

苦小牧駒澤大学紀要

第3号

『正法眼蔵』における「心」の構造について(三)

——「心は衆生、衆生は心」についての一考察—— …… 齋 藤 俊 哉 …… 1

二人の浦島次郎

——幸堂得知と幸田露伴の浦島伝説をめぐり—— …… 林 晃 平 …… 19

高度情報化社会がもたらす我が国における国民意識の変化 …… 室 本 弘 道 …… 49



楽器による音楽表現研究

——学校教育における管・打楽器活動の展望—— …… 今 井 敏 勝 …… (1)

ナチュラルアプローチ

——苦小牧駒澤大学英語クラスに適用可能な教授法について—— …… ロバート・カール・オルソン …… (21)

川岸のクランシー：オーストラリア文学の異文化間教授法 …… マイケル・ギンドラー …… (39)

コラムバ批判書の梗概 …… 小 林 守 …… (69)

「パシフィック・ウェイ」概念の再検討

——太平洋世界の政治文化・法文化を考えるために—— …… 東 裕 …… (105)

エドモンドに投影されたイアーゴの影 …… 嶺 金 治 …… (135)

古代北方史研究のための覚え書き …… 蓑 島 栄 紀 …… (157)

ロバート・ヨウの現代シンガポール演劇

「セカンド・チャンス」における異なるアプローチの比較 …… ジョージ・ワット …… (175)



翻訳「コールドロンの戦い」『500ネーション』(第5部) …… 村 井 泰 廣 …… (209)

苦小牧駒澤大学

2000年3月

BULLETIN OF TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

Vol. 3

On the structure of the core in <i>Shōbōgenzō</i> III □	Toshiya SAITO □	1
Two Characters of Urashima Jiro: KODO Tokuchi and KODA Rohan in Urashima Legend □	Kouhei HAYASHI □	19
Change of Japanese National Consensus according to a Highly Informed Society □	Hiromichi MUROMOTO □	49



Study of Music Performance by Instruments :		
The out-look for wind-instruments and percussion activities in school education in the future □	Toshikatsu IMAI □	(1)
The Natural Approach: Possible applications to a Tomakomai Komazawa University English classroom □	Robert Carl OLSON □	(21)
Clancy by the Kawa: Teaching Australian Texts interculturally □	Michael KINDLER □	(39)
Synopses of the Rebuttals to <i>Go rams pa</i> from the <i>dGe lugs pa</i> Scholars □	Mamoru KOBAYASHI □	(69)
Reflection on "The Pacific Way" □	Yutaka HIGASHI □	(105)
The Figure of Iago as Reflected on Edmund □	Kinji MINE □	(135)
A Memorandum for Historical Studies in Ancient Northern People □	Hideki MINOSHIMA □	(157)
Form and Transformation of Text: A Comparison of Different Approaches to Robert Yeo's Contemporary Singaporean Drama, <i>Second Chance</i> □	George WATT □	(175)



<Translation> "Cauldron War" In <i>500 Nations</i> (Series No. 5) □	Yasuhiro MURAI □	(209)
---	------------------	-------

TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY
March 2000

苫小牧駒澤大学紀要第三号（二〇〇〇年三月三十一日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

『正法眼蔵』における「心」の構造について（三）

——「心是衆生、衆生是心」についての一考察——

On the structure of the core in *Shōbōgenzō* III

齋藤 俊 哉

Toshiya SAITO

キーワード：衆生、衆生界内存在、有心衆生、無心衆生、有心吾子、無心吾子、心是衆生、衆生是心

要旨

道元禅師が『正法眼蔵』「仏性」巻においてのみ述べられている「心是衆生」「衆生是心」の意味するねらいは、どこにあるのか。この衆生を「有心衆生」と「無心衆生」に分けて論じられ、さらに「有心吾子」「無心吾子」と個人的な在り方にまで言及している。このことは、一般的日常的な人間の生き方を意味するものと考えられる。道元禅師は、この一般的日常的な人間の生き方をどのように捉えていたのか、またそれがなぜ仏性を有するものとして考えられたのかを説明することが、「心」論の最も基本的な問題の考察であらう。

第二節 「衆生界内存在」としての衆生の「心」

一、「衆生界内存在」としての衆生

衆生が一般的・日常的に生きているのが、衆生界である。衆生界は、十界から佛界を除いた九界の総称であるが、一般的にそれは「人々の世界」「人の世」を意味している。さらにその中の佛界・菩薩界・縁覺界・聲聞界は四聖と呼ばれて、佛となっているかもしれないが、まもなく佛位に到達するものの世界と考え、その他の天界・人間界・阿修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界を六凡と称して、いまだ衆生界において人間が欲望に苦しみ悶える世界と考えられている。しかし『正法眼蔵』の中における衆生界の使用の仕方は、単に佛界に対する人間の世界を指す語として用いられていると考えられる。道元禪師が、

「佛界・衆生界、それ有邊無邊にあらざるがゆゑに」(袈裟功德)(一)

「衆生界は有邊無邊にあらざれども、先度一切衆生の心をおこすなり。」(發菩提心)(二)

と述べていられる。佛界も衆生界も有限が無限かという相対的な関係にあるものではなく、佛界は佛界、衆生界は衆生界として存在している。それゆゑ衆生界を六凡の世界と捉えられていることから、いわゆる三界の中の欲界にあたり、衆生界は人間の一般的・日常的な生活の世界を総称していることになる。このことは、衆生界は一般的・日常的な人間の迷いと苦の世界すなわち欲望の世界であるから、過去の行為によつて現在が精神的・肉体的に苦の状態にあると感じる地獄の世界、絶え間なく欲望に苦しむ餓鬼の世界、他の人々によつて阻害され蔑まれ自律できないと感じる畜生の世界、他人との争いに絶えず巻き込まれているような阿修羅の世界、欲望や楽な精神状態を

求めて常に天上の世界を夢見ている世界等である。しかしそれらの世界は、単独の世界として衆生の心を責め苦しませているのではなく、それらの世界が心の中で複雑に絡み合つて衆生の心を形成しているのである。

そのことに気付かない衆生すなわち人間は、自らの過去の行為とその結果を反省することなく、また未来の生き方を真剣に考えることなく、常にこのように複雑に絡み合つた苦の世界から安易に脱出することだけを考えているために、悶え苦しむ状況の中で生きているのである。心の中で複雑に絡み合つた苦の世界は、個人個人を越えた同一ものではなく、個人個人によってまったく異なる苦であるのは、それぞれの素質や能力や環境が異なっているために、個人個人の過去の行為によるからである。それを、「一切衆生、その業道依正ひとつにあらず、その見まちまちなり。」（佛性）⁽³⁾であると述べていられる。私は、前述のように個々に異なる衆生の個々の状況を、現代的に言い表わすならば、「衆生界内存在としての衆生」と称してもよいのではないかと考えるのである。この「衆生界内存在としての衆生」は、表面的な道具などによって迷いを増幅されるような存在ではなく、衆生自身の内面的な「心の世界」がその存在の在り方を規定しているのである。そのため、衆生・人間（人・ひと）の心の状況を出来るかぎり解明しなければならないのである。

道元禪師が、

「過去生已滅、未來生未至、現在生無住とらひ。過去かならずしも已滅にあらず、未來かならずしも未至にあらず、現在かならずしも無住にあらず。無住・未至・已滅等を過未現と學すといふとも、未至のすなはち過現未なる道理、かならず道取すべし。」（授記）⁽⁴⁾

と述べているのは、別な意味でこの衆生界の状況を言い表わしたものと考えてよいであろう。それゆえ、自分の心を形成する世界が、過去は必ずしも滅したのではなく、未来は必ずしもまだ至っていないのではなく、現在はずしもとどまらないのではなく、まだ至っていないと云うことである。すなわち、「衆生界内存在としての衆生」で

ある自分に気付くに至っていない、というのが現実の衆生の姿である。それが、一切衆生であり、諸衆生なのである。

この衆生界と同様の「世の中」の意味で、「佛性」と「辨道話」では「群類」と使用されているのは、衆生が「世の中」から離れた特殊な存在ではなく、「世の中」に在るごく普通の存在であることを強調しているものと考えられ、道元禪師は衆生が「衆生界内存在としての衆生」であることを強く意識し、衆生の日常の在り方や発心とその後の在り方を『正法眼蔵』において考えていたのではなからうか、と思われるのである。

二、有心者と無心者

では、なぜこのように業道依正の異なる衆生すなわち人間が、なぜ佛性を有すると云われるのか。このことについて、道元禪師は、

「いま佛道にいふ一切衆生は、有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆへに。無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆへに。しかあれば、心みなこれ衆生なり、衆生みな有佛性なり。」（佛性）（三）
と、述べている。

この一文が、『正法眼蔵』の中で「心」をどのように捉えられているかを考察する場合、最も基本的なものと考えられる。

さらに、道元禪師は続けて次のように述べている。

「心みなこれ衆生なり、衆生みなこれ有佛性なり。草木国土これ心なり。心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有佛性なり。日月星辰これ心なり。心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有佛性なり。」（六）

この一切衆生とは、この世に生きているすべてのもの、とくに「すべての人間」「この世に生きているものすべて」を意味するが、しかし道元禅師が「佛性」巻では、「真実の姿を現しているものすべて」の意味で用い、そこから「すべての人間」へと限定してきている。

有心者とは、本来的には「何かを求め得ようとする功利的な心をもつ者」を意味する語句であるが、ここでは「心のあるもの」として用いられ、有心衆生と同義である。無心者は「思慮分別、是非善惡に動じない心のもの」を意味し無心衆生と同義であるが、しかしここでは「心のないもの」すなわち人間以外の存在者を示していると考えられる。草木國土・日月星辰が心であるということは、それは、道元禅師の思索が一見矛盾しているように見える。しかし、「一切衆生悉有佛性」に関連して、

「盡界すべて客盡なし、直下さらに第二人あらず、直截根源人未識、忙忙業識幾時休なるがゆへに。妄縁起の有にあらず、徧界不曾蔵のゆへに。徧界不曾蔵といふは、満界是有といふにあらざるなり。」（佛性）（7）

このことは、全世界は汚れがなく、現実をそのままにして佛と一体でないものはない。ただちに煩惱の根源を断ち切ることを知らない、忙しくて煩惱の根源がいつ休止するのか、全世界は虚妄の縁起によるものではない、それは全世界がすみずみまで現われていて隠されているものはないからである、全世界がすみずみまで現われているというのは、全世界がそのまま絶対存在である実在であるということではない、ということである。このことから考えると、草木國土・日月星辰が心であるということは、草木國土や日月星辰は草木國土や日月星辰としてそのままありのままの姿を偽りなく真実の姿を現している、すなわち真理そのものであるという意味とことである。草木國土や日月星辰の心は真理を意味する心としたのは、自然そのものがあるままの姿を人間の眼前にさらしているのであるが、人間自身がそのことに気付いていないのである。しかもその自然は刹那刹那に変化しながら、しかもそ

の変化する姿を縁起として人間自身の眼前にさらしていることを気付かないのが人間自身なのである。

徧界不曾蔵を「心是衆生」「衆生是心」として、別な語句で表現したものと考えられる。「心是衆生」とは、心そのものが衆生であるという意味であり、「衆生是心」は衆生そのものが心であるという意味であるが、このことについてはさらに詳細に検討したい。

このことは、衆生が、佛の説法すなわち真理を説くことを聞いて自分自身の心を変えろということとは、森羅万象すべてが真実の姿を表していることに気付くことによって、自分自身のものの見方を変えることが出来ることを主張し、心のそのような働きは佛性を有しているからと考えているのである。

一切衆生とは、心をもっている衆生であり、心が衆生であるから、「有心のもの」も「無心のもの」もおなじく衆生であり、衆生が心だからである。心がみな衆生であるから、衆生はみな佛性をもっている、と云うような意味である。

ここで、もう一歩突き進めて考えてみなければならない。それは、「有心者みな衆生なり、心是衆生なるがゆへに」と「無心者おなじく衆生なるべし、衆生是心なるがゆへに」のもつ意味であり、問題である。

一般に、經典内で「有心者」と記述されているのは、それは「有心は」あるいは「有心の者」と読まれる場合が多い。しかし、道元は「有心者」を「有心の存在者」と捉えていたものと考えられる。それは、「無心者」の場合も同様に「無心の存在者」と捉えていたものと考えられる。

「有心の存在者」とは、精神作用を具えている者で、執着の心で何ものかにこだわる凡夫の思慮をもつもので、このような執着心を有するのは人間以外には考えられず、有心者を道元もこのような人間存在として捉えていたものと考えられる。

「無心の存在者」は、ここでは心の働きのないもので草木国土や日月星辰など自然界にあるすべての存在は、人間を除きすべてがその時々刻々すなわち刹那刹那に、その真実を現しているものと理解できる。しかし、この「無心の存在者」は、一切の邪念を無くし妄念を離れた存在で真実を見取れる心をも指しているから、「証」すなわち真理を体得したものをも指すことになる。それゆえ、「有心の存在者」も「無心の存在者」も人間存在であり、併せて一切衆生と言い表わしたことになる。

第三節 「心は衆生」と「衆生は心」

一、「心は衆生」「衆生は心」と佛性

有心者と無心者の在り方を述べている基本となっているのが、「心は衆生」と「衆生は心」ではないかと考えられる。「心」と「衆生」の語については前述のとおりであるが、この「心は衆生」と「衆生は心」を考察する際、この語に使用されている「是」に重要な意味がこめられているのではないかと思われる。

この「是」は、漢訳經典では一般的に使用されている語であるが、その仏教的解釈は、「是」は一般的には繫辭で「それは」と主語をもう一度代名詞として言いなおしたものである。しかし、その他「正しい。適切。正しく妥当である」「これだ」などの意味をもっているとされている。⁽⁶⁾ また禪宗では、判断詞として「である」「これ。この」「〜というものは。あらゆる〜は。〜であるかぎり」であり、強調語として「ほかでもない〜は。そもそも」などと強く規定して提起するものであり、さらに連詞や副詞の語尾として使用されている、とされている。

る。⁹ 仏教学的解釈と禅学的解釈を併記したのは、両者でその解釈が多少の異なりを見せているからである。「心是衆生」と「衆生是心」の「是」を、私はこれらの解釈から多少逸脱するかもしれないが次のように考えている。ここまで行なってきた「有心者」「無心者」の考察から、「心是衆生」の「是」は、「有」を有するものはすべてとし、「有心を有するものはすべて衆生」であるとし、「衆生是心」の「是」は「あらゆる」は「と捉え、「あらゆる衆生はみな真理を悟る心を有する」と解釈すると、心の有無にかかわらず心と衆生は不離一体の関係として考えられる。

このことについては、高橋賢陳氏¹⁰が指摘していられるように「經典の三法無差説で、心・佛・衆生の三者（三法）は無差別一体であるとする説」がもっとも妥当と考えられる。それは、心と佛と衆生の三つのものは、本質的に異なったものではないということと、「一切衆生悉有佛性」を別な言葉で表現したものと考えてよいであろう。しかし、この衆生については、前述したように道元禅師は多くの場合とくに人間を指して述べていることを考えると、「心」を人間の「心」と捉えてよいと考えられる。

しかも前述のように、「心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有佛性なり。……心なるがゆへに衆生なり、衆生なるがゆへに有佛性なり」と二度も強調していられるのは、人間（衆生）に心があるから佛性があると、道元禅師は捉えている。それゆえ、ここでは三法無差説が成立すると同時に、道元禅師では心こそが佛性の存在を規定する最も基本的なものと考えていることが理解される。そのため、一切衆生悉有佛性であるから「無衆生といわず、有衆生」である、そこでは未来において佛（真理を体得した者としての佛）となるであろう可能性、すなわち佛性を有する衆生である人間存在の在り方が根本から追求されなければならないことになる。

それは、一切衆生悉有佛性とは云いながら、その佛性が顕現したものとするためには、一切衆生悉有佛性と理解

できたとしても、佛性を顕現させるものは何か、そのためには何をしなければならぬのか、佛性を顕現したとしてもそれが果たして確実に佛性の顕現なのか、を検証していかなければならないことを、「佛性」巻で述べられており、それは「佛性」巻をはじめとして『正法眼蔵』各巻で展開されている。

このように、「心是衆生」「衆生是心」の語のもつ意味は大きく、人間における「心」の存在を改めて道元禅師の思想から捉えることが出来たということは、『正法眼蔵』自体が人間の「心」の在り方を説いていることを深く意識し、『正法眼蔵』における「心の構造」を考察していく際の最も基本的な手がかりによりやく到達したとも云えよう。

二、「有心衆生・無心衆生」から「有心吾子・無心吾子」へ

道元禅師は、このような衆生界に生きる衆生についてさらに対立的な捉え方をしている。

「異域の衆生、かならずしも僧種にたへず。善衆生は善なり、惡衆生は惡なり。法界のいく三界も、衆生の種品おなじかるべきなり。」（佛經）⁽¹¹⁾

「有心衆生あり、無心衆生あり。有心吾子あり、無心吾子あり。かくのごとく吾子・子吾、ことごとく釋迦慈父の令嗣なり。」（三界唯心）⁽¹²⁾

「將謂衆生苦、更有苦衆生なり。衆生は自にあらず、衆生は他にあらず。更有苦衆生、つひに瞞他不得なり。甜瓜徹蒂甜、苦匏連根苦なりといへども、苦これたやすく摸索著すべきにあらず。自己に問著すべし、作麼生是苦。」（三十七品菩提分法）⁽¹³⁾

衆生界にあつても、衆生の種類は同じではなく、惡衆生と善衆生が存在するとして、惡衆生は惡であり、善衆生は善であるとすら言い切っている。ここで云われている惡衆生とは、端的に云つて惡人である。惡人とは、仏道に反し、道德的な行為に反し、自他に苦と害を与える存在ということになる。善衆生は、佛道に順じ道德的になつ

た生き方を行い、自他を益する存在と云うことになる。悪衆生と善衆生の対立は、衆生界においては勿論、佛道に對する受けとめ方、修行上の問題にしても対立が生じることになる。その対立は、悪衆生と善衆生が対立を超えて一体化され分化して進歩發展するような弁証法的な対立ではなく、どちらかが一方を飲み込んでしまわなければならない闘争の世界へと突入する危険すらはらんだ様相を呈するものとなるに違いない。これも弁証法的対立とは考えられるが、そこに、「心とは何か」というという心の問題が問われなければならないことを示している。

それゆえ、苦衆生と衆生苦の問題が提示されている。苦衆生は、身心の状態に悩まされて不安な日常生活をおくっている衆生である。衆生苦は、自分にとってすべてが苦である、いわゆる一切皆苦の状態で日常生活をおくっている衆生である。苦衆生も衆生苦も、一見同一の問題を抱えているように見える。しかしその苦は、個々の衆生の感受性によるものである。

これが、有心衆生と無心衆生の在り方であるが、

「觀受是苦といふは、苦これ受なり。自受にあらず、他受にあらず。有受にあらず、無受にあらず。生身受なり、生身苦なり。」(三十七品菩提分法)⁽¹⁴⁾

であるから、自分自身で受けようとして受けるものでもなく、他人から受けたり他人から強制的に受けるものでもない。この苦は、本来的に受けるものでもなく、そうかといって本来的に無いものでもない。それは、衆生が日常的に衆生界で生きているからということになる。衆生が日常的に衆生界で生きているということは、個々の衆生は自分と他人という衆生の間で生きているため、他人に対して無関心ということとはありえない。それは、衆生界が迷の世界であるため、苦しめる衆生がいることは事実であるから、そのような衆生の中で必然的に生きる衆生にとつては、苦を受けていると観ぜざるをえないと云うことになり、それが「衆生界内存在としての衆生」の本来的な実

態ではなからうかと考える。

有心衆生と無心衆生という対立的な捉え方を道元禅師がされているのも、またそのような意味からであろうと考えられる。

この有心衆生と無心衆生という対立的な捉え方は、有心衆生が精神的作用を備えているものすなわち有情、無心衆生を精神作用のまつたくないものすなわち金石・土木などのような無情として、両者が世界を形成する対立的な弁証法的な在り方として捉える向きもある。

しかし、有心衆生とは執着の心でなにもかにこだわる凡夫の心であり、無心衆生は一切の邪念をなくした心の状態としての衆生であると考ええる。有心衆生は三界における衆生の心であると解される。前述のように三界とは、生死流転する衆生の世界で欲界・色界・無色界を云う。特に欲界は欲望の盛んな世界で、その欲望によつて炎に身が焼かれその熱に堪え難いような苦しみを絶え間なく受け悲しみ叫ぶような生活を送っているような心をもっている人々が集まっている世界である。また、悪業の報いとして、福德がなく常に飢え・渴き苦しみに悩まされているような心をもっている人々が集まっている世界もある。愚痴が多く貪欲で父母兄弟の別なく害し合う苦が多く樂のないような心をもっている人々が集まっている世界がある。常にいらだち・憎しみ・怒り・恨みをもっているため、他の人々と争っていないければ落ち着かない心をもっているような人々が集まっている世界もある。しかし、このような心の世界は単独なものではなく、これらの心が複雑に絡み合っているのが現実の心の世界ではなからうか。それがまさに衆生界の有心衆生そのものの世界である。無心衆生は、三界の最上の領域である物質を超えた高度の精神的な世界に存在する衆生である。私は、有心衆生と無心衆生を対立的に捉えてはいないと述べたが、その意味は有心衆生から無心衆生への何らかの形で衆生自身の心を変化させることによるものと捉えるからである。

この有心衆生から無心衆生の心へと変化させるためには、たとえば、

「見佛聞法の最初に、難得難聞なるは衆生無佛性なり。或從知識、或從經卷するに、きくことのよろこぶべきは衆生無佛性なり。」（佛性）⁽¹⁵⁾

「先師つねにいはく、三百年よりこのかた、わがごとくなる知識いまだいでず、諸人審細に辨道功夫すべし」（行持下）⁽¹⁶⁾

「たとひ衆生説法、衆生得聞の道取を聴取しても、諸佛諸祖の骨髓を稟受しつべし。」（無情説法）⁽¹⁷⁾

「教化衆生は法明門、自不受樂、不癡倦故。」（一百八法明門）⁽¹⁸⁾

と述べていることから、道元禅師の心に対する考え方の一端が理解できるのではなからうか。

欲界すなわち心の世界という捉え方は、有心衆生と無心衆生の衆生を人々という人間の集団として考えているためと思われる。

前述の「有心衆生あり、無心衆生あり。有心吾子あり、無心吾子あり」と述べていることを、さらに吟味する必要がある。

「吾子」とは、「吾が子」という意味であるが、「衆生」の語と比べてみると、衆生が全体的・集団的意味を持っているのに対して、「吾子」は「吾が子」であるから個別的な意味を持つ言葉と解してよいであろう。ここでは、諸佛の「吾が子」の意味であるが、父である諸佛から身体を受けてはいるが、父が大で子が少、父が先で子が後、父が老で子が若いなどというような関係ではなく、ここで使われている「吾子」とは、現在の自分自身という意味として使用されていると考えてよいと思われる。このことから、衆生すなわち人々という集団的に見る考え方から発展させて、道元禅師も人間を個別なものとして捉えようとしたのが、有心吾子と無心吾子という考え方である。それは、集団である衆生からさらに個別の「現に在る自分自身」の「心」を問題として、人間の個別的な「心」を全体

から個、個から全体へと捉えることによって「心」の在り方がより鮮明なものとして解明されることになるのである。

先に述べた「心は衆生」「衆生は心」を、この個別的な「心」で見ると、「心は吾子」「吾子は心」と言い換えることができよう。「有心者」「無心者」に関する考察から、「心は吾子」は「有心を有するものはすべて吾子」であるとし、「吾子は心」は「あらゆる吾子はみな真理を悟る心を有する」と解すると、個々人にも心の有無にかかわらず心と吾子は不離一体の関係にあるものとして考えられる。

このように考えると、有心吾子は、執着の心でなにものかにこだわる一人一人の心であり、無心吾子は一切の邪念をなくした心の状態としての個人であると考ええる。有心吾子の心は三界における衆生の心と同じ心であると解される。有心である個々人の心は、それぞれ欲望にとらわれ、その欲望によって炎に身が焼かれその熱に堪え難いような苦しみを絶え間なく受け悲しみ叫ぶような生活を送っているような心である。また、悪業の報いとして、福も徳もなく常に飢え・渴き苦しみに悩まされているような心である。愚痴が多く貪欲で父母兄弟の別なく害し合う苦が多く樂のないような心ももっている。常にいらだち・憎しみ・怒り・恨みをもっているため、他の人々と争っていないければ落ち着かない心をもっている。

しかし、このような心はそれぞれ単独なものではなく、これらの心が複雑に絡み合っているのが個々人の現実の心である。そのために悩みや苦しみの内容は、個々人によつて異なり多種多様であるのが、有心吾子の世界ではなからうか。それがまさに 衆生界における有心吾子そのものの心の世界である。無心吾子は、三界の最上の領域である物質的な欲望を超えた高度な精神的な心の世界に存在する吾子である。その意味は、有心吾子から無心吾子へと何らかの形で自分自身の心を変化させることによって、自己の在り方を考えることになるのである。

それは、道元禪師が『正法眼蔵』の各巻で述べているように、第一には或従知識・或従経巻である。このことは、素晴らしい指導者を探し尋ね会って直接学び、また經典を熟読することによって学ぶことは、佛が衆生のために法を説き衆生がそれを聞くことと同じである。それによって、徐々に欲界の心のありようを変化させることを示している。さらに、そこから自分の修行に精進努力することによって、心の変化すなわち心の跳出を図らせ、衆生は衆生以外のなものでもなく、衆生そのものであることに気付かせることが図られなければならないのである。

それを、道元禪師的な言い方をするなら、衆生は衆生の法位に住していること、吾子は吾子の法位に住していることを気付かせることが、或従知識・或従経巻などを含めて佛の説法の役割ということになるであろう。言い換えると、佛の説法によって衆生・吾子に心のありようを気付かせ、心の変化を衆生自身に期待しなければならない。それは、吾子自身が自分と他人のために自分自身の心のありように気付き、自分自身で自分の心を変化させることが必要なのである。それは、吾子自身すなわち自分が自分自身の心の中の三界の存在に気付き、その存在を肯定しながら心の変化させることなのである。

三界の存在を肯定するとは、三界とは自分自身の心の世界のありようだからであり、それを自分自身で乗り越えていくために必要なのが、或従知識・或従経巻である。そして、自分自身の心のありように気付き、自分自身の心を変化させるための可能性のある実践が辨道功夫（「佛性」）⁽¹⁹⁾である。辨道は、仏道に精進することすなわち仏道修行のことであり、功夫も修行に精進することであるが、功夫には自ら考えをめぐらすという意味があり、辨道功夫は自ら考えて仏道修行に努める、あくまでも自己自身の問題なのである。

この辨道功夫が、『正法眼蔵』『現成公案』の巻に示された「自己をならふ」⁽²⁰⁾ことであるが、このことについて

は別に詳述したい。

【注】

大久保	道舟編『古本校定 正法眼蔵 全』	六二七頁	筑摩書房	昭四六
同		六四九頁		
同		二七頁		
同		二〇二頁		
同		二七頁		
同		二七頁		
同		一五頁		
中村	元著『仏教語大辞典 下巻』	八二三頁	東京書籍	昭五〇
禅学大辞典編纂所	『禅学大辞典』	三六一頁	大修館書店	一九八八
高橋賢陳訳	『全巻現代訳 正法眼蔵 上巻』	五二頁	理想社	昭四六
大久保前掲書		四一三頁		
同		三五四頁		
同		五〇三頁		
同		五〇三頁		
同		一一〇頁		

同 同 同 同 同

一六〇頁
四〇頁
七二頁
一六頁
七頁

(さいとうとしや・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第三号（二〇〇〇年三月三十一日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

二人の浦島次郎

——幸堂得知と幸田露伴の浦島伝説をめぐり——

Two Characters of Urashima Jiro:

KODO Tokuchi and KODA Rohan in Urashima Legend

林 晃 平

Kouhei HAYASHI

キーワード：浦島太郎、浦島次郎蓬萊壩、北村透谷、新浦島、伝説

要旨

明治二十年代の小説の主人公に浦島次郎が登場してくる。明治二十四年十二月幸堂得知『浦島次郎蓬萊壩』。その約三年後二十八年には幸田露伴の「新浦島」である。これは共に浦島伝説を前提とした作品である。得知の作品は江戸の草双紙の面影をそのまま残した作品であったため、北村透谷から厳しい批評を受けた。露伴の作品は得知の作品を充分に意識して書かれたと思われるもので、露伴の次郎は得知の次郎が歩みを留めたところから歩き始め、新しい浦島伝説の創造の先駆けとなった。

浦島伝説は明治になって、新しい主人公を迎えた。その名は浦島次郎。もちろん浦島太郎あつての浦島次郎であり、浦島太郎のパロディーとなるものであつた。しかも、その浦島次郎が、ほぼ同じ時期に二人登場しているのである。それがこの時期の浦島伝説を考察するにも甚だ好都合となる。

一人は明治二十四年（一八九一）十二月に刊行された幸堂得知『浦島次郎蓬萊噺』という作品の主人公であつた。もう一人は新聞『国会』の明治二八年一月に連載された幸田露伴『新浦島』の主人公である。この約三年の間を置いて登場した浦島次郎、名前は同じながらその人物像は大きく異なる。片や鉄砲を撃つ丹波の獵師であり、片や丹後の漁師の息子である。違いはそれだけではない。物語の出だしも違えば結末も違う。だが、結末に到る途中には似ている部分もある。それらを明らかにしながら、明治初期二十年代の浦島伝説を把握するとともにその伝説の流れを明らかにしていこう。

一

『浦島次郎蓬萊噺』は、その奥付によると、暮れも押し迫つた明治二十四年（一八九一）十二月二十七日に春陽堂から「新作拾二番」という叢書の第八番として木版刷りで刊行された。序二丁、本文五十丁挿絵二丁の全五十四丁、全文草書交じりの毛筆の仮名文字。表紙や挿絵には月岡芳年の錦絵があり、今日としては美しい洒落た本である。しかし、残念ながらこれ以外に刊行の記録もなく、活字本などで読むことはできないため、今日の読者には遠い存在の作品となつてしまつてゐる。

「新作拾二番」という叢書は「現今小説家の巨擘を以て目せらるゝ」作家の新作傑作集として刊行されたものとい

う。そこに名を連ねている作家とその作品を巻数とともに記すと次のようになる。一、饗庭篁村『勝鬃』（明治三三年四月二三日）。二、紅葉山人『此ぬし』（同九月二二日）。三、山田美妙斎嫁入り『教師三昧』同一〇月一五日）。四、三昧道人『かつら姫』（同十一月一日）。五、南新二『鎌倉武士』（同十二月二六日）。六、学海居士『十津川』（明治三四年三月二五日）。七、前田香雪『梅その』（同九月二九日）と続いたもの。一巻から順調に刊行されたとはいがたく、四月に最初に出されてから四箇月間が開いて、九月から十二月までは各月に一冊づつ刊行されたが、それ以降は、三月から九月と五箇月開き、さらに二箇月開いて十二月となっている。また、十二番とあったが、実際はこの得知の八番を以て途絶したらしい。（注一）

得知は彼らに続く八人目として登場した。この中には今日でも名を知られている作家たちがいる。得知の文壇における位置も当時彼らと同じく確たるものであったと解してよいだろう。だが、この得知の後を継いだ作品は出ていないようだ。どうやらこの叢書はあまり芳しい評価を得なかったのだろう。では、いったい『浦島次郎蓬萊嘸』とはどんな作品だったのだろうか。

まずは全体の把握のために以下にその梗概を記しておこう。丁付けを合わせて記した。

従是／篠やま 丹波の篠山にすむ獵師の次郎作は、ある日借りてきた御伽草子の「浦島太郎」を読んで、自分は山獵師だから海の龍宮は苦手だが、蓬萊山には行ってみたいと思い、手掛かりを求め丹後の浦島明神に詣でる。

（一丁表～六丁裏）

従是／水の江 次郎作は浦島明神に、蓬萊の道案内に鶴を貸してほしい、返事は夢告げで、と頼む。そして、夕方までに獵をして、明神への膳ひもろぎにと山へ行く。真鶴を狙った熊を追って銅像の阿弥陀如来に登ると、像の胸の辺りが窓になって開く。縄を取り出して台座に引っかけ、真っ暗な銅像の中へ入るが、命綱が切れて落ちる。

(六丁裏、十丁裏)

従是／佛がはら 不老不死の千年飴（寿命糖）を売る商人が、折鶴に飴をひと舐めさせると、鶴は蓬萊山目指して飛んでいった。それを見た次郎作は、飴屋に蓬萊の場所を聞く。飴屋は次郎作をわが家に案内し、浦島太郎の本当の話をして、忘れなければ、必ず蓬萊へ行けるからと、折鶴を渡し、それを使って飴を売って元手を作り、稼いで蓬萊へ行くようにという。飴売りは浦島の指図で来た鶴であった。鶴は次郎作を乗せて飛ぶが、次郎作は目が廻って地上に落ちてしまう。

(十丁裏、十六丁裏)

従是／寢覺の里 人に揺り起こされた次郎作は、落ちて自分の頭が欠けていないかと心配する。しかし、気がつくに浦島明神の神前に寝ていた。これまでのことは夢告げであった。明神から浦島の苗字と、蓬萊へ来て歓楽に耽ることを許される文を受け取る。鉄砲を明神に奉納し、獵師を捨てて、飴売りから財をなすが、半粋長兵衛という男から無間の鐘のことを話され、さらに廓に誘われ、丹頂鶴の扮装で商売に出かけることにする。

(十六丁裏、二十二丁裏)

従是／傾城が窪 廓で次郎作が来るのを待つて毎日飴を買い切る大尽がいた。次郎作は、たまたま馬鹿と批判する。ある茶屋女から、玉藻という花魁が自ら金を出しても次郎作と会いたいといっているといわれ、経費は玉藻持ちで会う。次郎作は騙されているとも知らず、女のところに毎日通う。結局駆け落ちと称して、家に連れていかれ、持ち金の三百十兩を残らずそれまでの諸経費として取られてしまい、追い出される。

(二十一丁表、廿六丁表)

従是／富の森 飴を売っている次郎作は、富の森八幡宮の五千七百二十九番の富札を半値で飴と交換した。五千は飴の効能の口上、七百は浦島の歳、二十九番は熊の「仁獣熊」からの見得けんぐくという。その通り一番富の千兩が当たり、あわてた次郎作は宿で草鞋履きのまま二階にあがってしまった。

(廿六丁裏、三十一丁表)

従是ノ縁の林 手数料を差引いた七百両の金を手に入れたが、宿の主人たちに約束の分け前を遣るのが惜しくなった次郎作は、これを元手にとこっそり都へ出かける。夜になって峠を越えなければならぬ道中で、座頭と一緒にになった。峠で座頭は追剥（坊主六）となり、次郎作を襦袢ばかりにして、金も着物もすべて持ち去った。

（三十二丁表～三十八丁表）

従是ノ泪川 道行夢の世迷言 次郎作は、死のうと考え、襦袢一枚で川を探して麓まで下りた。川の浅瀬に居たところ、人（土左衛門の玄吉）が来て理由を尋ねるので、訳を話す。今更道具もなく飴屋もできないので、死ぬといふと、ヒータラノビールは護膜（ごむ）のことで、都にあると教えられ、死ぬことをやめ、ついていくことにする。

（三十八丁表～四十二丁裏）

従是ノ戀の中道 都の石部屋金左衛門という質両替商に奉公した次郎作は、丁稚の双松と店の娘おとねとの仲を知り、双松に意見しておとねへの辞色願を書かせた。渡すことを頼まれ、開帳参りの折に娘にその手紙を渡そうとするが、娘は自分への恋文と誤解して、受取を拒否して騒ぎとなる。通り合わせた玄吉が間に入って次郎作を預かる。次郎作から訳を聞いて玄吉は事の次第を理解し、再勤咄を勧めようとするが、次郎作は娘の忠義にならないかと断り、玄吉の家の居候となる。

（四十二丁裏～四十六丁裏）

従是ノ出世の閑 都で戦が始まり、玄吉は人入れ商売を始めた。次郎作も働き、敵の鉄砲を奪つて戦ったことから、褒美をもらつ。東国での戦にも参加し、鉄砲直しの仕事を始め、段々と金持ちになる。妻を娶り今は五本の指に入る持丸となった次郎作は、浦島明神への感謝の気持ちを忘れない。隠居して南湖に新たに居を構えた次郎作は、その祝宴を開く。

（四十六丁裏～四十八丁裏）

蓬萊 祝宴で鶴亀の謡と舞がある中で次郎作は富士の山を見て、これこそ蓬萊山だと気がつく。

以上の梗概からもわかるごとく、『浦島次郎蓬萊嘶』という作品は、十一の章段に分かれ、それぞれの章段の始まりは、絵によって描かれた道標の文字で記される。つまり、話の展開があることに、道標に記された場所へと進んで行くのである。出だしの道標には「従是」と「篠やま」とあり、「是より篠やま」の意で、話の舞台は丹波篠山である。そして、丹後の水江、仏が原、寢覚の里、傾城が窪、富の森、縁の林、泪川、そして一人だけの道行が入り、恋の中道、出世の関、そして蓬萊で上がりと双六のように進んでいき、その情景にあわせて、主人公の境遇も変化していく。この展開は、主人公の地理的移动を意味しているだけでない。各章段に使われている山・江・原・里・窪・森・林・川・道・関という文字が、いわば主人公の山あり谷ありの人生をも象徴しているといえる。山から出てきた次郎作が、水江から野原に出て、人里で商売に成功するが、遊女という窪みに入り込み、森の中で富を得るが、林で追剥に会い、川で死のうとするが、助けられ心を入れ換え働いたが、恋の仲介に失敗して、やっと関を越え、蓬萊に到る、という話なのである。

こうした人生を歩む次郎作という獵師が、主人公の浦島次郎である。作者はこの作品を展開するにあたり、所謂御伽草子の洪川版(祝言御伽文庫)の「浦島太郎」を次郎作に読ませるという設定をする。そして、その全文をそっくり作品中に引用している。今日からいえば、ちょっとあきれる進め方である。しかし、これは単なる枚数稼ぎではなく、作者にとつてはそれが必要だったのだらう。先ずこれから始まる嘶の前提となる作品の紹介をするのである。読者はここで十分な浦島の知識を与えられることになる。つまり、ここで扱われる浦島伝説の内容は祝言御伽文庫に記された伝説をもとにしたものである。ゆえに、この時期に既に祝言御伽文庫から大きく変化していた伝説の内容については、作者は取らないというのである。^(注1)明治初期に雑多にあった浦島伝説の中で、基本となるも

のを作者として最初に提示しておきたかったのである。だから、この得知の浦島噺には渋川版同様、主人公が苛められていた亀を助けるわけでもなく、また、亀の背に乗って龍宮へ行くことにも言及がない。あくまでも、浦島は小舟で流れ着いた女を故郷へと送っていくことで龍宮へたどりつくのである。

さて、この蓬萊噺には、こうした前提を基に語られる浦島太郎の隠された真実があった。仏が原の章において飴屋は蓬萊へ行きたいという次郎作にそれを語って聞かせる。それは、今明かされる赤裸々な真相、衝撃の新事実ともいべき話であった。先ず、飴屋は次郎作に聞く、どうして蓬萊へ行きたいのかと。

「次郎作」 どういふ了簡も斯ういふ了簡も有はしませんが、どうぞ蓬萊といふ所へ往て延る文命を延し、旨いものは喰次第、好きな酒は飲次第、活計、歡樂心の儘とやつて見たいのです。天下茶屋の元右衛門ぢや有めへし、こなさんも随分目出た慾の張た人だナア。今まで和主は山の中で昔の物語本計り讀で居たから、龍宮といふ所を有やうに思つて居なさるのだが、其様な都が何所に有ものか。へエー、夫でも浦嶋様は龍宮へお出なされたといふぢやア有ませんか。

（原文に一部ふりがなを省き適宜句読点を施し会話の主体を「」で傍記した。以下も同じ。十二丁裏）
それに対しての飴屋の答えが次の通りである。

「他それ」 夫が大違ひだ。浦島様といふお方は漁師こそなされたが、ソレハ――慈悲深いお方で、いかに鱗族でも、刺身にも焼肴にも成ない龜杯を釣上たからとて魚屋へ賣渡すやうなそんな向見ずはなされない。なんでも通例の魚の外は成丈け物の命を取まいと思召したお方だから、或時、小舟に乗って漂つてござつた姫君を助け、日の十日も掛つて送り届けて遣はされたゆゑ、其親切な心に感じて、國王も誓に成れたのぢや。へエー、夫が龍宮でございますか。夫は琉球サ。成程、旨く洒落ましたナア。夫でまたどうして七百年といふ、寿命をお保ちなされたのですナ。夫は一代ではない。初代の太郎様が、さういふお方ゆゑ、外國と貿易を盛ンになされて、ドシコと利益られた。そこで、息子さんも三人出来たので、総領には國王の跡目を譲り、次男には廓を出させて浦島屋太郎兵衛と名のせせたのサ、是が浦島の二代目

で、夫より、三代、四代と漸次續いて、三十一代目の太郎兵衛さんが、商法がてらに水の江へ歸つてござつて、舊跡をお尋に成たのだ。

この龍宮とは実は琉球のことという解釈は、音が似ているから合理的で理解しやすい。また、七百歳とは三十一代後の子孫が歸つてきたのだという解釈も合理的なものである。しかし、こうした発想や浦島がその琉球の王となるとの趣向は、得知のオリジナルではない。既に前例があつた。二世南仙笑楚満人（為永春水）作『浦嶋太郎珠家土産』がそれである。そこでは、丹後の国に生まれた浦島の若丸は、若くして両親に死に別れたが、元服して「たい太郎」となり生計に苦しむうちに、ある縁から交易船に乗つて琉球まで行き、そこで琉球国の王から婿になれと勧められ、また生き別れた「みちこ」とも再会して、琉球の王となる話である。この作品のことを江戸文学に堪能な幸堂得知ゆえ当然知つていたと考へてよいだろう。いや、知つていたからこそ、ここで利用しているのである。合理的解釈は更に續く。そして、次郎作も志を捨てなければ蓬萊へ行くことができると説く。

ナル程、夫で又鶴に化て蓬萊へ往たといふは、どういふ理由です。どうも、さう念入に聞かれては困るナア。鶴に化たといふは、其時の商法が蔓に成て、丹後へも出店を開かれ、後遂に蓬萊へ渡つて安樂な身に成たといふのサ。解りました。さうして蓬萊といふ所は何處でございますか。序ながらお聞申て置たうございます。夫は今爰で咄ては、作者の趣向を詰くやうなものだから、聞ずに置きなさい。追々に分るよ。併し道は遠いから、其積りで居なさい。和主の了簡次第で、道に迷ひさへしなければ、三四年で往かれるが、若し迷つたら、一生涯立ても往事は出来ないよ。何でも常に蓬萊へ行つといふ事を忘れさへせねば遂には彼山に至り、無量の歡樂を極むる事が出来る。

（十三丁裏）十四丁裏）

こつして次郎作は浦島の話を受得する。

ところで、その次郎作は、浦島太郎とは本来無関係、赤の他人なのであつた。それが、浦島明神から浦島を名乗ることを許されたのである。その経緯は、飴屋の鶴に乗つた次郎作が空から落ちて目を回し、浦島明神の神前で氣

がついたら、包み紙に入つた神託を受け取つたからである。それは次のようなものであつた。

汝蓬萊ニ到ンコトヲ冀ヒ、我ヲ信仰ナス條、奇特之至、(まじ)海トニ嘉賞スルニ堪タリ。之依テ今^(よ)自リ、浦嶋之苗ヲ許シ、年ヲ重ヌル之後、
祈願ノ如ク蓬萊之地ニ到ラ使メ、思^(おも)ノ儘ノ歡樂ヲ與ヘン。宜ク慎テ其身ヲ過ツコト勿レ。

彌勒十年辰正月、浦嶋明神（印）、

浦嶋次郎へ

（十七丁裏・原文は漢文に訓点のみ、それに句読点を施し書き下し文とした）

この神託、ご丁寧にも印判までが押してある。その印の形、亀甲を丸くした亀の形の中に、松葉を左右の羽根に見立てた正面向きの鶴の模様、鶴の体には「蓬萊主」とある。なんとも念の入つた趣向である。

さて、これによれば、次郎作は浦島明神から苗字を許され、晴れて浦島次郎となつた。しかし、浦島次郎とは、太郎本人の後継ではなく、一家一族の弟分という意味である。神託はそれだけではない。何年かしたら願いの通り蓬萊へも行かせようという。だから、身を慎めと。この二度に渡る予言でこの話の結末までも既に見えてしまつたことになる。次郎作は最後には蓬萊にたどりつくのである。ただし、身を慎めとあることから、そう簡単にはいかない。万一身を過てば行けないこともあると見るべきか。しかし、これでは折角の神託が、いくら飴屋の浦島明神の使いの鶴の化身といえども、飴屋が仏が原でいつたことの二番煎じ、再確認にすぎなくなつてしまふ。

こつした冗長な展開に加えて、この作品の特徴は滑稽と言葉遊びの洒落に満ちた文章である。洒落たといえは肯定的だが、駄洒落といえは今日では否定的な意味合いも強くなる。たとえば、次郎作が浦島明神に願ひ事する文句も「就ましては私も其龍宮とやら申都へ参りたうございませうが、獵師の事故所詮海上の旅行はむづかしかうと存じます。斯様申上ましたら海若のない奴と思召しもございませうが、板子一枚下は地獄と聞て見ますとどうやら相場にでも手を出すやうな氣持が致しまする」（七丁表）という調子である。「海上」と「甲斐性のない」を懸けた

洒落を神前で臆面もなく述べるのである。

滑稽といえ、富の森での富籤が当たった場面では、次郎作が草鞋履きのまま二階へ上がってしまったのは、落語の「高津の富」（東京では「宿屋の富」とも）の趣向をそのまま借りて、それに一捻りを加えて見せている。

二

こうした得知の作品に対して痛烈な批判を加えたのは、北村透谷であった。彼は次のような書評を『女学雑誌』に載せる。

得知氏は滑稽家なり、明治の文壇に滑稽を以て立つ者、ひとり得知氏あるのみ。われ其滑稽の性質を探るに苦しむ。彼も一現象なり、疑ひもなく明治社会の或一部分の趣味を代表する者ならむ。世には閑散無事なる者多し、商賣の隙にそるばんの上にて通讀するには、結構なる書物なるべし。

一九の仙骨は著者に望むべきところならじ、従つて一九の滑稽も著者に望むこと能はじ、三馬一派の妙鳥も、著者には適はず、何事もめでたし、めでたしと世をその儘に觀察するが著者の眼なるべし。世は夢なるか（三十八葉參觀）、著者の夢は如何なる夢ぞ。浦島太郎の妙譬を轉用して浮世の凡慾を説きたるは、我浦島の爲に惜しみ、蓬萊の靈境を假借して慾界の茶番を描きたるは、我れ神仙に代りて泣く。最後の落は、いかにと問へば、矢張り西南戦争の際まうけ。黄金の外に蓬萊なしとは、さても。

（『女学雑誌』第三十八號・明治二五（1892）年五月二一日・署名「透谷」）

これが作品の刊行約五箇月後に発表されたその書評の全文である。ここでは、透谷は得知の作品の特徴が滑稽にあることを認めている。しかし、それを全面的に肯定はしていない。せいぜい商売の暇に読む程度には好い作品だ

ろつというのみである。十返舎「一九の滑稽」も式亭「三馬一派の妙罵」もこの作品には見られない。これは文学作品に理想像を求める透谷の姿勢からは許されないものであったのだらう。だから透谷は問うのである、「著者の夢は如何なる夢ぞ」と。せつかくの「浦島太郎の妙譬」が、蓬萊神仙が惜しいではないかという。

だが、得知は最初から自分の作品の持つ位置をよく弁えていた。この蓬萊嘲の序文の中で述べているのである。「おのれの作は笑はれるのか第一の手柄」として「無闇とおかしさにケタ／＼アハ／＼と御笑ひ下されたく候」と。だから「若又横合より名作ぢやなと、ませつ返しの批評有て候節は、我等の出屹度恥かき申為て候」と予防線を張っているのである。「新作十二番を著はされたる諸先生方は、いつれも笑はれまいとの御用心堅固に相見え申候」と述べる得知と透谷では文学作品の目指すところが違っていたのである。だから、透谷の批評は著者に対する無い物ねだりでもあった。

この当時の証文の形式を借りた序文は滑稽作品の宣言であった。序文が述べるように、得知の目指したものはパロディーといふべきものである。だから、御伽草子の『浦島太郎』を冒頭に引いて展開していく。しかし、パロディーが広く受け入れられるには、その時代に応じた批評精神が必要である。その点から見ると、残念ながらこの時点の得知には、それが欠けていたようだ。明治という新しい時代に応じた清新な息吹が作品に感じられないのである。いわゆる江戸趣味、江戸という過去の時代に向く姿勢だけが強く見受けられるのである。それが、得知の作品の限界であつたのかもしれない。透谷の得知に対する批評もそこを突いていたのである。それが「その滑稽の性質を探るに苦しむ」ということばに現れている。透谷は、このような得知の存在を「明治社会のある一部分の趣味を代表する者」として認める。しかし、その存在意義までは認めはしないのである。

透谷はいう、浦島の譬えを転用して浮世の凡欲を説くことは浦島の為に惜しみ、蓬萊の靈境を仮借して欲界の茶

番を描いたことは、自分が神仙に代わって泣く。浦島の譬えも、蓬萊の理想郷も卑俗過ぎるというのである。そして、最後の戦争を西南戦争ととらえ「黄金の外に蓬萊^{ほか}なしとは、さてもさても」と文を結ぶ。透谷が文学に求めたものと、得知が表現しようとしたものの差がここに如実に表れているのである。

ところで、なぜ、透谷は無い物なだりの得知の作品をあえて書評にしたのだろうか。それは、作品の内容が「蓬萊嘶」という題名を持つ浦島伝説だったからではないだろうか。実は透谷はこの作品が発表される前年に、透谷自身、浦島伝説に想を借りた作品を書こうとしていたらしいのだ。明治二十三年八月四日の日記には次のように記されている。

「西行傳」成りたらば「再來浦島」こそ其次ぎに取懸るべきものならめ。

第一、蓬萊。第二、世の變遷。第三、今の戀昔の戀。第四、古往今來の小歴史。

（透谷子漫録摘集『透谷全集』第三卷・一九五五年九月・岩波書店・二四二頁）

「西行伝」の完成の後には「再來浦島」という作品に取りかかろうと考えていた。そのための構想を簡単なメモとして残している。これだけの断片からその内容を推測するのは困難だが、想像を逞しくすればこんな内容ではなかったか。

第一「來着」とは、龍宮から故郷へ戻った浦島の登場する場面であらう。第二「世の變遷」は、その故郷のあまりの変貌振りに驚くわけである。第三「今の戀昔の戀」は恋愛觀の変遷を述べようというのであらう。第四「古往今來の小歴史」とは、そうした変遷を改めて歴史のなかで位置づけようというのだらう。この第一から第四までは、筋書きや章段を表すものか、単なる内容の要点なのかは未詳だが、透谷は故郷に帰った浦島の目を借りて、その時代世相を歴史の流れの中で再認識しようと考えていたのであらう。

また、この日記を記した九日後にも透谷は浦島について記している。

「浦島」、浦島は奇異なる生涯を送れる者なり、釣に往きてむすびくひける時、魚かゝりてあはてふためきむすび投げ捨てけるをかしきよ、魚も得ず、むすびはすてるおろかさよ、魚は逃げ、むすびは砂に達磨様、云々。
(同・二四三頁)

この浦島伝説に係わる内容は管見では他に例を見ないものである。あるいは、「再来浦島」の構想から触発された透谷独自のものではある。「再来浦島」にも使うための一節なのかもしれない。浦島太郎の希有な人柄と生涯に注目して、社会の変遷を歴史的にとらえ、そして透谷独自の明治における新しい恋愛観をからめて、小説は完成するはずのものであった。しかし、この構想はとうとう実現されなかった。「西行伝」も「再来浦島」も完成しなかった。透谷は浦島物を書きたいと念願していて、それが果たせない。それゆえに、他人の浦島伝説を扱った作品は余計に気になり、自分の構想した視点から作品を批評することになったのである。更に加えるならば、もう一つ「蓬萊曲」の存在を挙げておこう。「蓬萊曲」は、この「再来浦島」を構想したと同じ時期に発想されたものである。あるいは得知と同じく浦島の龍宮を蓬萊に発展させたと考えるならば、更に形を変えたものとして「再来浦島」の影が「蓬萊曲」に落ちているのかもしれない。「蓬萊曲」には別篇が存在するように、まだ完成途中ともいえる作品である。そうしたところに「蓬萊」を冠する浦島の話が刊行されたのである。透谷としては気に掛けない訳にはいかない作品であつただろう。そして一読、透谷の期待はずされたのである。

『浦島次郎蓬萊曲』の結末は、新たになつた次郎作夫婦隠居所の南湖の御殿披露の祝宴で結ばれている。祝いの席での長唄「鶴亀」が流れ舞が舞われる中で、正面に「芙蓉の峰」が見え思わず蓬萊の存在に気づくのである。その展開は少し大きく書かれた長唄の詞章に割り込むようなかたちで記されている。池の汀の鶴亀は蓬萊山もよそならず」とある詞章で「余所ならず、富士は我が日本の蓬萊と聞ゝ、此山を見て此歡樂今こそ望みは協ひたり」と思い、

「君の恵ぞ有難き」の詞章で「有難し／＼、是皆浦島明神の御加護、又二つには色欲の念を断て、業はひを励みし故に、天の恵み給ひしならん」と気がつくのである。そして、謡も「君の齢ひも長生殿に／＼還御なるこそ目出たけれ」という末尾の詞章とともに「拍手喝采樓上に満ち、おめでたうございます。お目出たう。おめでたい。賞度いな。目出たい／＼の聲をかりて、拙作の蓬萊ばなしもめでたく爰にて筆をとゞめ、またあらためてめでたし。」（五十丁裏）と結ばれる。

透谷の書評の末尾は「最後の落は、いかにと問へば、矢張り西南戦争の際まうけ。黄金の外に蓬萊ほがなしとは、さても／＼。」と結ばれているが、これは些か得知の作品に合わない。たしかに西南戦争の軍需景気での儲けをきつかけとして財を成すが、蓬萊は黄金だけではないはずである。神の加護と色欲の断念と正業に励むということ、これを評価するのである。そして、なによりも「めでたし」で結ぶことこそ、得知の目指したものであった。

得知の描こうとした浦島は、獵師が理想郷を求めて、結局は自分の日常の間にそれがあつたことに気づくという、一般的な内容であつた。そこには社会に対する高い理想や夢は見られない。社会に対する批判よりも寧ろ社会に順応することをよしとする。それよりも、得知は話の中の滑稽に力を注ぐ。あの次郎作が獵師でありながら読書、それも御伽草子の類に耽つたように、読んでおかしいこと楽しいことが大切なのであつた。何よりも自分の身丈にあつたほどの文学を求めたのである。だから、結論も蓬萊とは富士山である、という現実の肯定になるのである。

浦島伝説は、明治初期になつても、江戸からの流れで子供向け赤本などが刊行される一方、鷗外が二十二年アーヴィングの「リップ・ヴァン・ウィンクル」を「新世界の浦島」として翻訳紹介している。『浦島次郎蓬萊噺』はそうした時期に江戸時代の雰囲気を引きずつた滑稽本の流れで書かれていたのである。しかし、透谷が構想したよう

な、明治を迎え新しい視点からの文学も既に始まっていた。そして、『浦島次郎蓬萊嘶』の発表から四年後には、今までにない新しい浦島像をもって露伴の『新浦島』が発表されるのである。

三

幸田露伴の新聞連載小説にも得知と同じ浦島次郎という名前の人物が登場しているのだが、その題名は「新浦島」である。読むものはここに注意を振り向ける必要がある。新しい浦島なのである。何に対してどう新しいのか、それを探ることが本稿の眼目である。

「新浦島」は新聞『国会』の明治二八年一月三日号から三〇日号まで連載された。この『国会』という新聞は、二三年一月二五日に第一回帝國議會開院に呼応して設立された新聞で、露伴もこの創刊に読売新聞社を退社して参加した。この新聞の特色が、論説社説欄の格調の高さと文芸欄であった。露伴は「七変化」、「辻浄瑠璃」、「寝耳鉄砲」、「いさなとり」、「五重塔」、「二日物語」の「此一日」、そして、長編『風流微塵蔵』の諸編など、初期の傑作を多く連載している。なお、『国会』は惜しくも二八年二月一五―一五〇四号で廃刊となったから、「新浦島」はその末期に掲載された作品といえる。まず、構成と粗筋を章段ごとに把握しておこう。『露伴全集』の頁数を併せて記した。

其一 浦島が子の末裔は代々次郎と称して、天の橋立近くの九世戸に住んでおり、今で九十九代。その子は今年二十五歳になり、近郷でも評判の息子である。遊学中の息子が久々に帰郷するので、老夫婦は歡び、百代目として身代を譲ろうと考えている。

(二〇九―二二二頁)

其二 浦島次郎は人品気高く才知遅しく生まれついて、独学で学んでいたが、十六の時から京や東京へ出て学問をしていた。たまたま帰郷の折に村長の仲人で村一番の分限者の娘との縁談をきり出されるが、相手にしない。ある時、大きな荷物を送りつけ、漁師になって一生を過ごしたい、近日帰るといふ。老夫婦は料理やらと迎える準備に余念がない。

(二二二～二二五頁)

其三 息子を囲んで老夫婦は大喜びで賑やかに語り合う。特に、爺は上機嫌で酔つて語る。(二二五～二二八頁)

其四 翌日の夕刻、漁から帰った息子次郎に、夫婦はあらたまつて身代を譲ることを告げ、浦島家の由緒を語り、箱と釣竿を示す。そして、父は箱を開ける。(二二八～二二九頁)

其五 中から出てきたのは玉手箱、それを父は譲り状に署名して譲り渡し、息子は受取る。夫婦は歡び舞を舞い、酔つてその夜は寝て、翌日生きているような面持ちで死んでいた。(二二九～二三四頁)

其六 息子次郎は、都で七条三位の姫と相愛の恋をしたが、身分違いで姫は浮橋四位の若君へと嫁ぐ。二年後、姫によく似た町家の娘と出会い、また恋に落ちるが、今度は娘が病死してしまう。(二三五～二二七頁)

其七 寂しさから酒に溺れた次郎は、瓢六という狂歌師と知り合う。瓢六は、素人の女を女房に持つことの愚かさを説き、廓の女を勧める。(二二八～二三〇頁)

其八 廓で勇菊という女と出会い、深い仲となり気も晴れる。しかし、慣れるにしたがつて女の魂胆も見えてきて、金持ちの男が女に入れ込んでいるのを幸いに別れようとする。女は一端はその男に身請けされるが、わざと別れて次郎に一生を任せたいと真底を見せるが、却つて嫌気を感じ、愛想尽かしの手紙を残して、東京へと行く。しかし、東京でも醒めた目で見ると、世間の人々の汚れたことばかりが目立つ。清貧の生活こそがよいと帰郷したが、両親は翌日往生してしまった。

(二三〇～二三三頁)

其九 両親の仏事を行うが、途中で柩が軽くなったという輿担ぎのことばを咎め、寺の本堂で開けてみると両親の死体はそれぞれ一粒の舍利を残して消えていた。次郎は父母を恋い、仙道を得たいと思いながら毎日家に閉じこもる。
(二三三―二三六頁)

其十 眼前に玉手箱や両親の奇瑞を見て、次郎は神仙の実在の有無を七日七晩考えたが結論が出ない。とうとう赤白の舍利を取り出してそれを探り取ることで決めることした。七回とも白を取ったので、仙道のあることを確信する。
(二三六―二三九頁)

其十一 仙道を志すが、その方法がわからないので、自分が仙人になることができるかを改めて舍利にきく。七度とも赤で不可能と知る。神仙があるならば悪魔もある。悪魔の通力を得て後、神仙を目指そうと考えて、魔道を舍利に再び問うと、七度も三十三度も白で可能とのことだった。
(二三九―二四二頁)

其十二 魔道伝授をどうして受けようと迷った末に聖天を思いつき、その履歴を知るために行李をといて調べ始める。
(二四二―二四五頁)

其十三 仏書を求め寺から学者から本を借り出し苦学して、やっと軍荼利明王の修法を会得して聖天を呼び出そうと決心した。斎戒沐浴して祈ると、大魔王が出現した。
(二四五―二四八頁)

其十四 現れた毘奈耶伽王に次郎は魔道執心を述べ教えを乞うが、逆に心を見透かされ、魔と仏が同じものであることを説かれ、愚か者といわれる。しかし、なお、眷属の中に加えてほしいと乞う次郎を、宝剣で身を二つにして、二人として、一人を同須という眷属として次郎に暫く仕えさせる。
(二四八―二五一頁)

其十五 次郎は同須の力を知ろうと質問する。何でも出来るというので、温泉に入ること望むと、唐土驪山の温泉に瞬時に連れていく。
(二五一―二五四頁)

其十六 浴槽からあがると、四人の女たちが垢搔きをして、十二人の女たちが着替えを持ってまっていた。次郎はその中から二人の女の持つ好みの着物を選ぶ。
(二五四―二五六頁)

其十七 連れていってほしいという二人の女を置いたまま、次郎は温泉から九世渡に帰ると、我が家は橋立、宮津を含めた大庭の中の金殿玉楼となっていた。酒を飲みながら、この子細を同須に尋ねると、漁師の家は焼き払って、物は盗んできたという。
(二五七―二六〇頁)

其十八 次郎は驚き旧に戻すようにいうが、同須は快樂を望む主人のためにわざとしたことという。次郎は酒も美女美少年もいらない、本地に返せ。自分は額に汗して働いて食べたい、同須も共に働けという。
(二六〇―二六三頁)

其十九 同須は元に戻すが、耕作だけはできないという。また、美女美少年の放還も本人たちが望まないもので、力づくで追い返そうかどうかという。次郎が直接彼らから訳を聞くと、今の生活のほうが好きと答えるので、魔風で追い返す。
(二六三―二六五頁)

其二十 次郎は庫の中にある元の家に戻って寝るが、寝つかれず、いろいろなことを思っているところに、門を叩く者がある。不思議に思い、戸を開けると女が懐かしいと取りついて泣く。
(二六五―二六八頁)

其二十一 女は勇菊であった。次郎が相手にしないので、女は海に飛び込んでしまふ。次郎は勇菊を助けるが、この後に困り、同須に相談する。同須は女を化石にしてみよう。
(二六八―二七〇頁)

其二十二 次郎は殺せとは頼まなかったと同須を責めるが、同須は殺したのではなく、動かないだけで三年間立てば復活するという。しかし、次郎は人の意思知覚を奪っているのは快くないと、元に戻させる。そして、困った次郎は同須に我身を化石に変えさせた。
(二七〇―二七三頁)

以上のように「新浦島」の構成は「其一」から「其二十二」までの二十二の章段に分かれているが、さらにその展開から大きく五つに分けられる。九十九代目がその息子に百代目を譲り死ぬまで（其一―其五）。息子次郎の遊学流浪（其六―其八）。親の死を見て、自分も神仙を求め、尊天を呼び出すこと（其九―其十四）。同須を授けられ思うままに使うこと（其十五―其十九）。訪ねてきた勇菊を避け石となることである（其二十―其二十二）。

こうした筋書きを追ってみると、得知の『浦島次郎蓬萊嘶』との類似点がはつきりしてくる。二人の浦島次郎ともに遍歴を重ねていることである。そして、色欲を抑制しようとしていることである。ここから、二人の浦島次郎の関係が同じ道を前後して歩いているに過ぎないことが理解されよう。作品の発表された時間経過からいえば、得知の浦島次郎が歩いている道を引き継いで露伴の浦島次郎は歩きはじめているのである。

もちろん二人の浦島次郎はその素性が異なっている。得知の次郎は浦島太郎とは縁も縁もない丹波の獵師の次郎作であった。しかし、露伴の次郎は浦島太郎の弟の血縁である。だが、血縁であっても所詮は次郎である。太郎の話から外れたところで筋書きは展開していく。それが、浦島次郎」という人物を主人公とするの物語の所以であり、パロディーとなる必然でもある。

ところで、この露伴の利用した浦島伝説はどんなものであったのだろうか。九十九代目が百代目に語って聞かせたその内容は次のようなものであった。

往昔浦島が子と云つて水の江に居た漁師があつた、乃公が先祖は其弟、ところが世間に名を知られた兄の浦島は世に傳へた話の通り龜の命を助けて遣つた仁徳の報で龍宮に案内され、龍王の娘に惚れられて今日も明日もと歡樂の郷に引止められた、然し故郷の忘じ難い理屈で一旦歸らうと強て云ひ出して玉手箱を買つて來たが、其時は既何百年も経た後ゆ糸水の江の様子も變つて知つた人も全で無い位になつて居た、勿論浦島の惣領では有つたが嬢もまだ無い中に龍宮へ行つて久しい間音信も無かつたので、乃公等が先祖の乙子どのが家を預か

つて女房も持ち、漁の都合で此の九世渡に早くから移つて住んで居た、それ故龍宮歸りの浦島殿も左様とは知れなかつたもので迷ひ出して玉手筈を明けたが、雲のやうなものが出る途端に齒もぶら／＼髪も白々と三四百年立つただけの本相になつて仕舞ふたさうな、

『露伴全集』二二〇頁

この語られた先祖が、浦島太郎でなく「浦島が子」とあるのは、太郎より一時代古い古代の呼称を用いたのである。しかし、行き先が蓬萊でなく龍宮であるのは、鎌倉以降の中世の伝説内容である。では、亀の存在はどうなのであろう。亀を助けた報いで龍宮に案内されたところばかりで、その亀をどう助けたのか、どのようにして龍宮に行ったのかも語られてはいない。だから、得知の場合と同じように祝言御伽文庫の「浦島太郎」のように亀を釣り上げて放生する助け方とも考えられるし、明治初期の赤本に見られる漁師に捕らえられ殺されそうとするところを助けたとも考えられる。だが、肝心なのは「龍王の娘に惚れられ」とあることである。龍宮ゆえの龍王、そしてその娘となれば、古代の常世や蓬萊の亀姫ではなく明らかに龍宮の乙姫が想定されていると見るべきであらう。

さて、続いて九十九代目はその後の浦島についても語る。

世間では其後を語らぬが、さて老耄れた浦島殿は其時忽ち心に悟つて、其から曲つた腰を伸しく磯に居た漁師に老釣竿を買つて杖とつきながら、近江路美濃路と段々に名山を搜して信濃にかゝり、信濃の寢覺の床といふところに止まり、龍宮の榮華も覺むれば一夢の痕無く香無く、人間の富貴も融けぬ間の氷柱を彩り雪丸に刺繍するばかりと觀じて静に岩窟の主人となり濟まし、餓えては樹菓草菌に渴いては石の罅隙の眞清水に惜しからぬ身を委ねて居られたさうだが、其中にとゞく仙人と成り上つて日の出る國から日の入る國まで、雲の上の世界から地の下の世界まで一眼に見るやうになり、岩の中にも透り霞の上を遊ぶやうにもなられて、通力自在の身の心安く世を送られたが、仙人になつても縁には牽かれるものと見えて復龍宮へ渡ると定つた時、杖にした釣竿の截端に手紙を封じ込んで彼の玉手箱に添へ、召使ひの仙童に持たせて、吾が肉身の弟の九世渡に居るといふことを天眼通で見られたにより、此方の先祖殿に置土産として、

而して龍宮へ行かれた限り其後は知れやう筈も無いが、これだけは手紙にあつたと先祖父^{かたみ}代々紀念の玉手筥と與に傳へた話、(同三二頁) 浦島は玉手箱を開けて老人になつた後、信州の寢覺の床に行つた。そして仙人となり、また龍宮へ歸つたという。信州の寢覺の床に浦島伝説が起こるのは早くても室町末期であらう。この伝説は所謂御伽草子類にもないが、寢覺浦島寺略縁起などで江戸時代中期以降には著名なものであつた。^(注六) 得知が伝説の基本を一つに絞つて展開していつたのに対して、露伴は古代から近世までの伝説を任意に取捨して展開している。そして、玉手箱と釣り竿と手紙の三点を先祖の浦島が肉親の弟へと残した代々の宝として設定する。しかし、手紙は五十代目の時に行方知れずになり、そのかわりにその五十代目の譲り状が残つてゐるという。

九十九代目から譲られた百代目となつた浦島次郎の願ひは神仙を求めることにあつた。この百代目の浦島次郎は、若くして既に人生の現實に絶望してゐた。学問も恋愛も金儲けもすべて彼にとつては意味のないものとなつてゐた。ここが、得知の描いた浦島次郎とは違ふのである。学問もない、恋愛もない、金儲け一筋の次郎に対して、露伴の次郎は、学問を捨て、恋愛を捨て、東京の生活を止めて故郷で漁師をしようとしたのである。しかし、そこで自分の家柄が神仙に係わることを知り、最後の望みをそれに託した。彼の望むことは、俗世界の富でも愛欲でもない。厭う俗世を離れ、神仙の世界に入ることだけなのである。

さて、そこでこの百代目の次郎で注目したいのは、その発想と決断の方法についてである。両親の遺体が赤白の舍利と化した奇瑞を前に、彼は神仙の存在の可否に悩む。そして、今までの学問でも解決できないものとして「人智の及ぶところで無ければ、人間より上に靈智靈力を具へたものありと假に定めて其に依るほかは無し」と思いつく。そして、その方法として「彼の赤白二つの同じやうなる舍利のあるこそ幸ひ、眼を瞑^めぎて若し仙人のあるものならば白き方を取らせ玉へ、無きものならば赤き方を攫^とませ玉へと、盆か何ぞの上に二つの球を置いて在り所知れぬ

ほど回轉したる後盲搜りに搜り得たる方に定むべし」と決めたのである。というのも「但し靈智靈力あるものありての冥示ならんには其證として七度撈りても七度同じものなるべく、又譯も無き事ならば或は白き方を得或は赤き方を得て自然定まり無かるべし」という理屈からである。これは偶然に任せるようでありながら極めて論理的發想である。数学の確率論を前提とした論理が使われているのである。そして、實際に彼は舍利を玉手箱の中に入れて取り出し、七度まで行つていずれも白ばかりであつた。もう疑つ余地はない。では、「我が神仙道に於て成道昇天の時あるべきや否や」もこうして明らかにしようとするのである。そして、神仙道は成らず、魔道ならば成るといふ結果を承認するのである。

今までない事態に陥つた時に、今までの總てを否定して、その上で納得できる論理を見いだし、それに徹して決定していく。微塵も感情の入らないこうした論理性の徹底にこそ新しさがあるといふべきであらう。

こうした論理性の徹底という点においていえば、この後に登場する魔王としての尊天、聖天毘奈耶伽王の登場に対しても同じである。尊天は次郎の目論見など先刻承知で「魔力を偷んで仙とならんと小き智慧を動かして我を誑かる心算とは飽まで見破り果てたるぞ」といい、次郎の浅はかな論理を破壊しようとする。魔と仏も仙も同じであり、本来その区別の付かないものであるという。「説け我はこれ佛か魔か天か畜生か鬼か仙かと」という尊天の前に返す言葉も見つからない。「非魔非佛なる我に對つて魔法を求むる味きもの」と呼ばれ、次郎は魔道を断念し、では眷屬の中に加えられることを望むが、それすらも拒否される。

しかし、尊天は「されど左までに云ふ上は汝を我が族になし與へて同須と呼ぶ名を假に命じ、汝浦島次郎の使役に少時供し得させん」という。これもまた論理的な物言いである。汝（＝浦島次郎）を尊天の眷屬にならせて同須と呼ぶ名を假に付けて、汝＝浦島次郎の使い走りに与えよう、ということになる。次郎は眷屬となり同須と呼ば

れ、次郎に召し使われる。そんなことが可能なのか。尊天は宝剣を抜いて次郎を脳天から二つに切ると、次郎は二人となつたのである。「尊天は右の次郎をば劔もて指しつゝ嚴かに、其處に名あれよ、名に力あれ、力に質あれ、質に性あれ、毘奈耶伽天王隨侍同須、と呼はり玉へば唯と答へぬ」と同須は誕生するのである。

この同須は姿はまつたく次郎と変わらないが、分相應の通力は具えているという。次郎はそこで、この同須に経歴の概略を問う。すると「申し難き事ながら近き頃御主人が右の腕に宿りて、或は白き舍利或は赤き舍利を我思ふたまゝ取らせたるが随分の手柄ぞと覺えました」と答える。それに対して次郎は「さては此の次郎汝のために疾くより計られ居たりしか」と呆れ返るのである。

だが、ここで考えてみよう、果して計つたのは誰か。同須が思うままにというが、同須の意志は誰の意志なのだろうか。尊天の意志ではないのか。また、同須の意志とした場合、いま仕える主人次郎との関係を予め想定していたものか。それ以前に今の同須は次郎の分身ではないのか。ならば、同須の履歴とは何か、過去の同須とは誰なのか。さまざまな論理の矛盾やパラドックスに突き当たる。もう少し述べよう。そもそも、浦島に神仙道の成就是不可能だったのだろうか。次郎が百代目を継いだ時から、九十九代目までの次郎と同じように神仙は約束されたものではなかったか。落ちついて考えれば、代々同じことをしていれば同じ結果になることは明白であつたはず。この自家撞着は、次郎が自分の意志で神仙道を求めたときに始まっているのである。

ともかくも尊天が「同須汝は浦島次郎が侍者たれ少時」といつた時から、こうした関係が成立してしまつた以上、「少時」その関係は続いていく。そして、その終わりのない「少時」は続くのである。こうした論理を中心とした小説のあり方こそが、得知の作品にはなかつた「新浦島」の新しいところといつてよいだろう。

四

ところで、この露伴の「新浦島」の主人公浦島次郎という名と幸堂得知の『浦島次郎蓬萊嘶』とは偶然に同じ名前であったのだろうか。それとも、二つの作品の間につながりはあるのだろうか。おそらく、名前の一致は偶然ではあるまい。

岡保生氏は、幸田露伴「新浦島」に関連して、この二人の浦島について述べている。「露伴のこの作の場合、しいてその先蹤を求めるならば、わたくしは、むしろ宛然たる「明治の黄表紙」ともいうべき、幸堂得知の『浦島次郎蓬萊嘶』（明24・12、春陽堂刊）のほうに、まだしも妥当であろうと思う^{（注七）}」とし、さらに、得知も露伴も根岸派に属していることを述べ、「この場合、主人公を浦島次郎とし、いわば八方やぶれの、どうにも構成らしきものをもたぬ構造をとり、自分の抱懐するすべてを次郎に託して奔放な想像力を駆使しようと露伴がこころみたのは、案外、平板そのものというべき得知作の破天荒なパロディをもくろむという露伴一流のいたずらもあつたのではないかと記す。

確かにそうした見方はできる。明治二三年頃から、露伴には、饗庭篁村や得知を中心とする下谷根岸辺りに住んでいる根岸党（根岸派）と呼ばれる集団との親交があつたことである。親しく一緒に旅行などもしており、仲間の得知の作品を読んでいた可能性は充分にある。しかし、状況証拠だけでは推測の域をでない。

では、それ以外に関わりのあるものはないだろうか。百代目の浦島次郎が世間を遍歴して成長していくという人物に設定されていることは既に述べた。しかし、歴代例えば九十九代目はどうだったのだろうか。九十九代目の口

からは漁師以外の履歴は語られていない。代々ずっと漁師だったはずだ。だから「其三」で、九十九代目次郎は「漁師で澤山だ乃公の一生は、飴賣りで澤山だ彼の與平次は、お桑婆さんは蠶兒さへいぢつて居ればよい」といわせている。しかし、なぜ、ここで飴売りが登場するのだらう。与平次とは誰のことなのだらう。ここから、次郎作の飴売りと得知の名前を連想することに無理があろうか。幸堂得知、鈴木利平、幼名庄吉のち平兵衛と称すという。ここで飴売りという商売が出てくることについては前後にまったく脈絡がない。漁村に飴売りとは似つかわしいだらうか。他の商売でもいいはずである。やはり得知の次郎作が飴売りであったことを暗に踏まえての比喩ではなかつたかと思わせるのである。

もう一つ例を挙げておこう。仏が原で飴屋は次郎作に浦島太郎の来歴を説明したこと既に引いた通りである。その引用の直後は次のように続いている。

モシ——お言葉の中では有^(有)ますが、忘れるの忘れぬのと名荷^(名荷)畑で狐に魅^(魅)されたやうに其様な呆^(呆)りヒヨンとした願ひではありません。心から底から蓬萊の子に成^(成)た心持で居るのです。感心^(感心)々々、其程執心なら間違ひも有^(有)まいが途中には種々な魔界が有^(有)から氣を付て行^(行)めととんだめに合^(合)ますぞ。ナニ、おまへさん、魔界などは何程有ても平氣なものさ。飯令魔界^(飯令魔界)裨^(裨)が訛^(訛)かしに來やうとも、魔界山が崩^(崩)れ掛つても來やうとも、恠^(恠)ともするものじやア有^(有)ません。そんな所へはドン——鍬砲^(鍬砲)でも撃^(撃)込^(込)で、大魔も妖魔は申に及ばず、達磨でも維魔^(維魔)でも按摩でも秋魚^(秋魚)でも、魔といふ魔は残らず降参させて通るつもりでございます。

(十四丁)

ここで飴屋は、蓬萊にたどり着く前に魔界に注意するように説いているのである。この魔界は、先を読んでいけば、傾城が窪で遊女に騙されることを指すと見るのが妥当だらう。しかし、露伴の「新浦島」をも視野に入れると「大魔も妖魔は申に及ばず、達磨でも維魔でも按摩でも秋魚でも、魔といふ魔は残らず降参させて通るつもり」という意気込みは、露伴の浦島次郎に通じるものがある。つまり、露伴は得知の『浦島次郎蓬萊噺』を読んだ上でこ

の「新浦島」を執筆したと考える方が、素直に理解できるのである。書かれた作品こそは大きく違つが、露伴の『新浦島』は、得知の『浦島次郎蓬萊噺』を充分に意識して書かれていた。更にいえば、得知の浦島次郎が立ち止まった先から、時代が変わつたことを意識しつつ歩きはじめた次郎であつたのである。

そうになると、めでたしめでたしで終わつた『浦島次郎蓬萊噺』に対して、「新浦島」の次郎が勇菊から逃れるために化石となる結末をどう理解したらよいのだろうか。そもそも、浦島伝説の結末は玉手箱を開けて年寄ることに基本的にきまつていた。そうになると、その趣向をその裏返しにすることを考えることになる。つまり、箱を開けて若返る浦島の結末が登場している。それは近世において既に狂言「浦島」や草双紙「浦島七世孫」に見られるものである。ゆえに露伴はそれを取らなかつた。浦島次郎の望んだのは神仙道である。そうになると目指したのは不老不死ということになる。つまり、不老不死の一変形として登場したものがこの結末ではないだろうか。

人間が一時化石化することは、正確には不老であつても不死ではない。「三年の間は生死の外の世界」にいるのである。だが、ここで生ずる時間の格差こそ浦島伝説の本質的なものの一つであろう。化石化した勇菊を前に同須は次郎にいう。「三年々々また三年と月日を過ぐす中には失禮ながら御主人の髪に霜も侵して、色戀のない冷い世界に入つて行くゝは知れし事ゆゑ、勇菊殿の執念も弓状の腰した御主人にかゝらうやうもござりませぬ」と。確かに勇菊は三年後ごとに蘇るたび、既に次郎は三年づつよけいに年を取っているのである。その年齢の格差に色恋がどこまでついてゆけるのだろうか。こう考えるとき、これはそのままSFの題材ともなりうる。

そして、こうした恋愛を描いたSF作品が既に栗本薫氏にある。一つは「心中天の浦島」であり、もう一つは「ウラシマの帰還」である。^(注)どちらもアインシュタインの特殊相対性理論をもとに宇宙時代の宇宙飛行士と地球に残された女性との恋愛を描いたものである。そこでは、こうした時間の格差を取り除くために、本人が望めば人間

の人工冬眠という方法までが考えられているのである。露伴の発想の斬新さはここに繋がるものなのである。

結び

近代という時代はどんな文学を生み出していったのか。年が明け新年になったからといって、人間が新しくなるわけではなく、明治という時代になってもすぐに文学の質は変わりはない。文学は緩やかに変化していく。同じ明治二十年代ながら、同じ根岸派という趣味の近い集まりに属しながら、二人の浦島次郎の違いは、近代過渡期の明治二十年代の複雑な文学状況を表していた。その違いは内容だけではなかった。得知の『浦島次郎蓬萊噺』は木版刷で錦絵を伴っていた。岡氏はそれを「明治の黄表紙」と呼んだが、まさに江戸の出版文化がそのまま残存していたのである。一方露伴の「新浦島」は新聞に連載という、明治に誕生した新しいメディアに新しい形で発表されたものであった。しかもその新聞は『国会』という帝国議会開会にあわせて創刊され、「知識階級向けの高級新聞をめざし」、「異色ある文芸欄で明治二十年代文壇に重きをなした」新聞であった。^{〔注九〕}既にそのメディアに大きな開きがあったのである。執筆者の意識の格差があつて当然であろう。

得知の次郎作が蓬萊を求めたのは「命を延し、旨いものは喰次第、好きな酒は飲次第、活計、歡樂心の儘とやつて見たい」という己の欲望の肯定であつた。しかし、露伴の主人公の浦島次郎は、快樂も富も求めない。富と快樂を求めるといふパターンを否定しているところに露伴の世界が成立しているのである。露伴の理想とした世界は、そつした欲望から離れた神仙世界であつた。この時の露伴二十九歳。作者の早熟と老成が思われ、次郎の姿に、青年期特有の性急さと理想の追求が象徴されている。だが、完全にそれを実現することは出来ない。それがラストシー

ンの石と化す姿になって象徴的に表されているのである。露伴の『新浦島』の題名に「新」がついているのは、彼の描いた浦島が人間の普遍的欲求を乗り越えて、なおかつ神仙世界を欲しているところにある。つまり、得知の浦島次郎が求めたものを否定したところから、出発したところにあるのである。新しい浦島伝説はここに始まったのである。

注一 例えば、『勝鬨』の奥付には「毎月一回発行」と記されているが、以降の奥付からは消えている。また、八巻のみであることは、『日本近代文学大事典』（昭53・3）・第六巻の叢書・文学全集・合著集総覧においても八巻の記載しかなく（二二―二三頁）、岩波版『透谷全集』第一巻の解題でも「標題の書は前年十二月春陽堂刊「新作十二番」全八冊のうち第八番。半紙木版刷組綴本」（四四〇頁）として、根拠は未詳ながら全八冊と明記されている。

注二 近世における浦島伝説の変容の詳細については、拙稿「浦島伝説の近世における展開——浦島乗亀譚の生成をめぐり——」（『説話文学研究』第35号掲載予定）を参照されたい。

注三 『浦嶋太郎珠家土産』については、拙稿「浦島伝説資料稿・近世草双紙編」（駒澤大学古小牧短期大学紀要・第24号・平4・3）、及び、前田裕子「合巻『浦嶋太郎珠家土産』について」（『叢草双紙の翻刻と研究』第15号（平4・10））に翻刻と解説がある。詳細はそちらを参照されたい。

注四 得知は「いわゆる江戸趣味の一人で饗庭篁村ら根岸派の文人として知られ、その作品は滑稽洒落の戯文調のものが多い」（『日本近代文学大事典』二・一七頁）とされるだけでなく、実際のその学識を生かしてこの時期には黄表紙のアンソロジーである『大通世界』の標注編集をしており、後には統帝国文庫の第三四編『黄表紙百種』と第四八編『名家短編傑作集』の編輯校訂を担当している。

注五 明治初期の赤本の内容については拙稿「日本昔噺「浦島太郎」の周辺」（駒澤大学古小牧短期大学紀要・第23号・平3・3）を参

照されたい。

注六 拙稿「寢覚浦島寺成立の周辺——能「寢覚」と浦島伝説の接点——」（伝承文学研究・第46号・平9・1）を参照されたい。

注七 『解釈と鑑賞』（四七七号昭48・2、特集・異端文学の世界）。

注八 「心中天浦島」は『SFマガジン』一九八一年二月号、後、ハヤカワ文庫『心中天浦島』（一九八一年）に収録、「ウラシマの帰還」は『SFマガジン』一九八三年七月号、後、ハヤカワ文庫『さらしなにつき』（一九九四年）に収録。「心中天浦島」については駒澤大学苫小牧短期大学平成四年度公開講座（駒大とまみん文学講座）「伝説からみる現代文学」の第四講「浦島伝説」の中で言及し、後公開講座集『文学の森』（平7・8）にその要旨を収録した。

注九 『日本近代文学大事典』第五巻「国会」の項・浅井清、一一八頁、一一九頁。

付記

本稿は、駒澤大学苫小牧短期大学平成七年度公開講座（駒大とまみん文学講座）「明治の浦島伝説を読む」での第一講「幸堂得知『浦島次郎蓬萊斬』」、第二講「幸田露伴『新浦島』」及び、後、公開講座集『文学の森』その2（平成10・12）にその要旨を収録したものを元に大幅に改訂したものである。

（はやし こうへい・本学助教授）

苫小牧駒澤大学紀要第三号（二〇〇〇年三月三十一日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3 31 March 2000

高度情報化社会がもたらす我が国における国民意識の変化

Change of Japanese National Consensus according to a Highly Informed Society

室 本 弘 道

Hiromichi MUROMOTO

キーワード：高度情報化社会、国民意識、ネットワーク、グローバル化、国際情勢

要旨

これからの高度情報化社会がドライブするグローバル化の流れは、我が国の戦後の国民意識を根本から変化させるかもしれない。その要素として考えられるものに、1、国民の国家帰属意識の変化、2、我が国周辺の国際環境、3、情報サイエンスの進歩をあげて検証した。国民意識の変化は、当然国家の安全保障観の変化をもたらす。グローバル化の進む中で、近い将来、我が国は新しい21世紀の国際戦略が求められよう。

一. 前言

今日の世界は、そして日本もいよいよ待った無しのいわゆる「高度情報化社会」へ突入し、人々は好むと好まざるとを問わずそれに組み込まれつつある。

このことがいかなるインパクトを人々に与えているのかを考察し、2025年頃をターゲットとして、それがどのような国民意識の変化につながるのかを考察したい。

二. 情報化社会の到来

情報化社会とくくと、人によつては大いに迷惑であるとか、つまらない情報の氾濫に拒否反応を示す人は多い。これは何も中年以上の人に限った話ではなく、若い学生達について、アンケートを取ってみても、これ以上の情報は要らないという意見の方が多い。また早い情報化速度について行けない若い人達も増えてきており、情報の個人格差がすでに学生間に存在している。

このような昨今の情報環境について、西垣通氏は近著^{注1}「こころの情報学」のなかで次ぎのように指摘している。

「現在我々を取り巻く機械情報の量はヒトの処理できるレベルをとくに超えており、その中で、子供たちは一種の「思考停止」という手段で自分を防御しているようだ。他人と話す関係を持てず、他人を避ける「回避性症候群」や自分でものごとを決断できず、すべて他人に頼る「指示待ち症候群」、「依頼性症候群」なども、混乱した挙げ句自己の中心に空虚を抱え込んだ若者が示すものだ。これ以上の情報を持ち込む他人は面倒な存在であるし、かといって思考を停止すれば、他人に頼るほかはないという不安にかられる。そしてその不安をサイバースペースにおいて解消してくれるものとして、ノーマルな「ヒトの心」から安易に「サイバーな心」を持ち、のめり込んでしまう」

と。

例えばサイバースペースの教祖がカルト宗教である場合は、オーム真理教などはこれからも決して無くならないことになる。

ここで本来の「情報」とは何かについて考えてみたい。

「情報が多すぎる」とは良く聞くが、「知識が多すぎる」とか「知恵が多すぎる」とは聞かない。このことは今日の情報というものが、「事務的・機械的に処理するもの」と受け止められていることを意味している。

西垣氏は更に「本来情報とは生命の意味作用である。社会的動物であるヒト特有の言語をはじめとする記号表象が生まれ、「ヒトの心」を創った。しかしそれが規範化されて、今日意味内容を剥ぎ取られた記号のみが機械的に複製・配布されるようになった。これが、今日我々を取り巻く機械情報であり、これを扱うテクノロジーの驚異的進歩によって、我々に襲いかかり、ヒトの根源的な統一感覚を見失ってしまいがちになる。しかしながら、ヒトの心は理性のみを体现する論理機械からは程遠い存在であるから、本能にからだ、烈しい欲望や恐怖が次々に吹き出してくる。」と。

高度情報化社会においても、「ヒトの心」はもともと情報（社会情報）が織り成すダイナミックなプロセスであるわけで、これからも、「情報」が「心」を作りまた「心」が「情報」を作り出して行くことになる。もちろん「サイバーな心」もその一つということになる。

今日の情報に対する人々の不安や対応は、ヒトと機械情報との出会いに本能的に現代人が、更なる「ヒトの心」を求めてもがく姿であるといえるのではなからうか。

そして、その身体性への復権に寄与できる情報技術の一つが、人間の諸感覚を融合するマルチメディアであるといわれている。

さて、今日のこの情報化が人々の意識の形成（国民意識形成）にどう関係してくるのか考察してみたい。

今日の情報化社会を作り出しているほとんどの中心となるテクノロジーは、詳細に調べるほど、米国の軍事上の要求によって、米国防省を中心とするグループが誕生させたことが分かる。戦後の日本の科学者の多くは、軍事的な要素を極力除外したいと希求する傾向が強く、このためパソコンや公開鍵暗号方式を生み出した民主化グループの貢献を強調したり、今は殆ど無くなったが、ネチズンを強調したりしてきた。しかし冷静にルーツをたどれば、原子力技術がそうであるように、今日の情報化の礎は、戦争の道具として誕生している事が明らかとなる。

この本質を見誤ると、今日の情報化に対する日本人特有の情報化拒否反応や情報進度の対米遅れを、正確に理解する事が出来ないと思っている。

今日我々が目にする機械情報化の進展は、米国流軍事戦略・戦術及びそのための技術が作り出したものであり、米国流軍事合理性一点張りの思想は、戦後の一般の日本人にはどうも馴染めないものであり、今日の高度情報化時代の到来に日本人は躊躇思案していると思っている。

もちろん、米国の軍事技術が今日の全ての情報化技術を爛熟させたなどとは決して思っているわけではない。インターネット誕生後、軍事側へは、民の持つ優れた技術を導入したCOTS (Commercial Off The Shelf) あり、また最近の軍事技術からのスピン・オフ (Spin off) ありと、軍民双方がインターラクティブな関係を保ってきた。

近未来の現代情報化は今後更に相互依存関係を深めつつ、「ヒトの心」を持った情報化へ進化することが予測される。我が国においては高度情報化の波が、一部の自衛隊の装備品という例外を除いて、米国の一般社会から到来したために、もともと民生技術であると勘違いしている節がある。また民生技術が軍事に応用される時代であると、我が国では常識のように言われるが、米国やロシア、ドイツやフランスでは民生技術にそこまでは依存してはいない。我が国には軍事技術がないだけの話である。

ちなみに20世紀後半、つまり今日の情報化社会を特徴づける技術は、1。インターネット 2。バーチャル・リアリティ 3。GPSであろう。いうまでもなく全てが米軍事技術がもとである。

米軍事技術から発信された情報化社会は、今や、国ごとに異なるさまざまな問題を抱えつつも、全世界を覆い尽くし始めているのみならず、高度情報化社会への待望と情熱は、いかなる国においても高まっている。我が国でも例外ではない。

最近、今日の高度情報化社会が、21世紀の軍事革命RMA (Revolution in Military Affairs) を起こすといわれているが、本末転倒の議論に思える。これまでに過去何回があった軍事革命が、産業社会の発達の結果もたらされた新技術が軍事に応用されて軍事革命につながったが、今日の情報化軍事革命はこれとは好対照に、軍事自らの要求が作り出した技術が軍事革命を引き起こしつつあるわけであり、至極当然のことである。もう一つの同様な例は、原子力による軍事革命である。従ってこの二つの軍事革命は、後でも触れるが、軍事的にはとてもよく似た結果をもたらすことになる。

三・ネットワークと人々

情報化の中心は言うまでもなくコンピュータであり、第2次大戦末期、軍事的要求（暗号解読、弾道計算及び原爆開発）から生まれた。

そして電気通信技術が作り出すネットワークはまずデータ通信システムとして米国の軍事的要求（半自動警戒管制組織SAGE）から生まれた。そして今日のネット社会を誕生させたインターネットも、米ソ冷戦下での核戦略が生み出した米国防省のアーパネットが発端である事はよく知られている。

しかしこの技術はたちまちスピノフを起こし、広く民間社会に使われるようになった。使いやすいソフトの開発とパソコンの低価格化が、軍や一部のネチズンと呼ばれる人達のものであったコンピュータを、一般大衆の利用するものへと変えた。ネットワーク社会では端末の普及が極めて大切な要素となる。パソコンという端末が多くの人々を結びつけ、今日の機械から人へ、通信からネットワーク社会への転換が可能となった。情報化技術は、あらゆるメディアを一括して送受信できるというデジタル技術の統合汎用性によつて更に大きな発展を遂げつつある。人々をネットワークキングすることは、人々の意識に変化をもたらした。自分の部屋にしながら世界中の自分の欲しい情報や遠くの相手にいきなりアクセスし、トランスローカルなコンタクトが簡単に可能となった。

しかし、このことはよほど主体性を持つて、それらの情報と向き合わなければ、先に述べたように情報洪水の中に埋没する危険性がある。また個人のレベルでは殆ど防ぎようのない情報セキュリティの問題が提起された。そしてこれからのインターネットの成否は、セキュリティにかかっていると言えるところまでやってきた。

このようにネット社会は、メリット・デメリットを多く包含しながらも、世界中の人と情報とを結びつけ、多く

の人々を取り込みつつある。

今年7月、世界のインターネット利用者は1999年末で1億3千60万人に達し、2003年には3億5千万人に膨れ上がるとの予測が公表され、また全世界のネットの5割が米国関連で占められていることが示された。米国の軍事が作り出したインターネットのお家元であり当然とも言える。

我が国でも6月に公表された通信白書によれば、平成10年度の国内インターネットの利用者数は前年比46・6%増の1、694万人に上り、5年間で普及率が10%を越えたのは、パソコンや携帯電話を上回る速度と言われている。

米国では、国家活性化計画の目標として、NII(National Information Infrastructure)計画が推進され、更に米国主導のもと、G7において決定した世界情報基盤計画GII(Global Information Infrastructure)により、日本を含む全世界に情報ハイウエーを張り巡らすことが約束された。

特に最近の傾向は、中国などのアジア地域での加入者が増えているが、このことは、閉鎖的な国家においては、まさに国難の到来でもある。国民の情報化に大変熱心なあるアジアの国だが、個人の衛星受信アンテナを厳しく取り締り、外国衛星放送の受信を禁止している。つまり外国からの有害な情報の流入を規制しているわけだが、情報化を押しとどめることは不可能と思われる。

四、通信からネットワークへ

ここで、人々を巻き込みつつある脱工業化社会の本質ともいえる高度情報化社会を特徴づけている「通信とネットワークとの違い」について触れておきたい。

通信は端末間同志、端末とノード（交換機）あるいはノードとノードを線状に繋ぐが、ネットワークは、それらを組み合わせて立体的に空間を包み込む通信網である。通信の主役は通信機だが、ネットの主役は、ハード的にはコンピュータ（交換機）を中心とするノードであり、ソフト的にはプロトコル（通信規約）である。そしてネットワークという言葉は、取り扱うメディアが主としてデジタル化されたデータであることを意識している。このプロトコルを体系的に階層化してネットワーク・アーキテクチャーになる。通信にはこのような機能はない。ネットワークはこれまでの、通信の線概念を、空間を包み込む網概念にまで拡張した。すなわちネットワークは、ネットを構成する各種の端末を含む装置全体を制御するハードのみならずソフト的な運用概念が持ち込まれている高次の通信網といえる。

最近では、ネットワークを、もっと広がりを持った人々や組織の集まりとして捉え、マルチメディア・コンテンツを中心とした捉え方がされている。この観点からいえば、通信には音声・データ・画像という捉え方しかないといえる。

この「通信からネットへ」の転換は、人々をより高度情報化社会へと導いている。人々の暮らしのみならず、アルビン・トフラーは電気通信革命は「軍事革命」につながると指摘している。^{注2}私はもしこの種の軍事革命が起きるとすれば、「通信からネットへ」の転換が、高度情報化社会すなわち脱工業化社会の本質だと思っている。

ここで我が国の情報インフラの整備について触れておきたい。

1994年5月電気通信審議会の答申、21世紀の知的社会への改革に向けて「情報通信整備プログラム」によって、2010年を目標に3段階で整備に着手するFTH（Fiber to the Home）計画がある。最終的には全国津々浦々

までも、光ファイバーで結び、高速度の通信ハイウエーを構築し、高度情報化社会の中心である人間の感性へ働きかけるマルチメディア時代を実現しようとするものである。しかも今日の急速なインターネットや携帯電話の普及は、この計画の完成時期を更に早めるのではないかといわれ始めた。

現在世界の通信サービス業界は凄まじい投資と再編を繰り返している。技術力、資本力、サービス内容、価格競争力、加入者の動向などが要因となつて、弱肉強食の世界が展開されている。いづれそう遠くない将来、世界の通信網は、その中を流れる信号伝送技術はもとより暗号技術についてまで、標準化規格化されたインターオペラブルな、WWW (World Wide Web) が完成するように思えてならない。そしてもしNTTの名前があるとすれば、そのWWWの日本担当部門として活躍しているのかも知れない。

「お釈迦様の掌の中の出来事」という言葉があるが、これからは、どんな大きな世界の出来事や、大きな戦争でも、敵も味方も使用せざるを得ない「国際公共財WWWの掌の中での出来事」に過ぎなくなる。このようにして、日本でも世界でも情報ネットワーク社会が到来することになる。

五. 情報技術が加速するグローバル化

今日、この情報ネットワーク社会は、グローバル化（世界の縮小化）、民主化、ボーダレス（無国境）化、価値観の多様化、国民国家の崩壊あるいはその相対的な低下などを加速させている。

今日急速に進展する情報技術がドライブするグローバル化のなかで、我が国の国民意識に対して、近い将来どのような影響を与えつつあるのか考察してみたい。

そもそもグローバル化は今日始まったわけではなく、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、交通通

信網が発達した時代から始まっているという説や、もっと古く人類誕生から始まっているという人もいる。これらの過去のいずれの場合にもグローバル化の進展は主権国家存立の主張という結果に終ってきた。しかしながら、過去のグローバル化と今日の情報技術がもたらすグローバル化とは桁違いなインパクトを有し、将来ともそう簡単には、グローバル化の波は止まらないという認識が一般的であろう。

今日米国主導の情報技術がもたらしたグローバル化は、まずグローバル経済となつて現れ、我が国を覆い尽くしたとも言えよう。この根本にあるものは、米国流・アングロサクソンの・キリスト教史観とも呼ばれる一元的価値観に立つたものの考え方であるように思われる。これに対して、単一グローバル自由市場などと言うものは、民主主義とは相容れない現代のユートピア（幻想）に過ぎないものであつて、結局世界は多元的な価値観が並立する今日のな世界が続くとする考え方がある。（このような意見は例えば、英国のジョン・ 그레이の近著「グローバルイズム」という幻想」^{注3}に詳しい。）

人々の価値観は普遍的なものなのか、多元多様なものなのか。また国家の役割は、特に今日の日本で言われるように縮小して、小さい政府に向うのか、反対に、国家は再評価の方向に向うのか、二つに分かれよう。本件に関し京都大学の中西輝政氏は「グローバルイノベーション一般が国際秩序における主権国家の中心性を突き崩すということの十分な論証も現れていないし、それを示唆する事態もいまだ見られない」^{注4}としている。

少なくともこれまでの日本は、米国が主導する一元的価値論の方向で官民マスコミ共に進んできたように見える。この、米国への傾斜に対してすでに、日本でも色々な反対意見が最近多く見られるようになってきた。もし将来日本人の多くの意見が、今日の一元論から本来日本人が持っている多元論の方向に傾く可能性があるとすれば、その要因は、1.「日本人の帰属意識」2.「国際環境の激変」3.これからの「情報サイエンスの発展」の3つが絡み

合った場合ではなからうかと私は考えている。

そして国民意識の変化は、戦後日本国民が忘れかけていた安全保障意識の高まりとなって、あるいは危険なほどの国民意識の転換を迎えるような気もする。

以下その変化をもたらし要因^{注5}ごとに、安保意識を絡めながら分析してみたい。

六. 「日本人の帰属意識」

はじめに、「日本人の帰属意識」について考える。

情報通信技術がもたらすグローバル化により、急速に世界に放り出された人々は、元京都大学の野田宣雄氏^{注6}など多くの学者が指摘するように、世界の二元化や世界国家の方向に向うのではなくて、「私はだれ？」と自問し、自分の所属するグループを希求し、宗教意識、民族エスニック意識、自分の所属する文化への帰属意識を顕著に示すという。昨今の原理主義運動、オーム、コソボなど思い当たるところである。

R・ロバートソンによれば、人々のローカル・アイデンティティは情報化によってむしろ顕在化し、これを彼は「グローカリゼーション」^{注6}と表現している。多元論を支持するJ。グレイは「グローバリゼーションは文化の相違を表現かつ深める作用をする。グローバル化した日本人は自分達の言葉で放送され、自分達の歴史と価値観を表現する衛星TVを見る時、日本人としての文化的連帯を強くする。すでに、ヨーロッパ各国に亡命しているクルド人はクルド語のTVによって共通の文化を維持している。グローバルな通信手段は日本や中国におけるように、それぞれの文化が自己のアイデンティティ、西洋の近代性との差異、そして互いの相違性を主張することを可能にする」といふ。

日本の国家を構成する日本人の均質性は、世界でも有名である。日本国民でありまた地域性も保有する「2空間並存性」を、日本人は徹底して実現してきた。つまりごく普通に浪速つ子が丸の内族をやっている。仮に多くの諸外国がエスニックを中心とした小さい政府や国家へと、傾いた場合でも日本国の一体性が崩れることが考えられるだろう。

最近よく「われわれ地球市民」あるいは地球国家等という言葉を耳にする機会が増えた。米国や中国が解体して地球市民を形成したり、世界を取り仕切るある機関（世界政府）に納税し、その金によって最終的に個人の福祉を賄う社会が、少なくとも21世紀前半に実現するとは、私は決して思わないし、そんな世界を希望もしない。

国際関係論や国際機構論（国連論）の根本を構成する考え方の中心は、「世界を統一するような独裁」を防ぎ、国民国家を中心に国際機関あるいはNGO等の民主的な共立によって、これを防ぐかである。このような考え方に立つて、人類が希求する世界平和、つまり戦争のない公正で公平な世の中を実現する方法として、現在までに人類が到達した叡智が、集団的安全保障論である事は、言を待たない。もしそれに反対するのであるならば、スイスの様に、国際連合に加盟しないのが筋である。

将来の国民国家日本は、アングロサクソンの説くキリスト教的一元論と世界に存在する多元論とを巧く組み合わせながら、グローバル化する高度情報化社会を生き抜く知恵を出し、かつそうする事は日本が世界に情報発信できる最大の貢献であるとの自覚を持つ様になるのかも知れない。

七. 国際環境の変化と日本人

次に今日の日本人意識を大きく転換させるかも知れない「日本を取り巻く国際環境」について考える。

冷戦の終焉と時を合わせて、情報技術が後押しするグローバル化が一段と加速した。冷戦の終焉は、日本周辺では、北朝鮮からのロシア離れに始まる北朝鮮の孤立化をもたらし、北朝鮮をして軍事路線を明確に選択させた。韓国の太陽風路線も情報による民主化を促そうという路線であり、いくら北朝鮮が特殊な情報の壁を構築しても、世界のグローバル化の風は壁を越えて進入する。関係筋の話では、北朝鮮の一般大衆は案外外の世界の情報を知っているとも言われている。韓半島の統一は、民族の悲願であり何かのきっかけがあれば案外早く解決するのも知れない。少なくとも2025年まで冷戦の遺物である南北対立が続くと言う事は、世界にとっても朝鮮の人々にとっても堪えられない事であろうし不幸なことである。統一のプロセスを見つめる日本人は、その時誰が主役で、ということが半島に起こり、日本人にとってどういう事なのかについて、日本のマスコミも連日詳細に報じることになる。

このような激動が、ヨーロッパや遠くのアジアでなく近隣に起きると、日本国民も1998年夏のテポドン・シヨック以上の反応を示し、国民の世界観や安全保障観までもが大きく転換する可能性がある。韓半島の統一が将来の日本に何をもたらすのか、統一された韓半島は核武装しているのだろうか。日本人の国民意識の歴史的転換が予想される。

また我が国よりもグローバル化の波乗りが上手い中国は、更に改革開放路線に乗り経済発展を遂げ、我が国のGDPを越える日も近いといわれている。

近い将来さらに政治・外交・経済・軍事的にも強大となる事が確実視される中国と、次世紀当初も相変わらず世

界の覇者であり続ける米国とが対立するとの見方が日本には多いが、私はそう思わない。米国は今よりも共通の価値観を中国と共有し、より接近すると考える方が自然で、理に適っているように思う。戦争による兵士の損害を極力避けたい最近の米政府や米国民の気持ちを考えれば当然の帰結かも知れない。

イラクと北朝鮮とダブルスタンダードであると冷やかされても、頑として多くの兵士の死亡が予測される北朝鮮との陸上戦闘は避けている。選挙前には政党の違いを強調してみせるが結局は戦闘を避けるのがクリントン以降の米政府の伝統となる可能性がある。増してや中国を相手に米国が戦争するなどとも正気の沙汰とは考えられない。もちろん双方とも戦略的対応に慣れた大国である。戦争寸前までの瀬戸際外交ラリーは当然行われるであろうが。

米国は振り子のように六十年周期で日本と中国を選択するともいわれているが、これからの21世紀前半は米中接近の時代であろう。

これからの日米双方の国民世論を考慮しても、これからは日米安保の難しい運用の時代に入らと思う。ロシアについてもいつまでも今のような経済停滞が続くわけはなく、旧ソ連とは異なる国の組み合わせで、多くのスラブ国や広大なユーラシア地域の国家の代表「ロシア」として蘇るように思う。歴史的にこの地域における多くの国家群にとっては、ロシアを代表選手として各国が生き延びようと期待する事が多かった。

高度情報化社会が進展しグローバルイノベーションは更に進展する中において、日本は米・中・露等の核兵器に囲まれた「非核の経済・技術国家」として生き延びる選択をしなければならない時期が迫っている。3つの核兵器を持つ大国に囲まれた国は世界のどの地域にも存在しない。

日本側から日米安保を止めますと言う理由は何処にもないが、民主国家アメリカの国民が別の選択、あるいは過

去何回もあつた孤立主義に戻る衝動に駆られた時、日米安保は終焉を迎えるかもしれない。

その時、日本人はいかなる選択をするのだろうか。

歴史は繰り返すという言葉があるが、京都大学の中西輝政先生は「日本や米国はこれから新しい中世へと向う」「日本の周辺国家はこれから過去の日本のように近代国家へと変身するなかで」と著しておられるが、私はもっと分かりやすく日本は明治元年を迎えると思つてゐる。

鎖国から開国した国際国家明治日本と同じ運命をこれからもう一度やり直す時期を迎えるような気がする。少子化・高齢化そして世界では人口爆発と食糧不足、エネルギー不足そしてグローバル化が進む中で、近未来の日本人たちが、我々の先輩が犯した過ちを繰り返さないように願いたいものである。

高度情報化が推進するグローバル化の行き着く先がどうなるのかは、今日のパックス・アメリカナ2が終る時、どのような世界が待っているのかが回答になる。

すなわち、自由主義経済論とホッブズのリアリズム政治論を根拠とするアメリカによる覇権安定論が終わりを告げた後の世界である。

アメリカの推し進める国際化つまりはアメリカ化であるが、この象徴である、キリスト教及びアングロサクソンの一元論に基きかつ啓蒙主義的なグローバル自由主義経済や小さい政府への転換等が行き詰まる時、世界は多元的見方に基いた各種の民主主義や様々な主義主張が混在し、かつそれらがすべて正義であり、混沌とした世界が、丁度今の時代と何ら変わわずに待っているような気がする。但しグローバル化する地球は、今よりは少しだけ権限をもった国際機関やN G O的な市民レベルの活動が盛んになっており、国際的な友好関係は個人を中心に相当進展す

るものの、どうしようもない食糧とエネルギーの不足をめぐり、紛争やテロは、今のアフリカに見られるように、日本周辺においても、血生臭さを増して頻発するのではなからうか。

これを象徴するように、すでに世界の危機管理は、国と国が戦争するこれまでの「対称型脅威への対処」から、直接国民を狙う、どこかの国にバックアップもされていない小グループによる、何でもありのしかも猛烈に悲惨な「非対称型脅威への対処」へと転換を開始している。^注自衛隊も同じである。

そして米国や国連が主導した湾岸戦争や米国を中心とするNATOに対するコソボ紛争の結果は、何ら解決をもたらしなかった。サダムフセインは多量破壊兵器の製造にいそしんでいるかもしれないが、コソボでは主役が入れ替わっただけである。更に、冷戦後に発生した、グローバリゼーションの結果生じた国民国家の相対的力の低下がもたらした、各種の紛争は何ら解決されないままに、21世紀へと順送りされている。

高度情報化社会が創る新しい21世紀に、情報技術革新が生み出すサイバーな世界観等が人間・人類を平和的に変えてしまいもう戦争などのないユートピアが実現すると楽観的な見方をする人々もいる。私もそう願いたいというは思わない。この点については後述する。

八. 情報サイエンスの発展と日本人

さて、ここからは日本人意識を大きく変えてしまつかもしれない「情報サイエンス（高度情報化技術）の発展」について考察したい。

多くの人はなぜ情報技術の発展が日本人意識を刺激するのか不思議に思うかも知れない。

これからのネット社会の中心をなすコンピュータや情報化技術の発展方向について考察する。

私は正直今日パソコンが良く売れるなど思っている。あんなに使いにくいものでもインターネットなど情報化への興味が人を引き付けているのだろう。

科学の発達の方角を便利さとの関係を占うものに、電灯は飛行機と異なり、未開の人でも一端使用したらもとのランプ生活には戻りたくなり、電気のある生活を希求するそうだが、飛行機の場合はあきらめてしまうそうだ。今日のコンピュータは電灯に当たるそうである。つまり現代社会や現代人にとって一度与えられると、その便利さゆえに使い続けることになるそうである。そのコンピュータが実現した今日のインターネットがいつまでも続くとは思わないが、ネット社会すなわち電脳社会は永久に続くと思う。

おそらく今の時代のパソコンについて数年後、「あんなに使い勝手が悪く、故障が多いのにアフターサービスも悪いものをよく使っていたものだ」というようになると思う。これからのパソコンは「身体とマッチするテレビのような、透明なメディア」にならなければ本物ではない。感性情報処理という面でまだまだの情報機器である。

また、今日のインターネットについても、電気紙芝居だと揶揄する人もいる。

今日のパソコンのレベルでは、とても人間の感性に働きかけてくる新しいメディアであるマルチメディアの誕生などとは程遠いものと言える。

このため、コンピュータをより人間に近いツールとなるように開発し、人間同志が対話するように使いやすくする研究がいま精力的に行われている。

京都大学の長尾真教授の言葉を借りると、人間の脳の判断には色々なレベルがあるとして、1. 外界からの情報

を判断する2。外界からの認識された情報について論理的な判断をする3。外界からの認識された情報について文化的背景に基づいた判断をする4。外界からの認識された情報について情動的レベルで判断をする5。外界からの認識された情報について本能レベルで判断する。

これらの5つに分類し、まず、2の論理的判断は一般的な知識に基づいたものだから、世界中に通じるものであり、今日のコンピュータはこのレベルであるとしている。しかし、人間はこのレベルの判断をいつもしているとは限らず、またこのレベルでの判断では決して満足しない。同じ事柄でも日本人には日本人の判断があり、アメリカ人の判断と異なることはしばしばある。人間は常に社会的存在であってその社会が持つ慣習・文化に影響されて物事を判断し行動している。したがって文化的・慣習的レベルの情報・つまり常識と言われるものをコンピュータに判断させる必要がある。

更に人間には情動があり、論理的には理解できても納得できない世界がある。この分野は現在のコンピュータでは全く手付かずの分野である。最後の本能的な判断については、動物的な刺激に対する反応の部分であり、コンピュータにはやり易い分野である。

今日のコンピュータの実力は2までとのことであり、人間としてはとにかく付き合いにくいヤツなのである。

3のレベルの、文化的背景に基いての判断がコンピュータに可能か、ということについては、大論争があり、これが人間の脳と機械であるコンピュータとの最大の違いだと考えられている。これは専門的には「フレーム問題」と呼ばれる難問である。

人間は、生命誕生とともに生まれた情報を歴史的に時間的に累積され、この情報に基いて行動しているが、コンピュータは記号を使って書かれた論理命題を形式的に組み合わせる別の論理命題を導き、行動している。人間誕生

以来の情報をこの機械にインプットすることは不可能である。

このような意味から今日では人の心を持った人工知能の開発は不可能ということが段々明らかになってきた。

西垣氏によれば、「情報を伝える言語の基層にあるものは、統辞論（シンタククス）ではなく意味論（セマンチックス）である。しかし、人間社会がある共同体として発展する段階で、統辞論すなわち文法のある言語が生まれ、更に話し言葉だけの世界から、言葉を空間に釘付けにするテクノロジーである文字が生まれると、言葉は次第に具體的なものから概念として伝えられるようになった。それがついに機械情報すなわち意味解釈の存在しない情報の誕生へとつながり、近代国家という印刷物の作り上げた「想像の共同体」を完成した。そして、更にコンピュータを動かす論理言語へとつながっている」と述べている。

いうまでもなく一元論に基づく論理演算である。

そして、このコンピュータにとって機械情報の中心である情報理論やコミュニケーション論が、キリスト教文化を背景とするアメリカで生まれたものであるという点である。つまり今日のコンピュータを始めとする情報サイエンスには西洋的思考の抜き難い伝統が入り込んでいる。

この事は、この情報技術に加速されたグローバル化の進展であり、アングロサクソンの啓蒙思想（アメリカが教えたようにすれば世界は幸せになるという信念）に基いた国際化を迎えているとも言える。今日アングロサクソン社会のみが実現している小さい政府などが果たして東洋の多元論（多神教）日本で実現するのだろうか。

21世紀の高度情報化社会の基幹産業として、日本も情報産業を考えているがこの事は並大抵の問題ではないこ

とが分かる。

これからは人間の感性を伝えるマルチメディア時代になるというが、日本や世界の多くの多元論的人々の感性を果たして満足させる情報文化が根づくのかという根本的疑問につながる。

これまでの日本の高度情報化社会への取組みが、政府の掛け声にも関わらず、いつも米国にかなりの遅れをとってきたことも、深層心理的にはこのような背景に起因するのかも知れない。

日本の一般社会や家庭などに比して、すでにかんりの高度情報化を職業として経験しているところがある。自衛隊の専門部隊である。

自衛隊と情報化技術との出会いは古く、冷戦時の1960年代にやってきたC3Iであり、今日のC4ISRである。

すなわちC3I:Command,Control,Communications and Intelligenceあるいは1994年頃からいわれ出したC4ISR:Command,Control,Communications,Computer,Intelligence and Surveillanceである。

この種の戦闘用の指揮装置こそ人間の本性をさらけ出した究極のコンセプトを内包している。すなわち、西洋思想を凝縮した、アメリカ的軍事合理性の権化みたいなものといえよう。

昨年、北朝鮮のテポドン・ミサイル発射の際に日本海においてこれを探知した海上自衛隊のエージス艦などは、日本の持つ最高度の情報化器材とも言えるが、全て米国製である。

陸海空で戦闘の様相の差異から多少の差はあるものの、当時C3Iに接した自衛官の多くは、なんとなくバタ臭いやツツと直感的に感じていたようだ。つまりは西洋的一元論の発想に基づく機械であり、日本人的多元論に立った代物では無かった。

日本のみならず、世界のどの国においても、今日米国に追いつけの掛け声は高いものの、実際には益々差をつけられているのが現状であろう。軍事情報技術のアメリカ主導のグローバル化である。

このように見てくると、これからの高度情報化社会を日本が生き抜く為には、これまでの一元論的な判断では、アメリカが生み出し、アメリカの軍事によって育てられたコンピュータ世界・情報化時代にはなかなか勝てないことが分かる。

先に述べたようにレベル2（論理判断）から少なくともレベル3すなわち、文化的背景を考慮した判断ができるようになる、日本も一役買えることになる。そしてこのようなコンピュータこそマルチメディア時代に相応しいものといえよう。

このような時代の到来はそう遠くないかも知れない。

コンピュータは人間を超えないと書いたが、我々が日常使用する情報機械は、例えば自衛隊がC4ISRの目的に使用するように限定目的のコンピュータであり、人間のような万能の性能を期待しなければ、先のフレーム問題を回避して、コンピュータの能力を人間に近づけることは容易であろう。

そしてレベル3のコンピュータが現実に使われるようになる、東西の狭間的な立場と経験を持つ日本は、そのとき本当に実力を発揮できる国となる可能性がある。

高度情報化に対する今日の対米劣等意識が払拭され、バブル期とまではいかなくとも、日本人に新技術立国として自信と活気を取り戻すことが出来るかも知れない。

すなわち新情報化技術の確立が、今日の国民の意識を変えるかもしれないと考える。

九、高度情報化社会がもたらす軍事革命

情報化が進み人々の考え方が変わり、日本人の国民意識までも変わるかもしれないことを述べたが、このような中であつて、高度情報化技術は、戦闘員の意識まで変えてしまい、これまでの戦争の概念を根本的に変えてしまう軍事革命をもたらすかも知れないと主張する人がいる。

ここで過去の軍事革命についてまず簡単に触れたい。

歴史的には、これまで技術との関わりにおいて、数次の革命的なことが軍事に起きたとされる。

農業社会から産業革命を経て工業化社会に入ると、産業の工業化に必要な科学技術の進歩は軍事用にも使用され軍事革命をもたらした。

最初の革命は、土木工事などに使われた火薬の進歩が軍事「火力」の面で第1次軍事革命を引起こし、小銃や大砲が登場した。次いで交通機関や自動車などに使われる内燃機関の発達は、軍事「機動力」の面で第2次軍事革命を引起こした。戦車・車両・艦艇・航空機の登場である。この間軍事のもう一つの柱である「防護力」も時代の最先端技術を利用して強化された。

第3回目の軍事革命は軍事の要求から生まれた。原子・水素爆弾にはじまる「原子力」である。

戦場を支配する直交した3つの力に「火力」「機動力」「防護力」が有るといわれるが、この「原子力」は「火力」の面では圧倒的な破壊力を有し、「機動力」の面特に水中機動力の面では大きな力を発揮しているが、「防護力」の面では、耐核防護の有効な策が見当たらず、この為軍事の要求から登場したにも関わらず実際には使えず、戦略的抑止力として、大国間の紛争防止に今日も機能しており、21世紀にも抑止力として、日本の核廃絶の悲願にも関わらず残念ながら、これからも配備される公算が高い。

これらの軍事革命はすべて工業社会において生起したが、これからの脱工業化社会・情報化社会における軍事革命として、第4の軍事革命の生起が指摘されている。

そして、この第4の情報化軍事革命を支える殆どの技術が、「原子力」がそうであるように軍事的要求から研究されて、実現されたものである。「機動力」や「火力」にたいしては、この第4の「情報力」はフォース・エクスパンダーと呼ばれていることから理解できるように、大きな力を発揮するが、「防護力」に関しては「対電子戦闘」という言葉が登場したように、コンピュータや電子通信兵器への電子的攻撃には大変脆弱である。「原子力」と非常によく似た特性を示す。

この情報革命があまりに大きくなると、戦略的攻撃（相手の政治・経済・社会基盤など戦略中枢への攻撃）には実際には使えない兵器、すなわち戦略抑止兵器に転化してしまう。このことについては最後にもう一度触れたい。

1973年アルビン・トフラーが「第3の波」の中で、過去の農業社会は産業革命を経て今日の産業社会になり、そして情報化社会へ突入すると指摘した。また同じ年に、ダニエル・ベルは「脱工業化の到来」を発表した。

我が国でも既成の産業が情報によって変わる「産業の情報化」と情報それ自体が産業となる「情報の産業化」が進んだ。「情報技術の革新と情報産業の進展が、社会の大変革をもたらす」というトフラーの「情報社会論」と「どんな社会でも、（つまりは高度情報化社会でも）ある技術を受け入れるか否かは、社会を構成する人の価値観によって決まる」というベルの考えとがせめぎあい、日本人としては多少のバタ臭さを感じつつ、今日の我が国の情報化速度が決まっている。

しかし、程度の差はあれ、間違いなくトフラーが1993年に書いた「戦争と平和」のなかで指摘するように、

戦場の情報化、エレクトロニクス指向のハイテク兵器の登場などいわゆる第4次軍事革命は起きている。

湾岸戦争当時みなが見張ったPGM（精密誘導兵器）の使用は、統計によると湾岸戦争では攻撃に使われた弾頭のうち5%であったものが、今回のコソボでは80%に達する。その他コソボでは、GPSを利用した爆弾とか、ステルス爆撃機を撃墜する新防空システムなど新装備が続々と登場し情報化路線は止まるところを知らない。また新ユーゴ連邦へのウイルスなどを使った情報戦が行われたとの報道もあり、あらゆる新兵器のテスト場としたようだ。

しかし、湾岸戦争当時に人々が感じた高度情報化型の兵器が将来の戦争・戦闘を著しく変えてしまつかもしれないとの高ぶりは、段々薄められたように思う。今や「トマホーク外交」^{注8}と揶揄されるように、いくらトマホークを撃つても国が無くなったり、何も解決されないことに気付き始めた。^{注9}ただ、この精密兵器がもたらしたものは、自国の兵士を殺さないで済む「より政治的に使い易い兵器」の登場であり、このため、武力行使に突入するスレシホルド・レベルを下げ、「パックス・トマホーク」とでも言える状態になっている。

高度情報化社会がもたらす軍事革命がささやかれた1990年代当初以来、夢の情報化社会の到来は、きっと人類の醜い戦争からこの技術が人間を解放し、素晴らしい未来を約束するとか、ボタン戦争になってしまい実際にはもめごとはいサイコを振ればよく、誰も戦争など考えなくなると喧伝されたことがある。これに対し、我が国でもまた情報化の本場米国でも「C3Iは軍事革命RMAの道具足りうるのか」という疑問が出てきた。^{注10}

「戦場において変化しないものまで変化するように考えるのは危険ではないのか」「第4次軍事革命は戦略、戦術の想像力を欠如している」「戦いの原則と戦闘の機能は変化しない」という反論である。

私のこの考え方に対するコメントをしてみたい。

人類社会は、農業社会から工業社会へ移行し、現在は脱工業社会への入り口にあると考える。

工業社会において、日本人のもつ器用さや物づくりへのこだわりが、今日の日本を繁栄に導いてくれた。しかし、このことはこれからの情報を中心とする非製造業社会へ世界が向いつつある時、かえってこのこだわりが問題を生じさせているように見受けられる。丁度江戸時代農業を大切に「農本主義」が工業社会を中心とする近代国家への転身を妨げたように、「工本主義」にこだわる今日の日本の姿が気になる。これもアメリカ的世界観に基くこれまでのコンピュータ技術に対する日本人の感性がそうさせているのかも知れない。

脱工業化社会になっても、別に農業や工業が無くなるわけではない。このことは軍事革命でも同じで、火力・機動力・防護力・原子力そして情報ネットワーク力へと進んでも、それらが重疊的に組み合わせられるだけで、無くなりはない。このことはトフラーも指摘している。

過去の軍事革命が全て産業社会において起こったということは、過去の農業社会からの軍事革命であつたともいえる。この意味で第4の軍事革命は、脱工業化社会に起因する軍事革命であるから、理論的には過去の軍事革命に起因するものを、すっかり改革（革命）してしまふ脱工業化社会最初の革命かも知れないと考えることもできる。

さらに、ここで再び、人の心を支配する脳の話に戻りたい。

吉川英治氏は「食・性・闘の3つは人間本能の最大ものだ。今日までの、地球上の人間の歴史は、闘争本能の動力が転がしてきたといつてよい」と指摘する。仲間を殺す動物は残念ながら私たち人間（ホモ・サピエンス）知恵ある人）だけである。

脳の専門家時実利彦氏^{注1)}によれば、この闘争心は「幸か不幸か、個性を生み出し、成人をして自主的に行動させ

新皮質の前頭連合野があまりにもよく発達した為である。2、3歳の子にかけっこさせても、一向に競争にならなくて、みんなが一緒になって走っているだけである。ところが、4、5歳になると、一番を争うようになり、始めて競争ができるようになる」そうだ。

歴史学者のA・トインビーも、この闘争心は人間の原罪であってこの心が、私たちの創造行為を発動させており、私たちを理想の実現のために努力させているのである」と言っている。

このような闘争本能説やF・フロイトの死の本能など人間の意識の深層にかかわる本性的なものであるとする議論の他に、社会的要素を重視したものに、欲求充足妨害から発生する攻撃性という心理学的なもの、あるいは文化人類学者のM・ミードは「戦争は生物学的必然にあらず、社会的発明なり」と結論しており、そのため民族によって好戦度が異なるとしている。

いずれにせよ、私たち人間（ホモ・サピエンス）に殺し屋の血潮をたぎらせ、私たちをして同類相食む殺人行為、戦争へと追い立てているようだ。

今日のコンピュータの発達、このような人を「サイバーな心」へと進めるが、このサイバー社会を支配するものが、このような人であり、コンピュータは人を超えられないものである限り、高度情報化社会がもたらすサイバー社会では、戦争はむしろ悪用されたり、増幅されたりしても、その本質は少しも変わらないと思う。

確かに人類の文化は高度情報化社会（第3の社会文化革命）へと大きく舵を取ったが、その人類の根本とも言える「ホモ・サピエンスの本能」に起因する闘争心、好戦性や自己保存性といった軍事の原点となる「争い」を誘発する本能は、昨今の絶え間無く発生する世界の紛争から判断しても、少しも変わっていないように見える。

十. おわりに

20世紀は1914年の第1次世界大戦に始まり1989年の冷戦終結を持って終わったという見方があるが、そうであれば、すでに21世紀は始まっていることになる。

高度情報化社会が加速する我が国を取り巻くグローバル化の激しい波は、少子化・高齢化への対策はもちろん、ここで述べたように我が国民自らが厳しい21世紀の自分たちの選択をする決断の時期を早めており、その時期が、ベルリンの壁の崩壊のように意表をついて突然やってくるように思う。

また、核軍縮・核廃絶は非核国家日本の悲願だが、国の数だけ、民族の数だけ正義が存在するアナキーな世界にあつて、遅々として進まない。このような状況下に、高度情報化がもたらす攻撃的情報戦と表裏をなす新情報戦略抑止力の誕生は、先進諸国の「情報脆弱国家」への転換を考えれば、核をもつ意味合いを相対的に低下させる可能性がある。情報戦略抑止力の分散・拡散がこれからはじまる。私も広島の子のこ雲の下にいた者の一人だが、核爆弾のような悲惨な大量死がゆえに抑止につながる兵器から、よりましな、情報が破壊されるといふ非殺傷型兵器による抑止への転換が始まるかも知れない。

ひょっとすると、近未来の高度情報化世界は、我々が強く希望する核廃絶への道なのかも知れない。

注1 西垣通「こころの情報学」ちくま新書（1999）

注2 アルビン・トフラー「戦争と平和」フジテレビ出版（1993）

注3 ジョン・グレイ「グローバリズムという妄想」日本経済新聞社

(1999)

注4 中西輝政「新国際関係学がわかる」P68朝日新聞社

(1999)

注5 野田宣雄「20世紀をどう見るか」文芸春秋(1998)

注6 R・ロバートソン「グローバリゼーション」(1997)

注7 米科学委員会報告(1998・1)

注8 エドワード・ルトトワク「砂漠の狐作戦が告げた世界新無秩序

時代」This is 読売 P74(1999・3)

注9 江畑謙介「ユーゴスラビアの空爆の軍事的教訓」世界週報

P48(1999・7・27)

注10 町村凱光「C3IはRMAの道具足り得るのか」軍事研究

(1998・8)

注11 時実利彦「人間であること」岩波新書P168(1998)

(むろもと ひろみち・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

楽器による音楽表現研究Ⅲ

— 学校教育における管・打楽器活動の展望 —

Study of Music Performances by Instruments:

The out-look for wind-instruments and percussion activities in school
education in the future

今 井 敏 勝

Toshikatsu IMAI

キーワード：音楽教科外活動、年間計画、教材研究、心技体、生涯
学習

要旨

21世紀に向け教育をめぐる状況は、かつてない変化の時期にある。学校における音楽教育においても「他人とともに協調し、他人を思いやる心」「感動する心」を育てる重要な教科になっている。

教科外活動においても「豊かな人間性」を育てる上で必要不可欠な活動と考える。本稿では楽器を中心とした音楽教科外活動のあり方と課題、今後の展望を論ずる。

はじめに

本物の楽器を手にした時の興奮と感激は、いつまでも心の蓄積として残るものである。私のはじめてトランペットを手にしたのは、小学校5年生の夏であった。近所の野球チームのリーダーが中学生となり、ある日突然トランペットを持ってきたのである。吹奏楽部に入部したのであった。初めて近くで見るトランペットであった。その後リーダーが自分のトランペットを買ったがトロンボーンパートに移ったので自分のトランペットを私に貸してくれたのである。その時の感動と興奮、次に音が出るのかの不安と期待、いろいろな思いが頭の中でめぐっていたことを今でも忘れられない。

学校内において、管・打楽器を活発に使用されているのは課外活動が中心である。演奏形態上、吹奏楽や金管バンド(1)という編成が中心になる。

現在において、吹奏楽部は中学校、今では小学校においても一般化している状況である。入部していない生徒も吹奏楽(小学校においては金管バンド編成がある、以後金管バンドを吹奏楽の中に含める)の音を聞くことができ、又、楽器を近くで見ることもできるチャンスに恵まれている。学校内における吹奏楽のあり方は、活動している子どもはもちろんのこと全校の生徒に対しても音楽文化の影響を与えることのできる活動であらねばならない。又、音楽教育の面から見ても表現すること、鑑賞すること、さまざまな活用においても多様であろう。2000年を迎え、学校教育も大きな変化を遂げている。「生きる力」を育み、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心」又、更に「豊かな人間性」を重要な要素として挙げられている。そこで、学校教育における管・打楽器活動として、吹奏楽、金管バンドのあり方、課外活動をする部員が「音楽を生涯の友」とする部活動につなげる指導を考察する。

1、吹奏楽部活動の年間計画及び指導案の必要性

吹奏楽の指導、実践研究を行い20年になる。近年特に学校5日制という声が上がりだしてから指導者も子どもたちも忙しい毎日になりつつある。限られた時間の中で授業のカリキュラム、部活動を行わなければならない。学校教育の目標としている原点は今も昔も変わりはない。子どもたちが人間として成長し育っていくことである。ホエールトは、学校教育の本質として「共同社会生活において、一見、偶然に行われているところのものを、一定の計画に従い、また、一定の目的志向において（in bestimmter Zielstrebigkeit）なす」ことにあるとし、「学校の本質は、自然的な共同社会生活が精神的接触と交流において与えているところのものを、秩序づけ（ordnen）、明瞭ならしめ（klaren）、完全化する（vervollständigen）ところにある。」と述べている⁽²⁾。そこにいろいろな方法（授業科目、ホームルーム、校外学習、部活動など）が行われている。音楽という一つの方法で、子どもたちがよりすばらしい感性を養い育つことを一心に指導している。授業という方法であったり、吹奏楽部活動という方法であったりである。音楽の授業においては年間の指導計画が年度当初には立案されている。それに伴う教材研究などは、以前から進められていなければならない。吹奏楽部活動も人間が生きるために必要な豊かな感性を養うためのものでなければならない。そのために年間計画と指導計画案が必要である。また教材研究（楽曲の選曲など）も必要不可欠である。

楽器を自分の思うままに操作し表現していくまでには大変な練習量とエネルギーがかかる。しかしそれをじっくり時間をかけている余裕もないほど、学校行事、市、町、村の行事が予定されているし、突然入ってくることもある。常に忙しい中、その都度選曲し、練習を行っていて、子どもたちも先生も音楽を感じ感動しているところではない部活動もある。ともかく演奏会に間に合うための練習が行われ、夏休みなど返上し

て行う学校もある。これでは本来の目的とはかけ離れていく活動になる危険性もでてくる。そうならないためにも、年間通して今年はどうな音楽表現を身につけるか、そのための教材研究（選曲）をしなければならない。もちろん現在のレベルにあった選曲が必要になる。また、何月ごろにはどんな音楽的内容を指導しているか、年間指導計画が立案しなければならない。そしてそれらの練習過程においての発表をどこにするのか毎年の発表の場を活用することになろう。行事のための練習ではなく、練習の成果のための行事の演奏会としてとらえなければならない。また部員達も、今何の練習で、目標は何であるか知りつつ、毎日の練習に励むことができる。指導者も目標を見失いそうになると、常に年間の目標が頭にあり、今何を目的としているか、部員につたえていく必要性がでてくる。特にコンクール出場においては、出場にあたり自分たちの目標をしっかりと持ち、練習を行わなければならない。目標の明確化、そのための実践化のために年間計画と指導計画案が必要と考える。

年間計画案の実践例（図表例1）

1999年度 札幌大学吹奏楽団 年間スケジュール ○●練習日 △●会議											
10月				11月				12月			
日	曜日	学校行事	練習予定	日	曜日	学校行事	練習予定	日	曜日	学校行事	練習予定
1	金		○	1	月	○	パート練習（定期演奏会）	1	木	○	リハーサル
2	土			2	火			2	金	○	リハーサル
3	日		本番	3	水			3	土	入試準備	ホール
4	月		▲強化練習開始	4	木		▼	4	日	入試入試	本番
5	火		パート練習	5	金			5	月	推薦入試	定期演奏会（Nittai）
6	水		▼	6	土		合奏	6	火		20周年記念式典
7	木	ホール	音楽の森（合奏）	7	日			7	水		
8	金	大学祭	音楽の森（12/12）	8	月		合奏（12/12）	8	木	○	定期演奏会反省会
9	土	大学祭	音楽の森（合奏）	9	火		本番（12/12）	9	金	○	定期演奏会反省会
10	日	大学祭	ホール	10	水		▲定期演奏会のため	10	土		
11	月	大学祭		11	木		リハーサル	11	日		大練習
12	火		▲	12	金		▼	12	月		冬休み（～1/12）
13	水		○	13	土	本番	定期演奏会（三笠市）	13	火		
14	木		▼	14	日			14	水		
15	金		○	15	月		▲強化練習開始	15	木		
16	土	ホール	音楽の森（合奏）	16	火		○	16	金	冬期休業	
17	日	ホール	推薦入試（合奏）	17	水		定期演奏会のため	17	土	△	▲年度反省資料作成
18	月		○	18	木		個人・パート練習	18	日	△	
19	火		○	19	金			19	月	△	▼
20	水			20	土			20	火		
21	木	ホール	札幌出展	21	日		○	21	水		
22	金	ホール	リハーサル	22	月			22	木		
23	土	本番	全国本番（新都市）	23	火		○	23	金		
24	日			24	水		▼	24	土		
25	月			25	木			25	日		
26	火		札幌出展	26	金	入試準備	○	26	月		
27	水		個人練習（定期演奏会）	27	土	推薦入試	○	27	火		
28	木		個人練習（定期演奏会）	28	日	推薦入試	○	28	水	清田区民センター（合奏）	
29	金		個人練習（定期演奏会）	29	月		○	29	木		
30	土		パート練習（定期演奏会）	30	火	ホール		30	金		
31	日			31	水			31	土		

1992 年より札幌大学吹奏楽団において、以上の計画を推進してきた。計画案は、年度前（2 月中）に役員と指揮者（私）が中心になり立案される。（図表例 1）又、年間曲目の選曲も年間計画の中の重要な一つである。一年間を通しどのような音楽表現力を身につけ、体験するか、具体的な計画につながる。（図表例 2）

（図表例 2）1999 年度年間曲目

オーブニング向け					
曲 名	作曲家	グレード	演奏時間	出版社	コメント
ファンファーレ オブ ザ ベル	ゴードン	3	2' 00"	デニハスケ	
コンセンサス	ヴァン・デル・ロースト	4	3' 00"	デニハスケ	
演奏会向け					
曲 名	作曲家	グレード	演奏時間	出版社	コメント
ザ ラスト スプリング	グリーグ	3	4' 00"	デニハスケ	
ヴィーボ ベレ・レイ	ボツタエリ	3	4' 30"	デニハスケ	
「ミス・サイゴン」 組曲	ジューン・ベルグ	3	7' 00"	デニハスケ	
コンクール向け					
曲 名	作曲家	グレード	演奏時間	出版社	コメント
「お茶に召すまま」より	★ウォルトン/木村吉宏	5	3' 00"	クラシボン	レンタル盤
ロンド 四重奏曲	ショウワツ	3	4' 00"	デニハスケ	
組曲「ハリー ヤーメッシュ」	↑コダーイ/ハイナム	5	2' 00"	シエット	レンタル盤
マーチ					
オン ザ ロード	ウェニヤン	2	3' 30"	デニハスケ	
フィザリティー	ホジェス・テイ	3	3' 00"	デニハスケ	
ポップス					
ハロー ニューヨーク	エヴァース	2	3' 40"	デニハスケ	
アイム トゥー セイ ブラバド	ウェンツェリウス・ブライトマ	3	4' 00"	デニハスケ	CDで使われている
オール バイ マイセルフ	セリーヌ・ディオン	3	3' 00"	デニハスケ	
トレーニング用					
オン ステージ	アレス	2	5' 00"	デニハスケ	リズムトレーニング用

選曲案をジャンル別に選曲することにより、コンサートに合わせたプログラミングが可能になる。

以上の計画立案を行い、前年度の反省をもとに次年度の目標、改善すべき点等を提案することができた。指導者にとっても、反省点などを踏まえて新たな指導計画案を立案することの手がかりになった。一方、メンバーにとっても、学生生活、授業との関係など個人的生活計画も立てやすくなる。

学校内課外活動において、学業と部活動の両立及び家族（友人）との交流を前提とした活動でなければならない。年間計画を部に提案し、メンバー全員で目標に向かい、個々の学生生活をも自分自身で計画的に立案することになる。一人一人の学生生活をより積極的に“生きる”ことにもつながる。

2、心・技・体の指導

毎日の練習が音楽表現活動でなければならない。もしそうならなければ、その日の練習は、ただの特訓に過ぎない。もちろん演奏会に向かって様々なトレーニングが必要である。それらのトレーニング法は100通りも1000通りもある。しかしそこにはどんな音楽を表現したいか、又、音にしたいかという目標があって初めて方法が考え出されなければならない。現在、あらゆる吹奏楽のトレーニング法のテキストやクリニックがある。それらの情報は、昔より数倍も手に入りやすくなっている。しかし、それらを活用する前に、どんな演奏会をしたいのか、どう表現したいのか、指導者は目標、イメージがなくてはならない。もちろん、トレーニングが進むにつれて、その目標が変わっていくこともある。そして、目標となる演奏をするために、どのような音色、音量、アーティキュレーションを用いることにより、さらに具体的になってくる。そこで、イメージされた音を出し、表現するためのテクニックを、習得するための練習が必要になるのである。目標が高ければ高いほど時間が必要になり、エネルギーも多大になってくる。毎日の反復練習が必要になるのである。わけもわからず、目標もわからず、メトロノームのテンポに合わせて、ひたすら運指のみの練習をしていたのでは、子どもたちも楽器を吹くことをいつかはやめるであろう。なぜなら音楽がないからである。日々の練習が音楽表現活動でなくてはならない。たとえ一つの音を長く伸ばす基礎的練習（ロングトーン）であってもである。

指導者として考えなければならないこととして、第1に 心 がある。子どもたちにどのような音でどのような表現をしたいのか 心 で感じ、想像させなければならない。第2に心で感じた音のための 技、技術（テクニック）が必要になる。こう吹きたい、こう打ちたい、だからその音を作り出すための技術を磨くのである。心の中でこんな音で表現したいと想像するので、技術が生まれる。

全道小学校管楽器指導者講習会が毎年1月上旬に行われ、今年で27回を数える。私も講師として18年間参加させていただいている。その中で、小学生モデルバンドを使っただけの合奏指導法についての事である。

Gの音③のフェルマータがあった。O君という子どもだけが伸ばしている途中で、どうしても音程が下がってしまうのである。O君に「飛行機が飛びたつんだけど、空高くなく、地面すれすれに飛んでいくような、そんな音が出るかい？」と指導した。O君がチャレンジして音を出す度、その音を私が手の飛行機で真似てみた。それを見ていた他の子どもたちまでもが、O君の出す音を想像し、手の飛行機で表現しだしたのである。それは誠に正確で地面に落ちてしまうタイミングまで一致しているのである。O君も子どもたちもそこには音を伸ばすだけでなく、遊び、ゲームが生まれていたのであった。幾度となく繰り返していた時、見事なGの音のフェルマータができたのである。その瞬間、周りの子どもたちから拍手が沸き起こった。そこには指導者である私は必要なかったのである。O君は心で想像した音を吹奏楽器のブレスコントロールという技（テクニック）を使い、表現したのである。

そして最後に 体 が必要になる。自分自身が心に感じ表現したい音はすぐには出せないで、幾度となく反復練習（体力）が必要になる。それを出すための精神力、集中力、体力が兼ね備えていなければならない。しかし、こうしたいという 心 が強ければ強いほど、体の方は、もしかしたら苦痛になっていないかもしれない。それは、反復練習であっても、いつも音楽があるからである。指導者は、いつも彼らの指示者でなく、支援者の心を持ち備えていなければならない。「指導者からの一方的イメージの注入なり、巧みな強制だけで表現が作られていくと、子どもたちの方は自分達で不一致（イメージ）を作り出すことができなくなってしまうことになる」という柳生力氏の音楽教育面からも同じように言われていて、さらに「いわれることだけではできるけれども、自分達が

らのアクティブな行動に導かれない表現行動というものは、たとえ できる ものになったとしても、わかる ことと 好き に連動し、それを強化していくものにはならないであろう。又、「音楽すること以外の他の目的（人に賞賛されるとか、他を追い越すこととか）を目指して進んでしまうことが多い」⁽⁴⁾。と続けている。もし吹奏楽部活動において、音楽すること以外の他の目的になってしまっていたならば、子どもたちは、音楽活動を続けることはないだろう。楽曲の中でのクレッシェンド、リタルダンドなどは、なぜ書かれているか自分がそうしたいのか、指導者と一緒に考えていく部活動でなければならない。

3、生涯の友としての音楽活動

札幌にシルバーの吹奏楽団がある。昔、楽器をやっていた方や、定年を迎えて思い切って楽器を始めた方もいる。続けてきた市民バンドから、シルバーバンドに移籍した方もいる。私のところにも、60歳を迎えてオーボエを始めた方がレッスンに来ている。その方もシルバーバンドに在籍している。オーボエが誰もいないので自分が受け持とうと思ったという。人生の先輩として頭がさがる。

学校において最も多人数の部活動の一つであった吹奏楽部も、少子化の影響で年々小編成になりつつある。しかし、一部では100名を超えるバンドもあることは事実である。全校生徒数などそれぞれの学校の状態、事情によっても違いはあるだろう。一方、市民バンド、及びOBバンドは数が多くなってきている。それらの音楽活動を続けている者の多くは、中高生時代で吹奏楽部経験者である。学生時代に部活動を通してよい体験をしたものが、時間的に厳しい時代にもかかわらず、楽器を続けている。彼らと指導を通じ接していると 音楽で遊んでいる ことを感じる。社会人になりゴルフ、野球、及びカラオケ等の趣味で遊んでいるように、彼らは音楽を、吹奏楽という形態で遊んでいるのである。これらのバン

ドの多くは、自主公演として、年1～2回の定期演奏会を行っている。しかしその演奏会当日のみならず、週1～2回の練習を楽しんでいるのである。音楽を楽器で表現することでそこに遊びが常に生まれているのである。だから1回1回の練習が楽しいのであろう。一方、部活動においての吹奏楽では、定期演奏会やお別れコンサート、学校祭など様々な演奏会を生徒たちが体験している。しかし、毎日の練習を本当に楽しんでいるのであろうか疑問を抱くときがある。特に、コンクールに向けての練習をしている時などは、音楽（楽曲）を楽しんでいるより苦しんでいる生徒たちを見ることさえある。しかし、ある部活動においてはコンクールで県・道大会出場キップを手に入れたために、夏休み、土・日曜日も返上し練習をしている。賞状を手に入れるために、音楽を使って楽器を吹いているとしたら、それを手に入れたときに楽器を吹くことをやめるであろう。又、さらに全国大会の賞状を手に入れたと思ったとして目標に向かい楽器を演奏し続けたとしても、手に入った時や卒業という時間的制約で達成しなかった時は、楽器を吹くことをやめるであろう。コンクールを否定するつもりはない。コンクールという一つの演奏会を部活動がどうとらえるかである。自分達の活動として音楽を体験し表現している吹奏楽部活動であれば、コンクールという演奏会をどのように有効に活用するかを考えるであろう。

音楽を、吹奏楽という表現形態で楽器を使い、遊び（play）を体験することを部活動の目標としたならば、さまざまな演奏会、及び毎日の練習をも感性を育てる活動になる。

指導者はそれらの活動を、指導と支援の両方からいつも支えなければならない。」ホイジンガは「一度でもその遊びが行われれば、それは精神的創造、あるいは精神的蓄積として記憶の中で定着し、伝えられて伝統となる」といっている。遊び（play）から生まれた音はそのバンドの伝統の音になる。一度でも遊び（play）の体験をした者は、生涯に渡り

音楽を 友 とし、生活していくことができる。たとえその活動が演奏者（player）でなく、音楽鑑賞者という立場になっても同様である。



〔写真〕北海道シニア吹奏楽団5周年記念定期演奏会（9月20日、かでのホール）

4、今後の課題

(1)指導者が不足している。楽器を経験している者が教職につく人数は、20年前から見ると数倍にもなっている。一方、学校における吹奏楽部比率もアップしている。又、先生方の時間的制約も大きく、とにかく忙しすぎる。ある高校の吹奏楽部指導者は、3年生の学級担任を受け持ち、また進路指導部長として毎日4～5名の企業からの来校の対応をしている。6月～8月にかけては10社を超える時もあるという。その上、学校の2期制に関わるカリキュラムのとても重要なポストにもなり、出張も多く、授業もある。そんな中で吹奏楽部の顧問でもあり、指揮・指導もしなければならない。若い先生方の中では吹奏楽部は大変だということで敬遠されている話も聞く。それは時間もエネルギーもかかるからである。前任者が自分の時間もさき、土・日曜日にも返上し、エネルギーを注いだ部活動ほど、後任者は大変になる。父母は、前任者のあり方を当たり前と思い、後任者にも期待をする。コンクールなどでよい結果が得られなければ、指導者批判にもつながる。父母がそう思うと

生徒も影響を受ける。一方、とても情熱的な指導者で、生徒も父母もその指導の下、一緒になってすばらしい音楽活動を展開している学校を指導に行ったことがある。夏休みの合宿には父母やOB・OGがたくさん応援にかけつける。部員も年々増え、60名を超えるほどになっていた。おのずとレベルも上がり、コンクールでとてもよい成績になっていた。さらに4年後には全国大会に出場するまでになった。全国大会出場が2年間も続き、これからも上昇していく部活動であった。3度目の全国大会を目標にしていた時、「お金の面での負担が大きく、あまり頑張らないで欲しい」という声が先生のもとに飛び込んできた。又、ある父母の方からも「子どもが2人も部活動に入っているので、全国大会にいけたとしても今年は1人分しか費用は出せない」といつてきたという。子どもたちと泥塗れになって自分の時間も惜しまず部活動にエネルギーを燃やし、子どもたちと一緒に音楽をする体験を夢見てやってきたことが何だったのかとむなしく思ったという。その後その指導者は転勤し、吹奏楽部の顧問をすることはなかった。

現在の学校における教員の職務は、とても広い範囲と多くの時間が必要とされる。そこに部活動指導も入るのである。こと吹奏楽においては、楽器の知識や指導法、さらには運営的な面など、さまざまな知識と経験が必要とされる。又、そのためのエネルギーは現在の学校内の時間では不可能になりつつある。無論、やる目的、範囲、人数など、さまざまな学校事情によっても異なる。しかし、指導者も心豊かな状態で子どもたちと一緒に音楽を楽しみ、感動を共感していなければならない。町内で一つしかない中学校の吹奏楽部などは学校と地域の行事に出演するのが年間の恒例で、そのための曲を練習することで精一杯であるようにも見えた。自分たちが楽器を使い音楽を表現することで、喜びと感動を味わっているとはとても思えなかった。音楽を楽しむ時間的余裕が指導者にも必要であるだろう。それに伴う指導者育成をする機関も、現在の教員養

成大学にはほとんどといっていいほどない。

(2)もう1点は、どこの吹奏楽部も予算面で大変苦勞をしている。他の部活動から見ると額が1桁違う予算が必要である。しかし市・町・村の教育委員会からの予算面ではほとんど不可能である。その上リード、修理費、維持費、教材費（楽譜、エチュード）等までどのように捻出しているのか不思議なほどである。楽器というものは約10年が対応年数と考えられる。しかし、10年毎に買い替えている学校などほとんどないのが現状である。不足分を個人の部費や父母会などに頼らなくてはならないのが現状である。指導者が自分のボーナスの一部を楽器に当てて、子どもたちに貸し出している学校もある。良い悪いということをする前に、どうしようもないという現状であろう。

アメリカの吹奏楽指導者が来日されると、異語同音に「日本の吹奏楽指導者はスーパーマンだ」という。「学校の授業もやり、吹奏楽の指導もしている、また就職の指導部長や学級担任も受け持っているなんて！」と首をかしげている。アメリカでは、授業内で吹奏楽や管打アンサンブルが行われているところも多い。又、ヨーロッパにおいては、学校内で吹奏楽活動はほとんどない。市民バンド、町民バンドが主である。又、指導者もバンドトレーナーとして、ある時は州や教育委員会から派遣されて指導にあたる。ドイツでは、州によって違いはあるが、ケルン、ジュッセルドルフ、エッセン等のルール地方を包括する北ラインヴェストファレン州は1億マルク（約90億円、1990年）という額が、音楽学校や市民バンド指導費等、地域音楽文化活動に予算化している。日本においては指導者のあり方、育成、及び予算面など学校内だけでは解決できない課題になっている。

登録加盟団体数（平成11年10月1日）

会員連盟	小	中	高	大	職	一	合計
函館地区	14	51	26	3	0	11	105
日胆地区	4	26	21	2	2	7	62
札幌地区	26	94	59	10	4	30	223
空知地区	5	29	18	1	0	6	59
旭川地区	17	32	18	4	0	8	79
名寄地区	1	10	5	0	0	4	20
北見地区	17	32	26	2	1	16	94
釧路地区	9	34	18	3	0	12	76
帯広地区	3	31	16	1	1	7	59
留萌地区	2	11	5	0	0	3	21
稚内地区	4	8	7	0	0	2	21
北海道支部	102	358	219	26	8	105	819
宮城県	51	168	89	10	3	36	357
岩手県	29	124	78	5	2	26	264
青森県	43	99	54	5	0	17	218
秋田県	69	125	51	4	3	29	281
山形県	30	87	53	4	3	17	214
福島県	41	122	75	5	2	33	278
東北支部	263	725	400	33	13	178	1,612
栃木県	41	104	52	4	0	32	233
茨城県	49	218	103	5	7	68	450
千葉県	64	298	150	9	2	44	567
神奈川県	9	326	207	9	7	90	648
東関東支部	163	946	512	27	16	234	1,898
新潟県	15	197	73	4	1	24	314
群馬県	10	128	60	5	2	20	225
山梨県	8	65	34	4	4	38	153
埼玉県	15	351	175	7	3	78	629
西関東支部	48	741	342	20	10	160	1,321
都・小学	93						93
都・中学		541					541
都・高校			235				235
都・大学				29			29
都・職場					19		19
都・一般						84	84
東京支部	93	541	235	29	19	84	1,001

会員連盟	小	中	高	大	職	一	合計
愛知県	9	258	162	11	9	39	488
三重県	5	88	58	6	4	23	184
岐阜県	0	84	64	8	1	24	181
長野県	45	176	90	3	2	36	352
静岡県	0	200	124	8	5	26	363
東海支部	59	806	498	36	21	148	1,568
福井県	4	58	28	3	0	16	109
石川県	10	82	48	6	3	21	170
富山県	14	72	47	3	1	16	153
北陸支部	28	212	123	12	4	53	432
大阪府	3	230	151	15	8	93	500
京都府	13	108	73	14	0	28	236
兵庫県	15	295	161	7	3	87	568
滋賀県	9	87	44	3	1	31	175
奈良県	5	80	44	5	1	41	176
和歌山県	0	38	36	3	1	16	94
関西支部	45	838	509	47	14	296	1,749
広島県	28	165	100	12	1	25	331
岡山県	21	121	67	9	1	14	233
山口県	20	100	62	8	3	37	230
鳥取県	1	58	27	1	0	25	112
島根県	12	75	37	3	1	22	150
中国支部	82	519	293	33	6	123	1,056
香川県	6	61	30	4	2	11	114
高知県	1	47	19	2	0	8	77
愛媛県	1	83	39	3	0	10	136
徳島県	14	39	16	2	0	9	80
四国支部	22	230	104	11	2	38	407
福岡県	6	192	107	14	3	70	392
佐賀県	12	50	25	1	1	24	113
長崎県	6	62	58	5	1	18	150
熊本県	11	98	46	4	2	27	188
鹿児島県	35	88	61	3	3	21	211
宮崎県	13	77	32	4	2	17	145
大分県	2	42	32	2	3	26	107
沖縄県	21	86	37	1	1	24	170
九州支部	106	695	398	34	16	227	1,476
全国合計	小学校	中学校	高校	大学	職場	一般	合計
	1,011	6,611	3,633	308	129	1,647	13,339

吹奏楽コンクール参加団体数（平成11年度）

会員連盟	小	中			高			大	職	一	合計
		A	B	計	A	B	計				
函館地区	10	8	41	49	4	16	20	3	0	5	87
日胆地区	2	3	22	25	3	15	18	1	1	2	49
札幌地区	16	24	59	83	13	33	46	3	1	11	160
空知地区	4	3	22	25	3	7	10	0	0	3	42
旭川地区	9	7	23	30	5	11	16	2	0	3	60
名寄地区	0	2	7	9	1	3	4	0	0	2	15
北見地区	13	7	24	31	5	13	18	1	0	8	71
釧路地区	0	3	27	30	3	7	10	3	0	7	50
帯広地区	3	6	24	30	3	8	11	1	1	4	50
留萌地区	2	5	5	10	1	2	3	0	0	3	18
稚内地区	0	2	3	5	0	4	4	0	0	1	10
北海道支部	59	70	257	327	41	119	160	14	3	49	612
宮城県	30	19	136	155	13	52	65	6	1	2	259
岩手県	16	11	95	106	16	46	62	2	0	16	202
青森県	26	19	76	95	13	28	41	3	0	5	170
秋田県	32	17	102	119	11	33	44	2	0	9	206
山形県	10	15	70	85	13	26	39	1	0	11	146
福島県	25	78	35	113	40	26	66	4	1	14	223
東北支部	139	159	514	673	106	211	317	18	2	57	1,206
栃木県	11	18	79	97	8	26	34	0	0	9	151
茨城県	32	34	174	208	16	40	56	5	1	20	322
千葉県	50	54	229	283	38	104	142	7	2	21	505
神奈川県	5	55	232	287	55	101	156	3	4	25	480
東関東支部	98	161	714	875	117	271	388	15	7	75	1,458
新潟県	0	50	207	257	21	49	70	0	0	14	341
群馬県	3	21	103	124	15	23	38	0	0	6	171
山梨県	4	9	50	59	10	14	24	4	0	9	100
埼玉県	5	56	272	328	31	115	146	4	0	32	515
西関東支部	12	136	632	768	77	201	278	8	0	61	1,127
都・小学	0										0
都・中学		45	235	280							280
都・高校					61	97	158				158
都・大学								21			21
都・職場									6		6
都・一般										26	26
東京支部	0	45	235	280	61	97	158	21	6	26	491

会員連盟	小	中			高			大	職	一	合計
		A	B	計	A	B	計				
愛知県	8	97	140	237	73	50	123	7	4	10	389
三重県	2	25	46	71	20	21	41	3	0	7	124
岐阜県	0	17	58	75	18	29	47	2	1	5	130
長野県	35	72	95	167	29	32	61	3	1	9	276
静岡県	0	44	145	189	40	56	96	2	1	12	300
東海支部	45	255	484	739	180	188	368	17	7	43	1,219
福井県	1	19	31	50	9	9	18	1	0	4	74
石川県	2	18	47	65	14	20	34	5	0	4	110
富山県	4	20	43	63	16	14	30	1	0	4	102
北陸支部	7	57	121	178	39	43	82	7	0	12	286
大阪府	1	101	98	199	71	43	114	8	4	17	343
京都府	3	56	51	107	32	26	58	9	0	17	194
兵庫県	8	116	176	292	63	78	141	3	0	25	469
滋賀県	1	48	36	84	16	19	35	2	0	13	135
奈良県	1	31	41	72	17	23	40	2	1	10	126
和歌山県	0	13	21	34	9	15	24	1	0	2	61
関西支部	14	365	423	788	208	204	412	25	5	84	1,328
広島県	0	68	64	132	36	13	49	3	0	10	194
岡山県	0	63	41	104	37	15	52	2	0	8	166
山口県	10	40	60	100	28	26	54	2	0	14	180
鳥取県	0	31	24	55	11	1	12	1	0	5	73
島根県	6	37	43	80	19	14	33	1	1	6	127
中国支部	16	239	232	471	131	69	200	9	1	43	740
香川県	4	31	27	58	14	6	20	1	0	2	85
高知県	1	13	28	41	10	8	18	0	0	4	64
愛媛県	1	53	20	73	18	15	33	1	0	4	112
徳島県	0	20	12	32	7	6	13	1	0	5	51
四国支部	6	117	87	204	49	35	84	3	0	15	312
福岡県	5	161	9	170	8	61	87	6	0	19	287
佐賀県	1	36	11	47	20	3	23	1	0	5	77
長崎県	5	52	0	52	47	0	47	2	1	5	112
熊本県	9	48	49	97	27	15	42	4	1	15	168
鹿児島県	18	68	0	68	45	0	45	1	0	6	138
宮崎県	10	53	18	71	16	8	24	3	0	4	112
大分県	1	27	14	41	23	2	25	2	1	4	74
沖縄県	10	46	29	75	14	9	23	0	0	5	113
九州支部	59	491	130	621	273	43	316	19	3	63	1,081
全国合計	小学	中学校			高校			大学	職場	一般	合計
		A	B	計	A	B	計				
	455	2,095	3,829	5,924	1,282	1,481	2,763	156	34	528	9,860

(注) 中学校・高校の「A」は全国大会予選としての数、「B」はその他の数。

おわりに

日本において今後の課外活動としての吹奏楽活動を考えた時、社会教育的とらえ方をある面でしていかなければならないのではないかと。指導面においても研修・研究活動、指導者養成体制など、欧米水準で考える必要があろう。学校教育課程の基準が改善される今、吹奏楽部活動の展望と課題についても早急に改善していかなければならない。今後私も音楽を生涯の友とする子どもたちが1人でも多くなることを願い、実践・研究を続け行う。

注および参考文献

- (1)金管バンド（Brass Band）はイギリスの職場、市民バンドを中心に広まった金管と打楽器のみで編成されている。日本の小学校においては、金管バンドと吹奏楽の両方の編成がある
 - (2)ホエールト（Hordt, Ph）Theorie der Schule（1933）S 206 - 207
 - (3)G はドイツ音名でソの音のこと
 - (4)柳生力 音楽教育論集『自分のためにうたがあるとき』P64 1986
 - (5)札幌市内において、市民バンド数 29 団体 札幌地区吹奏楽連盟 1998
 - (6)J. ホイジンガ、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中公文庫 P34 1997
 - (7)今井敏勝「楽器による音楽表現研究」- 小学校における楽器を使った音楽教育の必要性 - 日本吹奏楽学会研究紀要 第 8 号 P31 ~ 32 1998
-
- ・教師養成研究会：『教育原理』3 訂版 学芸図書株式会社 1975
 - ・ゲルトルート・オルフ著、丸山忠璋訳：『オルフ ムジーク テラピー』明治図書 1992
 - ・柳生力：音楽教育論集『自分のためにうたがあるとき』音楽之友社 1986
 - ・マリー・シェイファー著、高橋悠治訳：『教室の犀』全音楽譜出版社 1975
 - ・J. ホイジンガ著、高橋英夫訳：『ホモ・ルーデンス』中公文庫 1997
 - ・ジェームス・L・マーセル著、美田節子訳：『音楽教育と人間形成』音楽之友社 1967

・今井敏勝:「楽器による音楽表現研究」 - 小学校における楽器を使った音楽教育の必要性 - 日本吹奏楽学会 1998

(いまい としかつ・本学非常勤講師)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

The Natural Approach: Possible applications to a Tomakomai Komazawa University English classroom.

ナチュラル・アプローチ

——苫小牧駒澤大学「英語」クラスに適用可能な教授法について——

Robert Carl OLSON

ロバート・カール・オルソン

Key words: Natural Approach, language acquisition, comprehensible input, affective filter, monitor

SUMMARY

As college students are entering a market place which is becoming increasingly international, the ability to communicate in English is moving from the category of "valuable skill" to the category of "essential skill." With this in mind, instructors of English conversation must intensify their searches for teaching methods that are effective as well as efficient in assisting students with English language acquisition. One purposed method is the *Natural Approach*. The purpose of this paper will be to introduce the *Natural Approach* and explore some of its possible applications to a Tomakomai Komazawa University Communication English course.

INTRODUCTION

The goal of my Communication English course is to assist the students in their quest to improve their ability to acquire use of the English language. While the obstacles that complicate this process are numerous, there are three that I find to be particularly difficult to overcome:

- Varying levels of student ability. It is not uncommon to have a potpourri of English speaking ability in one class.
- Student apprehension preventing language production. "Shyness" is often the reason given for lack of student participation.
- Student frustration. Fatigue from years of heavy grammatical study and a perceived lack of relevance often hamper an English class's effectiveness.

One suggested solution to the above-mentioned goal and obstacles is the learning method known as the *Natural Approach*.

EARLIER METHODS OF LANGUAGE STUDY

A brief introduction into some of the previous methods used in language instruction would be beneficial in understanding some of the current rationales used in developing new processes.

Grammatical studies were most likely developed by the elite of Greek and Roman society. It is not clear whether these studies were intended to induce language acquisition or not. This form of study continued in the Middle Ages in monasteries by monks who studied Latin and then expanded to the West. This method of study has come under heavy fire as of recent for being perceived as out of date and irrelevant to language acquisition.

The *natural method* (not to be confused with the *Natural Approach*) is a series of teacher-spoken monologues combined with comprehension-checking

questions. A fair amount of repetition of vocabulary and phrases was practiced until the student "memorized" the target language.

The *psychological method* is very similar to "word association." The instructor would present a topic and offer vocabulary and other language components while consistently using charts, diagrams and other visual aids.

The *series method* taught language through the separation and identification of individual activities as they related to a specific activity. If the specific activity is "making a cake," the ingredients (flour, butter, eggs, etc.) would comprise the vocabulary section while the specific instructional verbs (mix, open, pour, etc.) would form the conversational part of the lesson.

The *phonetic method* first instructed students on the pronunciation of the new language using phrases and then used these same phrases to create dialogs and stories that could be used for communication.

The *audio-lingual method* was developed after World War II when it became apparent that current language teaching methods were not producing students who could communicate in the language they had been studying. Linguists developed a course which introduced a target language in one classroom session and then reinforced it through the use of "drill sessions" several times a week.

While it is easy to look at past methods and ideology and be critical, it is far more beneficial to use past information to improve current methods while searching for new ones.

WHAT IS 'LANGUAGE ACQUISITION?'

There is a tendency to lump all forms of 'studying English' under one heading but there is a vast difference between language learning and language acquisition. The study of grammar and its application to a particular language comprise language learning. Language acquisition, on the other hand, pertains to the ability of an individual to gradually use a given language in meaningful circumstances. Despite the heavy reliance placed on formalized grammatical study by the Japanese education system, there is no evidence to suggest that mastery of the former leads to proficiency of the latter (Krashen&Terrell,1988,pg.17).

HOW IS LANGUAGE ACQUIRED?

It is interesting to note that while language acquisition is as old as human interaction, the formal study of other languages is relatively recent (Krashen&Terrell,1988,pg.7). The process of acquiring language is often divided into two methods: "traditional" and "formal." An example of traditional methods would be various ethnic traders at a market place learning each other's language while exchanging goods. "Learning through doing" is the principle of traditional methods. Formal methods focus on organized instruction with rote memory and "drilling" being major components of the learning process.

Whatever method is utilized, Krashen and Terrell (1988,pg.20) suggests that language acquisition follows a set hierarchy which is governed by a few principles. The principles are:

- Comprehension precedes production; i.e. students will understand spoken language well before they can use spoken language. A young child who

picks up a knife and hears his or her mother yell "NO!" is not conscious of the meaning of the word "NO" but will be able to deduce the meaning through the mother's tone, volume, facial expressions and body posture. This form of "understanding" far precedes the ability to mimic such language productions.

- "Silent periods" (a period where student improvement and production appears to decrease) precede advancement into the next level of language proficiency. As a former instructor in an English conversation school where students attended one 50-minute class per week, I can attest to this phenomenon. Our class would spend four or five weeks on a set of vocabulary and accompanying questions. It was often the case that at the end of the unit I was frustrated as, despite the intensive nature of our study, the students were not able to produce the language. However, during review sessions in the following weeks, students would randomly spout out "blocks" of English language production. It would appear that students need time to digest and internalize the language before they can recall and use it.
- Production (and, ultimately, fluency) of language is not taught but rather "emerges." As stated earlier, it appears that students need varying amounts of time to internalize language before they can reproduce it. As an intermediate Japanese speaker, I know from personal experience that there are some words and phrases that I "just can't get" but several weeks later these same words will have become part of my immediate vocabulary.

The hierarchy for language production that Krashen and Terrell speak of is as follows:

- Non-verbal responses (gestures, compliance with spoken instructions).
- Single-word responses.
- Multiple-word responses.
- Phrases.
- Sentences.
- Complex discourse.

WHAT IS THE 'NATURAL APPROACH?'

Krashen and Terrell (1988,pg.55) have offered what they refer to as the "Great Paradox of Language Teaching" as their reason for supporting the *Natural Approach*. This paradox is that **"language is best taught when it is being used to transmit messages, not when it is explicitly taught for conscious learning."**

Simply stated, the *Natural Approach* classroom is a collection of language acquisition activities that utilize a pre-determined target language.

Comprehensible input is the foundation of this teaching method. The instructor strives to keep all spoken activities and instruction at an *i + I* language level. In this linguistic equation, "*i*" refers to the students' current language ability while "*+ I*" symbolizes the new language which is just beyond the students' current level of understanding. Krashen and Terrell theorize that supplying students with this *i + I* level language (in this case, comprehensible input) eventually leads to language acquisition.

THE ROLE OF THE "AFFECTIVE FILTER"

What is known as the "affective filter" is a very important component of the *Natural Approach*. The affective filter is the student's ability to be "open" to comprehensible input. A high filter infers low self-confidence/high anxiety levels on the part of the student which is detrimental to the acquisition process.

On the other hand, low affective filters suggest high self-confidence and low anxiety levels which is beneficial to the acquisition process. Therefore, when using the *Natural Approach*, one of the chief goals must be the lowering of the affective filter. Four methods have been suggested (Krashen&Terrell,1988, pg.20).

#1) Instructors should communicate all language goals and how they will be achieved. In addition to stating *what* the students will be learning, it may be beneficial to tell the students *how* they will be learning it.

#2) Instructors must utilize the target language in a way that is both meaningful and interesting to the students.

#3) Students are not forced to speak until they are ready. Instead of randomly calling upon students to answer, *Natural Approach* classrooms often utilize the technique known as "random volunteer responding." In this manner, students respond to questions when they feel they are ready to do so.

#4) Mistakes are subtly corrected, if at all. Research has led to the suggestion that mistake correction does not appear to assist in language acquisition. Krashen and Terrell suggests that teacher correction of student speaking errors should be done as follows.

Teacher: What color is her dress.

Student: She's blue.

Teacher: That's right. *It's* blue.

THE ROLE OF GRAMMAR

Bahlsen described the attempts to use grammar in language acquisition as "*a barren waste of insipid sentence translation. Committing words to memory, translating sentences, drilling irregular verbs, later memorizing, repeating, and applying grammatical rules with their exceptions---that was and remained our main occupation, for not until the last years of the high schools with the nine-year curriculum did French reading come to anything like prominence and that was the time when free compositions of the foreign language were to be written* (Krashen&Terrell.1988,pg.9)." Despite this obvious objection to grammatical study and how it relates to language acquisition, the study of grammar does have a role, albeit a limited role, in the process of language acquisition.

The rules and regulation learned through the process of formalized studies serve as a **monitor**. The monitor is what a student uses to correct small errors and alter word/sentence structure as needed.

A possible example of monitor use would be a native-English speaker acquiring the Japanese words "watashi" ("I"), "wa" (article defining "I" as the subject of this sentence), "ikimasu" ("go"), "ni" ("to") "Tokyo" (city name). If this sentence were to be spoken in accordance with English grammatical rules, the sentence would read, "Watashi wa ikimasu ni Tokyo." While this sentence may be understood by certain individuals, it is likely that the speaker will encounter those who, formally or otherwise, will give some "grammar instruction." If this instruction coincides with comprehensible input, the non-native speaker will internalize the rule while retaining the acquired vocabulary and then be able to produce the grammatically correct, communicative statement, "Watashi wa Tokyo ni ikimasu" (or the Japanese equivalent of "I go to Tokyo").

A possible example of monitor usage by a native speaker would be an elementary school student in the United States who has formed the incorrect language habit of saying, "I'm not going to eat nothing." It is likely that this student's tendency will be corrected until the student internalizes the grammatical rule of not using "double negatives." While the student may not be able to name the rule or even understand "why" the rule is used, the student will be able to edit his or her own speaking, often using the claim, "it doesn't sound right" to signify that a grammatical rule has been broken.

But while grammar does have a place in language acquisition, Krashen&Terrell (1988,pg.57) state that it is essential that the study of *grammar not interfere with communication*. There is a danger of students "over-monitoring" their language production and, as a result, never progressing to the stage where they are able to communicate effectively. Some signs of over-monitoring would be students pausing for long periods after each word is spoken as they try to fill in the pieces of the grammatical puzzle or silently mouth verb conjugations.

THE 'NATURAL APPROACH ' CLASSROOM

It is likely that one of the first acts of an instructor in a classroom utilizing *Natural Approach* techniques would be to inform the students not only what they will be learning but how they will learning it. Krashen (Krashen&Terrell,1988,pg.74) says this form of "debriefing" is often beneficial for students who have grown leery of language classes that promise communication-based instruction but fall back into grammatical studies.

After having discussed the syllabus, the class would likely begin progress in the three general communicative goals; #1) the personal identification stage,

#2) the personal experience stage and #3) the expressing opinions stage (Krashen&Terrell,1988,pg.23). All classroom activities would focus on providing comprehensible input for the students while allowing them the freedom to produce language at their own individual paces.

Examples of such activities would be preference ranking, personal charts and tables. In such activities, the focus is not on the answers themselves but on the sharing of answers during the follow up conversation between the instructors and the class. I will show (ok) way in which preference ranking is used for the purpose of illustration. The instructor would pass out a sheet with the following lead-in statements printed on it (Krashen&Terrell,1988,pg.103).

My favorite summer activity is:

_____ swimming

_____ reading novels

_____ playing tennis

_____ cooking

The students would then rank each activity accordingly. After the rankings are complete, the teacher would begin a follow up conversation that would allow the students to express their answer and opinions in the predetermined target language. An example of such a conversation is listed below (Krashen&Terrell,1988,pg.103).

Who ranked swimming number one? (Mark raises his hand.) Where do you swim, Mark? How often. When did you first learn to swim? Have you ever swum competitively? Who else in the class swims a great deal? (Betty raises her hand.) Did you mark swimming as your first preference? Why not? What did you mark? (Betty answers "playing tennis.") Why do you like tennis more

than swimming?

Activities can be teacher-centered or students-centered, which gives the students the freedom to move around the room and speak with other members of the class. Either activity allows for language acquisition as long as the target language is utilized and the students understand the message that is being given.

Whatever activities are utilized, the student's, according to Krashen and Terrell, should leave the class thinking, "I really did understand most of what was said and it wasn't so difficult (Krashen&Terrell,1988,pg.75)."

POSSIBLE APPLICATIONS TO A COMMUNICATION ENGLISH COURSE AT TOMAKOMAI KOMAZAWA UNIVERSITY

There are three aspects about the *Natural Approach* that I find attractive. The first is the concept of sharing the process as well as the final product with the students. I believe that involvement proceeds commitment and this may be one method that fosters both.

Another aspect I find appealing is the interactive approach among students. I hold the opinion that language education is an active process rather than a passive one and that lecture-based language courses are not an effective method of teaching. Having students work with one another accomplishes two things. #1) It increases the likelihood that language will be acquired as the process involves producing input as well as receiving input in a manner which is not passive. #2) It is a sad but true fact that as administrators try to keep the costs of education manageable that class sizes will increase. Such

developments will make one-on-one instructor/student opportunities decrease in the future. While I'm not suggesting that students working in pairs or small groups is a substitution for interaction with the instructor, it will be necessary for instructors to find ways in which to increase the number of speaking opportunities for students who are in classes in which the numbers are large.

The final aspect I find attractive is represented in Krashen's quote regarding how students should feel when they leave the classroom. I believe that the myth that a class must be difficult in order to be meaningful permeates most language courses. To be able to say to students that this class does not have to be difficult in order to be effective will most likely alleviate some student anxiety and increase enthusiasm.

QUESTIONS I WOULD LIKE TO ASK

While I find various aspects of the *Natural Approach* intriguing, I do have some questions and concerns that I intend to further research. They are as follows.

What is the time frame for a Natural Approach course?

At Komazawa University in Tomakomai, students attend approximately 24 90-minute classes over two semesters. This allows for 36 hours of instruction. The contrast becomes obvious when one considers the class goals from a suggested syllabus from a *Natural Approach* Spanish course (Krashen&Terrell,1988,pg.74).

After a100-150 hours of Natural Approach Spanish you will

be able to: "get around" in Spanish; you will be able to communicate with a monolingual native speaker of Spanish without difficulty and know enough Spanish to continue improving on your own.

My questions would be #1) how much time is allotted for each session and #2) how many sessions are students offered during an academic year? Assuming class sessions are 90 minutes each, the above-mentioned syllabus would suggest between 66 and 100 hours of study further suggesting an extremely intensive course or a four-year program.

Has the Natural Approach ever been tested in a country where the language being taught is not the primary language?

As a native-English speaker, my study of Japanese is enhanced by the fact that I am surrounded by it. I have the opportunity to practice what I learn in the classroom daily---whether I desire to do so or not! My university students, on the other hand, are not as fortunate. With the exception of some foreign music and videos, it is likely that my Communication English class is their only exposure to English.

How compatible are the language abilities in a given class?

One of the obstacles I mentioned earlier was the wide range of abilities in any given class. While I was taught to "shoot for the middle," it has been my experience that doing so leaves approximately one third of the class frustrated and another one third uninterested. Either way, it is possible that two thirds of any given class are partaking in a language course which could be described as

less than positive.

One of the principles of the *Natural Approach* is the instructor's ability to provide the students with comprehensible input in the form of target language that is just beyond their current ability (represented by the formula $i + 1$). My concern is that what constitutes $i + 1$ input for one student may actually be $i + 4$ for another student and $i - 3$ for another.

What is the role, if any, of the speaker's native language in a Natural Approach classroom?

There has been a fair amount of debate regarding if an instructor should revert to using the student's native language when teaching a foreign language.

One English conversation school in Japan, the David English House school in Hiroshima, uses what they refer to as the "discovery method." This method not only refrains from using the speaker's native language but also, in some cases, from assisting with the target language. Proponents of using the student's native language in the classroom argue that meaning can be clearly communicated and a great deal of time saved by using the student's native language in a prudent manner.

In regards to the *Natural Approach*, it would appear that using the student's native language would be beneficial to the acquiring process. As stated before, the cornerstone of this process is the providing the students with comprehensible input. The ability to use the student's native language would appear to be a beneficial asset as it would assist the instructor in providing input which is comprehensible in an effective and efficient manner.

What is the role of review and are there any methods which are more effective than others?

Review has been proven to be effective in certain circumstances. Obviously, certain aspects of language will be repeated naturally in the form of everyday conversation but vocabulary and other forms of specialized language will not. What review engines are available for assisting students in retaining what they have learned?

Is "waiting" until students are willing to speak the best way to foster language production?

I must admit that this is one piece of information I would not share with the students of my courses. I believe that if students are told that there is no need to produce language until they "are ready," there will be a significant number of students who will decide that the state of "being ready" will not be reached during that particular semester.

In addition, it was mentioned earlier that the job market is becoming increasingly international and the ability to use languages other than one's native tongue is becoming more and more necessary. With that in mind, a process that allows students to acquire new language skills and do so quickly must be developed.

Krashen and Terrell (1988,pg.13) mention that it was during World War II that the need for concise language acquisition instruction came into light. Great strides have been made but it would appear that much work remains to be done.

One of the frustrating yet inevitable facts about research papers is that they often raise more questions than they answer. It is often the case the author will pose a question at the beginning of the report but when the report is finished, the only solid "fact" the author has arrived at is the need for further study.

Such is the case with this report. While I have uncovered material that will be beneficial to my future classes, there is still a vast amount knowledge to be obtained in regards to the process of language acquisition and how it can be utilized to better serve my students.

Bibliography

Krashen, Stephen D. & Terrell, Tracy D The Natural Approach; Language Acquisition in the Classroom. Prentice Hall Europe. 1988.

(ロバート カール オルソン・本学講師)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

Clancy by the Kawa¹: Teaching Australian Texts Interculturally

川岸のクランシー：オーストラリア文学の異文化間教授法

Michael KINDLER²

マイケル・キンドラー

Keywords: intercultural studies, Australian Studies, teaching foreign texts in Japan, cultural studies, Aboriginal Studies, political science in Japan

Abstract

This article illustrates how the study of texts from different cultures (especially Australian) can be undertaken in the Far East. It discusses how points of access are achieved across linguistic and cultural divides. By going from the global to the national and then to the local, one can induce understanding in people of texts that reside outside their immediate range of experience. By drawing on the universal nature of human experiences, this top-down model approach is further enriched. By emphasizing universal human experiences of love, hope, and desires these narratives become directly accessible. The usefulness and relevance of indigenous art is also shown in ways which are more visual than literary, and which stretch the postmodern notion of text across national and cultural boundaries. As well as boundaries of form. The attempt to familiarize students with contemporary political issues was surprisingly difficult, and some reasons for this are postulated. All these approaches are located in a growth model of language development. These are predicated on the study of meaning preceding the study of language. Culture before language, idea before form.

Introduction

One of the biggest questions driving tertiary pedagogy in the world today is critical relevance. The critical relevance of what, you may well ask? The relevance of content to the learner's experience, value base and range of understanding so that the learner is challenged, informed and extended. This is particularly relevant when conveying the meaning of Australian texts in Japan, the author's current experience.

The ability to challenge students to exercise their thinking muscles, to consider, weigh, examine and reach an informed view point on a subject that is central to progress, be that scientific, social, economic, private or public is arguably the most essential activity in universities today. Ways of thinking about intercultural understanding are at the heart of what Michel Foucault called "the archaeology of knowledge" (1969). Questions emerge which confront the individual with a cross-cultural challenge, the kind which asks learners to rebuild what and how they come to know what they think they knew.

As has been said before³ it is the quality of the journey, not the arrival that determines the value of lasting educational outcomes. Process is the key. The experience of teaching Australian texts in Japan has been less an issue of an interdisciplinary nature than it has been a foray in intercultural studies. As so-called Mega-trends in education increasingly globalize curriculum, and zero in on the learner's meta-cognitive attitude to learning, questions of tolerance of difference, of understanding other cultures emerge as being in the forefront of university work in the humanities today.

Japanese business success in the post World War two period can make a reasonable claim to having successfully maintained critical relevance with a view to ongoing product quality, excellence and sophistication dominating a global market in a range of sectors. After all, being the number one income earning economy of APEC⁴, an organization driving half of global output, is no mean feat. Depending on how the figures are arranged, OECD measurements can also corroborate an amazingly strong position in Japan. Consensus is that as the new century is approaching, the Japanese economy is "bottoming out". Does the Japanese tertiary education system mirror the performance described in Japanese business practice?

A previous paper explored strengths and weaknesses of the Japanese approaches to teaching at university level, and this paper does not wish to repeat those, simply to take one learning characteristic as the point of departure from which the teaching of Australian texts in Japan becomes accessible. That characteristic is the capacity to establish the critical relevance of teaching Australian texts in Far East Asia.

The ability to individually weigh an idea in its cultural context for its intrinsic and extrinsic human values, to arrive at an informed value judgement is the pin that holds this critical relevance package together. That is how the teaching of Australian texts in Japan is being approached. This paper describes how the process of establishing critical relevance makes Australian texts accessible, and how they are reacted to. The author is informed by a past experience of teaching Australian texts in Australia and to international audiences, refined here to a particular and predominantly Japanese setting⁵.

The question is how can an(y) Australian text be made reasonably readily accessible to an audience in Far East Asia which has limited linguistic familiarity, and an even more limited cultural understanding, of most iconic Australian hallmarks and texts?

From the Universal to the National

When teaching in international contexts, the instructor can choose to emphasize, or neglect, cultural differences. The question that needs to be asked is teaching for the State the primary purpose (Plato⁶), or is molding a *homo sapiens in the enlightened international sense* the main goal today. Which is better? The locally skilled or the internationally aware? Clearly both is the answer. Both have the same end result, a betterment of the human condition, but the methods and approaches that inform the process could not differ more widely. The approach taken here is one that goes from the present and particular and liberalizes that notion into the broader and the culturally more diverse and tolerant⁷.

Which is the better educational goal? To fill an empty vessel or to show students how to build vessels themselves? To tell people how to cross a 't' and dot an 'i', or to ask them the purpose of the 't' and the 'i'?

These kinds of questions are in the background of the approach to teaching anything interdisciplinary or trans-cultural. Before coming to the trans-cultural itself, however, the relevance of the idea itself has to be established, in a universally accessible sense, as it were.

Take the example of *Malcolm*, an irreverential film made in 1986, original and comic, of Australian humor. Colin Friels plays an inventor, young, naive, encapsulating so much of what Australia is. The story is unimportant, other than to say that it concerns three people against the establishment, yet another Australian myth with Ned Kelly et al. The underdog against the world always manages to galvanize sympathy, even in Japan. But that was not the access point taken, although it could have been. The central teaching question is how to make such a text accessible to a Japanese audience. What are the options:-

- Teaching Australian humor. Sarcasm and Irony can be enormously culturally variable and therefore almost inaccessible
- Australian male identity (Malcolm is shy about people, especially girls)
- Identify key Australian cultural attributes
- Locate the most incomprehensible aspects and deconstruct them backwards
- Look for a common human strand that Australia and Japan has in common
- Universalize the central idea of the text, then work back from the global to the local, from the human to the culturally specific.

The Universal Point of Departure

When teaching Shakespeare's *Romeo and Juliet*, the relevance of an old tale to a young teenager could be questioned. Once the link to the 14 or 15 year old is established by pointing out that this tale could have happened any time anywhere because it is about boy meets girl, then textual access is paved and relevance established.

Similarly, the relevance of any idea must be established to the learner's range of experience, to his/her life. Thus the need to ask a question which facilitates this appeal. This question best emanates from the global and general, before it becomes narrow and specific.

The core idea that was taken was the notion of inventions. The first question by which to gradually introduce *Malcolm* was to ask⁸:-

1. What in your opinion has been the most significant invention to have impact on this century? Examples cited were Electricity, Penicillin (antibiotics), Computers, Gasoline, The Pill (Contraception), or students were invited to cite what they thought was not on the list but worthy of inclusion.

Answers varied. On the list, electricity, computers, contraception, were quoted most frequently and in that order of priority.

Off the list, medicine, cars, fire, space shuttle, rockets, television, ice maker, music, education, the atom bomb, air planes, ability to bio-genetically copy humans, things that plug into the wall, were listed.

This question simply acted to get participants thinking about and around the question, using dictionaries where necessary. As people worked in small groups, discussion in English simultaneously managed to involve people linguistically as well as culturally, around one basic idea: the most significant technological impact on humans today through an invention which was relatively recent, preferably this century.

This question involved being given a stimulus, speculation and taking risk, thinking along the lines of the examples, but also thinking across and over the examples along different lines. By accepting all answers, students were dumbfounded, as their past training had drilled them into believing that there was one collectively arrived at dominant answer and other others, especially individually voiced opinions, were secondary. As western teaching celebrates individual differences, answers which showed a relationship or which were original were valued. This unsettled some students, disturbing their comfort zone. Precisely what was hoped for.

From the Global to the National

Having stimulated a global question, now is the time to focus on a national question close to home.

2. What do you think has been the best Japanese Invention?

Examples cited were Cars, Audio Electronics, Photo Electronics, Robotics and Sushi. Answers included all items listed on the list . Off the list items were Zen Buddhism, as it forms Japanese tradition, the Kimono, electrical appliances, tatami mats, Japanese writing (!), the portable phone, TV games hardware, Walkman, Hanabi, noodles in a cup, Natto, Misu.

The two criteria that were applied were best and Japanese. This was asking respondents to speak with pride of something that was indirectly personal. The next question was to ask a question that searched for the respondents' ability to be critical of their culture by identifying what they could arguably consider the

"worst" Japanese invention.

3. What do you think has been/is the worst Japanese invention? Some ideas are driver's licence, packaging, Japanese banking system, Japanese writing.

Answers did not refer to banking, but listed all other suggestions. Original answers included computer games, throwaway disposables, the Japanese education system (!), the Japanese economic system, Japanese writing, the old Japanese toilet, the portable phone (case by case), geta, fundoshi, the Japanese government. One answer said that the way of thinking in Japan was customarily such as not to say our opinion, and the respondent felt this was a detrimental attribute.

The data base by now allowed for some discussion of why the same item could be listed in two categories, and the level of discerning thinking and consequent discussion and comparative evaluation rose.

From the National to the Transnational

4. Do you know of any Australian inventions? Listed were the Bionic Ear Implant, Victa Lawnmowers, The Hills Hoist, Air Traffic Control Software, the Sarich orbital engine. Students were asked to cite their own knowledge of Australian inventions.

The software came out as the most popularly known Australian invention in Japan, followed by the clothes hoist and the bionic ear. The Boomerang was cited by some. Winfield cigarette was also mentioned.

This last question established an order of awareness of Australian inventions, and also elicited cultural knowledge by asking what they knew about Australian inventiveness.

This kind of preliminary straw poll stimulated thinking around the question of the value of any invention. This well prepared the ground for the ensuing study of the narrative, humor and inventiveness of the film *Malcolm*.

Teaching Australian texts in Northern Japan tests one's ability to universalize Australian texts across considerable extremes of language and culture. Australian texts tend to local and specific historic and cultural contexts. These are often not readily accessible in their original sense to a Far East Asian audience without the teacher using creative and innovative interpretative approaches.

Working in a faculty of intercultural studies, the task is one of devising the curriculum by building bridges between cultures, languages, generations and genders. The overriding common element in all this is the examination and celebration of the human condition. It is one that provides ample scope to explore, reflect and enjoy.

What constitutes "text" in an intercultural context?

It is not just the new Syllabus for the Higher School Certificate in English for the New South Wales Board of Studies (approved June 1999) in Australia that is defining 'text' in more relaxed ways. Extending the meaning ever so gently,

the Board is acknowledging multi-media, film, video, CD-Rom and other printed matter such as journalism. Teaching in another language to another culture takes these timid re-definitions and blasts them across all formats of text, from which the power of a picture, painting, graph, or scene is not excluded. In the true post-modern sense, text is so much more than the printed word. It is tone, it is clothes, it is mood, it is context, it is eye contact, it is body language. Communication is more complex and subtle than is allowed for in many pre-dominantly English cultures. Eastern cultures, such as the Japanese, are very much open to, and cognisant of, such nuances, in ways which instruct the Western teacher.

Issues confronting Australia in 1999 included the 2000 Sydney Olympic Games, the referendum which contained a proposed preamble which was in search of a treaty or recognition of the first Australians, and a question about a republic. As well, Australia assumed a significant role in respect of East Timor. The Australian Prime Minister, Mr Howard, was quoted in the Japanese press as being anti-republic and anti-Asia, while his predecessor had been perceived as pro-Republic and pro-Asia.

In Komazawa University in 1998 a Research Center for Ainu and Asia Pacific Indigenous Cultures was established. This hosted an International Minorities Day in Tomakomai city, a public panel and discussion on November 13 at which representatives came from New Zealand, Australia and of course Ainu from Hokkaido itself.



International Minorities Day, November 13, 1999, Ivy Plaza, Tomakomai Hokkaido,

The speakers included (from left to right) Ms Jane McGrory, who was the Australian Embassy's translator for the day. Associate Professor Shinohara, Professor of Japanese Literature, was the Chairman.

President of Tomakomai Komazawa University, Professor Ohkubo, made his opening remarks in which he asserted that a Japanese report on NHK (National Educational Television Channel of Japan) of that week in Tokyo claimed that there was a DNA similarity between Aborigines and Japanese.

On his left are Mr Lester Finch, Dean, Humanities and Social Sciences,

Eastern Institute of Technology, Napier, New Zealand, who spoke about the Treaty of Waitangi and its educational implications for especially Maori children.

The Aboriginal Presence in Australian Culture courses

Michael Kindler spoke on the economic and social minority rights of Aboriginal people in Australia. He framed his address against the 1999 Draft United Nations Resolution on the Rights of Indigenous people, and used it to evaluate a number of performance areas such as health, education, employment and land rights.

Imizu-san is an Ainu elder who spoke about his personal experiences in Hokkaido as an Ainu from his childhood days, the Second World War through to recent times. He highlighted through anecdotes experiences of discrimination.

On his left is Ms Avril Quail, senior curator for the Aboriginal Collection for the Australian National Gallery in Canberra, who spoke about her art and what it meant to be an Aboriginal woman in Australia today.

Coincidentally, Dr Robyn Archer, Director for the Adelaide Arts Festival was in town because she was looking for Ainu performers and cultural artefacts and photos which might tour Hobart in 2001 as she was appointed to direct the first Arts Festival for Tasmania. She sang two impromptu songs, one an Edith Piaf chanson and the other an Australian country yodel.

Reaction to the day among the audience was amazing. This ranged from an ignorance of the fact that Australia had indigenous people, to questions about how it was that Australian singers could adopt different personas such as those of a French chanson or a yodel. 'Easy', replied Dr Archer. 'Australians have such difficulty knowing who they are that they more readily assume other personas than be themselves'.

What the day succeeded in showing was the many similarities between minorities of Maori, Ainu and Aboriginal people. Examples were their comparable political and social justice status, their struggle to preserve languages and identities in the face of mixed blood relationships as well as cultural commonalities such as characterize hunter-gatherer societies (hunting, fish, food preparation, baskets, carvings). This is a further illustration of how intercultural studies are promoted in Hokkaido. In an Asian Pacific sense, which embraces the question of preserving minority cultures.

During this month a display had been organized in Komazawa University which was called Three Minorities Art. This contained a display of Maori wood carvings (courtesy of the New Zealand Embassy) and Ainu crafts. The main space of the exhibit was taken up by *Origins*, a collection of prints by contemporary Aboriginal artists. This had been curated by Ms Quail from the Aboriginal Collection of the National Gallery and which had been put on tour to Japan through Ms Leona Landers from the Department of Foreign Affairs and Trade.

The intercultural value of an Aboriginal art collection was immediately apparent to the Japanese, who appreciated the opportunity to see this kind of

art. Indeed, members of the community came to look at the exhibit, and this included elder citizens as well as local artists who brought their classes to discuss the way in which Aboriginal artists had chosen to express themselves. The two teachers used this art for their teaching purposes, questions which were framed yielded fascinating insights, comments and reactions as outlined below.

The stimulus for this way of promoting Australian studies had been a visit earlier in the year by Australian Aboriginal author Herb Wharton, who had visited the University to speak of his experiences as a drover and living in Australia, especially its outback. He received great respect, but his verbal messages were less immediately accessible than was his visual presence, his body language. This then prompted the question: "If a story teller communicates to some extent, would a visual art collection not communicate more immediately". It would be unfair to compare the effect of the two different cultural events, as both were successful in their own right, and for different reasons.



***Kangaroo Dreaming*, Treahna Hamm, Etching, Printers Barbara McConchie and Toni Bailey, Aboriginal Art Collection, National Gallery of Australia. Part of the Origins Collection regularly sent on tour by the Australian Department of Foreign Affairs and Trade.**

Two questions which this print prompted concerned the species of leaf/tree shown, and the question of what the Kangaroo could possibly be dreaming about?

Professor Watt constructed a study guide around the collection *Origins* which asked questions like:-

- Find a favourite picture. What is it about? Why is it your favourite?
- Find a picture that is sad, and one which is happy. What makes it so?
- Are the Ainu exhibits more like the Maori ones or the Aboriginal ones?
- Find a picture that is difficult to understand and identify the difficulty
- Find totem animals in the Aboriginal pictures. How many can you find?

Professor Kindler framed similar questions, looking for variant answers:-

- What in your view is the oldest painting and what makes it so?
- What in your view is the most modern painting and what makes it so?
- What are the similarities/differences between the cultures?
- What is your view of indigenous art?
- Which art form do you like best? (painting, drawing, rock carving, bark carving, baskets, wood carving.

What is refreshing about teaching Aboriginal minority matters in Japan is that they receive far more respect and genuine curiosity than is frequently ever earned in Australian audiences.

One trap to avoid in teaching about Aboriginality (if oneself is not Aboriginal) is to treat the subject matter the way archaeologists have debased the integrity of the cultural identity this century, that is, as artefact, as curiosity, as a primitive cultural manifestation. Instead, the relevant intercultural approach is to approach Aboriginal identity from within a broader human identity in terms of feelings, weaknesses (*ningenteki na*) that are universal. And universally consistent, tangible and accessible. From a basis of *humanitas*⁹.

How does one approach the question of Aboriginal politics, art, textual representations, cultural appropriations, music, identity, historical treatment and mistreatment? There are really two questions here: how to do justice to Aboriginal heritage, and how to present to a non-Aboriginal audience. The first can only be addressed through the authentic voice of the Aboriginal story teller, artist, text or film. For example:

Aboriginal Music like *Yothu Yindi*, and documentary footage like *Mabo* (Last of an Island Man, Winner, 1998 Sydney Film Festival Documentary), and *Going Home*, The National Inquiry Into The Separation of Aboriginal and Torres Strait Children from their Families, 1999.

Teaching about political Australia, however, was found to be a virtually insuperably difficult alley. The approach taken with *Mabo* was to show the

classical David and Goliath struggle, in which, as one student remarked, David won because he found the 'weak point' in Goliath's armor. Before the award winning documentary was shown, the man Mabo was described as one individual who took on the might of (British) legal history and won. Why? Bbecause he too, had found the weak point of *terra nullius* (= empty land) not being so when Captain Cook planted the British flag on Australian soil in 1770.

Mabo was described in the documentary as having remarkable personal qualities, such as courage, the ability to continuously question the order of things, determination, endurance. Asked which of these qualities students admired the most, the question was met with a stony silence.

The teacher quickly learned that the idea of any citizen in Japan questioning the civil order was simply not countenanced, leave alone admired. Further, when questioning the students about their reaction outside of class, the teacher was told that the documentary was 'boring'. Asked why they considered the most significant historic event of the 1990s in Australia to be boring the answer surprised. Political life in Japan was, in their estimation, a non-event. Life in Japan had priorities which were firmly anchored against economic development, and the ideology(ies) that underpinned these were simply not an issue.

In the equation of a country's culture with its direction, the unsuccessful showing of Mabo showed that any examination of ideology was irrelevant to what Japanese students considered to be their learning requirements.

In Japan today, the communist party is still very active and visible despite its

disappearance virtually elsewhere in the world with the possible exception of Cuba and a lingering presence in Russia. It was thought that the only political party (the communist party) which in the 1960s supported the Aboriginal people in their struggle for their political enfranchisement would be of interest to contemporary Japanese students of intercultural studies (In May 1967 the Australian people voted by more than 90% to give Aboriginal people the vote). What was learned was that most students showed an extraordinary ignorance of the existence of the Communist party in their own country, leave alone an appreciation of the role of the communist party in the struggle to give Aboriginal people equal rights. Again, students explained their indifference by patiently explaining to the teacher that the difference between political parties in Japan was negligible, that politics was not really that important.

Asked what was, they were quick to talk about economic achievement and their own dreams in connection with that. Asked if they could see a connection between political processes and economic success, they felt the question was trying to make something out of nothing. This criticism of Japan, its inability to examine itself, has been successfully made elsewhere as well¹⁰. It is as if contemporary Japanese life experiences had effectively shielded students from becoming politically aware. Teaching about Mabo showed a blind spot in the vision of students in this class which it was not possible to address in the context of the semester. This will be addressed in more carefully thought out ways in the future, as not to do so would be to disenfranchise students of a significant element of international mainstream issues.

Yet to say that there is no political tension in Japan today is equally invalid. The press regularly reports intense debates over questions such as the national

flag, the national anthem, or between the old imperialist right wing guard and the progressive left. Not to mention discussion about fundamentalist cults like the Aum Shinrikyo and Honohana Sampogyo sects, rather reactionary legislation to deal with these, the continued existence of the death penalty in Japan, corruption in financial and government circles.

A further question met with similar intercultural difficulty. It was the one concerning the many setbacks Mabo had suffered. Among these were the fact that for most of his life he was poor and that he lived most of his life in exile in Townsville, not on his Murray Island. Last but not least, he was never to savor his legal victory over native title due to the fact that he died several months before the High Court was to bring down the history-making verdict.

The question was then framed so as to elicit what setback (kunan) students had experienced, and how they had let that setback affect their lives. Did it deter them from pursuing their dream, did they consider the setback to have had an initially negative, ultimately positive effect, or had the setback ultimately and conclusively negatively impacted on their lives. The series of questions were designed to elicit how they viewed life: as a victim or as a perpetrator, or differently. This question aimed at the student's ability to self-evaluate, and to examine their past in a philosophical context by asking how they viewed their future in terms of the setback(s) they had experienced.

This exercise, which took about half an hour, was only understood by few. The questioning showed that the Japanese students saw life differently from this Western approach. At best, the lesson showed that students had a more accepting, stoical, less political, less individualized view of life. At worst, they

lacked the ability to reflexively examine their condition from such a philosophical basis. This observation is made in no way to diminish student ability, simply to illustrate the intercultural difficulty that was experienced.

While indigenous art and culture are obviously archetypal and central to the transmission of intercultural understanding, they alone do not manage to convey an inclusive view of contemporary Australia. So a question which further framed the notion of how best to teach Australian studies in Japan was which texts can be chosen as representative of contemporary Australia without immediately distorting particular perceptions. The task was one of identifying appropriate texts which managed to show Australia without looking through rose-colored glasses, but at the same time not pandering to the ideological predilections of the teacher.

The postmodern notion of text as including desire, texts in a range of formats, is what is relevant in terms of accessible by Far Eastern audiences. After all, desire¹¹ is a rather universal human dimension. The key was not to isolate the subject matter by teaching only one of its forms, but to survey as many as a semester course could possibly allow.

What other texts have been used in 1999?

Of the many selection criteria examined, discarded or applied, three are identified here.

- Recency, ie preferably 19th Century, because intercultural studies is a course in contemporaneity, not historicity.

- Relevance in terms of accessibility, having meaning to the audience
- Critical potential in terms of meatiness for dialogical engagement

The next realization to convey is that there is not one culture about which to broadcast, but several: Aboriginal, Colonial, Anglo-Saxon, Multicultural, each of which may be further broken down by gender, tribe, generation etc. What is quintessential, what is marginal, what is conservative, provocative, all these are matters that in intercultural comparison terms call for close consideration. As an example, does one teach *Priscilla Queen of the Desert* because it is after all the most popular Australian video? In the event, it was decided not to do so in a hurry, not because of any moral prudishness on behalf of the teachers, but for a Japanese reason.

While the subject matter of *Priscilla* was perfectly ok for the vast majority of a Japanese tertiary audience, the location of such a film in a university was not. Life here after all is all about appearances, not reality. So it is perfectly ok for such film matter (and far more risque stuff at that) to be viewed in private or among friends. But a university in Japan allegedly is not a place for *Priscilla*.

Of course, mythical icons on the Australian cultural landscape like *Gallipoli*, *Crocodile Dundee* and *Strictly Ballroom*¹² are all titles for any pretension to teaching Australian culture abroad. These evocations of central Australian values like mateship, heroism, the underdog, masculine bonding, laconic self-deprecation, and the transformation of the ugly duckling to the swan symbolize a universal urge to mature, to transform into something better, to improve, to

realize a personal dream.

Teaching method

The key is to finely tune. Do not oversimplify the terminology so that the narrative becomes meaningless, or politically neutered. Nor complexify the matter beyond ready accessibility. Never patronize the audience because they have as sharp an eye for historical injustice as any people, and just because these non-native speakers of English may lack the verbal ability to say so does not suggest an inability to see it.

Linguistically, use several stimuli, and use them repeatedly: video, listening to a narration, reading it with their eyes, hearing the original voice, sharing ideas of historical accuracy and inaccuracy, depending on shifting perspectives. Let the search for meaning precede any struggle with language.

Popular culture like *Shine* is accessible because fatherhood and music are universal. *Black Rock* (1996), a play by Nick Enright asks what does life in contemporary Australia tell you about the country, its culture and its people. *Cosi*¹³ (1996) is a play by Louis Nowra and is based on mental hospital inmates trying to stage *Così Fan Tutte* by Mozart, an opera in which the alleged fickleness of female love complicates and uncomplicates so much.

These three films are great narratives, possess critical relevance en masse, and provide for an actual selling of Australian culture into an overseas market. How so? *Shine* uses the themes of mental stress and music. *Black Rock* is about the sub-culture(s) of any small town. *Cosi* cleverly works two plots, the

seemingly accidental one of the opera with the actual real life of the participants, and the borders between patient and warden, cultural borders between the opera *Così fan Tutte* and Australia are blurred in the single pursuit of what is love, loyalty, fickleness.

The Last Bullet (a film that was an Australian Japanese co-production about an encounter between a Japanese and Australian soldier in WWII) successfully confronts the futility of war. *Malcolm* (1986) is a humorous almost folksy film about wacky inventions starring Colin Friels. This comedy makes accessible some of the humour and uniqueness of what it means to be quintessentially Australian.

Literature is a form of text that integrates with these visible images. Poems like *Clancy of the Overflow* by Banjo Patterson, *No more Boomerang* by Oodgeroo Noonuccal, *Short Stories* by Tim Winton (*Neighbours*), and Michael Wilding (*The Words She Types*), combine relatively well with the latest 9 minute video update from the 2000 Olympic Games in Sydney called *Building The Legacy*. What matters is that some of the central ideas of what it means to be Australian, historically, multi-culturally, indigenously, are conveyed to the predominantly Japanese audience who are essentially a mono-cultural society. The differences are stimulating, the sameness cause for reflection.

Of course Patrick White is available in translation, with David Malouf to come, and of course film scripts like those of *Shine*, *Romeo and Juliet* (the Luhrman version) and *Elizabeth* (starring the Australian Cate Blanchett) are available in translation at popular printing houses in Japan like Maruzen and Kinokunya. The courses in Australian Studies at Komozawa University convey an

Australian essentialness that includes documentary, iconic, and folkloristic understandings of Australia through a diversity of resources, from the linguistic, pictorial, poetic, musical, filmic and auditory, galvanizing a range of learning approaches.

Underlying all is the question of what value base these texts are built on. Underpinning that approach is ensuring that the linguistic understanding is in fact in place. To that end, Kindler and Watt work with groups to ensure that the basic vocabulary is in place, that central concepts are understood, that the narrative is approachable and comprehended.

Multiple Choice questions, questions of true /false, questions which elicit responses and search for speculation, interpretation and for the central idea predominate. This workshop approach believes in groups constructing meaning, believes in exciting people with ideas of cultural variance, with the power of the narrative, with triggering peoples' imaginations with hopes, fears and anxieties that are universal, trans-cultural, and readily identifiable.

Human relationships, love, jobs and work, are really the same, even if languages and cultures may differ. People in Japan today struggle with old versus new, men versus women, permanent versus impermanent work, relationships, making sense of their lives as much as many a generation anywhere. So critical literacy, the capacity to examine the unexamined life, is what fuels Australian literature courses in far East Asia.

The point of intersection of Japanese and Australian expectations and needs is really the playground of ideas at university level that is being addressed by the

courses that are variously called *Australian Culture*, *Comparative Culture*, or *Australian Literature*.

If being educated means to travel with a different view (R.S.Peters), then the purpose of teaching Australian texts in Northern Japan is to enable locals to see in ways that were hitherto inaccessible. To gain insights across divides of geography, culture, and gender is after all what it means to be enlightened and able to cope with the demands of the moment and of the next century: to successfully move across boundaries, boundaries of ideational paradigm, of culture, gender, time, and country.

Bibliography

Australian Studies on the WWW:

www.arts.monash.edu.au/ncas/home/htm

www.monash.edu.au/arts/faculty

Bangara Dance Company, Sydney, ABC Broadcast June 1998

Roland Barthes, in Sontag, Susan (Ed.). (1993). *A Roland Barthes Reader*, Vintage London

Building the Legacy, Sydney 2000 Games Olympic Official Progress Report, Video, 9 minutes

Bullock, Alan (1985). *The Humanist Tradition in the West*, London, Thames and Hudson

Caruana, Wally, *Aboriginal Art*, Thames and Hudson, Singapore, 1993

Crocodile Dundee, video starring Paul Hogan, 1990

Alan Duff, *Once Were Warriors*, video, 1995, Alan Duff, *Broken English*, video, 1997

Elliott, Stephen, *The Adventures of Priscilla Queen of the Desert*, Sydney, Currency, 1994

Enright, Nick, *Black Rock*, Currency, Sydney, 1996

Michel Foucault, *The Archaeology of knowledge*, New York, Pantheon, 1972. This is a translated version of *L'archeologie du savoir*, Paris, 1969

Fox, Mem, *Possum Magic*, Omnibus Books, Adelaide, 1983

Gallipoli, 1979, video, Film script written by David Williamson

The Last Bullet, Japanese -Australian co-production about Japanese and Australian soldier confronting each other during WWII, video, 1994

Luhmann, Baz and Pearce, Craig, *Strictly Ballroom*, Sydney, Currency, 1993, *Romeo and Juliet*, Feature film and video, 1997

Mabo, Last of an Island Man, Documentary Video, ABC, 1998

Malcolm, Cascade Films, originally produced 1986, reprint 1997

National Inquiry Into the Separation of Aboriginal and Torres Strait Islander Children from their Families, *Bringing Them Home*, April 1999

Noonuccal, Oodgeroo, *No More Boomerang* and other Poems, in *My People*, Third Edition, Jacaranda Press, 1990

Nowra, Louis, *Cosi*, The Screenplay, Currency, Sydney, 1996

Origins, Collection of Aboriginal prints curated by Avril Quail, Senior Curator, national Gallery, Canberra, Australia and promoted by leona landers through the Office of the Department of Foreign Affairs and Trade, Canberra, 1999

Parsons, Nick, *Dead heart*, The Screenplay, Currency, Sydney, 1996

Paterson, Clancy of the Overflow, poem in any anthology by the same

Shine, Baz Luhrman, Video, 1996

Yothu Yindi, *diji muru*, the videos, 1992

Peters, R.S. (ed.) (1987), *The Philosophy of Education*, Oxford University Press

Peters, R.S. (1974a). *Psychology and Ethical Development*, London, George Allen and Unwin,

Peters, R.S. (ed.). (1970). *The Concept of Education*, London, Routledge Kegan Paul, 1970

Wadden, Paul (ed), *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities*, OUP, 1993

Herb Wharton, *Where Ya'Been Mate*, University of Queensland Press, 1996, Herb Wharton, *Unbranded*, University of Queensland Press, 1992, Herb Wharton, *Cattle Camp*, University of Queensland Press, 1994, Herb Wharton, *Yumba Days*, University of Queensland Press, 1999

Tim Winton (*Neighbours*), and Michael Wilding (*The Words She Types*) in Mary Lord,

¹ The poem, *Clancy of the Overflow*, by Banjo Patterson, was 'adapted' for local understanding as Clancy by the river. To engage the reader, and show that intercultural studies meant for the teacher and the student to make an equal efforts at learning the other's language, the teacher used *kawa* as the Japanese word for river in order to convey a speedy appreciation of a key aspect of the poem. The ensuing discussion, was it better to live in the city than the country, was a spirited one.

² Dr Michael Kindler is Professor of Intercultural Studies at Komazawa University in Tomakomai, Hokkaido, Japan.

³ R.S. Peters, *The Quality of Education*, London, OUP, 1964

⁴ New Zealand Herald, August 30, 1999. Statistics also available from APEC homepage. This figure is based on income per capita based on GDP in American dollars on 1998 figures

⁵ The author taught for more than 10 years Australian literature to American students who participated in the Semester in the South Pacific Program of the University of Wisconsin Stephens Point, at Dunmore Lang College, affiliated with Macquarie University, Sydney Australia. His anthologies changed constantly with the advent of new texts and in the light of the evaluations by students of texts taught.

⁶ *The Republic*, 4th Century Before Christ

⁷ Bailey, Charles (1984). *Beyond the Present and Particular: A Theory of Liberal Education*, London, RKP

⁸ The class was an Australian Literature and Culture Class in Tomakomai Komazawa University

in the Fall semester for 1999. They numbered 47 students.

⁹ Alan Bullock (1985)

¹⁰ Marilyn Ivy, *Discourses of the Vanishing, Modernity, Phantasm, Japan*, Chicago, University of Chicago Press, 1995

¹¹ Roland Barthes, in Sontag, Susan (Ed.). (1993). *A Roland Barthes Reader*; Vintage London

¹² These three films are available with Japanese subtitles

¹³ *Shine*, *Black Rock* and *Cosi* also were available with subtitles in Japanese

(マイケル キンドラー ・ 本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

コラムパ批判書の梗概

Synopses of the Rebuttals to *Go rams pa* from the *dGe lugs pa* Scholars

小 林 守

Mamoru KOBAYASHI

キーワード：Go lan、コラムパ、ジャムヤン・ガウエーロドゥ、
セラ・ジェツンパ、デレクニマ

要旨

コラムパが『見解の弁別』『悪見の除去』においてツォンカパ中観説を批判したのに対して、ツォンカパを宗祖とするゲルク派のジャムヤン・ガウエーロドゥは『雷の輪』を、そしてセラ・ジェツンパ/デレクニマは『悪見の闇の除去』を著わして、コラムパによるツォンカパ批判を論駁した。同じくコラムパ批判はデレクニマ作『入中論注』にもみられる。本稿は、『雷の輪』『悪見の闇の除去』の2書を分科、関連文献との対応を整理し、併せてデレクニマ作『入中論注』が『悪見の闇の除去』デレクニマ執筆分に先行する著作であることを論じる。

はじめに

サキヤ派のコラムパ Go rams pa bSod nams señ ge (1429 - 1489) が『見解の弁別 TS』(1468年作) と『入中論注・悪見の除去 TN』においてツォンカパ Tsoñ kha pa Blo bzañ grags pa (1357 - 1419) の中観説を詳しく批判したのに対して¹⁾、ツォンカパを宗祖とするゲルク派の論師たちはコラムパによるツォンカパ中観説批判を論駁する“コラムパ批判書 Go lan”を著わした²⁾。まずコラムパと同年のジャムヤン・ガウエーロドゥ 'Jam dbyaṅs dGa' ba'i blo gros(別名で 'Jam dbyaṅs Legs pa chos 'byor、ガロ dGa' blo と略。1429 - 1503)³⁾ がすでにコラムパ在世中の1477年に『一切の悪見を負処に迫りやる論・雷の輪 GL 』を著わして TSに展開されるツォンカパ批判を論駁した⁴⁾。さらにその後、セラ僧院の大立者セラ・ジェツンパ Se ra rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan (1469 - 1544/46) は、TNに展開されるツォンカパ批判を論駁する『甚深なる空性の見解に関する誤解を否定する論・悪見の闇の除去 SL/GL 』の述作に着手したが、しかしその仕事が彼の死により未完のまま残されたため、彼の直弟子デレクニマ Pañ chen bDe legs ñi ma が師の遺業を継いで GL を完成させた⁵⁾。現存 GL はセラ・ジェツンパとデレクニマの合作である。デレクニマはほかに『入中論注・中観意趣莊嚴宝鬘 bDe dBu』を著わしており、そこでも彼はコラムパ説を批判している。

筆者は既に別稿においてこれらのゲルク派論師による2種のコラムパ批判書 GL /GL を取り上げて、そのテキスト出版や述作の経緯、特徴の一端を報告したが、紙幅の制約のため別稿ではそれらのコラムパ批判書の科文を提示することができなかった⁶⁾。そこで、本稿では GL /GL の梗概を提示、関連文献との対応を整理し、併せて別稿で論じ残したデレクニマの2作品の前後関係の問題を検討しておきたい。

I ガ口作「コラムパ批判書 GL I」の梗概

ガ口は GL においてコラムパの『見解の弁別 TS』を批判対象として取り上げて、その本文を丹念に引用しつつ、コラムパによる批判を再批判する。ここで、GL の内容を分科し、併せて GL 所引の TS を対照表にして示しておく。

下表における科文は、GL のなかに与えられているそれを大枠として採用するが、筆者の判断により設けた細分も加えてある。

下表左側二列に記した GL の G. ed. のフォリオとラインと、C. ed. のページとラインは、TS 本文を前主張として引用している GL の箇所を示す。

右側二列には、その GL における TS 本文引用に対応する TS の T. ed. のフォリオとラインと、S. ed. のページとラインを記す。

なお、下表右側二列において例えば TS 対応箇所を「Cf. 8a³-b¹」と記す場合、それは GL が TS の文言を厳密に引用しているのではないことを示す。その場合には GL の TS への言及に内容的に一致する TS の一節を挙げておいた。また例えば TS 対応箇所を「13a⁶ ~ b¹」と記してあるのは、GL における TS の引用が TS 当該箇所の文言すべての引用ではなくて、途中が一部省略されていることを意味する。

GL	G. ed.	C. ed.	TS T. ed.	S. ed.
序偈・序論(1b ¹ ; 521 ¹)				
1 他説の陳述が巧みでないことを示す (3b ³ ; 523 ¹³)				
1/1 勝義である空性の確立				
1/1/1 否定対象の確認				
3b ⁶		523 ¹⁸⁻¹⁹	4b ⁶	11 ⁴⁻⁶
4b ¹⁻²		524 ¹⁸⁻¹⁹	4b ⁶ - 5a ¹	11 ⁷⁻¹⁰
6a ²		527 ¹⁻³	5a ²⁻³	11 ¹⁵ - 2 ²
6b ⁵		528 ³⁻⁴	5a ³	11 ¹⁷ - 2 ²
6b ⁶ - 7a ¹		528 ⁸⁻⁹	5a ⁴⁻⁵	12 ⁸⁻⁹
1/1/2 空性への執着				
7b ¹		529 ⁴⁻⁶	5a ⁵⁻⁶	12 ¹²⁻¹⁴
1/2 世俗である顕現の確立				
8a ¹⁻²		529 ²³ - 30 ³	5b ⁶ - 6a ¹	14 ⁹⁻¹⁴
1/3 派生する諸問題				
1/3/1 所知障について				
9a ⁵⁻⁶		531 ²³ - 2 ²	6b ²⁻³	16 ¹⁴⁻¹⁷
1/3/2 凡夫における四諦十六行相の証悟				
9b ³		532 ¹¹⁻¹²	7a ⁵	19 ⁴⁻⁷
2 他説批判の陳述が巧みでないことを示す (10a ¹ ; 533 ³)				
2/1 レンダーワ批判の非妥当性を示す				
2/1/1 トウルバパ説をめぐる				
10a ²⁻³		533 ⁷⁻⁹	11a ³ ~ 3a ²	32 ⁷ ~ 8 ¹⁷
10a ⁶ - b ¹		533 ¹⁹⁻²⁰	12a ²	35 ⁸⁻⁹

10b ³	534 ³⁻⁴	Cf . 11b ³⁻⁴	34 ³⁻⁶
10b ⁶	534 ¹²	11a ⁶ - b ¹	33 ⁷
2 / 1 / 2 タクバギエルツェン説をめぐって			
11b ¹⁻³	535 ¹⁰⁻¹⁵	13a ⁶ - b ²	39 ¹⁶ - 40 ¹⁰
11b ⁵	535 ²¹⁻²²	13a ⁶	39 ¹⁷ - 40 ¹
11b ⁶	535 ²³ ~ 6 ¹	13a ⁶ ~ b ¹	40 ²⁻⁵
12a ¹	536 ²⁻³	13b ¹	40 ⁶⁻⁷
12a ⁴⁻⁵	536 ¹²⁻¹⁴	Cf . 8a ³ - b ¹	22 ³ - 3 ⁵
12a ⁶	536 ¹⁷⁻¹⁹	Cf . 13b ¹	40 ⁶⁻⁸
12b ¹⁻²	536 ²² - 7 ¹	Cf . 13a ³⁻⁴	39 ²⁻¹⁰
12b ²⁻³	537 ¹⁻²	13b ¹	40 ⁶⁻⁷
2 / 2 ツォンカパ批判の非妥当性を示す			
2 / 2 / 1 勝義である空性の確立			
2 / 2 / 1 / 1 空性への執着			
13a ³⁻⁴	537 ²¹⁻²³	13b ⁴⁻⁶	41 ⁷⁻¹⁵
2 / 2 / 1 / 2 勝義真実の認識			
13b ⁴⁻⁵	538 ¹⁹⁻²²	14a ²⁻³	42 ⁸⁻¹³
13b ⁶	538 ²² - 9 ¹	Cf . 14a ³⁻⁵	42 ¹⁴ - 3 ⁵
15b ⁵⁻⁶	542 ²⁻⁴	8a ⁵⁻⁶	22 ¹⁵⁻¹⁷
15b ⁶	542 ⁴	Cf . 8b ¹	23 ⁵⁻⁸
2 / 2 / 1 / 3 “ 真実有の否定のみ ” なる空性			
16a ³	542 ¹³	14b ³	44 ⁵⁻⁶
16a ⁴	542 ¹⁷⁻¹⁸	14b ³⁻⁴	44 ⁹⁻¹¹
16a ⁶ - b ¹	542 ²³ - 3 ¹	14b ⁵ ~ 5b ⁴	44 ¹⁷ ~ 8 ¹
2 / 2 / 1 / 4 離戲論をめぐって			
16b ¹	543 ³⁻⁴	15b ⁵⁻⁶	48 ⁹⁻¹¹
16b ²	543 ⁵⁻⁶	Cf . 15b ⁵	48 ⁵⁻⁸

16b ⁵	543 ¹⁴⁻¹⁵	15b ⁶	48 ¹¹⁻¹⁴
17a ¹	543 ²¹⁻²²	16a ³	49 ⁸⁻⁹
17a ⁶ - b ¹	544 ¹³⁻¹⁸	16a ⁴⁻⁶	49 ¹⁴ - 50 ⁵
2/2/1/5 四極端の否定の仕方			
17b ⁴⁻⁵	545 ³⁻⁷	16b ²⁻⁴	50 ¹⁴ - 1 ⁹
18a ³⁻⁵	545 ¹⁷⁻²³	16b ⁴⁻⁶	51 ⁹ - 2 ³
19b ⁴⁻⁵	548 ¹⁻⁵	17a ²⁻³	52 ¹⁰⁻¹⁷
20a ¹⁻³	548 ¹¹⁻¹⁶	17a ³⁻⁶	52 ¹⁷ - 3 ¹¹
2/2/2 世俗である顕現の確立			
2/2/2/1 「言説による確立」の意味			
20b ⁴⁻⁵	549 ¹²⁻¹⁶	Cf. 18a ² - b ⁶	55 ¹⁷ - 8 ¹⁴
2/2/2/2 「消滅は事物」をめぐる			
20b ⁶ - 1a ³	549 ¹⁹ - 50 ⁴	18b ⁶ - 9a ⁴	58 ¹⁵ - 9 ¹⁴
21a ⁶	550 ¹²⁻¹⁴	19a ⁵ ~ b ¹	60 ²⁻¹⁰
22b ¹⁻²	552 ²⁻⁵	19b ¹⁻²	60 ¹³ - 1 ¹
2/2/2/3 人間や餓鬼などの認識の相違			
22b ⁴⁻⁵	552 ¹²⁻¹³	19b ⁵ ~ 20b ⁵	61 ¹² ~ 5 ¹
23b ²⁻³	553 ¹⁶⁻²¹	Cf. 19b ⁶ - 20a ⁴	61 ¹⁷ - 3 ¹
2/2/3 派生する諸問題			
2/2/3/1 二障の確認			
25a ⁶ - b ¹	556 ⁹⁻¹²	20b ⁶ ~ 2b ¹	65 ⁷ ~ 70 ⁸
27a ³	558 ²¹	21a ⁴	66 ⁵⁻⁶
27a ⁵	559 ⁴⁻⁵	22a ⁶ - b ¹	70 ⁶⁻⁸
27b ¹⁻³	559 ¹¹⁻¹⁵	22a ¹⁻³	68 ¹⁴ - 9 ⁶
2/2/3/2 二我の確認			
27b ⁶ - 8a ¹	560 ³⁻⁵	22b ¹⁻²	70 ⁹⁻¹²
2/2/3/3 二乗における断と証			

29b ¹⁻³	562 ⁵⁻¹¹	24a ³ ~ 7a ⁴	76 ⁴ ~ 86 ³
30b ⁴	563 ²¹	25b ³	80 ¹⁷ - 1 ¹
31a ²⁻³	564 ⁸⁻¹¹	26b ³⁻⁵	84 ⁶⁻¹³
31a ³	564 ¹¹⁻¹²	26b ²	84 ¹⁻²
31b ⁵⁻⁶	565 ¹⁰⁻¹³	27a ²⁻³	85 ¹⁰⁻¹⁵
32a ²⁻³	565 ¹⁹⁻²¹	27a ³⁻⁴	85 ¹⁵ - 6 ³
2/2/3/4 『現観莊嚴論』における九地と 九修所断をめぐって			
35b ⁴⁻⁶	570 ¹⁴⁻²⁰	27a ⁶ ~ b ⁶	86 ¹⁵ ~ 8 ⁵
2/2/3/5 凡夫における四諦十六行相の証 悟について			
38a ¹⁻²	573 ¹³⁻¹⁷	28a ²⁻³	88 ¹⁶ - 9 ⁴
2/2/3/6 アーラヤ識の認め方			
39b ²⁻⁴	575 ²⁰ - 6 ²	28b ⁴ ~ 9b ⁴	91 ² ~ 4 ⁶
2/2/3/7 自相成立の意味			
40b ³⁻⁴	577 ⁶⁻⁸	29a ⁶	93 ⁵⁻⁸
2/2/3/8 自立的論証因と自立的主張の 非存在			
41a ¹⁻⁴	577 ¹⁷⁻²³	29b ⁴⁻⁶	94 ⁷ - 5 ³
42b ⁵⁻⁶	580 ¹⁻³	31b ¹⁻²	100 ⁵⁻¹¹
44a ¹⁻³	581 ¹⁷⁻²⁰	32a ²⁻³	102 ⁴⁻¹²
44b ³⁻⁴	582 ¹⁶⁻¹⁷	32b ²	103 ¹⁶ - 4 ¹
45a ¹⁻²	583 ⁴⁻⁷	33a ²⁻³	105 ¹⁰⁻¹⁵
45b ²⁻³	583 ²³ - 4 ²	Cf . 33a ²	105 ¹⁵⁻¹⁷
45b ³⁻⁶	584 ²⁻¹¹	33a ³ - b ¹	105 ¹⁷ - 7 ¹
2/2/3/9 中観兩派の相違			
46b ³⁻⁶	585 ¹³⁻²²	33b ² ~ 4a ⁵	107 ⁷ ~ 9 ¹⁴

2/2/3/10 ツオンカバ説の由来			
$48a^6 - b^1$	$588^{3 \cdot 8}$	$35b^6 \sim 6a^5$	$115^3 \sim 6^5$
3 自説の確立が巧みでないことを示す ($48b^5$; 589^2)			
$48b^6 - 9a^1$	$589^{3 \cdot 5}$	$36b^{1 \cdot 2}$	$116^{17} - 7^4$
3/1 本性が示される器について			
$49b^5 - 50a^3$	$590^{10 \cdot 23}$	$36b^3 \sim 7a^4$	$117^7 \sim 9^9$
3/2 示されるべき本性について			
$51a^6 - b^2$	$592^{17 \cdot 23}$	$37a^5 \sim 8b^2$	$119^{10} \sim 23^{14}$
3/3 慣習的世界の確立の仕方			
$52a^{2 \cdot 3}$	$593^{17 \cdot 21}$	Cf. $38a^{2 \cdot 3}$	$121^{17} - 2^8$
3/4 人間や餓鬼などの認識の相違			
$52b^{3 \cdot 4}$	$594^{14 \cdot 17}$	$38a^6 - b^2$	$123^{6 \cdot 12}$
3/5 類義的勝義と真正な勝義の確立の仕方			
$53a^{4 \cdot 5}$	$595^{12 \cdot 15}$	$38b^2 \sim 40b^2$	$123^{15} \sim 30^5$
$53b^1$	$595^{19 \cdot 21}$	$39a^{1 \cdot 2}$	$124^{17} - 5^4$
$54a^{4 \cdot 5}$	$596^{23} - 7^4$	$39a^{3 \cdot 4}$	$125^{11 \cdot 17}$
$54b^{1 \cdot 2}$	$597^{10 \cdot 14}$	Cf. $39b^{1 \cdot 3}$	$126^{10} - 7^5$
$55a^1$	$598^{2 \cdot 3}$	$43a^3$	$138^{14 \cdot 16}$
$55a^{3 \cdot 4}$	$598^{8 \cdot 13}$	$40b^{3 \cdot 5}$	$130^{9 \cdot 17}$
$55b^{1 \cdot 2}$	$598^{22} - 9^1$	Cf. $42a^5 - b^1$	$135^{16} - 6^8$
4 意味を要約して今後不放逸であるべきこと とを教授す($56b^3$; 600^{15})			
著作記($59b^5$; 604^{18})			
出版記($60a^5 - 61a^2$; 605^9)			

II セラ・ジェツンパ／デレクニマ作「コラムパ批判書 GLII」の梗概

セラ・ジェツンパ／デレクニマは GL においてコラムパの『入中論注・悪見の除去 TÑ』を批判対象として取り上げて、その本文を丹念に引用しつつ、コラムパによる批判に再批判を加える。TÑ 批判はほかにデレクニマ作『入中論注 *bDe dBu*』にも数多くみられる。ここで、GL の内容を分科し、併せて GL および *bDe dBu* 所引の TÑ を対照表にして示しておく。

下表における科文は、GL のなかに科文が与えられていないため、そのほとんどは筆者の判断により設けたものである。

下表左側三列に記した GL の G. ed. / D. ed. / C. ed. のフォリオとライン、ページとラインは TÑ 本文を前主張として引用している GL の箇所を示す。ところで、GL が再批判を加えるコラムパの TÑ には、ツォンカパの『入中論注・密意の解明 GR』本文が批判対象として数多く引用されている⁷⁾。よって GL が TÑ の一節を引用するときそこに自ずと GR 本文が含まれているケースもでてくるが、そのほかに GL が TÑ とは別個に GR 本文を引用してツォンカパ説を紹介する場合もある。後者のケースは“GL における TÑ の引用”に該当しないが、しかしその GL 所引の GR 本文が TÑ にも前主張として見出せるなら、これを出来るだけ取り上げることにして、“GL における TÑ の引用”だけにはこだわらないことにした。

下表中央一列には、TÑ 本文を前主張として引用している *bDe dBu* のフォリオとラインを記し、下表右側一列には、GL および *bDe dBu* における TÑ 本文引用に対応する TÑ のフォリオとライン又は GR のページとラインを記しておいた。

なお、下表において記号をいくつか用いた。例えば、

GL	G. ed.	<i>bDe dBu</i>	TÑ/GR
1 : 144b ²⁻⁶		19b ⁷ - 20a ³	4a ⁴ - b ² (GR 5 ¹⁹ - 6 ²)

2 : 147a ³⁻⁶	Cf 20b ⁴⁻⁶	Cf 4b ⁴ - 5a ¹ GR 6 ¹⁶ - 7 ⁵
3 : 149b ⁶ - 50b ²	22a ² - b ²	7b ⁶ - 8b ¹ = GR 15 ⁶ - 6 ⁹

とあるうち第1の例は、GL *G. ed.*, fol. 144b²⁻⁶/ *bDe dBu*, fols. 19b⁷-20a³にTN, fol. 4a⁴-b²が引用されており、しかもそのTNの一節のなかに、GR, pp. 5¹⁹-6²が含まれていることを意味する。

第2の例は、GL *G. ed.*, fol. 147a³⁻⁶における引用文が、正確にはないが、ほぼ言葉の上で又は内容的に *bDe dBu*, fol. 20b⁴⁻⁶/ TN, fols. 4b⁴-5a¹に一致し、そしてそのTNの一節全体がほぼ言葉の上で又は内容的にGR, pp. 6¹⁶-7⁵に一致することを意味する。

最後の第3の例は、GL *G. ed.*, fols. 149b⁶-150b²/ *bDe dBu*, fol. 22a²-b²にGR, pp. 15⁶-16⁹が引用されており、しかもそのGRの一節がそのままTN, fols. 7b⁶-8b¹にも見出せることを意味する。

ほかに下表について注意すべき点をあげるなら、「第六発心 2 / 1 自立派の否定対象」において「GL *G. ed.* 欠」とあるのは、筆者の披見した東北大学所蔵 *G. ed.* に fol. 175 が欠落していることによる。同じく「第六発心 8 『入中論』 6 34 の前主張者について / 9 自空の意味」において「GL *C. ed.* 欠」とあるのは *C. ed.* 当該箇所にて脱文があることによる。GL *C. ed.* が脱文、余文の多く認められる杜撰な刊本であることは、すでに指摘しておいた⁸⁾。

また下表の末尾に、「第3：上の論述の意味を要約し今後不放逸であるべきことを教授する」とあるうち「第3 gsum pa」というのは、もともとセラ・ジェツンパが『悪見の闇の除去 SL/ GL 』を述作するにあたって論全体を、

1 : Chen po Śāk mchog pa'i rtsod lan bśad pa

2 : Go bo rab 'byams pa'i rtsod lan bśad pa

3 : de dag gi don bsdus te phyin chad bag yod par gdams pa

と分科しており、弟子のデレクニマもその師の構想を承けているからである。

GL	G. ed.	D. ed.	C. ed.	<i>bDe dBu</i>	TÑ/ GR
* セラ・ジェツンバ執筆分					
序偈・序論(144a ¹ ; 3 ¹ ; 385 ³)					
第一発心(144b ² ; 5 ¹¹ ; 386 ¹)				(8b ⁴)	(3a ² ; GR 4 ¹⁹)
1 声聞 srāvaka の語義					
144b ²⁻⁶	6 ² - 7 ⁶	386 ⁴⁻¹²		19b ⁷ - 20a ³	4a ⁴ - b ⁷ (GR 5 ¹⁹ - 6 ²)
145a ³	8 ⁹⁻¹¹	386 ²¹⁻²²		20a ⁷	4b ²
2 ツォンカバ讚(146a ² ; 12 ¹⁴ ; 388 ⁴)					
3 独覚 pratyekabuddha の語義					
147a ³⁻⁶	18 ² - 19 ⁴	389 ¹⁷ - 90 ²		Cf 20b ⁴⁻⁶	Cf .4b ⁴ - 5a ¹ GR 6 ¹⁶ - 7 ⁵
147a ⁶ - b ⁵	19 ⁵ - 21 ¹	390 ²⁻¹⁵		20b ⁶ - 1a ³	5a ¹⁻⁵
148a ¹⁻²	22 ¹⁻⁵	390 ²³ - 1 ¹		21a ⁴	Cf 4b ⁴
4 仏は菩薩より生まれる					
149b ²⁻³	29 ⁵⁻¹⁰	393 ⁵⁻⁷		21b ⁶	Cf 5b ⁴
5 菩薩の三因					
149b ⁶ - 50b ² 30 ¹³ - 4 ⁴		393 ¹⁵ - 4 ¹⁵		22a ² - b ²	7b ⁶ - 8b ¹ =GR 15 ⁶ - 6 ⁹
				22b ²⁻³	8b ¹⁻²
150b ²⁻⁶	34 ⁵ - 5 ¹⁴	394 ¹⁶ - 5 ³		22b ³⁻⁶	8b ²⁻⁶
				22b ⁶ - 3a ³	8b ⁶ - 9a ⁴
				23a ³⁻⁵	9a ⁴⁻⁶
151b ⁵⁻⁶	40 ⁸⁻¹²	396 ¹¹⁻¹³		24b ¹⁻²	6a ⁵⁻⁶
152a ⁴ - b ³	42 ⁵ - 5 ¹	396 ²³ - 7 ¹⁷		Cf 24a ²⁻⁵	7a ³ - b ³
153a ³⁻⁴	47 ⁵⁻⁹	398 ⁸⁻¹⁰		24b ⁴⁻⁵	7b ¹⁻²
153b ⁴⁻⁵	50 ⁵⁻¹²	399 ⁴⁻⁷		24b ⁵⁻⁶	7b ²⁻³
154a ⁴ - b ²	53 ¹ - 4 ⁹	399 ²¹ - 400 ⁸			Cf .6b ² - 7a ²

155b ⁶ - 6a ¹ 61 ⁷ - 2 ¹	402 ⁸⁻¹²		9b ⁵⁻⁶
156a ⁴⁻⁵ 63 ¹⁻⁷	402 ¹⁸⁻²¹		9b ⁶ - 10a ²
6 三因のうち特に悲について			
156b ¹⁻⁴ 64 ⁴ - 5 ⁶	403 ³⁻¹¹		10a ³⁻⁶
156b ⁵⁻⁶ 66 ¹⁻⁵	403 ¹⁵⁻¹⁷	32a ¹	11b ²⁻³ (GR 20 ⁵⁻⁶)
156b ⁶ - 7a ³ 66 ⁵ - 7 ⁹	403 ¹⁷ - 4 ²	Cf 32b ²⁻³	11b ⁵ - 2a ²
		32a ²⁻⁵	10b ² - 11a ¹
158a ⁵ - b ² 73 ³ - 4 ⁷	405 ¹⁴⁻²³	32a ⁵ - b ²	12a ⁴ - b ¹
7 地に住する菩薩について			
159a ³⁻⁴ 77 ⁸⁻¹²	406 ²⁰⁻²²	Cf 57b ⁴⁻⁵	Cf .14a ¹
		57b ⁶	Cf .14a ²⁻³
159a ⁶ 78 ⁹⁻¹¹	407 ⁴⁻⁵	Cf 58a ¹⁻³	Cf .14b ²⁻⁵ (Cf .GR
			41 ²⁻⁶)
159a ⁶ - b ¹ 78 ¹³ - 9 ⁴	407 ⁶⁻⁸	Cf 57b ⁷ - 8a ¹	Cf .14a ⁴ - b ²
8 第七地の菩薩は知力の点で声聞・独覺を凌駕することについて			
		60a ³⁻⁴	Cf .15b ³
		60a ⁶⁻⁷	15b ⁵⁻⁶
		60b ¹⁻²	Cf .16a ¹⁻⁴
160a ⁴⁻⁶ 82 ¹⁰ - 3 ⁴	408 ¹⁰⁻¹⁴	Cf 60b ⁴⁻⁵	18a ⁶ - b ¹ (GR 44 ¹³⁻¹⁴ ,
			45 ¹⁹⁻²⁰)
160a ⁶ - b ¹ 83 ⁶⁻¹⁰	408 ¹⁵⁻¹⁷	Cf 60b ⁵⁻⁶	18b ¹⁻²
8/1 『十地經』経文解釈			
161a ¹⁻² 86 ¹⁻⁸	409 ¹¹⁻¹⁵		15a ⁶ - b ²
8/2 『現觀莊嚴論』の解釈と評価			
161b ⁶ - 2a ¹ 90 ⁵⁻¹²	410 ⁸⁻²²		17b ³⁻⁴
162a ³⁻⁴ 91 ⁷⁻¹²	411 ⁴⁻⁶	61a ⁴⁻⁵	18b ²⁻³ = GR 45 ⁷⁻⁹

162a ⁴⁻⁶	91 ¹³ - 2 ⁹	411 ⁷⁻¹²	Cf 61a ⁵⁻⁶	18b ³⁻⁵
162b ²⁻⁴	93 ⁸ - 4 ⁵	411 ¹⁹ - 2 ¹		Cf .TS , T .ed .27a ₆
				- b ⁴ ,S ed 86 ¹⁵ - 7 ¹⁵
*デレクニマ執筆分				
序偈・序論 (163b ¹ ; 97 ¹³ ; 413 ⁴)				
8/3 “空性の三昧”への入出定の難易				
164a ³⁻⁶	100 ³ - 1 ⁵	413 ²³ - 4 ⁹	Cf 61b ³⁻⁵	18b ⁵ - 9a ² (GR 46 ¹⁻⁷)
164b ³⁻⁴	102 ⁸⁻¹¹	414 ¹⁹⁻²⁰		19a ³ ~ 20b ⁴
9 凡夫における四諦十六行相の証悟				
164b ⁵	102 ¹⁵	414 ²²⁻²³	61b ⁷	20b ⁴ = GR 48 ¹⁶
164b ⁵ - 5a ⁴	103 ² - 4 ¹¹	414 ²³ - 5 ¹⁴	Cf 61b ⁷ - 2a ¹	21a ⁶ - b ⁵
165a ⁴⁻⁵	104 ¹²⁻¹⁴	415 ¹⁵⁻¹⁶	61b ⁷	20b ⁴ = GR 48 ¹⁶⁻¹⁷
165a ⁶	105 ⁵⁻⁷	415 ²⁰⁻²¹		20b ⁵ = GR 48 ¹⁸⁻¹⁹
165a ⁶ - b ¹	105 ⁸⁻¹⁰	415 ²¹⁻²²		21a ⁴⁻⁵ = GR 50 ⁹⁻¹⁰
165b ¹⁻²	105 ¹²⁻¹⁴	415 ²³ - 6 ²		21b ⁶
9/1 アビダルマと帰謬派における煩惱と人 無我の異同				
165b ³ - 6b ⁴	106 ⁵ - 10 ¹³	416 ⁵ - 7 ²⁰	Cf 63b ³⁻⁴	22a ⁴ - 3b ¹ (Cf .GR
				50 ⁴⁻⁷ 53 ⁶⁻⁸)
166b ⁵⁻⁶	111 ³⁻⁶	417 ²² - 8 ¹		22a ⁴⁻⁵
167b ⁴⁻⁵	114 ¹⁵ - 5 ⁶	419 ⁶⁻⁹		22a ⁵⁻⁶
168a ²⁻³	116 ⁸⁻¹⁴	419 ¹⁸⁻²¹		22b ²⁻³
168a ⁵	117 ⁹⁻¹⁰	420 ²⁻³		22b ⁴
9/2 『入菩提行論』の一節の解釈				
168a ⁵⁻⁶	117 ¹² - 8 ²	420 ⁴⁻⁶		22b ⁵⁻⁶
168b ³	119 ⁴⁻⁵	420 ¹⁴		23a ¹
168b ⁴⁻⁶	119 ¹¹ - 20 ⁵	420 ¹⁷⁻²²		23a ³⁻⁵

169a ⁴	121 ¹²⁻¹³	421 ⁹⁻¹⁰		23a ⁶ - b ¹
10 大乘と小乗の利根と鈍根				
169a ⁴ - b ⁶	122 ² - 5 ²	421 ¹¹ - 2 ¹⁰	Cf .68a ² - b ³	23b ¹ - 4a ⁷ (GR 68 ³⁻⁹)
170b ⁴⁻⁵	128 ¹⁵ - 9 ⁶	423 ¹⁶⁻¹⁹		23b ⁶ - 4a ²
11 人の施設の仕方				
171a ²⁻³	130 ⁹⁻¹³	424 ⁵⁻⁷	62a ³⁻⁴	19a ⁵⁻⁶ = GR 47 ¹²⁻¹⁴
171a ³ - b ²	130 ¹⁴ - 2 ¹⁵	424 ⁸ - 5 ¹	62a ⁴ - b ²	19b ¹ - 20a ⁴
172a ³⁻⁴	135 ¹⁻⁸	425 ¹⁶⁻²⁰	63a ¹⁻²	20a ⁴⁻⁵
12 アビダルマと帰謬派における煩悩				
172b ⁶	138 ⁵⁻¹⁰	426 ¹⁸⁻²⁰	63b ³	22b ⁴⁻⁵
13 小乗における二障の断不断と『現觀莊嚴論』の解釈				
173a ²⁻⁴	139 ³ - 40 ⁴	427 ¹⁻⁸		Cf 24a ³⁻⁶ GR 68 ¹³ ~ 9 ¹⁰
173a ⁵	140 ⁵⁻⁷	427 ⁸⁻¹⁰		24b ²
第二・第三発心(173b ³ ; 141 ¹³ ; 427 ²⁰)			(68b ⁶)	(27b ³ ; GR 82 ¹⁰)
第四発心(173b ³ ; 142 ² ; 427 ²¹)			(77b ¹)	(31b ⁵ ; GR 108 ¹⁹)
173b ³⁻⁵	142 ³⁻¹³	427 ²² - 8 ⁴		32a ¹⁻³ (GR 111 ⁶⁻⁸)
173b ⁵⁻⁶	142 ¹⁴ - 3 ³	428 ⁴⁻⁶		31b ⁶ - 2a ¹
第五発心(174a ³ ; 144 ⁶ ; 428 ¹⁴)			(77b ⁴)	(32a ³ ; GR 111 ¹⁰)
第六発心(174a ³ ; 144 ⁹ ; 428 ¹⁵)			(78a ¹)	(32b ³ ; GR 114 ¹¹)
1 三乗によって証悟される空性				
174a ⁴⁻⁶	144 ¹⁰ - 5 ⁷	428 ¹⁶⁻²²		35b ⁶ - 6a ²
2 否定対象の確認				
2/1 自立派の否定対象				
174b ^b - 欠	148 ³⁻⁷	429 ²¹⁻²³	Cf .104a ¹⁻³	Cf 37a ¹⁻³ = GR 134 ⁵⁻¹²
欠	148 ⁹ - 9 ³	430 ¹⁻⁵	103b ⁷ - 4a ¹	38a ⁴⁻⁶

欠	$149^{12} - 50^{10}$	430^{10-16}	$104a^{4-6}$	$38a^6 - b^3$ (Cf. GR 135 ⁸⁻¹³)
欠	$151^5 - 2^3$	$430^{20} - 1^4$	$104a^7 - b^2$	Cf. $37a^4 - b^1 = \text{GR } 135^{8-18}$
欠	152^{3-6}	431^{4-5}	$104b^{2-3}$	$38b^{2-3}$
欠 - $176a^1$	$152^{10} - 3^2$	431^{7-10}	$104b^4$	$38b^{3-4}$
$176a^{3-4}$	$153^{13} - 4^7$	431^{15-20}	$104b^{6-7}$	$38b^{4-6}$
$176a^5$	154^{8-13}	431^{20-23}	$105a^1$	$37a^{5-6} = \text{GR } 135^{13-15}$
2/2 帰謬派の否定対象				
$176b^{3-5}$	156^{5-14}	432^{11-15}	$105a^{5-6}$	$39a^{1-3}$
$176b^{5-6}$	$156^{14} - 7^5$	432^{15-17}	$105a^{6-7}$	$39a^{3-4}$
$177a^5$	159^{6-9}	433^{9-10}	$105b^3$	Cf. $39a^{3-4}$
2/3 四極端を否定する離戯論の問題点				
$178a^{2-3}$	162^{7-12}	434^{10-13}		$39a^{5-6} = \text{GR } 144^{14-17}$
$178a^{4-6}$	163^{5-13}	434^{16-21}		$39b^5 - 40a^1$
$179a^1$	166^{7-8}	435^{16-17}	Cf. $106a^4$	$40a^1$
3 自立派と帰謬派の区分				
3/1 勝義を論証する正埋の立て方				
$185a^{3-5}$	$196^{14} - 7^8$	444^{15-19}	$106a^{6-7}$	$40a^{4-5}$
$186a^5 - b^1$	$202^{13} - 3^{10}$	446^{8-12}		$40a^5 - b^1$
$186b^6 - 7a^2$	$206^1 - 7^2$	447^{5-11}		$41a^5 - b^1$
$188a^{3-4}$	213^{2-6}	449^{1-3}		$41b^{2-3}$
3/2 世俗の確立の仕方				
$188a^5 - b^3$	$214^1 - 5^{12}$	449^{6-18}	$107a^{3-6}$	$41b^3 - 2a^2$
$190a^{5-6}$	224^{2-7}	452^{3-5}		$46a^{4-5}$
3/3 自立的論証の不合理性				
$190a^6 - b^4$	$224^8 - 6^1$	452^{6-16}	Cf. $108a^{5-7}$	$42a^{2-6}$
3/4 主張の非存在について				
$191b^{2-4}$	$230^6 - 1^6$	$453^{22} - 4^6$		$43b^5 - 4a^2$

192a ²⁻³	232 ¹³ - 3 ⁶	454 ¹⁶⁻¹⁹		44a ³⁻⁴
4 二真実				
4/1 世俗と勝義の二つの本質の存在				
192a ⁵	233 ¹³ - 4 ²	454 ²² - 5 ¹		47a ⁵⁻⁶ = GR 173 ¹⁷⁻¹⁹
192a ⁵⁻⁶	234 ³⁻⁶	455 ²⁻³	138a ²⁻³ = 106b ⁵	47b ³
192b ¹	234 ¹² - 5 ²	455 ⁶⁻⁸	138a ⁴ = 106b ⁶⁻⁷	47a ³⁻⁴
192b ⁴	235 ¹⁴ - 6 ⁴	455 ¹⁴⁻¹⁶	138a ⁵ = 106b ⁷ -	47b ⁵
			7a ¹	
192b ⁶	236 ¹³ - 7 ³	455 ²⁰⁻²²	138a ⁷	47b ⁶ - 8a ¹
4/2 世俗真実の区分				
193a ²⁻⁴	237 ¹¹ - 8 ⁶	456 ³⁻⁸		48b ³⁻⁵ (Cf. GR 182 ¹⁵⁻²⁰)
193a ⁵ - b ³	239 ¹ - 40 ⁵	456 ¹²⁻²²	139a ¹⁻⁴	49a ⁶ ~ b ⁵
194a ⁶	243 ¹²⁻¹³	458 ²⁻³	139b ⁴	50a ⁴ GR 183 ¹⁶⁻¹⁷
194b ¹	243 ¹⁴ - 4 ¹	458 ³⁻⁴	139b ⁴	50a ⁵
5 第八地における煩惱障の断について				
194b ²⁻⁵	244 ¹⁰ - 5 ⁸	458 ⁹⁻¹⁶	138b ²⁻⁵	51a ⁵ - b ¹ (Cf. GR 189 ¹⁻⁷)
195a ²⁻³	246 ¹⁰⁻¹²	459 ²⁻³		51b ¹
6 慣習的立場での“非有・非無”について				
195a ⁵ - b ²	247 ⁹ - 8 ⁸	459 ⁹⁻¹⁷	139b ⁶ - 40a ²	53a ²⁻⁴
195b ⁶ - 6a ¹	249 ¹⁴ - 50 ²	460 ⁵⁻⁶	140a ⁵	52b ⁶ - 3a ¹
7 自性・自相の二義性				
196a ⁵ - b ¹	251 ¹¹ - 2 ⁵	460 ¹⁹⁻²³	152a ⁶⁻⁷	54a ⁵ - b ¹
198b ¹⁻²	260 ¹² - 1 ²	463 ²²⁻²³	152b ²⁻³	46b ⁶ ~ 7a ¹
198b ²⁻³	261 ³⁻⁶	464 ¹⁻³	152b ⁴	47a ³⁻⁴
8 『入中論』6 34の前主張者について				
198b ⁴⁻⁵	261 ⁹ - 2 ¹	464 ⁵⁻⁸	152a ³⁻⁴	54a ³⁻⁴
199a ¹⁻²	262 ¹¹⁻¹⁴	欠		54a ⁴

9 自空の意味				
199a ³	263 ⁵⁻⁷	欠	152b ⁶	Cf 54b ⁵⁻⁶ GR 213 ¹¹⁻¹⁶
199a ³⁻⁴	263 ⁸⁻¹⁰	464 ¹⁶⁻¹⁷	Cf .152b ⁶⁻⁷	54b ⁶
10 業果の関係について				
199a ⁵ - b ¹	264 ²⁻¹²	464 ²¹ - 5 ⁴	153a ¹⁻³	56b ⁴⁻⁶
11 「消滅は事物」をめぐって				
199b ⁴⁻⁵	265 ¹³ - 6 ³	465 ¹²⁻¹⁴	153a ⁵⁻⁶	57b ¹⁻² = GR 231 ¹⁶⁻¹⁹
199b ⁵⁻⁶	266 ⁴⁻⁹	465 ¹⁵⁻¹⁸	153a ⁶⁻⁷	58b ⁴⁻⁵
200a ³⁻⁴	267 ⁸⁻¹⁰	466 ³⁻⁴	153b ²	58b ⁵⁻⁶
200a ⁵⁻⁶	267 ¹⁴ - 8 ⁷	466 ⁷⁻¹¹	153b ³⁻⁵	58b ⁶ - 9a ¹
200b ²⁻³	269 ¹⁻⁹	466 ¹⁵⁻²⁰	153b ⁶⁻⁷	59a ²⁻³
201a ¹⁻³	271 ¹⁻⁷	467 ⁸⁻¹¹	154a ⁴⁻⁵	59a ⁴⁻⁵
201b ²⁻³	273 ⁹⁻¹¹	468 ³⁻⁵	154a ⁷	59b ²⁻³
201b ⁴⁻⁵	274 ²⁻⁷	468 ⁷⁻¹⁰	154b ¹⁻²	59b ⁶ - 60a ¹
202a ² - 3a ⁶	275 ⁷ - 81 ¹³	468 ¹⁸ - 70 ¹⁶		60a ⁶ - 1b ⁵
203a ⁶	281 ¹⁴	470 ¹⁷		58b ⁴
203b ⁴	283 ⁷⁻¹⁰	471 ³⁻⁵		60b ³
203b ⁵⁻⁶	284 ²⁻⁴	471 ⁷⁻⁸		60b ³⁻⁴
204b ⁶ - 5a ¹	289 ²⁻³	472 ¹⁸⁻¹⁹		58b ⁴
205a ¹⁻³	289 ³⁻¹⁴	472 ¹⁹ - 3 ²		61b ⁵ - 2a ² (GR 217 ⁸⁻¹⁰)
205b ¹⁻²	291 ¹¹⁻¹²	473 ¹⁴⁻¹⁵		58b ⁴
205b ²⁻³	291 ¹³ - 2 ⁶	473 ¹⁵⁻¹⁹		Cf .62a ²⁻⁴
12 アーヤ識をめぐって				
206a ²⁻³	294 ⁵⁻⁹	474 ¹¹⁻¹³		64a ⁶ - b ¹
206a ⁵ - b ¹	295 ²⁻¹³	474 ¹⁶⁻²²		65a ¹⁻³ GR 245 ²⁻¹⁰
206b ¹⁻²	295 ¹⁴ - 6 ⁶	474 ²³ - 5 ³		65a ³⁻⁴
207a ⁴⁻⁵	299 ³⁻⁷	476 ¹⁻³		Cf .62b ⁶ - 3a ⁴

207a ⁶ - b ¹	299 ¹⁴ - 300 ⁵	476 ⁷⁻¹⁰		63b ⁵⁻⁶
207b ³⁻⁴	301 ²⁻⁵	476 ¹⁶⁻¹⁷		66b ²⁻³
207b ⁴ - 8a ³	301 ⁶ - 3 ²	476 ¹⁸ - 7 ⁷		64a ¹⁻⁶
13 声聞蔵における法無我の説示				
208b ²⁻⁴	305 ⁴⁻¹³	477 ²³ - 8 ⁴		66a ⁵ - b(GR 247 ¹⁹ - 8 ²)
14 夢の知をめぐって				
209a ³⁻⁵	307 ¹⁰ - 8 ⁸	478 ¹⁸ - 9 ¹	158b ⁵⁻⁷	68a ⁵ - b ²
209b ¹	309 ³⁻⁵	479 ⁵⁻⁶	159a ²	68b ¹⁻²
209b ³⁻⁴	310 ¹⁻⁶	479 ¹²⁻¹⁴	159a ³⁻⁴	69b ³⁻⁴
209b ⁵ - 10a ⁵	310 ¹² - 2 ¹³	479 ¹⁷ - 80 ⁹		68b ³ - 9a(Cf .GR 258 ¹⁸ - 9 ¹²)
15 人間や餓鬼などの認識の相違				
210b ⁶ - 1a ¹	315 ¹¹⁻¹³	481 ⁶⁻⁷	159a ⁵	Cf .71b ²⁻³
211a ¹⁻³	315 ¹⁴ - 6 ¹⁰	481 ⁷⁻¹²	159a ⁵⁻⁷	72a ³⁻⁵
211a ³⁻⁴	316 ¹³ - 7 ¹	481 ¹⁴⁻¹⁵	159a ⁷ - b ¹	72a ²
211a ⁶ - b ¹	318 ¹⁻⁶	481 ²² - 2 ¹	159b ³⁻⁴	74a ²⁻³
211b ² - 2b ⁶	318 ¹⁰ - 25 ¹	482 ³ - 4 ²	159b ⁵ - 60b ⁴	74a ³ - 5b ²
16 自証をめぐって				
216a ¹ - b ²	339 ¹² - 42 ⁸	488 ¹¹ - 9 ⁶		77b ⁶ - 8b ¹
17 唯識説における色等の承認について				
219a ⁴⁻⁵	354 ¹³ - 5 ⁴	492 ²¹⁻²³		80a ⁴⁻⁵ (Cf .GR 319 ³⁻⁴)
18 人無我をめぐって				
219b ¹	356 ¹⁻³	493 ⁶⁻⁷		Cf .86b ³⁻⁶ =GR 367 ¹⁵ - 8 ⁴
219b ¹⁻²	356 ⁴⁻⁷	493 ⁷⁻⁸		87a ³⁻⁴
219b ⁴⁻⁵	357 ⁹⁻¹⁴	493 ¹⁵⁻¹⁸		88a ⁵⁻⁶
220a ¹⁻²	358 ¹¹⁻¹³	493 ²³ - 4 ¹		90a ³⁻⁴ (Cf .GR 387 ¹²⁻¹⁶)
220a ²⁻³	358 ¹⁴ - 9 ⁵	494 ²⁻⁴		90a ⁵⁻⁶

220b ⁴⁻⁵	362 ⁵⁻⁹	495 ¹⁻⁴		90b ⁴⁻⁵ (GR 388 ⁹)
19 声聞と独覺における法無我の修習				
221a ⁴ - b ¹	364 ⁷ - 5 ⁷	495 ¹⁵⁻²³		98a ⁵ - b (GR 420 ³⁻¹⁰)
第八発心(222a ⁶ ; 369 ¹² ; 497 ⁷)			(181a ⁵)	(101a ⁸)
1 第八地における福資糧積集の必要性				
222a ⁶ - b ¹	369 ¹² - 70 ⁴	497 ⁷⁻¹⁰		Cf .103a ³⁻⁴ = GR 446 ⁵⁻¹¹
222b ¹⁻³	370 ⁵ - 1 ⁴	497 ¹⁰⁻¹⁶		103a ⁵ - b ¹
2 第八地以上における出生				
223a ⁵⁻⁶	374 ⁷⁻¹¹	498 ¹⁴⁻¹⁶		104b ⁵⁻⁶
仏地(223b ⁵ ; 377 ² ; 499 ⁹)			(182b ⁵)	(106a ⁴)
1 “ あるがままのものの認識 ” と “ あるかぎり のものの認識 ” をめぐって				
223b ⁶	377 ⁴⁻⁸	499 ¹⁰⁻¹²		106a ⁴⁻⁵
224a ¹ - b ³	377 ⁹ - 80 ¹²	499 ¹² - 500 ¹²	Cf .185a ³⁻⁴	107a ⁶ - 8a ² = GR 458 ¹³ ~ 60 ⁶
224b ³ - 5b ³	380 ¹⁴ - 5 ⁸	500 ¹³ - 1 ²¹	Cf .185a ⁴⁻⁶	108a ² - 9a ¹
225b ⁴⁻⁵	385 ⁹⁻¹⁵	501 ²² - 2 ²		108a ³
225b ⁶ - 6a ¹	386 ⁶⁻¹²	502 ⁵⁻⁸		108a ⁵⁻⁶
226a ³⁻⁴	387 ⁵⁻⁸	502 ¹³⁻¹⁴		108a ⁶
226a ⁶ - b ¹	388 ⁵⁻¹⁰	502 ²¹⁻²³		108b ²⁻³
226b ²⁻⁴	388 ¹⁶ - 9 ⁷	503 ³⁻⁷		108b ⁴⁻⁵
226b ⁶ - 7a ¹	390 ⁴⁻⁷	503 ¹³⁻¹⁵		Cf .108b ⁵⁻⁶
227a ¹⁻²	390 ⁸⁻¹⁴	503 ¹⁵⁻¹⁸		108b ⁶ - 9a ¹
227a ⁴⁻⁵	391 ¹¹⁻¹⁵	504 ²⁻³		Cf .110a ¹⁻³
227a ⁵ - b ⁴	391 ¹⁵ - 3 ¹⁰	504 ³⁻¹⁶	Cf .185b ¹⁻²	110a ³ - b ³
228a ²	395 ¹⁻³	505 ⁴⁻⁵		109b ⁶
228a ⁶ - b ¹	396 ¹²⁻¹⁴	505 ¹⁸⁻¹⁹		110a ³⁻⁵
229a ¹⁻²	398 ¹⁶ - 9 ⁴	506 ¹³⁻¹⁴		110a ⁶

230a ²⁻³	403 ⁷⁻¹⁴	508 ¹⁻⁴		110b ¹⁻³
230a ⁵⁻⁶	404 ⁹⁻¹³	508 ⁹⁻¹¹		11b ⁵⁻⁶
230b ⁵	406 ⁸⁻¹⁰	509 ¹⁻²		Cf .107a ¹⁻²
2 等流身について			185b ⁶	110b ⁵
3 仏地における心・心所の有無				113a ⁵⁻⁶
231a ⁴	407 ¹⁶⁻⁸	509 ¹³⁻¹⁵		116a ⁵ ~ b ¹
4 正覚の時間：『入中論』12-39の解釈				117a ²⁻³ = GR 479 ¹³⁻¹⁵
232b ⁴ - 3a ¹	414 ⁷⁻⁵	511 ¹⁷⁻²³		117b ¹⁻²
233a ¹⁻²	415 ⁵⁻⁹	512 ¹⁻³		116a ⁴⁻⁵
233a ²⁻³	415 ¹⁰⁻⁶	512 ³⁻⁷		116b ²⁻³
233b ²	417 ⁸⁻¹⁰	512 ¹⁹⁻²⁰		116b ⁵
233b ²⁻³	417 ¹¹⁻¹⁴	512 ²¹⁻²²		116b ⁵
233b ⁴	418 ¹⁻²	513 ¹⁻²		
233b ⁴⁻⁵	418 ⁵⁻⁷	513 ³⁻⁴		
論結：チャンドラキールティ説の独自性				
234a ²⁻³	419 ⁸⁻¹¹	513 ¹³⁻¹⁵		Cf .118b ⁶ - 9a ¹ = GR
				482 ⁶⁻⁹
234a ³⁻⁴	419 ¹²⁻¹⁵	513 ¹⁵⁻¹⁷		119a ³⁻⁴
第3: 上の論述の意味を要約し今後不放逸であ るべきことを教授する(234b ¹ ; 420 ¹³ ; 514 ⁴)				
著作記(236a ³ ; 427 ³ ; 516 ⁸)				
出版記(236b ² - 237a ⁵ ; 428 ¹³ - 432 ¹⁷ ; 516 ¹⁹ - 518 ¹⁰)				

Ⅲ デレクニマの2作品の前後関係について

デレクニマの詳しい伝記は不明だが、彼の略伝は『布達拉宮典籍目録 SBKC』『雪域歴代名人辞典 *Min mdzod*』から知られる。それらによると、彼は16世紀中頃の生まれで、はじめタシルンポで学習したが、その後ウ dBu 地方にいたりセラ・ジェツンパのもとで般若やプラマーナなどの学習を深めた。セラ・チェー学堂のラマにもなり、その名声は広まった。ドライラマ3世・ソナムギャムツォ bSod nams rgya mtsho (1543 - 1588) によってセラ僧院の座主になるように勧められたが、彼は目が見えないと言って辞退したという。彼の著作として、『律概論 '*Dul ba'i spyi don*』『俱舍論概論 *mDzod kyi spyi don*』『般若概論 *Phar phyin spyi don*』『セラ・ジェツンパ伝 *rJe btsun rnam thar* 』等があるという⁹⁾。

上の伝のうちデレクニマがセラ・ジェツンパの直弟子であることは、彼の作になる『セラ・ジェツンパ伝』著作記 mdzad byañ や、ヤブジェ・ケルデンギャムツォ作『セラ・ジェツンパ伝』の記述からも確かめられる¹⁰⁾。また彼の著わした作品として SBKC ,No.00566 には1帙2作品(『律注』『セラ・ジェツンパ伝』)が挙げられているだけだが、東北大学には伝のいう『律注』¹¹⁾のほかに、『未了義了義の弁別の注』¹²⁾そしてここで取り上げる『入中論注 *bDe dBu*』の3作品が所蔵されている。これらの3作のうち特に『律注』はセラ・チェー学堂の律学の教科書 *yig cha* として重視された¹³⁾。

さて、前節に示した対照表からわかるように、デレクニマの *bDe dBu* に前主張として引用される TN 本文のほとんどが GL にも見出される。これらの *bDe dBu* と GL デレクニマ執筆分の前後関係に関して、筆者は別稿において、「デレクニマは師セラ・ジェツンパの“Go lan”を参照しつつ *bDe dBu* を著わしたのち、他からの勧めもあり、師の未完の“Go lan”を完成させた」と推定したが¹⁴⁾、そこではそのための論証を割愛せ

ざるをえなかったので、ここでその論拠をいくつか挙げておくことにしたい。

そもそも GL デレクニマ執筆分と *bDe dBu* の著作記に著作年が記されていたり又は 2 書のどちらか一方がもう一方に言及しているなら何ら問題は生じないが、残念ながら今の場合はそのような決定的な記述を見出すことは出来ない。そこで、2 書の行論、表現の仕方を手掛かりとして検討してみよう。

まず、デレクニマ作 *bDe dBu*, fol. 103b6 以下にみられる一連のコラムパ批判の最後は、

コウォ・ラブジャムパの『中観難語釈』[= *TÑ*] として有名なこの[書物] に対しては、文献と正理による無量の排撃が述べられるべきである。[しかしここでそれを述べる] 必要性は大してないし、大略のみを述べることで十分であるから、以上のことの他に詳述しなかった¹⁵⁾。

と、締め括られている。前掲対照表にあるように、しかしこの「ツォンカパを尊敬していないある人 *rJe rin po che la ma gus pa kha cig* は……」で始まる *bDe dBu* fols.103b-108b における一連のコラムパ批判では、「2 否定対象の確認」や「3 帰謬派と自立派の区分」等のゲルク派の中観説において急所ともいうべき極めて重要なトピックが扱われており、それはとても「排撃の必要性が大してない問題」とは思えない。実際 GL ではこれらの問題についてより詳しい論述がなされているのだ。したがって、もしもデレクニマが *bDe dBu* に先行して GL を完成させていたなら、この一連の批判の末尾は、「以上のことの他に詳述しなかった」ではなくて、「詳しくは“*Go lan*”で説明した」などという具合にすでに完成している GL への参照を促しておくのが自然と思われる。

また GL と *bDe dBu* が *TÑ* の本文を前主張として引用する場合の表現の仕方も参考になる。

現存 GL のうちセラ・ジェツンパ執筆分は、G. ed., fols. 144a1-163b1,

D. ed., pp. 3-97, 13, C. ed., pp. 385, 3-413, 3 であり、それ以下がデレクニマ執筆分であるが、GL が TN の本文を引用する場合に、その両者の執筆分において表現の微妙な差異が認められる。まずセラ・ジェツンパ執筆分には、例えば、

そこで、[TN において] あなたは.....

ある学者「 = ツォンカパ」が、「この語釈は.....」と説明するのは、正しくない。

.....とあるのは、例説にすぎない。

と述べている¹⁶⁾。

と、このように「あなたは～と述べている khyed kyis ~ žes zer ba」というかたちが一般的に認められて、「あなたは～と書いている khyed kyis ~ žes bris pa」などのかたちは一度もみられない。

これに対して、GL デレクニマ執筆分になると、TN 本文を引用する場合に、例えば、

コウオが『難語釈』[= TN]において、

また [ツォンカパが] 「第七地章に説明されているように.....」と書いているの

は、逆である。.....きわめて難しいからである。

と書いているのは.....¹⁷⁾。

という具合に、「あなたは～と書いている khyed kyis ~ žes bris pa/ bris' dug pa」というかたちが一般的になる。

これらに対応してデレクニマが *bDe dBu* において TN 本文を前主張として引用する場合でも、それへの批判が GL セラ・ジェツンパ執筆分にも見出せるところの TN 本文は専ら「あなたは～と述べている」というかたちで引用しており (*bDe dBu*, fols. 19b6-61a6)、一方それへの批判が GL デレクニマ執筆分に見出せるところの TN 本文の圧倒的多数は「あなたは～と書いている」というかたちで引用する (*bDe dBu*, fol. 61b3ff.)¹⁸⁾。このことから、少なくとも、デレクニマは *bDe dBu* を著わすにあたって GL セラ・ジェツンパ執筆分を参照したと言うことはできだろう。

この場合に、デレクニマは師の“Go lan”を完成させたのちに GL を転用しつつ *bDe dBu* を著したという可能性もなくはない。しかし筆者は、前掲対照表から明らかなように、GL におけるコラムバ批判と *bDe dBu* におけるそれでは、前者の方が詳しいが、それはデレクニマが自著の *bDe dBu* でおこなったコラムバ批判を踏まえた上で GL においてより詳しい批判を展開しようとしたからと考えたい。ここで参考になるのは、「第六発心 11 「消滅は事物」をめぐって」におけるコラムバ批判の進め方である。

「消滅は事物 *zig pa dños po* である」という主張は、ツォンカパに由来するゲルク派特有の学説で、コラムバなどのサキャ派の論師たちはこれを執拗に批判した。その批判を承けて、デレクニマも批判を丹念に斥けて自派の学説を弁証する。それは *bDe dBu* では fol. 153a4 以下にみられるが、その一連のコラムバ批判の末尾は、次の中間偈 *bar skabs kyi tshigs su bcaḍ pa/antaraśloka* で締め括られている。

嫉妬の病にとらえられた人々は、
 ジャムヤン・ラマの善説の最高の薬により、
 嫉妬の病から速やかに解放される。
 とくにコラム・ソナムセンゲよ、あんたは、
 ジャムヤン・ラマ・ジェツン・ツォンカパの、
 慈悲心の千光が十方を照射することにより、
 不信と誤解の闇をすべて取りのぞいて、
 賢者の教えの天路に入るべし！¹⁹⁾

一般にチベット人の著作のなかに著作者自身が作成した中間偈が挿入されるのはめずらしいことではない²⁰⁾。デレクニマも *bDe dBu* において6箇所中間偈を置いている。それらの6例のうち上に和訳を示した1例も含めた4例はコラムバ批判に関わる偈頌である²¹⁾。

中間偈がチベット人の著作においてはたず行論上の役割を一般的に規

定する問題は措くとして、少なくとも *bDe dBu* において中間偈 6 例はすべて、デレクニマが『入中論』本文の注解から比較的自由になって或るトピックをめぐり他説の批判的検討を交えつつ自説を弁証してゆく議論を展開した終わりに、その一連の議論を総括し終了させる役割をもっている。上に示した中間偈もまた先行する “*zig pa dños po*” をめぐる一連の議論を終了させる役割をもっているとみるべきで、それらの中間偈ののち、*bDe dBu*, fol. 154b4 以下は再び『入中論』の注解に戻ってゆくの

だ。

これに対して、前節 の対照表にあるように、GL , G. ed., fols. 199b3-206a2, D. ed., pp. 265, 8-294, 5, C. ed., pp. 465, 9-474, 11 では、“*zig pa dños po*” をめぐるより詳しい議論がみられる。そのうち *bDe dBu* に対応箇所の得られる議論前半部の末尾(GL , G. ed., fols. 201b6-202a2, D. ed., pp. 274, 12-275, 7, C. ed., p. 468, 13-17) に、*bDe dBu* におけると同様に上記の中間偈が置かれている。*bDe dBu* において問題の中間偈は一連の議論を終了させる役割をもつと推定したが、一方の GL では上の中間偈をもって “*zig pa dños po*” の議論は終了せずに、*bDe dBu* に対応箇所の得られない議論後半部(GL , G. ed., fols. 202a2-206a2, D. ed., pp. 275, 7-294, 5, C. ed., pp. 468, 17-474, 11) において更に TN 本文を長々と引用してコラムパ批判を展開する。そもそも GL デレクニマ執筆分に中間偈は今問題にしている 1 例があるのみで²²⁾、しかもそれが上に述べたように GL の “*zig pa dños po*” を扱う文脈の途中に挿入されているのは、いかにも不自然に思われるのだ。しかしその不自然さも、デレクニマが、あらかじめ *bDe dBu* でおこなった、上の中間偈で終わる一連の議論を、のちにほぼそのまま GL に転用し、GL ではさらに一層のコラムパ批判を追加したと解釈することによって、説明がつくだろう。

よって、以上のことから、デレクニマはまず GL セラ・ジェツンパ執筆分を参照しつつ *bDe dBu* を著したのち、他からの勧めもあり、自著 *bDe*

*dBu*におけるコラムパ批判を敷衍するかたちで師の未完のGL を完成させたという著作の順序を想定してよいだろう。

略号および使用テキスト

Baiḍūrya ser po : sDe srid Sañs rgyas rgya mtsho, *dGa' ldan chos 'byuñ Baiḍūrya ser po*, 中国蔵学出版社, 1989.

bDe dBu : bDe legs ñi ma, *dBu ma dgoñs rgyan rin po che'i 'phreñ ba*, Toh No. 6839.

dGag lan : *dGag lan phyogs bsgrigs*, 四川民族出版社, 1997. Cf. 小林 [1999] pp.(201)-(202).

GL : 'Jam dbyañs dGa' ba'i blo gros, *lTa ba ñan pa thams cad tshar gcod pa'i bstan bcos gNam lcags 'khor lo*.

C. ed. : *dGag lan*, pp. 519-605.

G. ed. : Toh No. 6843. (東北目録がGL の著者を rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan とするのは単純なミス。小林 [1999] p. (203) に mdzad byañ 和訳。)

GL : rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan/ bDe legs ñi ma, *Zab mo stoñ pa ñid kyi lta ba la log rtog 'gog par byed pa'i bstan bcos lTa ba ñan pa'i mun sel*. (前半がSL、後半がGL。)

C. ed. : *dGag lan*, pp. 385, 3-518. (C. ed., p. 385, 3-9 に、SLの結偈のごとく3詩節が印刷されているが、それらの3詩節はGLの冒頭に位置付けられるべきである。この点でもC. ed. は注意力の欠けた出版といわざるをえない。)

D. ed. : Champa Chogyal, *lTa ngan mun sel, A Refutation of Erroneous Views Regarding the Nature of the Void Expounded by Gser Mdog Pañ-Chen Shakya-Mchog-Ldan and Go-Bo Rab-'Byams-Pa Bsod-Nams-Senge, betun by Se-ra rje-btsun and completed by his disciple Bde-legs-nyi-ma*, Vol. : Go-Bo Rab-'Byams-Pa, New Delhi, 1969.

G. ed. : Toh No. 6842, fols. 144a-237a. (東北目録がSL/GL の著者を bDe legs ñi ma とするのは、厳密さを欠く。小林 [1999] p. (206) に mdzad byañ 和訳。)

GR : Tsoñ kha pa, *dBu ma la 'jug pa'i rgya cher bsad pa dGoñs pa rab gsal*, Sarnath,

Central Institute of Higher Tibetan Studies, Gelugpa Students Welfare Committee.

(Sarnath 本第六章 pp. 114-442 は、小川 [1988] pp.9-336 に再録されている。)

GTChen: 'Jam dbyaṅs bṣad pa'i rdo rje, *Grub mtha' chen mṅ rtsa ba: Grub mtha'i rnam par bṣag pa 'khrul spoṅ gdoṅ lña'i sgra dbyaṅs kun mkhyen lam bṣaṅ gsal ba'i rin chen sgron me; raṅ 'grel: Grub mtha'i rnam bṣad raṅ gṣan grub mtha' kun daṅ zab don mchog tu gsal ba kun bṣaṅ ṣiṅ gi ṅi ma luṅ rigs rgya mtsho skye dgu'i re ba kun skoṅs*).

B. ed. : Tokyo Nos. 90-95. (' Bras spuṅ sGo maṅ edition)

C. ed. : *Grub mtha'i rnam bṣad Kun bṣaṅ ṣiṅ gi ṅi mṅ* (教派広論) , 甘肃民族出版社 , 1992.

K. ed. : *The Collected Works of 'Jam dbyaṅs bṣad pa'i rdo rje, Reproduced from prints from bKra-śis-'khyil blocks*, ed. by Ngawang Gelek Demo, Vol. 14, New Delhi, 1973.

rJe btsun rnam thar : Paṅ chen bDe legs ṅi ma, *rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan dpal bṣaṅ po'i rnam par thar pa dṅos grub kyi char 'bebs*, *rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan dpal bṣaṅ po'i rnam thar phyogs bsgrigs*, ed. by bsTan 'dzin sKal ldan/ Rab gsal, Sarnath, 1995, pp. 45-101.

rJe btsun rnam thar : Yab rje sKal ldan rgya mtsho, *Se ra rJe btsun pa'i rnam thar tshigs bcad ma*, *rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan dpal bṣaṅ po'i rnam thar phyogs bsgrigs*, Sarnath, pp. 1-18.

rJe btsun rnam thar : Yab rje sKal ldan rgya mtsho, *Thams cad mkhyen pa rJe btsun Chos kyi rgyal mṅsan dpal bṣaṅ po'i rnam thar Tshig lhug ma*, *rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan dpal bṣaṅ po'i rnam thar phyogs bsgrigs*, Sarnath, pp. 19-44.

bKa' gdams gsar rñiṅ : Paṅ chen bSod nams grags pa, *bKa' gdams gsar rñiṅ gi chos 'byuṅ Yid kyi mdzes rgyan, The Collected Works (gSun 'bum) of Pan-chen bSod-nams-grags pa, Reproduced from Prints and Manuscripts from Various Collections*, published by Drepung Loseling Library Society, Vol. 11, Mundgod, 1995.

KL : *rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan, gSuṅ lan Klu sgrub dgoṅs rgyan.*

A. ed. : Toh No. 6841. (東北目録によると A-mdo edition)

- C. ed. : *dGag lan*, pp. 69-173.
- D. ed. : Champa Chogyal, *Gsung lan Klu sgrub dgongs rgyan, A Refutation of the Eighth Karmapa Mi-bskyod-rdo-rje's 'Don gsal 'grel chen'*, New Delhi, 1969.
- MHTL : *Materials for a History of Tibetan Literature*, Pt. 3, Śata-Piṭaka Series, Vol. 30, ed. by L. Chandra, New Delhi, 1963.
- Miñ mdzod : *Gaṅs can mkhas grub rim byon miñ mdzod* (雪域歷代名人辭典), 甘肅民族出版社, 1992.
- lŅa pa'i rnam thar : rGyal ba lŅa pa Ņag dbaṅ blo bzaṅ rgya mtsho, *Za hor gyi ban de Ņag dbaṅ blo bzaṅ rgya mtsho'i 'di snaṅ 'khrul ba'i rol rtsed rtogs brjod kyi tshul du bkod pa Du kŭ la'i gos bzaṅ* (5世達賴伝), 3 Vols., 西藏人民出版社, 1991.
- Paṇ chen rnam thar : rJe btsun thams cad mkhyen pa bka' drin can bSod nams grags pa'i dpal rnam dpyod mchog gi sde'i rnam par thar pa Ņo mtshar rmad du byuṅ ba dad pa'i rol rtsed, *The Collected Works (gSun 'bum) of Pan-chen bSod-nams-grags-pa*, Vol. 1, Mundgod, 1995.
- SBKC : *gSuñ 'bum dkar chag* (布達拉宮典籍目錄), 西藏人民出版社, 1990
- SL : rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan/ bDe legs űi ma, *Zab mo ston pa űid kyi lta ba la log rtog 'gog par byed pa'i bstan bcos lTa ba űan pa'i mun sel.* (Cf. GL . .)
- C. ed. : *dGag lan*, pp. 177-385, 3.
- D. ed. : Champa Chogyal, *lTa ngan mun sel*, Vol. : Shakya-Mchog-Ldan, New Delhi, 1969.
- G. ed : Toh No. 6842, fols.1-143b.
- Tho yig : A khu rin po che Śes rab rgya mtsho, *dPe rgyun dkon pa 'ga' űig gi tho yig Don gñer yid kyi kunda bṱad pa'i zla 'od 'bum gyi sñe ma*, MHTL, pp. 503-601.
- Thu'u bkwan : *Thu'u bkwan grub mtha'* (*Grub mtha'* thams cad kyi khuṅs daṅ 'dod tshul ston pa Legs bṱad śel gyi me loṅ), 甘肅民族出版社, 1984.
- TŅ : Go rams pa bSod nams seṅ ge, *dBu ma la 'jug pa'i dkyus kyi sa bcad pa daṅ gṱuṅ so so'i dka' ba'i gnas la dpyad pa lTa ba űan sel*, サキヤ派全書 Vol. 13, 東洋文庫 .

- TS : Go rams pa bSod nams señ ge, *lTa ba'i śan 'byed Theg mchog gnad kyi zla zer*.
S. ed. : Sarnath, Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sakya Students' Union.
T. ed. : サキヤ派全書 Vol. 13, 東洋文庫 .
- mTshan byañ* : Bod kyi bstan bcos khag cig gi mtshan byañ Dri med śel dkar phreñ ba
(蔵文典籍要目), 青海民族出版社, 1985.
- mTshan tho* : Kloñ rdol Ņag dbaṅ blo bzañ, *bKa' gdams pa dañ dGe lugs bla ma rag rim*
gyi gsuñ 'bum mtshan tho.
C. ed. : *Kloñ rdol Ņag dbaṅ blo bzañ gi gsuñ ' bum*, Vol. 2, 西藏蔵文古籍出版社, 1991,
pp. 495-638.
D. ed. : *The Collected Works of Longdol Lama*, Pts. 1, 2, reproduced by L. Chandra, New
Delhi, 1973, pp. 1285-1413.
MHTL : pp. 603-696.
- Lopez [1996]: D. S. Lopez, Polemical Literature (*dGag lan*), *Tibetan Literature, Studies*
in Genre, ed. by J. I. Cabezón & R. R. Jackson, Ithaca, Snow Lion.
- Mimak [1980]: K. Mimaki, Sur le rôle de l'*Antaraśloka* ou du *Samgrahaśloka*, *Indianisme*
et Bouddhisme, Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte, Institut Orientaliste de l'Université
Catholique de Louvain, pp. 233-244.
- Ruegg [1988]: D. Seyfort Ruegg, A Kar ma Bka' brgyud Work on the Lineages and
Traditions of the Indo-Tibetan Dbu ma (Madhyamaka), *Orientalia Iosephi Tucci*
Memoriae Dicata, ed. by G. Gnoli & L. Lanciotti, Roma, IsMEO, pp. 1249-1280.
- Tachikawa [1983]: M. Tachikawa/T. Kelsang/S. Onoda, *A Catalogue of the United States*
Library of Congress Collection of Tibetan Literature in Microfiche, Tokyo, The
International Institute for Buddhist Studies.
- 小川 [1988]: 小川一乗『空性思想の研究 - ツォンカバ造『意趣善明』第六章の
テキストの和訳』文栄堂書店。
- 小林 [1999]: 小林守「ゲルク派による二種のコラムバ批判書」『印仏研』48-1,
pp.(201)-(206)。

白館/小谷 [1991]: 白館戒雲/小谷信千代「ゲルク派小史」, 立川武蔵編『講座仏教の受容と変容(チベット/ネパール編)』佼成出版社。

白館 [1992]: 白館戒雲「ジェットウン・シェーラブワンボ著『入中論講釈意趣善明の難解部分を明らかにする書「意趣再明」』 - Otani no.13957 - について」, 大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書『入中論講釈・意趣再明』臨川書店。

立川 [1987]: 立川武蔵『西藏仏教宗義研究第五巻 - トウカン『一切宗義』カギユ派の章 - 』東洋文庫。

松本 [1997]: 松本史朗『チベット仏教哲学』大蔵出版。

御枚 [1980]: 御枚克己「antaraśloka について」『印仏研』28-2, pp.(29)-(36)。

注記

1) TS に先行してコラムパは 1464 年に『現観莊嚴論注・仏母義の解明 *Śes rab kyi pharol tu phyin pa'i man ṅag gi bstan bcos mñon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dañ bcas pa'i dka' ba'i gnas rnam par bśad pa Yum don rab gsal*』(サキヤ派全書 Vol. 13) を著わしており、そこにも (fols.285b-286a) ツォンカパ中観説への批判がみられるが、しかしまとまった批判ではない。

また、コラムパの中観論書には TS/TN のほかに『中観概論・了義の解明 *dBu ma spyi don Nes don rab gsal*』(サキヤ派全書 Vol.12) と未完の『中論注・正見の光輝 *dBu ma rtsa še'i rnam bśad Yañ dag lta ba'i 'od zer*』(同 Vol. 12) がある。この2書にもツォンカパ中観説批判がみられるが、前2書ほど詳しいものではない。

因みにこれらのコラムパ中観関係4論書の著作順序に関しては、TS が 1468 年の作、TN が 1473 年以後の作 (cf. 小林 [1999] p. (204)) ということは、はっきりしている。そしてその TN は自著の『中観概論』(fol. 45a2-3) と『中論注』(fol. 92b1-2) に言及されており、さらに『中観概論』は『中論注』(fols. 15b5-16a1) に示唆されている。よって、4論書は、『見解の弁別 TS』⇒『入中論注 TN』⇒『中観概論』⇒『中論注』の順序で著わされたとみてよいだろう。

2) Go lan 等の dgag lan については、Lopez [1996], pp. 217-228 参照。

3) ガロの名については、*Thu'u bkwan*, p. 321, 8-10 参照。

またガロの略伝については、*bKa' gdams gsar rñin*, fols. 94a2-95b4 ; *Baidūrya ser po*, p. 107, 8-19; *Min mdzod*, pp. 633-634; SBKC, p. 171; 白館/小谷[1991] p. 97; 小林[1999] p. (202) 参照。

伝記によると、ガロの弟子の一人にダライラマ2世・ゲンドウンギャムツォ dGe 'dun rgya mtsho(1475/76-1542) がいる。彼は『ガロ讃』を二つ残している。Toh No. 5545 (15): '*Jam dbyaṅs dGa' ba'i blo gros kyi ṣal śṇa nas la bstod pa, Mu tig gi phreṅ ba* ; Toh No. 5545(16): '*Jam dbyaṅs dGa' ba'i blo gros kyi ṣal śṇa nas la bstod pa, mKhas pa'i mgul*.

4) ガロの著作については、小林[1999] p. (202) で簡単にふれておいた。彼の著作は、SBKC (Nos.00534(1) ~ (10), 00535(1) ~ (3)) に13作品がみられるほかに、ロンドルラマのリスト *mTshan tho* (C. ed., pp. 596-597, D. ed., p. 1372-73, MHTL. Nos. 15635 ~ 15642, 15662) に8作、アク・リンポチェのリスト *Tho yig* (Nos. 11312, 11399 ~ 11401, 11488, 11589 ~ 11597, 11895, 12009, 12023, 12223) に18作、そして『蔵文典籍要目 *mTshan byaṅ*』(pp. 590, 592, 593, 594, 606, 608, 619-620, 622) に11作が記載されている。

ガロの著作の出版状況として、GL については、小林[1999] pp.(202)-(203), *lṅa pa'i rnam thar*, Vol. 2, pp. 21, 20-22, 4 参照。GL のほかに、東北大学にガロ作『入中論注 *dBu ma la 'jug pa'i gṣuṅ 'grel dGoṅs pa rab gsal*』(Toh No. 6846; SBKC, No. 00535(2)) が所蔵されている。ちなみにその『入中論注』(fols. 3a1, 25b3, 26a7) にはガロの自著『中論注 *dBu ma rtsa ba'i tshig le'ur byas pa'i gṣuṅ 'grel Rig pa'i rgya mtshor 'jug pa'i gru rdziṅs*』(SBKC, No. 00535(1)) が言及されている。ほかにガロ作 *dMigs brtse ma'i las tshogs dṅos grub char 'bebs* (Toh No. 6731) が所蔵されており、また Tachikawa [1983] Nos. 1124, 1125 によると、ガロの『般若心経注 *Śes rab sñin po'i rnam par bśad pa Tshig don rab tu gsal byed*』(SBKC, No. 00534(3)) と『大乘莊嚴經論注 *Theg pa chen po mdo sde rgyan gyi gṣuṅ 'grel Kun bzaiṅ mchod sprin*』(SBKC, No. 00534(8)) が出ている。

5) GL 述作の経緯に関しては、*rJe btsun rnam thar* I, pp. 85-87 ; *rJe btsun rnam thar*, p. 13 ; *rJe btsun rnam thar*, pp. 36-37 ; *Baidūrya ser po*, p. 140 ; *Thu'u bkwan*, pp.

118-119, 325; 立川 [1987], pp. 55-56, pp. 101-102, n. 49; 小林 [1999] pp.(205)-(206) 参照。この点については第 節でも触れる。

6) 小林 [1999] この拙稿に誤植があったので訂正しておきたい。p.(201), 21 「Śākya mchog dan」⇒「Śākya mchog ldan」; p.(203), 5-6 「par kha n chen mo」⇒「par kha-n chen mo」; p.(203), 26 「側からの」⇒「側から」; p.(205), 9 「業界を」⇒「業果を」; p.(205), 29 「"Śāklan"」⇒「" Śāk lan"」; p.(206), 5 「パボンカ」⇒「パボンカ」; p.(206), 18 「Vol :SL,」⇒「Vol. :SL,」

7) 松本 [1997] pp. 192-193 に、TN 所引の GR が整理されている。

8) Cf. 小林 [1999] p.(206).

9) SBKC, p. 198 ; *Min mdzod*, pp. 967-968.

10) *rJe btsun rnam thar* I, p. 101 ; *rJe btsun rnam thar* , p. 17 ; *rJe btsun rnam thar* , p. 43.

11) Toh No. 6847 (A) (B) (C) : '*Dul ba'i sde snod mtha' dag gi dgoñs pa phyin ci ma log par 'grel par byed pa'i legs bśad sKal bzañ nor bu'i phreñ ba.*

12) Toh No. 6828 : *Drañ ñes rnam 'byed kyi spyi don mtha' dpyod Legs par bśad pa Blo gsal mgul rgyan.*

13) *mTshan tho*, C. ed., p. 594, 18-19, D. ed., pp. 1370, 6-71, 1, MHTL, No. 15605. Cf. 白館/小谷 [1991] p. 101 ; 白館 [1992], pp. 15-16, n. 1, p. 17, n. 12.

尚、アク・リンポチェの稀覯本リスト *Tho yig*, No. 11435 によると、デレクニマは、“Kar lan gyi yañ lan” を著わしたことになる。セラ・ジェツンパがカルマバ・ミキュドルジェ Karma pa Mi bskyod rdo rje (1507-1554) 作『般若注』に再批判を加える “Kar lan” として『奉答・龍樹の意趣の莊嚴 KL』を著わしたのは有名だが (cf. Ruegg [1988] pp. 1271-1275 ; Lopez [1996] ; 小林 [1999]) たんなる “Kar lan” ではなくて “Kar lan gyi yañ lan” の著者としては、セラ・ジェツンパやミキュドルジェ と同時代人のパンチェン・ソナムタクパ Pañ chen bSod nams grags pa (1478-1554) を挙げることができる。彼の作品として、*Pañ chen rnam thar* (fol. 14a) に “Karma pa'i Phar phyin ñikka'i dgag lan/ dgag lan gyi yañ lan ”, *mTshan tho* (C.ed., p. 537, 17, D.

ed., p. 1320, 5-6, MHTL, No. 14319) に “ Karma pa'i Phar phyin bka' lan/ de'i yañ lan ”、そして *Tho yig* (No. 11433) に “ Karma Mi bskyod rdo rje'i gsun lan le tshan gñis ” が記されている。Cf. *GTChen*, B. ed., fol. Ca 21a6-7, C. ed., p. 590, 11-16, K. ed., p. 665, 3-5. (ただし残念ながら Mundgod より出版された彼の全集に “ Kar lan ” と “ Kar lan gyi yañ lan ” は収録されていない。) しかしながらデレクニマ作の “ Kar lan gyi yañ lan ” は、*Tho yig* 以外の他の資料によって確認できない。

14) 小林 [1999] p.(206).

15) *bDe dBu*, fol. 108b2-3 : Go'o Rab 'byams pa'i *dBu ma'i dka' grel* du grags pa 'di la lun rigs kyi gnod pa dpag tu med pa gcig brjod rgyu 'dug ste, dgos pa cher mi 'dug cin, che lon tsam gcig brjod pa'i mchog (sic.) par 'dug pas, de tsam las ma spros.

16) GL , G. ed., fol. 144b2-6, D. ed., pp. 5, 11-7, 6, C. ed., p. 386, 1-12 : de la khyed kyismkhas pa kha cig, sgra bsad 'di.....zes pa ni mtshon pa tsam mo. zes zer.

17) GL G. ed., fol. 164a3-6, D. ed., pp. 100, 3-101, 5, C. ed., pp. 413, 22-414, 9 : Go bos *dka' 'grel* du, yañ sa bdun pa'i skabs su 'chad pa ltar.....zes bris pa ni phyin ci log ste..... sin tu dka' ba'i phyir ro. zes bris pa ni.....

18) GL デレクニマ執筆分にも「あなたは～と述べる *zes zer ba/ smra ba* 」という表現はあるが、しかしそれは「～と書いている」に比べて圧倒的に少ない。

ちなみに、ガロが GL において TS 本文を引用するより多くの場合に、「～と書いている *zes bris pa/ bris 'dug pa* 」を用いるが、そのほかに、「～と書いているようだ *zes bris snañ ba* 」の使用も少なくない。

19) *bDe dBu*, fol. 154b3-4 :

phrag dog nad kyi zin pa'i skyes bu rnam,
'Jam dbyaṅs bla ma'i legs bsad sman mchog gis,
phrag dog nad las myur du sgrol ba dañ,
khyad par Go ram bSod nams seṅ ge khyod,
'Jam dbyaṅs bla ma rJe btsun Tsoṅ kha pa'i,
thugs rje'i 'od stoṅ phyogs bcur 'phro ba yis,

ma dad log rtog mun pa kun bsal te,
blo bzañ bstan pa'i lha lam 'jug par sog.

20) 蔵外文献における中間偈については、御牧 [1980] p.(32)、Mimaki [1980] p. 237 参照。

尚、御牧氏が指摘されるように、チベット人の著作のなかに総括偈 *bsdu ba'i tshigs su bcad pa/saṃgrahaśloka* が用いられるのは稀である。氏は一例のみを報告されているが、ほかに本稿で扱ったガ口作 GL (G. ed., fol. 9b5-6, C. ed., p. 532, 19-21) に用いられる総括偈を稀な一例として加えることができる。ほかに GL には中間偈も 2 箇所に見られる。GL , G. ed., fol. 24a4, C. ed., p. 554, 15-17 ; G. ed., fol. 48a3-5, C. ed., pp. 587, 18-588, 2.

21) *bDe dBu* における中間偈: 1 fols. 63b5-64a1 (3 偈); 2 fol. 91b5-6 (2 偈); 3 fol. 108b3 (1 偈); 4 fol. 122b3-4 (1 偈); 5 fol. 140a6-7 (1 偈); 6 fol. 154b3-4 (2 偈)。これらのうち 1 3 5 6 がコラムパ批判に関係する。

22) GL セラ・ジェツンパ執筆分では中間偈は G. ed., fol. 145b2-3, D. ed., pp. 10, 14-11, 5, C. ed., p. 387, 11-14 に 1 偈みられる。ただしこの中間偈は *bDe dBu* にはみられない。

(こばやし まもる・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

「パシフィック・ウェイ」概念の再検討

——太平洋世界の政治文化・法文化を考えるために——

Reflection on "The Pacific Way"

東 裕
Yutaka HIGASHI

キーワード：パシフィック・ウェイ、カミセセ・マラ、
太平洋島嶼国、オセアニア文化、オセアニア政治

要旨

『パシフィック・ウェイ』は、1970年にフィジーが国連加盟した際、当時のカミセセ・マラ首相が国連総会でおこなった演説のなかではじめて使われた。以来、この言葉は、おもに多様な文化を包摂した太平洋地域の統合や連帯を象徴する言葉として、広く使われるようになったが、その本来の意味はほとんど忘れ去られてしまった。そこで、本稿ではこの言葉の本来の意味を確認するとともに、現実にはどのような局面で、どのような意味を込めてこの言葉が使われ、どのような機能を果たしているかを整理する。太平洋世界の政治文化や法文化を考える際の手がかりがここにあると考えられるからである。

はじめに

太平洋島嶼諸国の間で、『パシフィック・ウェイ』(PacificWay)という言葉がしばしば使われる。この言葉は、1970年に当時のフィジー首相であったラツー・サー・カミセセ・マラ現大統領が、フィジーの国連加盟に際して、国連総会で行った演説の中で使ったことで知られるようになった⁽¹⁾。その後、太平洋島嶼国の人々、とりわけ指導者の間で広く使われるようになり、太平洋地域の連帯・統合を表現したり、太平洋地域の人々の文化の独自性を表現する幅広い意味をもった言葉として使われている。わが国の太平洋地域研究者の間でも、このような意味をもつ言葉として『パシフィック・ウェイ』が使われる。

ところが、そもそもマラが国連演説の中でどのような意味でこの言葉を使ったかは、正確には伝えられていない。地域統合概念として、『パシフィック・ウェイ』をとらえることは誤りではないが、本来この言葉がそのような意味で使われたかという、必ずしもそうとは言い切れないようである。それにこの言葉は、様々の局面で使われる便利な言葉ではあるが、実のところ何が『パシフィック・ウェイ』であるか、その定義は明確ではない。そしてこの柔軟性こそが『パシフィック・ウェイ』の特徴の一つであるともいわれる。それでありながら、この言葉は、太平洋文化のキー概念と位置付けられる重要な概念であるともいわれる。

このように、ここで『パシフィック・ウェイ』を取り上げるのは、この概念の明確化を試みようとするだけでなく、太平洋諸国の政治文化・法文化を研究する上でのこの言葉の重要性を意識してのことでもある。言い換えれば、太平洋の政治文化・法文化の基層にあるものを『パシフィック・ウェイ』が表現しているのではないか、という問題意識をもってこの言葉の概念や用法を整理しようとするものである。

これはあくまで仮説に過ぎないが、それほど的外れとも思われない。

ただ、それを実証するとなると、大きな困難を伴うことはいうまでもない。そこで、その困難をいくぶんなりとも緩和する準備作業として、この概念の整理を行うものである。その際、この言葉がはじめて使われた国連におけるマラ演説での用例、および『パシフィック・ウェイ』を詳細に分析したロン・クローム元南太平洋大学教授の論文に即して、その概念整理をすすめる⁽²⁾。

1. 一般のパシフィック・ウェイ理解

わが国における一般の『パシフィック・ウェイ』理解は、およそ次のようなところではないだろうか。

フィジーのマラ首相が提唱した太平洋諸国の歩むべき指針。フィジーが独立した1970年秋の国連総会の演説で初めてその概念を用いたといわれる。彼は、南太平洋の島々は、外国の支配のもとでばらばらになっていた。しかし同じ伝統と文化をもっていたのではないか。独立した今、昔のように手を取り合って、国際社会に乗り出そうではないか。欧米文明をうのみにするのではなく、南太平洋民族の伝統と文化を保ちながら、ゆっくりと近代化に手をつけよう と呼びかけた。パシフィック・ウエーには太平洋共通の独自性と太平洋各地の独自性の双方が含意されている。イデオロギーとしての太平洋は一つといった排他的な主張ではなく、そこには、新しい国造りに民族、文化の土着主義的な共存、連帯が不可欠であるという願望がこめられている。太平洋諸島の近代化が今後パシフィック・ウエーといかに調和しつつ実現されるか興味をもたれる⁽³⁾。

すなわち、太平洋諸国に共通する太平洋地域の独自性と、太平洋地域に散在する各地の独自性という二つの意味を含んだ概念であるということ。そして、そこには近代国家の建設を進めるにあたって、地域の

共通性の上に立脚して域内国家の連帯をすすめる一方、土着の各民族文化を維持した上での共存が欠くべからざること、という意味がこめられているということができよう。

国際社会の中で、小さな小さな太平洋諸国が認知されるためには、一つのまとまった存在としてその存在を誇示する必要がある。そのためには、地域の独自性を主張する根拠となる域内各地の土着文化の独自性を強調することで、それを広く国際社会に印象づけ、さらに、域内の人々には自らの文化の独自性への認識を促し、それへの誇りをもたせることが必要になる。そのために、『パシフィック・ウェイ』が使われるのであろう。

2. パシフィック・ウェイの誕生

知られるように、『パシフィック・ウェイ』の概念が、国際社会の中に登場するのは、フィジーが独立を達成し、国連に加盟する際に、ラソー・サー・カミセセ・マラ首相（現大統領）が、国連総会における演説の中で使ったのが最初である。わが国で『パシフィック・ウェイ』に言及するときに、必ずといってよいほどこの事実が紹介される。ところが、この演説の中身について紹介したものを、筆者は寡聞にして知らない。マラ首相がどのような意味を込めて、どのような文脈で『パシフィック・ウェイ』を使ったのか知る由もなかった。そこで、この言葉が使われた演説の個所の前後を次に引用し、稿末には全文訳を付すことにした。

さて、マラ首相は、この演説の中で、太平洋諸国の植民地から独立国への移行にふれ、次のような文脈で、『パシフィック・ウェイ』という言葉を使っている。しかも、この言葉が使われたのは、この演説の中で、この1か所のみである。

私たち（＝フィジー国民）は、統合された複合人種社会をもちながら幸福かつ平和裡に独立国家へと移行したことを意識しています。このことは世界中でもおそらく共有されるべき高い価値を持つものであるといわれます。それゆえ、私たちがこれを守り大切にするのを国連が援助してくれることを期待するとともに、おそらく、この国連というすばらしい組織に対し、私たちが最大限の貢献ができるよう援助してくれることを期待します。フィジーに対して示された皆様の暖かい歓迎と明らかな善意は、私たち自らを卑小な存在と見るべきではないという証拠です。

多くの演説者の方々が、私たちの平和裡の独立への移行について言及されてきました。そして、私たち自身が、このような私たちの幸運について深く感謝しています。しかし、これは太平洋にとって目新しいことではありません。同様の平穏で整然とした独立への移行は、西サモア、クック諸島、ナウル、そしてトンガでもあったことです。私たちは、地理的及びイデオロギー的の両面で、これがパシフィック・ウェイ（Pacific Way）であると考えたいと思います。 私たちが、（太平洋地域の）友人や隣人から授權された限りでは、私たちみずから、いかなるリーダーシップをとることをも認められていませんが、私たちは友人や隣人の声の代表として、そしてその声を分かりやすく伝える者として行動したいと思うものであります。

議長並びに代表者の皆様、皆様方の多くにとって、独立の際の初めてのスリルの記憶は、時の経過の中でかすんでしまったことでしょう。私たちの経験では、独立の感情は、ジェット機の窮屈な客席から離れる時のような気持ちにいくぶん似ています。まず、元気づけに新鮮な空気を深呼吸し、次に慎重に地面にむけてタラップを降りたとたんに方角がわからなくなり、荷物をもってくれる手が差しのべられる——そして次に、私は、なんと死に物狂いの競争の場にいるように思えるのです⁽⁴⁾。

こうして、フィジーをはじめ太平洋諸国の植民地が、アフリカや東南アジアなどの国々にみられたような熾烈な独立闘争もなく、平和裡に独立国家へと移行したことを指して、これが太平洋流のやり方（Pacific Way）である、と言及したのである。これは地理的概念であると同時に

イデオロギー的な概念でもあると付言されているように、それは『太平洋流の方法』であり、『平穏なやり方』、という意味で使用されたものと理解できる。

そして、この言葉が使われたのがこの1か所だけであるにもかかわらず、クロコーム教授が次に指摘するように、この演説から5年ほどの間に、この言葉は広く太平洋地域で人口に膾炙するようになる。その理由は、太平洋諸国の人々の心理的・政治的必要を満足させたからであった。すなわち、『パシフィック・ウェイ』という言葉は、太平洋地域の一体性と太平洋地域の統合のシンボルを求める要求の高まりに応えたのである⁽⁵⁾。

それは、政治的独立という文脈（あるいは少なくともその要求）及び高まりつつ自信以外のなにものにも根ざしたようには見えない。さらに、すべての島嶼国の人々の共通の利益が島嶼国どうしの共働によって実現されることが自覚され、そして効果的な統合概念が島嶼諸国の周りを取り巻く富裕な先進国への新植民地的な依存の程度と強さを弱めることが自覚されるようになってきていた⁽⁶⁾。

クロコーム教授はこのように述べて、パシフィック・ウェイの概念が広く受け入れられるようになった理由を、太平洋島嶼国の共通の利益を国際政治上で実現するための地域統合概念としての政治的意味と、太平洋島嶼国の人々が自尊の精神をもつことによって誇りと自立の気概を高める心理的意味に求めている。

かつて、ほとんどの太平洋の人々は、さまざまなレベルの地元ないしは部族の一員としてのアイデンティティーをもつだけであった。このことは、今でもほとんどの人々について言えることではあるが、国家レベルの共通のアイデンティティーが形成されてきたり、英語を話すヨーロッパ人の文化（仏領地域ではフランス文化）を吸収した

り、といった現象が起こるにつれて、その重要性は減少してきている。こうした国家レベルと世界のレベルとの間に、パシフィック・ウェイという新たな集団のアイデンティフィケーションが登場してきた。

ただし、この概念は、「連邦」(federation) に結びつくとは思われない。なぜなら、現実の経済的・政治的利益は、地理的・文化的多様性同様、あまりにも違いがあり過ぎるからである。それに、この概念は全体的な文化的統合にもむすびつかない。なぜなら、500 万人に及ぶ太平洋島嶼の人々の諸文化間の相違は、おそらく地球上のどの地域の 500 万人の人々の集団の中で見られる文化的相違よりも大きいからである。しかし、その概念は、より効果的な地域協力の達成に少しは役立つかもしれない、そしておそらくは文化的アイデンティティーをいくぶんか高めることになるだろう。

この種の概念は、どんなものもそうであるが、それは現に存在する現実を記述するために使われるか、それとも達成されるべき理念を記述するために使われる。実際、この二つはしばしば都合よく混合され、すでに達成された理念を含んでいる⁽⁷⁾。

こう述べた上で、クロコーム教授は、その「神学(理論)」(theology) と「技術」(technology) という側面から、パシフィック・ウェイの意味を分析していく。教授はいう。

パシフィック・ウェイは、すべての重要な用語がそうであるように単一の精確な意味をもつものではないが、中核に基本的な意味を内包し、そして感情的な反応と一定の範囲で別の意味が、文脈に応じて付加される。そして、その言葉を使う人や使われる時によって、少し違った意味をもつ。

1975 年の時点でのパシフィック・ウェイの状態は、神学(theology) と技術(technology) の二つの側面からとらえることができる。前者は、『パシフィック・ウェイ』という言葉に対する信念、価値、政治的・心理的反応であり、後者はその言葉によって同一視できるように見える実際の行動と活動である。

そして、パシフィック・ウェイの大きな利点の一つは、この言葉に内包された柔軟

性 (flexibility) である。この言葉は全体的に特定の意味をもたないために、特定の時・場所・文脈の現実が何であれ、太平洋地域においては、その住人のどのような活動も、それがパシフィック・ウェイの現れであると分類できることだ⁽⁸⁾。

このように、パシフィック・ウェイの基本性質を総体的に理解した上で、この概念を「理念」と「現実」の側面、すなわち教授の言葉では、「神学」と「技術」の側面から分析していくのである。そこで、以下に、クロコーム論文の要旨を整理し、『パシフィック・ウェイ』概念が太平洋諸国においてどのように理解され、使用されているかを紹介してゆく。

3. パシフィック・ウェイの理念的側面

これを、クロコーム教授は、「パシフィック・ウェイの神学 (theology) 」と呼ぶ。ここでは、『パシフィック・ウェイ』という言葉自体が持つ機能・理想・イメージといった理念的側面に焦点を合わせた分析がなされる。

(1) パシフィック・ウェイの前提

『パシフィック・ウェイ』には、太平洋島嶼人は皆兄弟であるという、暗黙の前提が存在し、これが統合を促進する心理的な基盤を形成する機能を果たしてきたことが指摘される。

パシフィック・ウェイは、普通は口に出しては語られないある仮定の上にたっている。それは、一定のイデオロギー的な目的のためであるが、すべての太平洋島嶼人は、兄弟であるというものである。これは、太平洋文化にいくらかの基礎をもつものであるが、そのほとんどは、ある人の他人との関係を分類するために使われる。兄弟関係の現実とは、どこでも、口論や、ねたみや、争いや、競争を含むものではあるが、しかし

イデオロギー的には、相互扶助と共通の利益と先祖をもつものということである。

1975年の段階で、パシフィック・ウェイは、太平洋に広がるいくつかの統合感情を確かに助長してきた。そして、太平洋に限らず世界のどこにでもあることだが、域内にある深く分裂した多くの対抗関係、敵対感情、および偏見を克服するのに役立ってきた⁹⁾。

(2)パシフィック・ウェイとエリート

『パシフィック・ウェイ』は、太平洋島嶼地域のエリート層が、国や地域を越えて共通の基盤（連帯感）を形成するのに便利な言葉であると指摘される。

パシフィック・ウェイは、太平洋島嶼地域のエリートにとって便利な言葉ではあるが、村や島に住む普通の人々には無縁の言葉である。パシフィック・ウェイの概念がもっとも意味をもつのは、太平洋諸島地域を頻繁に往来する政治家・上級公務員・教会の指導的地位にある者・ビジネスマンなどの島嶼地域のエリートたちである。エリートになればなるほど往来の機会が増え、パシフィック・ウェイという言葉はますます便利なものになる。というのは、この言葉はどこでも特定の意味をもたないため、太平洋地域のどこであれ、この言葉だけが、違った場所から来た人と人との間で共通の基盤を作るきっかけになるという意味をもつからである¹⁰⁾。

(3)パシフィック・ウェイと選別・統合機能

『パシフィック・ウェイ』は、太平洋島嶼人とそれ以外の人々を選別し、太平洋島嶼人を統合する機能を持っていると指摘される。

パシフィック・ウェイという言葉は、太平洋諸島人をそれ以外の人々から区別するという重要な選別機能を持ち、太平洋諸島の外の人々や社会による圧力を防ぐ防壁の役目を果し、その防壁の内側でいくつかの統一された行動をとるための基礎を提供し

ている。言い換えれば、パシフィック・ウェイという言葉は、ヨーロッパ人やアジア人に対して、多様な島嶼人を統合するという最大の意味をもっている。

時にはニュー・ジーランドやオーストラリアまでも含む太平洋の統合のシンボルとして使用される場合もあるが、一般には南太平洋の熱帯にある英語圏の人々に対し使われる言葉であり、ただ二次的にそれらの南太平洋の集団とのつながりの性質や範囲に応じてすべての太平洋諸島人に対しても使用される¹¹⁾。

(4) パシフィック・ウェイと複合人種社会

『パシフィック・ウェイ』は、フィジーのような複合人種社会において、すべての種族の人々の調和を目指すべきであるという理念をも含んだものとして考えられるべきである、という主張がこの言葉をつくったマラ自身によってなされる。

問題は、南太平洋の諸島で生まれ育ったアジア系やヨーロッパ系の人々のことである。彼らは、地理的にも国籍的にも島嶼人である。しかし、フィジーのインド系住民のように、その数が人口の半数を占め、原住民をわずかに上回ったような例もある。こうした例について、フィジーのマラ元首相は、パシフィック・ウェイは調和を保った、複合人種の文脈の中で、これらの人々をすべて受け入れるものであると語った。しかし、このような考え方は、フィジーや他の太平洋のどこにおいても、まだ広く共有されているわけではなく、マラ元首相の言うような概念になるかどうかは、将来の課題である¹²⁾。

(5) パシフィック・ウェイと酋長制

『パシフィック・ウェイ』は、酋長制と結びついたものというイメージがある。しかし、実際には強力な世襲権力が残っている国の方が、むしろ少なくなっているのが現状である。

世襲による古くからの強大な権力をもった国王や酋長が多くの人々を支配する、といった太平洋イメージは、今日ほとんどの太平洋諸島の国々には当てはまらない。もちろん、トンガ王国のような例もあるが、リーダーシップの形は、ミクロネシア・メラネシア・ポリネシアのそれぞれの地域、そして国々によってさまざまであり、特にポリネシア人の文化とメラネシア人の文化は好対照をなすが、この点はほとんど強調されず、太平洋地域の統合の発展のために内部の相違は軽視され、類似性が最大限に強調される。

現在、強力な世襲による酋長制を残している国々（トンガ・サモア・フィジーなど）の人口を合わせても、太平洋地域全体の人口の10%でしかないが、世襲の酋長制というイデオロギーは、実際の酋長制の例よりも広く浸透している。そのため、パシフィック・ウェイという言葉に酋長制を含んだものとするとは、こうした貴族制的酋長制を維持し、自らの特権的地位を正当化しようとの意図を持ったエリートの政治的先制攻撃であると見る人もいる。そうではあるが、酋長制はパシフィック・ウェイの一部と理解されている⁸³⁾。

(6) パシフィック・ウェイと植民地経験

『パシフィック・ウェイ』は、負の植民地経験の反動として、旧宗主国への依存の口実となってはならない。

太平洋諸島人は、植民地状態によって作り出された諸問題に気づいているが、それにもかかわらず一般に太平洋諸島人は、同様の植民地経験をしたアフリカやアジアの人々よりも、植民地時代に生まれた利益に感謝している。とはいえ、植民地経験は、太平洋諸島人の舌に苦さを残した。屈辱感や収奪され搾取されたといった共通の感情を残したのである。だからといってパシフィック・ウェイが、こうした苦い経験の過度の反動となることは避けられるべきである。なぜなら、今日の困難のすべてが、過去の誤りの上に生じたものとするとは、未来に向かっての諸問題の解決に向かう創

造的な行為を妨げ、愚痴をこぼしながら依存し続けることがパシフィック・ウェイになってしまうからである。多国間の政府協力のもとに行われる「援助」は、新たな依存であり、この関係は、かつての植民地関係よりも悪いものとなるかもしれないが、そのことは時間の経過によって知る以外にない⁽¹⁴⁾。

4. パシフィック・ウェイの実際の側面

クロコーム教授が、「パシフィック・ウェイの技術」として紹介しているところが、パシフィック・ウェイの実際、すなわち現実の姿をよく表している。ここでは、実生活のさまざまな局面で現れる文化現象の中で、パシフィック・ウェイの現れと考えられる事例が紹介されている。

(1) パシフィック・ウェイと交渉

厳格な態度をとった話ぶり、口頭での交渉の伝統、交渉における柔軟性・順応性・妥協、深い感情の自由な表現、全員一致の妥協、そして誰も疎外しないことが、『パシフィック・ウェイ』の特徴であると指摘される。この中で、「全員一致の妥協」と「誰も疎外しないこと」を『パシフィック・ウェイ』の特徴と指摘したのは、故アルバート・ヘンリークック諸島首相である。

同首相は、1975年に、全員一致の妥協（unanimous compromise）が『パシフィック・ウェイ』の鍵であると語った。その具体例として、ある島での酋長会議の様子を紹介している。この会議の席上、ある提案をめぐって1名を除く大多数の賛成が得られることは明白だった。それにもかかわらず、少なくとも名目上の全員一致に到達するまで議事が続けられ、このことが多くの島の文化のなかで、つよい先例となったといわれる⁽¹⁵⁾。つまり、全員一致に至るまで、根気よく合議体を構成する全員の妥協が模索される、というのが太平洋地域における会議という交渉の場での慣

例になっているといわれる。

さらに、ヘンリー元首相は、『パシフィック・ウェイ』の中には「誰も疎外しないこと」が含まれると語った。すなわち、太平洋地域においては、周辺の先進国と違って、交渉の場により広い参加者を許容し、境界線をあまり設けない傾向があるということである。その理由の一つは、人口が少なければ少ないほどより多くの割合の人が参加でき、指導者を個人的に知ることもでき、その指導者と自分との何らかの縁戚関係をたどることができるようになるからだ、といわれる⁶⁶。

また、「口頭での言葉による交渉」が太平洋文化の中の深い伝統に根ざしていて、今でも世界の他のほとんどの地域よりも、それがずっと重要な位置を占めていると指摘される。そして、交渉の際には「適切な感情の環境や人間関係を作り出す言葉の技術が高く評価され、冷静な分析的なアプローチはあまり支持されないようである。コミュニケーションにおける人間らしい感情が高く評価される」⁶⁷といわれる。

「深い感情をより自由に表立って表現すること」が、パシフィック・ウェイの特徴の一つであると指摘される。「このパシフィック・ウェイは、正式の儀式からそうでない場にまで及ぶ。確かに中部太平洋においては個人的表現に対する拘束が強いものの、儀式・結婚式・葬式・その他種々の集まりにおいて、太平洋を取り巻く先進国でふつうに見られる以上のさまざまな表現が見られる」⁶⁸という。

以上が、政治文化にかかわるパシフィック・ウェイの現実的側面ととらえられるが、これ以外にも、次のような生活の局面に一層密着したさまざまな特徴が指摘されている。

(2)パシフィック・ウェイと生活の諸相

生活の諸側面における、『パシフィック・ウェイ』を、クロコーム論文に即して、以下に紹介する。

時間・労働・そして財産に対する気前の良さ

突然の来訪客を宿泊させ、食事を提供し、世話をし、自分の予定をすべて変更してまで相手の都合に合わせ、必要とあらば無一文になるまでもてなす。これは、広く太平洋に見られるもてなしの現実の姿である¹⁹⁾。

肉体的接触の多さ

握手の時間は長く、両手で握手することが一般的であり、会話の最中にずっと手をつないでいることすらある。また、男性どうしが抱き合うのも太平洋社会でふつうに見られる適切な行為であり、頬をおしつけ合うこともある²⁰⁾。

時間観念の柔軟性

時間の観念が、正確な時刻よりも少なくとも30分は遅れていて、かなりの幅の柔軟性がある。それは、「ニューギニア時間」だとか、「フィジー時間」だとかといわれる。さらに広くは、「太平洋時間」という概念があり、これはものごとが予定よりいくぶん遅れて起きるということを意味する。それは少なくとも正式に表明された時よりも遅くということで、極端な場合はそれがまったく起こらないこともある。その上、個人が出席したり参加したりする義務の範囲は、たいていのヨーロッパ社会ほど厳格ではない²¹⁾。

その場のしぎ

ヨーロッパ人やアジア人は、将来の心配のために計画し、ものごとが計画通りに運ぶことを重視する。しかし、『パシフィック・ウェイ』は、「アドホック・ウェイ」(the ad hoc way)である。これは、我々は未来を見通すことができないのだから、未来のことを考えるのにあまり時間を費やすべきではないという考えに基づいている。ものごとはうまく行き、なるようになる。今のことだけを考えて、未来のことは未来にまかせよ、という考え方である²²⁾。

服装の特徴

服装についての『パシフィック・ウェイ』は、ゆったりとして、涼しい服装というところに特徴があるが、これはイデオロギーであって、現実との間にはやっかいな困ったギャップがある。その主な理由は、植民地時代の植民者の服装が、今なお、太平洋島嶼人にとっては、かすかな権力・特権の象徴であり、喜びをもって受け入れられているからである。

おそらく、誰もが本当の『パシフィック・ウェイ』と認める服装は、ラバラバとかスルとか、そのほか島によっていろいろの名前で呼ばれる男性の正式の服装であるキルト（膝のあたりまでの短めのスカート）であろう。また、女性にとっての『パシフィック・ウェイ』を表す服装は、かかとまである長いスカートである。

花を首の回りや頭や耳の後ろにつける伝統は、太平洋の一部の地域に限られていたが、今では『パシフィック・ウェイ』の普遍的な姿になっている。裸足で歩くのも、『パシフィック・ウェイ』の目立った特徴であるが、今でもそれを続けている人はほとんどいない。ただ、家に入る時に外で履物を脱ぐのは、『パシフィック・ウェイ』の一部である⁸⁸。

食べ物と飲み物の特徴

食べ物は、『パシフィック・ウェイ』の象徴であり、中でも豚の丸焼きは、一番の歓迎のしるしである。伝統的ないも類、特にヤムイモとタロイモ、それに伝統的な果物、特にブレッドフルーツとバナナは、『パシフィック・ウェイ』において欠かせない食べ物である。

『パシフィック・ウェイ』は、ながらく飲み物にもあった。東太平洋においてはカバ（ヤンゴーナ）が正式の儀式において欠かせないものであるが、そうした場以外でも飲まれるようになってきている。今でもカバが中心ではあるが、ビールやウイスキーの消費も増えて

いる。また新鮮なココナッツミルクも伝統的な飲み物であるが、急速に輸入飲料に取って代わられている²⁴⁾。

歌と踊りとゴルフ

歌と踊りも『パシフィック・ウェイ』の大きな部分を占める。歌や踊りは、誰もがするものであるが、一部の上昇指向の太平洋島嶼のエリートたちは、ゴルフを利用して社会階層の階段を駆け上ろうとしている。ビジネスマンや外交官や国際機関のスタッフと肩を並べることで多くの島のゴルフクラブは、太平洋島嶼のエリートたちに自分たちはコミュニティーの非特権階層とは別だ、といった意識を形成し、人種の区別を越えた新たな特権階層を形成するエリート主義の焦点となっている²⁵⁾。

英語と現地語の併用

パシフィック・ウェイは、フランス語でも、またどの太平洋の言語でもなく、本質的に英語で行われる。西太平洋のパプア・ニューギニア、ソロモン諸島などではピジン語が広く使われ、英語が話せるメラネシア人も社会的自己確認や統合と連帯の感情を生み出すためにピジン語を使う。太平洋全域にわたる会議の席上でも、ピジン語を話す人は、たとえ英語の方が技術的なコミュニケーションにとって効果的であっても、自己確認と統合のしるしとしてしばしばピジン語を使う。あらゆる大きな試験や、大金のかかった仕事、重要な会議、太平洋地域以外の人との特権的接触の場では、英語が使われる。しかし、英語だけで十分というわけではなく、自分の島の言葉をはじめ、いくつかの主要な太平洋地域の言語の中の基本的な言葉やあいさつの言葉などの重要な言葉については知っている。このように、太平洋地域においては、英語に加えて他の言語も使われるのが特徴的である²⁶⁾。

独特の外交儀礼

太平洋文化は独自の特徴的なプロトコール（外交儀礼）をもち、人々もそのことを自覚しているが、今日行われているその多くはイギリスからのものであり、もっとも精緻なプロトコールをもっているトンガでさえ、それは昔のトンガと昔のイギリスのプロトコールが入り混じったものである⁷⁾。

キリスト教信仰

キリスト教は、『パシフィック・ウェイ』の大きな部分を占める。過去150年間にキリスト教は太平洋の東から西まで、その隅々まで席卷した。キリスト教へのいくらかの反対と伝統的な信仰と慣行の混入があったものの、現在の太平洋文化にはイギリス以上にキリスト教の影響が見られる。ほとんど何もかもが、祈りから始まるのが『パシフィック・ウェイ』である。これまで、その祈りはキリスト教の祈りであったが、近年キリスト教到来以前の土着の宗教が見直され、次第に土着の神々が信仰されるようになってきている。また、最近では、信仰に基づく活動が減少する傾向にあるが、それでも太平洋社会は一般に信仰心の篤い社会である。19世紀はヨーロッパ型のモデルが追求されてきたが、特殊太平洋的なキリスト教信仰の形が現れ、増加する傾向にある⁸⁾。

5. パシフィック・ウェイの機能

クロコーム論文は、最後に「パシフィック・ウェイは、ここからどこへ向かうのか？」として、次のような内容の文章で結ばれている。そこでは、主として機能面に焦点が合わされ、『パシフィック・ウェイ』が把握されている。

パシフィック・ウェイの発展は、「共通の必要という現実」と「共通の行為による達成」に大きく左右される。太平洋の島々は広大な海域に散在し、文化や経済の相違があまりにも大きく、その結びつきはあまりにも多様であり、植民地時代の国や新植民地地の力があまりにも強く、そのため、パシフィック・ウェイが統一の形（a unitary pattern）になっている。しかし、一方で、似たような表現があちこちで見られるということもでき、パシフィック・ウェイの主要な特徴はさまざまな言語と多様な地元社会の文化の受容である。

多くの人々にとって、村や地域や島が今でも最大の関心事であり、新たに独立した国の政府は国としてのふるまい方（a national way）、国民的アイデンティティー、そして国民統合をしばらくのあいだ強調するものである。太平洋諸国の指導者たちは、統合の必要を見、みずから強い交渉力を蓄えようとし、共通のアイデンティティーに発する信頼を広げようとする。そのために、彼らは賢明にも類似性や単一性の象徴を引っ張り出し、そのいずれもが太平洋地域の共通の関心事の網を引き出し、そして太平洋的なものを外国のものから区別した。パシフィック・ウェイは、こうして、共通の環境と文化経験の一部となった。それは一つには同じように植民地経験をしたことへの共通の反発であり、また新植民地主義による搾取についての共通の憂慮からその強さをひきだしている。そして、太平洋の外からの圧力に共通して直面するときの統合の焦点となる。

パシフィック・ウェイという言葉は、太平洋世界を変えはしないが、太平洋島嶼人の自信を増し、進むべき進路についてのいくつかの方向感覚を与え、そして大いに必要とされる統合の要素として役立つ。さらに太平洋諸国の指導者たちが設定した目標のいくつかを、少し早く、そして少し効率的に達成する役に立つだろう⁹⁹。

このように、『パシフィック・ウェイ』は、まず基本的に、さまざまな多様性をもった太平洋島嶼諸国・地域の統合の象徴であり、その統合の必要性は、それぞれの国の内側と外側の両面に向かっている。すなわち、内においては、自分の住む村や島の住民という地元意識の強い国民に国

家というものを意識させ、国民統合を達成するシンボルとして、そして外においては、小さな太平洋島嶼諸国の地域の連帯を推し進め、旧宗主国を中心とする先進諸国に対抗して国際政治の上で影響力を高めるための地域統合のシンボルとして、『パシフィック・ウェイ』は機能する。それは、国内においては伝統や伝統的制度を規定した憲法という形で、国外すなわち地域の連帯という点では、南太平洋フォーラム（SPF）をはじめとする地域国際機関として具体化するのである。

こうして、国家統合、地域統合の象徴として『パシフィック・ウェイ』は機能するが、さらに太平洋諸国の指導者たちが設定した目標、すなわち「近代化」の達成の促進とその効率化に資することも指摘される。確かに、太平洋流のやり方は、西洋先進国流の近代化にとっては、明らかに阻害要因となろう。しかし、太平洋には太平洋のやり方があり、太平洋風の近代化もあり得よう。それは、今日の太平洋島嶼諸国の現実を見れば明らかのように、着実にその生活の中には近代化の産物である自動車やコンピューターや電話が入り込み、政治においては立憲主義の下で議会制民主主義が一般化し、経済においては貨幣経済・市場経済が広く行われている。その歩みは、先進国ほど速くはないが、着実な進展が見られることは疑いない。こうした、穏やかな歩みこそ、マラがはじめて国連総会演説で使用した文脈における『パシフィック・ウェイ』にもっとも近いものではないだろうか。

統合の象徴としての『パシフィック・ウェイ』が強調されるあまり、この言葉のもつもう一つの意味、すなわち「平穏な方法」という側面がないがしろにされてはいないだろうか。ここにこそ、まさしく「太平洋流のやり方（方法）」があり、これが『パシフィック・ウェイ』の下に統合された国家及び地域国際団体の目標達成に至る方法を規定する、と考えられるのだ。太平洋地域の政治文化・法文化を考える際に忘れてはならない視点の一つである。ここに、『パシフィック・ウェイ』を再考し、

さらにこの概念の今日的意味をこれからも追求していく意義が認められよう⁹⁰。

(注)

(1)この言葉がマラ自身の造語であり、演説原稿はマラがそのスタッフとともに、演説前の2日間で準備したことが、その自伝の中に記されている。Ratu Sir Kamisese Mara, *The Pacific Way—A MEMOIR*, 1997, University of Hawai'i Press., p.117, p.120.

(2)これまでにわが国においてもクローム教授のこの論文をもとに『パシフィック・ウェイ』を分析した先行研究がある。しかし、筆者とは分析の視点を異にしている。(西野照太郎「パシフィック・ウェイの分析」、『南太平洋の政治社会学 - 社会構造と指導者分析』、オセアニア研究所、所収、pp.120-132、1983年。)

(3)『オセアニアを知る事典』(平凡社) 1990年、p.217。この説明の中で、引用のごとく記述されている<南太平洋の島々は、・・・近代化に手をつけよう>の部分は、マラ演説の中に見いだすことができない。後掲付録、「マラ首相の国連演説」参照。

(4) Mara, *ibid.*, p.238. これ以外に、マラ自身がその自伝の中で、次のように『パシフィック・ウェイ』に言及した一節がある。ここでも、会議が平穩のうちに進行し、過激な態度をとらなかったこと、すなわち『平穩な方法』であったことを『パシフィック・ウェイ』と呼んでいる。

「会議はことのほか成功した。議事が順調に進行し、参加の代表団も楽しただけでなく、全体を通して極めて平穩のうちに当初の目的が達せられたのは私自身びっくりするほどであった。銃口を突きつける、といった過激な態度をとったわけではない。『これこそがパシフィック・ウェイだ』と、コナテ事務総長はファミリーの一員として好意的にいてくれた。私自身もまた、そう思った。」(Mara, *ibid.*, p.179.)

なお、この国連演説の中で、クック諸島も独立へ移行したとされているが、クック諸島の場合はニュージーランドとの自由連合国という形態をとり内政自治を行っているため、他の例示された国々(=主権独立国)とは、その国際法上の地位が異なっている。(東 裕「クック諸島は独立国か——主として比較憲法の視点から」、『南太平洋シ

リーズ 』、No.217、1999 年 5 月号、pp.3-15)

(5) Ron Crocombe, *The Pacific Way : An Emerging Identity*, Pacific Perspective, Vol.4, No.1&2., 1975., p.4.

(6) Ibid.,p.4.

(7) Ibid.,p.4.

(8) Ibid.,pp.4-5.

(9) Ibid.,pp.5-7.

(10) Ibid.,p.7.

(11) Ibid.,pp.7-8.

(12) Ibid.,p.8.

(13) Ibid.,p.9.

(14) Ibid.,p.10. この具体例として、次のような事例が紹介され、このようなパシフィック・ウェイの現実に対して、辛辣な見方が提示されている。

ハリケーンで倒壊した家や畑を早急に修復しなければならないのに何日もクリケットに興じるサモア人。ハリケーンが接近しているのに座り込んでカバを飲みながら笑っているフィジー人。仕事が退屈だからといって、求人をつる断る失業中のトンガ人。これらは、無頓着な無責任感覚に結びつく。何もかもを階層の上の人々、すなわち酋長や、政府や、神に任せているのだ。特に酋長制の社会ではこの傾向が強い。平民には何を始める力もなく、また何かをやるとうことは不適切なことだと見なされている。彼らの仕事は、すべきことを指示されるまで待つことであった。こうした傾向が、今でもパシフィック・ウェイの中にいくらか残っている。さらに植民地時代に責任をもつ立場から除外されてことと、高等教育を受ける機会を排除されたことの影響も加わっている。そこで、今日、パシフィック・ウェイを一言で言うなら、多くの人々が、それが学生であれ、役人であれ、また大臣であれ、自分の宿題をきちんとやらないということである。太平洋全域にわたって、個人であると、国家であるとかかわらず、効率的に準備するとか計画するということが欠落している。

(15) Ibid.,p.11.

(16) Ibid.,p.12.

(17) Ibid.,p.11.

(18) Ibid.,p.12.

(19) Ibid.,pp.12-13.

(20) Ibid.,p.14.

(21) Ibid.,p.14.

(22) Ibid.,p.15.

(23) Ibid.,pp.16-18.

(24) Ibid.,pp.18-19.

(25) Ibid.,p.19.

(26) Ibid.,p.20.

(27) Ibid.,p.20.

(28) Ibid.,pp.21-22.

(29) Ibid.,pp.22-23.

③〇筆者の知るかぎりで、これまでわが国の文献で『パシフィック・ウェイ』に言及したものの中で、『パシフィック・ウェイ』は次のように把握されている。

「パシフィック・ウェイあるいはメラネシア・ウェイが提唱されている理由は、西洋的原理による国家建設が行われてゆく過程で、いかにして民族的アイデンティティ、つまり社会統合を守り得るかという危機意識のあらわれであるという点にもとめられ、それが、「外部世界よりも、南太平洋の内部で、非常な反響と新鮮な感受性で受け止められた経緯は、南太平洋人の混迷に対して、ひとつの展望をあたえるニュアンスを含んでいたからである。ところが、「パシフィック・ウェイとは、必ずしも明確な原理や政策に彩られているわけではなく、「政治イデオロギーとして位置づけ得る内容を有しているわけでもない」が、「南太平洋人がこのスローガンに、強い心理的共鳴を有していることは明らかである。」(高橋康昌、「島嶼国のめざす国家像と国際組織」・総論」、『南太平洋の政治社会学——社会構造と指導者分析』、オセアニア研究所、所収、1983年、p.117。)

「太平洋諸島が構成する地域的なアイデンティティを、推進する政治的意図をもつ概念」(p.120)であり、また、「伝統的な制度や文化の保護と活性化を、近代的な国家建設と調和させたいという理念」(p.130)でもある。(西野照太郎、「島嶼国のめざす国家像と国際組織・パシフィック・ウェイの分析」、『南太平洋の政治社会学 - 社会構造と指導者分析』、オセアニア研究所、所収、1983年)

「旧宗主国との協調により経済支援を引き出し、一方では、島嶼ナショナリズムを昂進させながら国家建設を進めるSPF方式が、フィジーのマラ首相が言ったところのパシフィック・ウェイだと理解することもでき」(p.116) それが「太平洋島嶼地域の共通の利害を集結し、地域団結のスローガンとして用いられることになる」(p.109) (小林泉『太平洋島嶼諸国論』、東信堂、1994年)

パシフィック・ウェイは、「民族的アイデンティティの確認を通じた社会統合を維持しつつ、地域協力による新しい国家像の追求」(p.222)のために提唱されたもので、マラ首相の国連演説におけるパシフィック・ウェイへの言及は、「地域的アイデンティティを主張した太平洋諸国の姿」(p.238)を表すものであった。パシフィック・ウェイは、「それぞれ自国の自立経済の確立と地域協力による広域経済の追求」(p.239)の手段でもあり、パシフィック・ウェイの理念と実践は、次のような3つの次元で意義を持つものであった。つまり、「国際政治の次元で、南太平洋の利害を主張し、統一行動をとるべく結束し、そして外からの圧力に対して防壁をつくり上げ、さらに国際社会での発言力を発揮すること」、「外国資本の行動に対し規制を加え、外国からの援助と地域の経済開発に則したものに修正するための自立の理念として提唱され、実体化されること」、そして「支配者にとっての域内統一の原理としての確認」すなわち「太平洋社会のアイデンティティ」の確認(pp.241-2)、である。(浦野起央『国際社会における小国』、南窓社、1992年)

(付録)

次に掲げるのは、1970年10月のニューヨークにおける第25回国連総会におけるマラ演説の原文である。この演説を含む、マラ自伝『パシフィック・ウェイ——ある回

想』の翻訳が、近く慶応義塾大学出版会より刊行される（小林 泉・都丸潤子・東 裕 共訳）。

マラ首相の国連演説（1970年）

議長並びに各国の代表の皆様

まず最初に、今日ここに演説の機会をお与え頂いたことに心より感謝の意を表します。先週、皆様方が私たちの国を、大変寛大にかつ暖かく迎え入れてくださった時に、出席できなかったことが唯一の心残りであります。私の欠席は、皆様方のすぐれた会議に対する非礼によるものではないということをきっとご理解頂けるものと思います。その理由は、私たちの島々の伝統によって従わざるを得ない歓待の習慣によるものでした。というのは、私たちは、私たちの先祖がその自由意思に基づいてフィジーを割譲したビクトリア女王の直接の子孫の歓迎のさなかにあったからです。私たちの求めに従って、また何の留保もつけずに、私たちに自分たちの運命を決める責任を与えてくれたのが女王陛下の政府であり、彼はその女王陛下の任命代表であったのです。

しかし、私は皆様方の20周年の記念すべき年に総会に出席できたことを心より嬉しく思い、フィジーのすべての国民からの皆様方へのあいさつの言葉と暖かい祝福の言葉を携えて参りました。その中には特に、きわめて密接かつ建設的に私たちの国の憲法的発展に手を携えて取り組んできた野党の代表であるS.M.コヤ閣下と彼の政党からのあいさつが含まれています。

私はまた、議長に、その職に当選されたことに対し、心よりお慶びを申し上げたいと思います。私たちはこのように新しいメンバーではありますが、あなたの寛大さと高い評判についてはすでに存じ上げています。そして、あなたが重要な任務を十分に遂行されることと期待します。

私たちの大使が、国を代表してフィジーの国連加盟に感謝を述べた直後にもかかわらず、私に演説の機会を与えて下さった皆様の親切に気がついております。そのため、大使と同じことを繰り返すのを躊躇します。しかし、私たちの支持者並びにこのように多くの加盟国の双方からフィジーに寄せられたもっとも親切で暖かい歓迎の言葉に

対し、私が何もふれなかったり、極めて手短にふれることは、礼を欠いたことになるでしょう。大使にとっては、演説の原稿を読み上げることさえ感動的な経験でありました。そしてここにいる私たちの大使は、私に演説の場そのものの大変な暖かさと誠実さについて私に話しておりました。私は、何人かのメンバーから私自身に、そしてコヤ氏について寄せられた親切な言葉に対し、心より感謝の意を表したいと思います。

この大都市の天気さえ我々の加盟を歓迎し、微笑んでいるように見えます。

私たちは、統合された複合人種社会をもちながら幸福かつ平和裡に独立国家へと移行したことを意識しています。このことは世界中でもおそらく共有されるべき高い価値をもったものであるといわれます。それゆえ、私たちがこれを守り大切にすることを国連が援助してくれることを期待するとともに、おそらく、この国連というすばらしい組織に対し、私たちが最大限の貢献ができるよう援助してくれることを期待します。フィジーに対して示された皆様の暖かい歓迎と明らかな善意は、私たち自らを卑小な存在と見るべきではないという証拠です。

多くの演説者の方々が、私たちの平和裡の独立への移行について言及されてきました。そして、私たち自身が、このような私たちの幸運について深く感謝しています。しかし、これは太平洋にとって目新しいことではありません。同様の平穏で整然とした独立への移行は、西サモア、クック諸島、ナウル、そしてトンガでもあったことです。私たちは、地理的及びイデオロギー的の両面で、これがパシフィック・ウェイ（Pacific Way）であると考えたいと思います。私たちが、（太平洋地域の）友人や隣人から授權された限りでは、私たちがみずから、いかなるリーダーシップをとることをも認められていませんが、私たちは友人や隣人の声の代表として、そしてその声を分かりやすく伝える者として行動したいと思うものであります。

議長並びに代表者の皆様、皆様方の多くにとって、独立の際の初めてのスリルの記憶は、時の経過の中でかすんでしまったことでしょう。私たちの経験では、独立の感情は、ジェット機の窮屈な客席から離れる時のような気持ちにいくぶん似ています。まず、元気づけに新鮮な空気を深呼吸し、次に慎重に地面にむけてタラップを降りたとたんに方角がわからなくなり、荷物をもってくれる手が差しのべられる——そ

して次に、私は、なんと死に物狂いの競争の場にいるように思えるのです。

私たちの独立祝典には多くの注目べき出来事がありました。英国王子への威厳に満ちた伝統的な歓迎があり、そこには公式の歓迎式では初めてすべてのコミュニティーの人々が一堂に会しました。王子による独立のための憲法的文書の交付があり、フィジー国旗が高々と掲揚され、静かに見守るフィジー国民の頭上に翻りました。しかし、私たちの記憶に残るであろうその出来事を越えるものが、独立の次の日曜日の朝の私たちの全教会の礼拝でありました。すべてのキリスト教会、さまざまなヒンズー教およびイスラム教の宗派の代表者が集まった大礼拝が行われました。祈りがあり、そして各宗派の聖典がヒンズー語、ウルドー語、フィジー語、及び英語で読み上げられました。各宗派の聖典が読み上げられるごとにそれが首相の私に与えられ、式の終わりには私の前には聖書、ベータ、ギータ、ラーマヤナ、及びコーランと一緒に置かれていました。それから、最後に私は、ささやかな誇りを持って執り行ったのが、「一つのフィジー国民」と平和への願いを込めて神に祈る礼拝の大集会を主宰することでした。私たちは、まさにこの調和と寛容と信頼と、そして神への帰依という精神をもって独立へと移行したのでした。私たちは、この礼拝が将来の統合と信頼のためであったこと、そしてそれが私たちの力の及ぶかぎり、私たちの約束を永続的な現実へと変えることを決定したと信じています。

私は、世界の人々の平和と進歩のために貢献しているこの大きな広場で、世界の事らについて2、3のコメントをあえてしてみたいと思います。そして、今だけ、皆様方は、「小さな子供は見られるべきであって、聞かれるべきではない」という教えを放棄することを期待します。私の指摘は、太平洋のはるかかなたの一小国から大変な謙虚さをもって行われるものであります。しかし私たちの遠く離れたところからの展望は、近くから見ている多くの国々からの見方とは違った見方を与えてくれます。それゆえ私たちの見解は興味あるものとなるでしょう。

第一に、私たちは今、個人の自由と表現の自由への深い関心の中で、社会を構成する多くの人々よりも個人に重点を置き過ぎてこなかったかどうかということです。怒れる若者を甘やかし過ぎ、「風変わりな」若者、そして独自の目的を持った小さな軍事

集団が、全体として着実な社会の進歩に、そしてとりわけ世界中の穏やかで勤勉な人々の大きな集団に対し、反発してきたのではないのでしょうか。もし、私たちが、私たちの時間とエネルギーのもっと多くを全体の進歩と改善に捧げるならば、私たちの総体的な達成はもっと大きくなるでしょう。

第二に、国連の努力の多くは、世界の人々の物質的な福祉の向上に集中されてきました。そして、第二の 10 年間の経済発展の青写真を示した第二委員会の遠大で想像力に富んだ報告をたった今読んだところです。そこで、この優先順位を問うことは、しばしばその恩恵の限界にあった、フィジーのような小さな国にとって、不愉快に思えるかも知れません。しかし、これらの計画の多くは、それ自体歓迎されるものではありますが、一国の境界内に限られています。他方、精神的・道徳的価値には国境がなく、そしてこれらを支持し促進することによって、私たちは真に国際的な道を行くことになります、そしてそのことは一つの世界という概念に他の何よりも現実性を与えることになります。私たちは、パンのみにて生きるものではありません。そして、私たちが意義のある経済的進歩を続けることができるのは、しっかりとした健全な道徳と精神的規準に基礎を置くときだけに限られます。

そして、最後にその規準については、それを一小国の代表としていくぶんかの遠慮と共に言うならば、私たちが一つの社会とそこでの生活を評価するときに、質を量の二の次に置くべきではないという見解を提示してよいでしょう。質は規準によってはかれ、そしてこうした規準は大国だけでなく小国によっても監視されなければなりません。私たちが捜し求める広い概念は、効率的な政府、教育、及び社会正義です。しかし、その規準を設定し、そしてそれらを広く普及させるのは国連の役目です。にも関わらず、人々や行為に関する間違った規準や誤った評価が余りにも安易に流通し、一般に受け入れられるようになっていきます。

しかし、規準の設定は、世界のあらゆる地域の諸問題の普遍的な解決策であると見なしてはなりません。諸問題にはそれぞれに特有の診断法があり、特別なケースには特別な治療法があるにちがいありません。一般的に言って、寛容、調和、そして正義は間違いなく普遍的な規準に違いありません。そしてそれらは、複合民族社会を持っ

た私たちの小さなフィジーにおいては間違いなく目的とされるものです。しかし、これらの目的を達成するために、私たちは私たち自身の固有の解決策と政治の枠組みを生み出さなければなりませんでした。私たちはこれを諸政党間でのギブアンドテイクと善意で、そして英国の励ましと理解とそして同情的な援助のもとに実行しました。

英国は、植民地システムそれ自身に固有の欠点から完全には免れてはいません。他の宗主諸国と同じように、彼らの政策は、彼らの概念、彼らの価値、彼らの行動様式に基づいて行われてきました。彼らは常に人々の感情、習慣、そして生活様式に正当な考慮を払ってきたわけではありません。優越感があり、傲慢がありました。過剰な指令があり、参加の機会は余りにもわずかでした。しかし、こうしたことをすべて語った時、後に残るのは英国の正義であり、フェアプレイの精神であり、法の支配への尊重であり、基本的な礼儀正しさであります。これらは彼らがフィジーに残したものであり、最もすばらしい記憶となるでしょう。私たちが、新しい独立国フィジーの国旗に恒久的な一部としてユニオンジャックをとどめたのはこれらの資質によるものです。

しかし、私のテーマに戻ると、権力争いも恨みもなく独立へと移行することを可能にした寛容、調和、そして正義というこれらの規準を大きなものさしとすることができたのは私たちの成功でした。そしてこれは私がすでに述べた理由によるものであり、私たちはこの輝かしい総会において、明らかに与えるよりも、より多くのものを得なければなりません。それにもかかわらず、私たちは自分たちの小さなフィジーという国が、国連に貢献し、そして、その高邁な目的を推進するために、私たちの役割を果たすことを楽しみにしております。

議長様、各国の代表の皆様、ありがとうございます。

(Ratu Sir Kamisese Mara, *The Pacific Way — A MEMOIR*, 1997, University of Hawai'i Press., pp.237-41.)

(ひがし ゆたか・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

エドモンドに投影されたイアーゴの影

The Figure of Iago as Reflected on Edmund

嶺 金 治

Kinji MINE

キーワード：戯曲、シェイクスピア、『オセロ』、『リア王』、
エドモンド、イアーゴ

要旨

『オセロ』における Iago の Othello、Cassio に対する企みの手口と『リア王』における Edmund の Gloucester 伯とその嫡子 Edgar に対するそれとは、極めて共通しているところがある。Iago と Edmund が、それぞれ陥れようとする相手を確信させるために、秘かに立ち聞きや観察できる場を設定するのが、その最たるものである。彼らに共通している点は、表裏の乖離した利己主義者であること、相手を見抜く洞察力にすぐれていることである。Edmund の悪は、悪のために悪を愛する Iago のそれとは、本質的な違いはあるが、すぐれた洞察力と表裏の乖離した利己的な言動には共通するところがある。

序

Iago は、人を描き続けた Shakespeare の創り出した悪漢のうちでも傑出した悪漢の一人である。悪知恵にかけては鋭敏で意図した目的に向って、それも合理的に手際よく運んで行く。しかも表裏の乖離した人間でありながら、そうでないような言動をする。彼が極悪非道の人間であることは、最後の上壇場まで分らない。Iago のように巧妙に人を欺く人間が悲劇において劇的効果をあげることに気をよくしたのか Shakespeare は『リア王』において、父親の Gloucester 伯とその嫡子 Edgar を陥れて、その領地と地位を横領し、更に時勢を利用して王座を狙う野心家の Edmund に再度用いている。Gloucester 伯の庶子 Edmund は、人物および人を欺す方法、言動が Iago に極めて似ている。そこで、ここでは Edmund に投影されている Iago の影について述べることにする。

(I)

Iago は合理的な知恵者を自認する人物であり、しかも徹底した利己主義者である。彼はヴェニス公國の雇われ將軍 Othello の副官の地位につくためにヴェニスの三人の高官の推薦を得ていたが、Othello が既に Cassio を副官に決めてしまっていたことから止むなく旗手におさまることになる。優れた知恵を持っていると自認する Iago は威厳を傷つけられたことに対して不満を抱くばかりではなく、嫉妬からというよりも怒りから Othello と Cassio を憎むようになる。

本来、利己主義者である彼は、この劇が始まる前からヴェニス公國の元老院議員 Brabantio の一人娘 Desdemona に恋慕している Roderigo の取り持ちをするということで、彼から金を巻き揚げている。Desdemona が Othello のもとへ駆け落ちしたことで Roderigo に非難されると、悪知恵の働く彼は Brabantio 邸の前で大声で Desdemona の駆け落ちを知らせるように Roderigo に囁ける。その際、彼も卑猥な言葉で Desdemona の駆け落

ちを告げて Brabantio を激怒させ、追っ手を出すように仕向ける。公国の有力な元老院議員 Brabantio をして Othello を罷免させ、彼に対するうっ憤を晴らすのが本音であるが、Roderigo に対しては誠意と思わせる言動である。

偉大で勇敢な Othello は堂々として Brabantio に伴われてヴェニス太公の前に出頭し、Desdemona が魔法によるものでなく、心から慕って Othello のもとに駆け落ちしたことが分り、落胆しつつも彼女を Othello に差し出し、事件が落着くと、失望して自殺すると言う Roderigo に対して利己的で冷静な Iago は、金を用意し変装して Othello と Desdemona の後を追ってサイプラス島へ行くことをすすめる。Roderigo が承諾すると Iago は独白する。

Thus do I ever make my fool my purse;
For I mine own gain'd knowledge should profane,
If I would time expend with such a snipe,
But for my sport and profit. I hate the Moor;
And it is thought abroad, that 'twixt my sheets
He has done my office: I know not if 't be true;
But I, for mere suspicion in that kind,
Will do as if for surety. He holds me well;
.....
To get his place and to plume up my will
In double knavery.....
After some time, to abuse Othell's ear
That he is too familiar with his wife,
.....
The Moor is of a free and open nature

That thinks men honest that but seem to be so,

(.iii. 389-406)

このようにして、いつも阿呆が俺の財布になる。

あんな間抜けの相手で、時間をつぶすなら

慰さんで巻き揚げなけりゃ

俺の知恵の威厳にかかわる。ムーアは憎い。

俺のふとんにもぐり込んで、俺の代理を

勤めたという噂もある。本当かどうかは知らない。

しかし俺はそんな噂を聞いただけで

実際にあったことと思う。彼は俺を信用している。

.....

キャッシュの地位を奪って、二重の悪巧みを

思う存分仕上げたい。.....

もう少し経ったら、オセローの耳に

彼が奥さんと仲が良すぎるとざん言してやる。

.....

ムーアは人が好くて、大まかだから

見かけさえ正直そうなら、正直だと思う。

彼が人にまさる知恵者であると自認していることがこの独白から分る。確かに Iago は人に倍する知恵と洞察力を持つ人間として Shakespeare によって創造されている。それに比べて Roderigo は、Brabantio に断られているにもかかわらず、Desdemona にのぼせているばかりではなく、生来の愚鈍な人間である。Iago から見れば、彼は金づるに過ぎない財布同然の阿呆である。彼は Iago の悪知恵にはまり、思いのままに操られ、最後には Iago に殺されることになる。

Twisted nature の Iago の悪意は更に Othello に対する憎しみを正当化す

るために、彼に cuckold されたという噂を、実際にあったこととして無理に受け止めようとする。Coleridge の言ういわゆる the motive-hunting of a motiveless malignity⁽¹⁾ である。motive-hunting は Othello だけに止らず Cassio にも及ぶ。それは彼の double knavery を正当化するためである。

double knavery とは、この場合 Cassio の副官免職と 'put the Moor / At least into jealousy so strong / That judgement cannot cure.' (.i.309-11) 「ムーアに、思慮分別では押えきれない程強烈な嫉妬を起させる位のことをしてやる」ということである。その方法として「キャシオーがデスデモナーと仲が良すぎる」とざん言するというのであるが、そのために彼は motive-hunting に専念すると共に Othello の性格を見極め、それを大いに利用しようとする。

悲劇における独白は、困難な問題を解決しようとする時、独白者にその意図を表明させることが Shakespeare の方法である。Iago も突発的な事件には彼の知恵を働かせて臨機応変に対処しつつ、独白通りに実行する。

一方、『リア王』における Edmund は庶子という運命が社会の慣習によって base (下賤) というレッテルを貼られ、嫡子と違って種々の権利を与えられない事に不満を持っている。Edmund は独白する。

Why brandy they us

With base, with baseness? bastardy? base, base?

.....

Legitimate Edgar, I must have your land:

Our father's love is to the bastard Edmund

As to the legitimate:.....

Well, my legitimate, if this letter speed,

And my invention thrive, Edmund the base

Shall top the legitimate. I grow; I prosper:

Now, gods, stand up for bastards!

(.ii.9-22)

なぜ世間は我々に焼印を押すのか、
下賤だとか、下卑だとか、庶出だとか、下賤、下賤といって、
.....

嫡出のエドガー、君の土地は俺が手にいれてやる。

父親の愛情は、庶子のエドモンドに対しても

嫡子に対しても同じだ。.....

よし嫡子、もしこの手紙がうまく行き、

俺の計画が成功すれば、下賤なエドモンドは

嫡子に追いつくぞ。俺は偉くなる。出世するんだ。

さあ、神々も庶子たちに味方したまえ。

Edmund のこの独白から、庶子として生れた彼が中世社会の慣習によって権利が与えられず蔑まれ、出世の道が閉されていることに不満を覚えているどころか大いに憤慨していることが窺われる。そこで彼は嫡子 Edgar を陥れることを考える。方法は偽の手紙である。実は嫡子 Edgar の陰謀を思わせるような自作の偽の手紙である。Edmund は、この手紙を父親の Gloucester 伯がどうしても見たがるような言動をとることによって、遂に嫡子 Edgar を追放させることに成功する。

Iago の不満が自己中心的で、その視野も狭いのに対して Edmund のそれは彼が「神々も庶子たちに味方したまえ」と言っているごとく、庶子である彼自身に限らず、庶子全員に神々の加護があるように願っている。つまり、彼は彼を含む庶子全員に対する社会の慣習と偏見に反発しているのである。『リア王』の世界が『オセロー』のそれより遥かに大きいと評される一つの要素ともなっている。但し両者が利己主義者であることに変わりはない。つまり、Iago は副官の地位についた Cassio を引きずり降

ろし、副官にした Othello にその腹いせとして嫉妬心を起させようとするのに対して、Edmund は父親を欺して嫡子 Edgar を陥れて、家督相続の権利を剥奪せしめて、代りにその権利を得ようとするからである。Iago も Edmund もすぐれた観察眼と洞察力を持っている。

Iago は Cassio が好男子ではあるが ‘rash and very sudden in choler’ (.i.280) 「気が短くて怒りっぽい」こと、Othello が人を表面だけしか判断できないお人好しの大まかな人間であることを見抜いている。彼は Cassio および Othello の性格を自分の奸計に利己的に利用する。財布として利用している頭の悪い Roderigo を唆けて Cassio を激怒させ、制止する Montano に傷を負わせる。その結果、副官の免職となる。酒に弱い Cassio を酔わせておいて陥れた彼の策略である。

一方、Edmund もすぐれた洞察力を持っている。彼は自作の偽の手紙で嫡子 Edgar が謀叛人であることを意図的に書いておきながら、不審の念を抱く Gloucester 伯に対しては、ひどく Edgar を庇うので、Gloucester 伯は嫡子 Edgar に対する疑惑を深め、激怒する。二面性を持つ彼は Edgar にも父が彼に対して激怒していることを信じ込ませることに成功すると、次のように独白する。

A credulous father! and a brother noble,
Whose nature is so far from doing harms,
That he suspects none: on whose foolish honesty
My practices ride easy! I see the business.
Let me, if not by birth, have lands by wit:
All with me's meet that I can fashion fit.

(.ii.195-200)

父は軽々しく人を信じ、兄は高潔であるので、
生れつき害を人に加えることはない。

したがって誰も疑わない。その愚直に乗じて
わが策略の進むこと容易だ。この仕事は見えてきた。
生れは駄目でも知恵で領地を手に入れよう。
うまく行けば、萬事好都合だ。

この独白で明らかであるように、Edmund も Iago のように自分の知恵を武器として善良な Gloucester 伯と高潔な Edgar を欺き、自分の利益をはかっている。置かれた自分の境遇に不満を抱き、知恵を働かしてその不満を解消しようとする点では Iago と Edmund に共通したところがある。

(II)

Iago も Edmund も置かれている境遇から知恵を働かして脱出することを意図しているのだが、両者の悪知恵は、行動に移す時、表面は誠実そうに装うことである。

Iago は Othello のもとへ駆け落ちした Desdemona に恋慕する Roderigo を欺す時には、Othello の旗手になってはいるが 'I am not what I am.' (.i.65) 「俺は見せかけとは違う人間だ」と言い、'Yet, for neccesity of present life, / I must show out a flag and sign of love, / which is indeed but sign.' (.i.156-8) 「でも現在の生活のためには、俺は旗を擔いで忠義の看板を出しておかなければならない。それは実際、看板に過ぎないよ」と述べている。阿呆だと思っている Roderigo を欺す時は、本音を述べて信用させ、Othello に対しては、最後の土壇場まで honest Iago である振りをしている。Desdemona の駆け落ちを知らされた Brabantio が追っ手と共に追跡する段になると、Othello のもとに逃げ帰り、Roderigo には Othello の宿を教える。Roderigo に案内されて Brabantio が追っ手と共に姿を現わすと、'You, Roderigo! come, sir, I am for you.' (.ii.58) 「やあ、ロダリーゴー、来い、俺が相手だ」と言う。こういう具合に、Othello には常に忠実であ

るように見せかける表裏の乖離した二重性を持つ人間である。

一方、Edmund の意図は、前述した通り Edgar を陥れ、嫡子の権利を横領することであるにもかかわらず、父に対しては Edgar を庇う言動をするところが、表裏の乖離した Iago を思わせる。更に Gloucester 伯と Othello の疑惑を決定的にする手紙とハンカチの入手場所であるが、Edmund も Cassio もそれぞれ一番くつろげる自分の部屋で発見する。Edmund は 'I found it thrown in at the casement of my closet.' (.ii.64-5) 「私の部屋の窓際に投げこんでありました」と説明し、Cassio は 'I found it in my chamber.' と述べている。手紙の内容を知って激怒する Gloucester 伯を宥めながら Edmund は自分の企みを確かなものにするために 'I will place you where you shall hear us confer of this, and by an auricular assurance have your satisfaction.' (.ii.97-100) 「私が、われわれがこのことを話し合うのを聞ける場所にお連れいたします。そして自分の耳で確かめ、満足のいくようにしてください」と言い、Glocester 伯の同意を得、自分は Edgar を探すことにする。Edgar に会うと、父の機嫌がよくないから 'at my entreaty forbear his presence till some little time hath qualified the heat of his displeasure.' (.ii.175-7) 「どうか、しばらく経って父上の不機嫌の熱がさめるまでお会いにならないでください」と言い、自分の部屋に隠れているようにすすめると共に、父の声が聞えるように手筈を整えることを約束し、更に 'if you do stir abroad, you armed.' (.ii. 186) 「外に出る時は、武装して出なさい」と忠告する。彼のこのような言動は、Iago の投影である。つまり、彼は Gloucester 伯に嫡子 Edgar が直接面談する機会がないように配慮しているのである。

Iago は Othello に Desdemona が不貞だという生きた証拠を見せろ、と迫られると、Cassio が寝言で言ったという Desdemona との情事を述べ、Othello が贈った記念のハンカチで Cassio が髭を拭いているのを見た、と言い、Othello の嫉妬を煽り、屈辱のあまり気絶した彼が意識を取りもど

して、来合わせた Cassio と直接話すことを恐れて Cassio を立ち去らしておいて Othello が意識を取りもどすと、Desdemona の不貞を更に確信させるために、隠れて Cassio との話を観察させることにする。Othello には Cassio と Desdemona の情事についての話であると言い含めておいて、実は Cassio とその情婦 Bianca についての話をするのだが、Bianca についての話になると、Cassio の一挙一動が観察している Othello には堪えられない屈辱となり、遂に 'I would have him nine year a-killing' (.i.188) 「あの男を九年殺しにしたい」と言わせ、Desdemona を殺害する決心をするに至る。Iago の気転と悪知恵は、陥れようとする相手の現状と性格を見抜く洞察力によるものと言える。

一方、Iago の性格を投影されている Edmund は Lear 王の来訪を避けて Gloucester 伯の居城を真夜中に、しかも急に訪れて来る Cornwall 公夫妻を利己のために利用する。彼は Edgar に逃げることをすすめ、Cornwall 公の悪口を言わなかったか、とか Albany 公の悪口を言わなかったか、と問いただし、斬り合う振りをしなければならないと言って、その振りを見せながら、小声で逃げることを促す。しかも恰も負傷したかのように自ら腕に傷をつけ、Gloucester 伯には、武装した Edgar が、父上の殺害を私に説き伏せることができないと分ると、深傷を負わせて逃走したと報告する。Gloucester 伯は、嫡子 Edgar を人殺しとして追跡させ、勘当するばかりではなく、'of my land, / Loyal and natural boy, I'll work the means / To make thee capable.' (.i.85-7) 「私の領地については、孝行な愛情のある息子だから、お前が相続できるようにしておくつもりだ」と言う。Edmund は父と兄を見事に欺くことによって、合法的に家督相続の口約束をものにする。つまり、彼の野望の第一段階は成功する。更に来訪した Cornwall 公からは 'For you, Edmund, / Whose virtue and obedience doth this instant / So much commend itself, you shall be ours:' (.i.114-6) 「エドモンドは孝順の美德、この際、称賛に価いするので召しかかえて家来にする」とい

う評価を受けて、出世の手掛りを得る。

(Ⅲ)

Iago の次の段階は、いわゆる double knavery に取りかかることであり、Edmund のそれは更に出世することである。

Iago は、副官免職のため意気消沈している Cassio に復職の取り成しを將軍の將軍とも思われる Desdemona に依頼することをすすめる。狡猾な彼は Cassio に対しては自他共に大切な親友であると思わせるような言動をする。Othello に対しては忠実で誠実な部下であるように振舞う。酔った Cassio が Montano に傷を負わせた時も Othello に問いただされると Cassio を庇い、Othello をして

I know, Iago,

Thy honesty and love doth mince this matter,

Making it light to Cassio. (.iii.245-7)

わかっている、イアーゴ、

お前は誠実で愛情があるから、キャッシューの罪を軽くするため、

問題を小さくしている。

と、言わせている程である。人を外観でしか判断できない Othello の Iago 評であるが、悪を愛する抜け目のない Iago の真の意図は Othello の裏をかくことである。復職の取り成しを Desdemona に依頼させるのは、二人を近づけ、仲が良すぎるとざん言するための計略である。依頼を受けた Desdemona が復職をねだる時に口にした求婚の頃の Cassio のことを聞いた Iago は 'I did not think he had been acquainted with her.' (.iii.99) 「彼が奥様とお近づきだったとは知りませんでした」と、含みのあるようなことを述べ、更に 'For Michael Cassio, / I dare be sworn I think that he is

honest.' (.iii.124-5) 「マイクル・キャシオーについては、確かに正直な人だと思います」と言いながら、続けて 'Men should be what they seem; / Or those that be not, would they might seem none!' (.iii.126-7) 「人間は見せかけ通りであるべきだと思います。そうでない人は正直そうな顔をするのはやめてもらいたいものです」と言い、Othello が 'Certain, men should be what they seem.' と応えると、'Why, then, I think Cassio an honest man.' (.iii.129) 「それなら、キャシオーも正直な人だと思います」と述べる。この対話は Othello が noble で free and open nature であることを十分見抜いた上で、見せかけが正直である Cassio は、無論正直である筈だ、と言うのであるが、その裏に、正直そうな顔をするのをやめてもらいたい人間であるという含みがある。「人間は見せかけ通りであるべきだ」という場合の「人間」とは、一人 Cassio に限らず、すべての人間を意味することは言うまでもないが、狡猾で悪知恵の働く Iago は、鉾先を Desdemona に向けて言う。'Look to your wife; observe her well with Cassio;' (.iii.197) 「奥様にご注意ください。キャシオーと一所の時をよくごらんください」、'She did deceive her father, marrying you;' (.iii.206) 「奥様はお父さんを欺して、あなたと結婚したのですよ」。Iago の時と要領をえた台詞は、Othello に疑惑と嫉妬心を起させ、'Why did I marry?' (.iii.242) 「どうして俺は結婚したのだ」と思わせるようになる。Iago の奸計にはまり、嫉妬心を煽られながらも Othello は最後まで Iago が誠実な愛情深い人間であることを疑わない。むしろその好意に感謝さえしている。それ程彼の計略は巧妙である。^②

一方、Edmund の意図は、偉くなり出世することである。彼は Curan から Cornwall 公と Albany 公が仲たがいをしていた、近い将来両公の間で戦争が起る噂を聞く。Cornwall 夫妻は Gloucester 伯の居城に招じ入れられているのだが、そこへ Goneril の冷遇を逃れて Lear 王が訪れてくる。Regan もその夫 Cornwall 公も Goneril 以上に冷遇する。激怒する Lear 王

に対して正直者の Gloucester 伯は仲たがいのないようにと、おろおろするばかりであるが、恩義を忘れた Cornwall 夫妻の冷遇に堪えかねて、Lear 王が嵐の荒野へ出て行った後、Edmund に両公爵の仲たがいがあること、と Lear 王の難儀に対して復讐するためにフランス軍が一部上陸しているという密書を受け取っていることを話し、Lear 王の救済に出かける。Edmund は父に同調して忠実であるような振りをするが、父が救済のために出かけると

This courtesy, forbid thee, shall the duke

Instantly know; and of that letter too:

This seems a fair deserving, and must draw me

That which my father loses; no less than all:

The younger rises when the old doth fall.

(.ii.22-26)

あなたに禁じられていることの忠義立ては

すぐに公爵に知らせます、その密書のことも。

これは見事な手柄になるようだ。父がなくするものを

俺に引渡してくれるにちがいない。何から何まで皆。

老人が倒れる時、青年が起きあがるのだ。

と独白して、父 Gloucester 伯がフランス軍の spy であることを密告する。これによって Gloucester 伯は叛逆者となり、Edmund は父に代って earl of Gloucester の指名を受ける。Cornwall 公に対しては 'I will persevere in my course of loyalty, though the conflict be sore between that and my blood.' (. v.22-24) 「忠義の道を一筋に進む覚悟です。忠と孝との争いが苦しくても」と忠誠な人間らしく振舞うことを怠らない。このような彼の表裏の乖離が Iago に酷似している。Gloucester 伯は謀叛人として Cornwall 公が

ら眼玉をえぐり取られることになるのだが、Edmundは上陸してきたフランス軍迎撃の準備のため、Cornwall公の命令でAlbany公邸までGonerilの供をすることになる。温厚で誠実なAlbany公と父Lear王を虐待するGonerilの間の愛情は既に冷めきっている。途中、権力欲の強いGonerilから出世欲の強い野心家のEdmundは恋を打ち明けられ、接吻を受ける。つまり、Edmundは公爵の地位が手の届くところまで来る。Cornwall公はGloucester伯の眼玉をえぐり取るという残虐な行為に堪えかねた子飼いの家来に斬りつけられて落命することになるが、その妻であるReganも権力欲があり、旭日登天の勢いがあるEdmundを好意というよりも恋慕するようになる。Lear王を追放した後、GonerilとRegan姉妹の間には明らかに王座を狙って、権力闘争が窺われる。マキアヴェリー型の野心家Edmundは、この姉妹の権力闘争を抜目なく利用して立身出世をはかる。

To both these sisters have I sworn my love;

Which of them shall I take?
 Both? one? or neither?.....

 And hardly shall I carry out my side,
 Her husband being alive: Now then we'll use
 His countenance for the battle, which being done,
 Let her who would be rid of him device
 His speedy taking off. As for the mercy
 Which he intends to Lear and to Cordelia,
 The battle done, and they within our power,
 Shall never see his pardon; for my state

Stands on me to defend, not to debate.

(.i.55-69)

姉妹二人に俺は契りを結んだ。

.....

.....どちらにしようか。

二人か、一方か、それとも両方ともやめるか、.....

.....

夫が生きていては、俺に勝目がない。それで今は

戦争には夫の権力を利用し、戦争が終わったら、

夫を避けたがっているあの女にさっさと

片づけさせよう。公爵がリアとコーディーリアに対して

施そうとしているあわれみについては

戦争がすんで、二人が虜になっている時は

赦すようなことはさせない。俺の立場は

自分の身を守ることで理屈をこねることではない。

この Edmund の独白から彼が Goneril および Regan 姉妹と夫婦の約束をしたことは明らかであるが、姉妹の方から積極的に持ち掛けられた約束で、幸運の女神にほほえみかけられた言わば幸運児である。どちらと連れ添っても、彼が伯爵の地位から公爵の地位に昇進できるチャンスがあることに変わりはない。しかし、このチャンスも実現ということになると簡単にはいかない。寡婦となっている Regan と連れ添うのは好都合であるが、姉の Goneril が黙ってはいないことは明らかである。だからと言って Goneril と連れ添うことは、主人である Albany 公が活着している限り不可能である。現在のブリテン国の最高の地位にあるのは Albany 公であるから、フランス軍との戦争では、彼の権力を利用してブリテン国を勝利へと導き、戦争が終れば、その妻である Goneril に彼を片づけさせるこ

とを考えると同時に Lear 王と Cordelia も片づけようと目論んでいる。Albany 公を片づけても、Lear 王が生存していれば、王権を取りもどし、彼の earl of Gloucester の地位も危なくなるからである。ここまでくると、Edmund は公爵の地位どころか王座が手に届きそうなところまできている。Edmund の「俺の立場は自分の身を守ること、理屈をこねることではない」という言葉は、われわれに「目的のためには手段を選ばない」というマキアヴェリーの論理を想起させる。

一方、Cassio の復職のことで取り成しをする Iago は、誰の眼にも親切で誠実な人に見える。しかし、それは表面のことで裏面は前述のごとく、Cassio を Desdemona に近づけ、二人が不倫の関係にある、と Othello にざん言するためである。堂々とした偉大な將軍であるが、人が好くて素朴な Othello は、すっかり Iago の奸計にはまり、Desdemona と Cassio の殺害を決意して、Cassio の始末を Iago に任せる。折から、ヴェニスからの使者 Lodovico が命令書を携えて到着する。Iago は Lodovico の話から、命令書の内容が Cassio が Othello の後任となり、Othello は召還されることになっていることを知る。つまり、Cassio の昇進である。このことは、心の掎じ曲った彼には堪えられない怒りとなるのだが、折しも彼が金づるとして利用してきた Roderigo が、彼の取り成しのいい加減さに業を煮やして、Desdemona と直談判すると言い出し、彼に危機が迫ってくる。知恵と機転を利かして彼は Roderigo に Cassio 殺害を持ちかけ、助太刀するからという約束で闇討ちすることを承諾させる。Iago は Othello から命じられた Cassio 殺害を Roderigo に実行させ、利己を図る。彼にとっては、相打ちになって二人共死ぬことが最も望ましいことであることは言うまでもない。Roderigo が生きていれば、巻きあげた莫大な金品の返還を要求される恐れがあり、Cassio が助かれれば、Othello が直接真相を詰問するかもしれないという危険がある。彼は、これまでも知恵を絞って、Othello が Cassio に、Desdemona との不倫を直接詰問しないように配慮してきた

のである。Roderigo の闇討ちは失敗し、逆に刺されるが、Iago は計画通り Cassio の脚を斬りつけ、闇に乗じて逃げ帰り、「人殺し」という騒ぎに目を覚めたかのように、明りと剣を持って、下着一枚の姿で現われる。現場に居合せたヴェニスからの使者 Lodovico と Gratiano から見れば、Iago はその事件に全く関係がないどころか、そのてきぱきした言動はいかにも勇敢で任務に忠実な旗手に見える。Cassio を介抱し、Roderigo を悪漢の片割れだと称して止めを刺す。Lodovico と Gratiano の前で、それが Roderigo であることを確かめ、更に Cassio が Roderigo を知らないことも確かめると、現われた Cassio の情婦 Bianca を事件に関係がある、とこじつけて引っ立てると共に Emilia には Othello と Desdemona に事件の報告をするように命じてから傍白する。'This is the night / That either make me or fordoes me quite.' (.i.128-9)「今晚が成功するのか破滅するかだ」。Iago のこの傍白には、彼の意図した double knavery の達成ばかりではなく、うまく行けば Cassio に代って Othello の後任となって出世するか、Othello が Desdemona の殺害を躊躇して、Cassio に不倫を問いただすようなことがあれば破滅になるか、どちらかだ、という考えが窺われる。

(IV)

Iago は Othello が Desdemona を絞殺してしまったこと、つまり当初の意図が達成されたことを知り、Edmund は当初の出世して偉くなるという意図がほぼ成就するところまで漕ぎつけた。

Iago は、純真無垢な Desdemona を殺害してしまってからでさえ 'My friend.....honest, honest Iago.' (.ii.154)「俺の友人.....誠実な、誠実なイアーゴだ」と Othello に信頼されながら、彼を見事に破滅させている。Iago の奸計があまりにも巧妙であったか、Othello が単純すぎたかについては、議論の余地があるとしても、悲劇は実際に起っているのである。

しかし、Shakespeare は表裏の乖離した twisted nature の Iago の罪を決してそのままにはしない。純真で天使のような Desdemona を殺害した Othello を非難する Emilia によって真相は明らかになる。更に負傷した Cassio の証言や Iago に止めを刺されて息絶えたと思われていた Roderigo が息を引き取る際に 'Iago hurt him, / Iago set him on.' (.ii.28-9)「イアゴーが自分を斬りつけ、イアゴーがけしかけた」と述べたこと、その他 Roderigo の pocket から発見された手紙によって彼の悪巧みはすべて露見する。Othello も自分の過失を知るに至る。

一方、Edmund も、乞食姿に変装して盲目になった父 Gloucester 伯を見守っていた嫡子 Edgar が、Oswald から手に入れた Goneril から Edmund に宛てられた Albany 公殺害を仄めかす恋文を、フランス軍迎撃の軍議に出かけようとする Albany 公に手渡すことによって、高潔、温厚な彼の知るところとなり、Edmund の野望は阻止されることになる。フランス軍との合戦に勝った Edmund は Goneril と謀って、捕虜にした Lear 王と Cordelia を秘かに殺害し、ブリテン国の王座を狙っている。Goneril は既に妹 Regan に毒を盛っており Edmund と連れ添うことができないようにしている。Albany 公を Goneril に片づけさせると、国王の座は必然的に自分のものになることを目論んでいるのだが、Shakespeare はここでも、因果応報という意味で poetic justice を用いている。Edmund は、やや有頂天になって Lear 王と Cordelia の処置について Albany 公と同等の地位にあるような口をきく。彼は earl of Gloucester となっているが、あくまで Cornwall 公の家臣であり、公爵ではないのである。Cornwall 公が亡くなり、Lear 王が捕虜となっている現在、ブリテン国の最高の地位にあるのは Albany 公である。有頂天になっている彼に Albany 公は 'I hold you but a subject of this war, / Not as a brother.' (.iii.60-1)「わしは君をこの戦争についても一部下と思っているだけで、兄弟同様には思っていない」と言う。寡婦となり、Edmund と連れ添うのに好都合な Regan は Cornwall

公の領地と城を明け渡すことによって、兄弟同様の権利と地位を与える
と宣言するが、ことごとく Albany 公に阻止されるばかりではなく、間も
なく Goneril に盛られた毒が効いて息絶える。Goneril は Edmund に宛て
た手紙によって Albany 公殺害の陰謀が露見し、遂に自害する。Edmund
は嫡子 Edgar の挑戦を受けて倒れ、摂理の偉大さを知り、'The wheel is
come full circle; I am here.' (.iii.174) 「車はちょうどひと廻りして、俺
は一番下にいる」と悔い改めて、本心に立ち帰り、最後に幽閉していた
Lear 王と Cordelia を救う手筈をするが、Cordelia の救出には間に合わず、
Edmund も間もなく息絶える。Shakespeare が創造した悪人の傑作の一人
である悪のために悪を愛する表裏の乖離した人非人 Iago が登場する『オ
セロー』は 1604 年の作と推定されている。人を愛し、人を描き続けたこ
の作家は、利己的な人非人ではあるが、知力と洞察力を持つ人間 Iago を
『オセロー』において試し、その劇的效果に気をよくしたのか、1606 年
作の『リア王』に再び彼を思わせる Edmund という人物を登場させてい
るように思われる。確かに、トレミー的秩序を打破しようとする人間の
登場が Shakespeare の悲劇においては効果をあげていることは事実であ
る。Edmund は Iago の投影で、マキアヴェリー型の人物であるが、Iago
のように悪のために悪を愛する人間ではなく、慣習によって不可抗力的
に蔑まれる境遇から脱出し、出世しようとするルネッサンスの青年であ
る。Iago と Edmund の相違は、そのあたりにあるように思われる。つま
り、Iago は極悪非道な人間であることが判明しても尚、真相を語ろうと
する妻の Emilia を刺して逃走するような人非人であり、捕えられ、引っ
立てられて Othello に斬りつけられても、'I bleed, sir; but not kill'd.' (.
ii.288) 「血は出たよ、でも死にはしない」と言っているごとく、軍人と
しての勇気もなく名誉も感じない人間である。Othello の 'Will you, I pray,
demand that demi-devil / Why he hath thus ensnared my soul and body?' (.
ii.301-2) 「どうか、その半悪魔にどうしてこれ程までわしの身も心も罣

にかけたかを問いただしてください」との依頼に対して、Iago の応答は 'Demand me nothing: what you know, you know: / From this time forth I never will speak word.' (.ii.303-4) 「問いただしてくれるな。知っていることはあなたが知っている。唯今から俺は一切口をきかない」である。あれ程多弁で Othello を罠にかけた彼の開き直った態度であるが、そこには悔悛どころか反省の色さえ全く見られない人非人の Iago が窺われる。彼には浄化は全くない。

一方、Edmund は Albany 公から Goneril の不義の手紙の内容を問われると 'Ask me not what I know.' (.iii.160) 「知っていることは聞かないでほしい」と応答するが、自分の非を認め、Edgar と和解し、本心をと咄として 'some good I mean to do / Despite of mine own nature.' (.iii.243-4) 「悪人ながらも、何か善いことをしたい」と述べ、Lear 王と Cordelia を救出する努力をする。Harrison は Edmund を 'a refinement of what we called the Machiavellian hero, the man who was unhindered by any human affections, moral sense or other restraint.' ③ 「いわゆるマキアヴェリイ的英雄の極致、つまりいかなる人間の愛情、道徳感、その他の拘束からも妨げられなかった人間」と酷評しているけれども、彼は Iago と違って、完全ではないまでも、浄化を果して息を引きとる。Shakespeare は Iago の影を Edmund に投影させてはいるが、ルネッサンスの波に洗われた彼は、ルネッサンスの青年 Edmund に同情を覚えたのではなかろうか。

(注)

(1) Edward Dowden: Shakespeare: His Mind and Art. Henry S. King & Co., London. P. 240.

(2) G.B. Harrison: Shakespeare's Tragedies. Routledge & Kegan Paul LTD. P. 157.

Harrison は『オセロー』のテーマは普遍的で、'the overwhelming power of evil unrestrained and unsuspected' と述べているが、それは正に Iago の巧妙な悪意の奸計である。

(3) Ibid., P. 166.

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

古代北方史研究のための覚え書き

A Memorandum for Historical Studies in Ancient Northern People

蓑 島 栄 紀

Hideki MINOSHIMA

キーワード：北方史 蝦夷 アイヌ 周辺民族 境界

要旨

中世・近世にその原型が形成されるアイヌ文化成立の問題を考察するうえで、古代北海道の歴史像の実態的な解明は不可欠である。本稿は、近年、開拓史あるいは制度史・国家史的な従来の研究を相対化した、北方史研究の新たな動きがみられることに鑑み、古代北方史研究の基本的な研究視角・方法論・理論的問題を探るためのメモである。北海道史の史的特質や、アイヌ文化形成の要因を考察するためには、北東アジアや本州など近隣諸地域との交流の実態と意義を考察することが必須条件であり、こうした広域圏からの北方史を構想するために有効な概念として、周辺民族論、境界論などの方法論の可能性に言及する。

はじめに

「開拓史」という一面的な理解から北方史・北海道史を解き放ち、アイヌなどを主体とする歴史像の必要性が提起されて久しい⁽¹⁾。今日のアイヌ文化は、中世から近世にかけてその原型が形成されたと目される⁽²⁾。いうまでもなく、このアイヌ文化の成立には、それ以前の古代の北海道に存在した諸文化（とくに擦文文化とオホーツク文化）の動向と帰趨が深く関わっている。しかし、中世～近世のアイヌ史研究の進展に比して、古代史研究においては、この地域の人々を主体とする歴史像の構築は緒についたばかりである。本稿では、まず日本古代史研究において北方史がどのように論じられてきたかを振り返り、その成果と課題を指摘しつつ、古代北海道を取り巻く諸民族・文化の動態のなかから、のちのアイヌ文化形成に向かう過程を解明するための基本的な研究視角・方法論について述べたい。

一 古代北方史研究の現状と課題

日本古代史における北方史研究の流れを振り返れば、まず、戦前から存在した研究視角として「開拓史」「拓殖史」的な認識があった⁽³⁾。これらは当時の時代背景と、植民地史観に色濃く規定された側面があることは明らかだが、その後の研究にもこうした観点そのものは根強く残存する。同時に、古代史史料に登場する「蝦夷（えみし）」の実態をめぐって「辺民（辺境日本人）論」と「アイヌ論」の論争が、大きな課題として存在してきた⁽⁴⁾。かつて列島古代の北方社会や民族・文化の実態に関する議論は、事実上ここに収斂されていた。

その一方で、むしろそうした議論を留保することで多大な成果を積み

重ねてきた、古代東北の律令制的支配制度に関する実証的研究があり、また石母田正氏の提起したいわゆる東夷の小帝国論^⑤の一環としての身分論的研究の系譜がある。これらの業績は膨大であり、現時点においても研究の中心をなしている^⑥。しかしこれらが、いずれも蝦夷社会の実態に関する議論を基本的に捨象することで展開してきた点は問題をはらむ。最近に至って、古代史研究においても、考古学との協業によって北方の社会や交流の多様な実態を追求しようとする方向性が緒についており^⑦、筆者は基本的にこうした研究視角を継承するものである。

従来の研究の問題点、課題をいま少し詳細に述べれば、まず北方社会の実態や、その自律的・主体的側面を独自にとらえようとする視座が問題とされることは最近までほとんどなかった。繰り返すが、かつて北方社会の実態に関する議論の方向性は、「蝦夷」の辺民論—アイヌ論に帰結していたといっても過言ではない。これは実際には、北方社会の歴史を、現実に存在した文化・民族の実態や彼らの立場から探求するという目的とは異なった意図のもとに展開された研究といわざるをえない。

例えば、かつて蝦夷辺民論を展開した伊東信雄氏の所論には、古代の東北地方における北海道系の文化の流入などを一方で指摘しつつも、その「農耕文化の存在」を強調し、すなわち「西日本と共通の文化」とみなすという二分法的な論理が看取される^⑧。近年の文献史学において通説的な理解、つまり考古学の知見を援用しつつ「蝦夷」社会の実態を基本的に「倭人と同じ」とみなす石上英一氏や熊谷公男氏などの見解^⑨は、本質的には伊東氏の学説と同様の傾向を有する。

これらの言説は、文献史料に記載された未開・野蛮な存在としての「蝦夷」像を相対化する上では、非常に重要な意義を有した。こうした理解は、日本古代の「夷狄」身分の政治性・虚構性を追求する日本古代史の研究状況によって、避けがたく辿りついた結論ともいえよう。

その総括ともいえるべき理解は、石上英一氏によって示される。すなわ

ち氏は、文化人類学のエスニシティ論を援用しつつ、日本古代国家の包摂した「蝦夷」などの諸民族を、実態をもたない「擬似民族集団」と規定する⁽¹⁾。しかしこのことは、日本古代国家の帝国構造の矮小性を明らかにした一面で、エスニシティ論が本来有している動態的側面を捨象することとなり、具体的に列島上で繰り広げられた諸民族集団の動向に踏み込む方向性は射程にとらえていない。加えて、「民族」の動態をまさに古代における実態という位相において把握する試みも保留されている⁽¹⁾。

なおこれらとは逆に、1970年代に研究の進展した本州でのアイヌ語地名や続縄文土器の分布から、蝦夷の異質性を強調する見解も再び有力化している。文献史学の側でも、日本古代国家の「蝦夷支配」を言語・文化の明確に異なる他民族にたいする「征服」とみる山尾幸久氏の見解⁽²⁾や、いわば両者の折衷説もある⁽³⁾。しかし実際には、これらの理解は表裏の関係にある。ここで暗黙のうちに課題となっているのは、「蝦夷」を辺境において国家支配から取り残された日本人とみるか、それとも異民族か、という議論である。つまるところそれは、古代北方の社会や文化・民族集団をまさに古代の文脈において把握するのではなく、「日本人か否か」をめぐる過剰に展開された議論なのである。

こうした問題は、対象とする「文化」「民族」をア・プリオリに本質的なものとして実体化している思考法じたいにも起因する。近年、アイヌ史研究においては、近世～近代にかけて、現代人の認識を規定する固定的な「アイヌ」像が歴史的に形成される過程の解明が試みられている⁽⁴⁾。事実上現代の概念・範疇である「アイヌ」あるいは「日本人」などを古代に遡及させる議論は、もはや払拭すべきことに疑問の余地はない。むしろ、多様な要因のなかで動態的に生成・運動する、北方の社会・経済や文化・民族の様相そのものを、古代の実態に即して検証することこそが求められるのである。そこでは、最近の考古学の諸成果の意義が改めてクローズアップされてくるといえよう。

次いで、上記の点とも関わるが、これまでの「蝦夷」論ないし北方史研究が、一国史的、国民国家史的な枠組みのなかで展開されていたという問題がある。近年、古代北方社会に関する考古学的成果の数々は、日本古代国家による支配の次元をこえた多様な交流の様態を明らかにしており、同時にこの地域が北東アジアないし東アジア規模の枠組みのなかで運動していることの一端をも示しつつある¹⁵⁾。こうした新たな知見による多様な事実・実態は、従来の「蝦夷」研究の枠組みでは十分に捉えきれないものである。

こうした状況を踏まえた場合、むしろ古代東アジア世界論の系譜における、藤間生大氏や菊池英夫氏などの提起には留意すべき面がある。すなわち各国家史の総和や、国家政府間の外交関係だけではなく、現実に古代東アジアを覆っていた経済・文化・思想など様々なレベルの交流や結びつきを掘り起こすことから、古代の「東アジア世界」を再構想しようとする方向性である¹⁶⁾。これに対して鬼頭清明氏は、前近代には資本主義市場のような一体的な構造が存在しない点を重視し、各国家の政府間交渉からなる「東アジア世界」の枠組みを描く¹⁷⁾。氏の指摘には依然傾聴すべき点が多いが、一方で近年の多様な交流に関する事実関係の蓄積は、むしろ藤間氏や菊池氏などの提示するような方向性で古代東アジア史を追及することを要請しているように思う。とくに菊池氏は、増加し続ける考古学の発掘成果などを手がかりに、モノの移動からヒトの交流・結合形態を追及する方法の有効性を示唆している。こうした研究視角は、国家形成に至らない多様な民族・文化の歴史をも包摂して展開しうる可能性を秘めているといえよう。

近年、李成市氏は、古代東アジア史において各国家史の枠を越えた「広域圏」のなかから歴史像を捉えなおす必要性を積極的に提言しており、同時に東北アジア諸民族の多様な生業・文化に光をあてた独自の研究視角によって成果をあげている¹⁸⁾。また穴沢啄光氏は、中国王朝を中心

とする東アジアの広域交流圏のなかでの副次核形成として日本の古代国家形成を説明しつつ、さらにその辺境への波及によって「蝦夷」社会の発展が促されたという巨視的な推移を描く⁹³⁾。地域間の交流を軸に、広域での歴史展開の一体性・必然性を重視しつつ、世界史・人類史レベルで北方の歴史展開までも俯瞰した、非常にスケールの大きい仮説である。

一方で、中世史研究における村井章介氏などに代表される議論の展開にも留意される⁹⁴⁾。そこでは、「中心—周辺」、「境界」などの概念を用いて列島の各「地域空間」の構造的特質を論じたり、各地域における国境を越えた交流の実態やその意義が問題とされており、中世北方史に関してもそうした観点からの研究がすでに一定の展開をみせている⁹⁵⁾。これらの成果に触発される面は多い。

ただここで留意すべき点として、これらの研究には、しばしば地域間交流の「国境を越える」性格を重視するあまり、これを国家に対して全く独自の、自由なものとして楽観的に描きがちな傾向がある⁹⁶⁾。歴史学研究における地域論の登場が、従来の国家史中心の史観を打破する点に大きな意義と功績があったことは多言を要さない⁹⁷⁾。とはいえ現在、「地域」や「交流」をキーワードにする場合にも、単に国家を相対化することのみを目的とするのではなく、広域圏のなかでの国家の機能や意義などを視野に収め、正當に位置づけたうえで、「地域」の歴史展開をより総合的に論じなくてはならない段階に至っているのではないか。

現状では、以上のような問題意識に即して、古代北方社会の諸相・実態に関する個別事例研究を積み重ねることが、まずは急務であろう。その際には、近年、次々に明らかになってきている考古学の諸成果、とりわけ多様な「交流」の事実から、いかなる歴史像を再構成するかが具体的に課題となろうし、そのままでは「事実」そのものにすぎない「交流」の意味・意義を歴史的に評価し、位置付けるための方法論・枠組みも必要とされよう。そこで、古代北方史研究において有効であると筆者の考

える研究視角を以下にいくつか提示し、検討を加えたい。

二 「周辺民族」論

「周辺民族」論とは、外的なシステムとの接触のなかで「周辺」的な地位に置かれた地域の人々・社会を、まさにそうした外的な関係とのなかで分析するための概念・方法論である²⁴⁾。それは、文化人類学が世界システム論や中心—周辺論などと接触するなかで獲得された概念であり、ある社会を分析する際に、常に歴史的な背景や、対外的な交通関係を通して認識しようとする

19世紀後半に産声をあげたばかりの文化人類学は、1922年に相次いで発表されたマリノフスキーとラドクリフ＝ブラウンの業績によって、機能主義（構造機能主義）および民族誌的現在時制にもとづいて、無時間的かつ自己完結的な社会を描く、民族誌の記述法を獲得・確立する。こうした社会の静態的把握という傾向は、1960年代以降には構造主義の盛行によってさらに顕著となる。しかし現代人類学の動向は、こうした方法論の確立以後半世紀を経て世界システム論と邂逅するに及んで、歴史性・動態性を導入する方向へと大きく傾いている。それは、独自かつ不変の「未開社会」などは存在せず、多様な地域社会は、世界的な経済システムに巻き込まれて動いていることを認識せざるをえないという現代世界の現実と直面したためである²⁵⁾。

「周辺民族」論では、さまざまな民族・文化の示す様態は、それぞれの社会にとって「本質的」に備わったものではなく、外的なシステムとの関係の中で歴史的に選択され、獲得された適応型として捉えなおすべきことが強調される。この背景には、ホブズボウムらの提唱した「伝統（文化）の創出」論の影響も認められる。さらにそこでは、従来は社会内に本質的に備わったものとして対外関係とは区別されて認識されてい

た「生業」等すらも、実は外的な文脈・交通との関係で選択され、獲得される側面があることを射程に収めており、注目される。

すなわち、こうした議論においては、外的な交通（交流）は、社会にとって単に副次的・補完的なものでなく、ある社会が存立する前提に、不可欠の一要素として組み込まれていると認識される。典型的には、社会の再生産に必要な物資を、外的な条件のなかで選択された、交易に依存するような状況が考えられる⁹⁸⁾。このような視角には、社会の理解に際して外因論に偏重しているという批判や、外部の広域システムとの関連性を強調するあまり各地域社会の独自性を軽視するものという反論も寄せられるが⁹⁹⁾、歴史的に外部との交易に大きく依存していることが明らかな北方社会の解明には、とりわけ有効な視角といえるのではないか。

要するに北方の社会やその組織形態、さらに主要な生業たる狩猟・採集・漁労等の内実にしても、必ずしも自然・素朴な姿としてとらえることはできず、その時々当該社会の置かれた外的な文脈、多様な交流との対応のなかで分析すべきことを「周辺民族」論は教える。北方社会と接する王権・国家の動向を追及することは、北方社会そのものの内実・歴史展開を捉える上でも重要な意味を有するのである。同時にこのことは、当該期の北方社会をある形態になさしめている外部のシステム、すなわち同時期の日本列島中央や東アジアの王権・国家の歴史を、別の観点から理解することにもつながるといえよう。

上述のように従来の「地域」論、「地域史」研究は、中央・国家史に偏重した史観への批判としての意義の一方で、しばしば地域の独自性・固有性を強調しすぎる憾みがある。こうした二つの視角の対立を克服し、外的システムの重要性和周辺社会の自律性・主体性を統合しうものとして、「周辺民族」論には一定の有効性があるろう。「周辺民族」論は、前近代においても世界の各地に一定のシステム・ネットワークの存在を想定して、そのなかで各地域社会の文化・歴史を考察すべきことを強調し

ており⁸⁹、基本的に古代史研究にも適用可能な概念である。

ただしここで留意しなければならないのは、既述のように前近代においては、これらの社会を組み込む世界的な市場は形成されていないことである。したがって「周辺民族」論の視角を援用して古代北方社会の歴史を追求する際には、これを取り巻く交流の形態・特質を、その時々の変異を踏まえつつ具体的に解明することが不可欠であると思われる。

この他「周辺民族」論が包摂する議論の一つとして、M・フリードによる「部族」の二次的形成論には注目される。人類史を通じて「部族」的社会と認識される社会のほとんどは、実は国家の周辺にあって、その影響への対応として、二次的に政治的組織化された存在であったとする⁹⁰。これは「蝦夷」をはじめとして、古代国家の周辺に多様な呼称で登場する諸集団の実態の前提を考えるうえで示唆に富む提起である。またこうした過程は、辺境における民族の実体化のプロセスと共通するというエスニシティ論の立場からの指摘もあり⁹¹、古代北方史研究において「民族」の問題を追求する際にも軽視できない。

こうした外部の国家的勢力との関係は、さらに周辺民族社会の政治的発展・成層化と交流の関係という大きな問題を提起する。社会発展の要因としての地域間交流、ことに中心 - 周辺間の交流の意義に関しては、欧米において盛んな議論がある⁹²。古代北方社会における「交流」、とりわけ「中心」との交流⁹³の、社会発展の要因としての側面には注目しなければならない。また逆に日本古代国家の形成・展開における北方交易（長距離交易）の意義も問題となろう。このような視角を日本古代の北方の歴史展開に適応した見解として、大づかみな俯瞰ではあるが、上記の穴沢氏の研究もある。こうした見通しの正否を、より詳細な具体的考察の積み重ねによって検証する必要があるだろう。

なお現在、「周辺民族」論がとりわけ活発に関心を集めている要因は、さきに述べたような学史的なパラダイム・チェンジだけには求められな

い。おそらくその背景には、例えば、現代世界の大きな課題である各地の「民族」「部族」間の抗争問題の多くは、その本質において、実はそれらの文化・民族の本質的な差などに根ざしているわけではなく、それらの社会が置かれている「周辺」的な状況のなかにこそ、この問題を解く鍵があるとの見通しがあるのであり、このようなすぐれて現代的な課題こそが、「周辺民族」論の議論に今日的な意義を与えていると思われることを付言しておきたい。

三 「境界」論

政治学などの分析概念を古代史研究のなかに駆使して国境（境界）論を展開しているブルース・バートン氏は、日本史における「境界」研究に関して、「辺境」「境界」地域を対象とした実証的研究の蓄積の割に、理論的な取り組みが少ないと批判する³³。

「境界」領域の特質を明らかにし、その機能を日本古代史のなかに位置付ける作業が少ないのは意外といえる。上述のように中世史の領域では、村井章介氏などによって、中世日本の地域空間を論ずるなかで、日本列島の周縁・辺境部の各地域に位相的同一性を看取し、その特質を考察する試みがなされている³⁴。こうした取り組みに啓発される点が多い。日本古代史における「境界」領域の特質は、北方史だけの問題でなく、南島や北九州・東シナ海など他の「境界」領域と問題を共有する面があり、これらを射程に入れて、古代日本ないし東アジアにおける「境界」領域の機能や意義を考察する余地があろう。

バートン氏は、日本古代の国境についてバウンダリーとフロンティアという概念で説明する。バウンダリーが近代国家の厳密な国境を意味するのにたいして、フロンティアは前近代の国境の特性を説明するのに有効な概念である。それは広い面的な、曖昧な境界で、古代東北の国境な

どはそうした性格に合致する⁶⁵⁾。

留意すべきは、それは内部と外部とを断ち切るよりは、むしろ結びつける作用をみせる点である。いわゆる「海域」もそうした広義の「境界」である⁶⁶⁾。近年の歴史研究で盛んな「国境を越える地域」に関する議論は、「境界」のこうした側面に当てはまるものといえよう。筆者の意図する「境界」の認識は、概ねこうした「フロンティア」概念に馴染むものである。また最近、デイヴィッド・ハウエル氏は北海道史の特質に迫る上で「中間領域」というキーワードの有効性を提起したが⁶⁷⁾、これも「境界」概念にほぼ等しいと思われる。

「境界」(辺境)の歴史状況にみられる大きな特色は、多面的な交流にもとづく文化の多元性・複合性(両義性・媒介性)である。古代の日本列島に関しても、北方のみならず、南島をふくむ環東シナ海域などの文化状況にみる多元性・国際性は、最近の考古学の知見が事実として明らかにしつつあり、これらの意義を「境界」概念を用いて分析してみる余地は大いにある。

このような「境界」(辺境)の特色を中央の権力との関係からみると、中心の権力からの影響が相対的に希薄であるため、国境をまたぐ両義性を帯びやすく、ヒトの帰属の両属性・曖昧性や、文化的・民族的な異質性をも内在して、社会構成の多元的・流動的傾向がみられる⁶⁸⁾。すなわちこうした地域においては、各種の経済的関係や宗教的結合、さまざまな契機による人と人との対面的・人格的關係がより大きな意味を有し、中央からの一元的な支配・統合とは異なるレベルの多様な交流・結合、結社、ネットワークが形成され、ヒト・モノ・情報が行き交うのである⁶⁹⁾。

さらにここには、活動するヒトの性格じたいにも注目すべき特色が生じる。こうした場では、往々にして複数の言語・文化やアイデンティティを具備し、使いわける人物群が出現して(通訳・国際商人・混血など)、重要な機能を果たすのである。こうした人々は異文化・民族間の媒介性

を帯び、それらを結合させる特性も備えており、「境界」領域の機能を広域の歴史のなかで把握する際に軽視できない。また境界領域に出現する権力は、しばしばこうした媒介能力を必須としていることも留意される⁴⁰⁾。情報伝達手段の未発達な前近代においては、以上のような「境界」領域の特質はとりわけ重要な意味をもつであろうし、その機能は、王権・国家の支配階層にとっても看過しえなかったと思われる。

こうした「境界」の特質をめぐる研究視角を導入した試みとして、中世北方史には安東氏やアイヌに「北の倭寇」としてのマージナルな状況を看取しようとする理解がある⁴¹⁾。また古代史研究においても、加耶や9世紀以降の環東シナ海域の国際交易圏の性格に関して、その民族・文化的多元状況の指摘がある⁴²⁾。日本古代国家領域のもう一つの辺境であり、北東アジア諸民族の世界との「境界」でもある古代北海道・東北の歴史を考察するうえで、こうした視角を導入してみる余地は充分にあるであろう。そしてそれは、この地域の歴史とその意義を、日本史・東アジア史といった広域の歴史のなかに位置づけて理解する際に重要な鍵となるう。

おわりに

以上、古代北海道史の実態・特質を解明し、またアイヌ文化形成の過程・要因に接近するための方法論・理論的問題について、いくつか思うところを述べてきた。

考古学的研究も含め、これまでの古代北方史に関する研究は、概してこの地域が属する外的なシステム・広域圏に対する意識が弱いと思われる。列島北方地域の歴史研究には、この地域を取り巻く多様な交流、ことに日本・東アジアにおける国家・文明の形成・展開との密接不可分の関係を縦糸として考察することが不可欠であり、それは古代北海道の歴

史を、日本史・東アジア史の一環としての必然性ないし有機的な歴史展開をもつ地域として論じうるか否かの可能性を探ることでもある。

筆者は、古代の北海道社会に生じた「周辺民族」としての性格と、多元的な文化を媒介する「境界領域」としての特質が、のちのアイヌ文化形成を準備する重要な鍵であったと考えるのであるが⁴³、その具体的な考察は機会を改めて述べることにしたい。

注

- (1)海保嶺夫『日本北方史の論理』（雄山閣、1974年）など。
- (2)河野本道『「アイヌ」その再認識』（北海道出版企画センター、1999年）など参照。
- (3)喜田貞吉「蝦夷の訓服と奥羽の拓殖」（『奥羽沿革史論』1916年）、村尾次郎「奥羽開拓史を通じて見た土地拡大政策の推進」（『律令財政史の研究』吉川弘文館、1961年）などに典型的。なお喜田論文は、高橋富雄^a『蝦夷』（吉川弘文館、1963年）、同^b『辺境』（教育社、1979年）などの時点においても、北方史全体をもっとも体系的に説明したものと評価され、その視角は基本的に踏襲されている。
- (4)菊池徹夫「蝦夷論の系譜」（『北方考古学の研究』六興出版、1984年）、工藤雅樹『古代蝦夷の考古学』『東北考古学・古代史学史』『蝦夷と古代東北史』（いずれも吉川弘文館、1998年）に研究史の整理がなされている。
- (5)石母田正「天皇と諸蕃」（『石母田正著作集』4、岩波書店、1989年）。
- (6)例えば伊藤循、今泉隆雄、熊谷公男、熊田亮介、鈴木拓也、関口明、高橋崇、武広亮平らの各氏に代表される諸研究。
- (7)例えば鈴木靖民編著『古代蝦夷の世界と交流』（名著出版、1996年）の諸成果およびそこでの鈴木氏の問題提起、さらに城柵官衙遺跡や出土文字資料の研究の進展による東北史の実像の見直しなど多岐にわたる。
- (8)なお氏は最晩年に蝦夷＝アイヌ説に転換する。工藤前掲注〔4〕を参照。
- (9)石上英一「古代東アジア地域と日本」（『日本の社会史』1、岩波書店、1987年）、熊谷

公男「九世紀奥郡争乱の歴史的意義」(『律令国家の地方支配』吉川弘文館、1995年)など参照。

(10)石上前掲注(9)。

(11)拙稿「古代北海道の『肅慎』と『渡嶋蝦夷』」(『歴史評論』555、1996年)。また田中史生「古代日本の国家形成・展開と民族的展開」『日本古代国家の民族支配と渡来人』(青木書店、1997年)を参照。

(12)山尾幸久「古代国家と文字言語」(『歴史評論』555、1996年)。

(13)古代の東北に複数の生業の担い手の混在を想定する新野直吉氏の「斑状文化」論に代表される(新野「蝦夷とその周辺に関する私見」(『北方の古代文化』毎日新聞社、1974年)など)。古代東北の民族・文化的多元構成を指摘するものとして、氏の見解には再評価の余地があるが、アイヌ論－倭人論の枠組みを出るものではない。

(14)岩崎奈緒子『日本近世のアイヌ社会』(校倉書房、1998年)や、中村和之「教科書のなかのアイヌ史像 知里幸恵『アイヌ神謡集』をめぐって」(『北からの日本史 場所請負制とアイヌ』1998年)など参照。

(15)例えば菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、1995年)参照。また北海道開拓記念館で継続中の「北の文化交流史研究事業」、日本考古学協会1997年度大会シンポジウム「蝦夷・律令国家・日本海」など、各種のプロジェクト・出版も盛んであり注目される。

(16)藤間生大『東アジア世界の形成』(春秋社、1966年) 菊池英夫「総説」(『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、1979年)参照。

(17)鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』(校倉書房、1976年)。

(18)李成市『東アジアの王権と交易』(青木書店、1997年) 同『古代東アジアの民族と国家』(岩波書店、1998年)。

(19)穴沢咏光「世界史のなかの日本古墳文化」(『文明学原論』1995年)。

(20)村井章介 a『アジアのなかの中世日本』(校倉書房、1988年) 同 b『国境を超えて』(校倉書房、1997年)など。

(21)斉藤利夫『平泉』(岩波新書)。網野善彦・石井進編『蝦夷の世界と北方交易』(新人

物往来社、1995 年）。中村和之「十三～十六世紀の環日本海地域とアイヌ」(『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社、1997 年) など。

⑫村井前掲注 [20] b、田中前掲注 [11] 書など参照。

⑬浜下武志・辛島昇編『地域史とは何か』(山川出版社、1997 年) など参照。

⑭清水昭俊「永遠の未開文化と周辺民族」(『国立民族学博物館研究報告』17 - 3、1992 年)。同編著『周辺民族の現在』(世界思想社、1998 年) 参照。

⑮マーカス&フィッシャー『文化批判としての人類学』(紀伊国屋書店、1989 年)、山下晋司『儀礼の政治学』(弘文堂、1988 年)、山下晋司・山本真鳥編『植民地主義と文化』(新曜社、1997 年)。清水前掲注 [24] 参照。

⑯例えば採集・狩猟経済の典型とされたアフリカのサン族の社会形態は、実は交易を前提として「周辺」に位置づけられた状況であった(清水前掲注 [24] 参照)。北方シベリアのいくつかの民族では、ロシアの東進以前には毛皮類の獲得が生業において本質的に重要であった形跡はないという(フォーシス『シベリア先住民の歴史—ロシアの北方アジア植民地—一五八—一九九〇』(彩流社、1998 年)。

⑰宮崎広和「オセアニア歴史人類学研究の最前線」(『社会人類学年報』20、1994 年) に詳しい。たしかに行きすぎた外因論は「開かれたシステムとシステムの欠如を混同するもの」であろう(サーリンズ『歴史の島々』(法政大学出版会、1993 年) 参照)。

⑱清水前掲注 [24] 参照。

⑲フリード「部族および部族社会の概念」(『社会人類学リーディングス』、アカデミア出版会、1982 年)。

⑳内堀基光「民族論メモランダム」(『人類学的認識の冒険』同文館、1989 年)。

㉑ T.C.Champion " Centre and Periphery " Unwin Hyman Ltd.1989。佐々木憲一「地域間交流の考古学」(『展望考古学』1995 年)。穴沢和光「世界史のなかの日本古墳文化」(『文明学原論』1995 年) など参照。

㉒なお「中心」「周辺」という概念じたい、自らを「中心」に位置させた観察者による傲慢さははらむことは否めないが(清水前掲注 [24] 参照) この問題に関しては別稿に述べたい。

㉔ブルース・パートン「境界とは何か」(『境界の日本史』山川出版社、1997年)。

㉕村井前掲注[20]

㉖なおその後あまり継承されていないものの、かつて高橋富雄氏によって、近・現代の北米のフロンティアとの対照において古代東北史の特質を述べる独自の提起があり留意される(高橋前掲注[1]b参照)。

㉗パートン前掲注[33]

㉘中村和之「北の倭寇の状況とその拡大」(『北の内海世界』山川出版社、1999年)参照。

㉙こうした社会に関する研究は、とくにイスラム史、東南アジア史などの領域で発展しており、示唆に富む。その理論的体系化としては、東南アジアの国家をモデルにしたタンバヤの「銀河政体論」などが知られる(西井涼子「周縁における権力とエスニシティ」(『民族学研究』57-2、1992年)参照)。なおJ・ビジョー氏は、5世紀の倭王権をこの概念を適用して説明する(“The Emergence of JapaneseKingship”(スタンフォード大学、1998年))。

㉚立本直史「海域とネットワーク社会」(『海と文明』朝倉書店、一九九五年)。

㉛E・E・エヴァンズ=プリチャード『キレナイカのサヌシ』(オックスフォード大学、一九四九年) 嶋田義仁「マージナルなイスラム教師の国家形成」(『民族学研究』50-3、1985年) 西井前掲注[38]など参照。なお古代東アジアの安祿山や張保皋などの性格もこうした面から分析する余地を残している。

㉜中村前掲注[21]および同前掲注[37]

㉝鈴木靖民「加耶の鉄と倭王権についての歴史的パースペクティブ」(『日本古代国家の展開』上、思文閣、1995年) 田中史生「帰化人論新考」(同前掲注[11]書) 山内晋次「九世紀東アジアにおける民衆の移動と交流」(『歴史評論』555、1996年)などの諸研究。

㉞その一端は拙稿(前掲注[11])に述べたことがある。

(みのしま ひでき・アイヌ文化及び環太平洋先住民族文化研究所所員)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

Form and Transformation of Text: A Comparison of Different Approaches to Robert Yeo's Contemporary Singaporean Drama, *Second Chance*

ロバートヨウの現代シンガポール演劇 “セカンドチャンス”
における異なるアプローチの比較

George WATT

ジョージ・ワット

Key Words: Robert Yeo, Guy Sherborne, Casebook, interpretation,
iconography

Summary

The post-modern assumption that dramatic literary texts are not sacrosanct when produced has given directors and performers much needed freedom when they take a text from script to performance. In this model the troupe actually move away from interpretation towards re-creation and invention, so frequently the new performance bears little resemblance to the original. There are times when audiences commend this type of originality. This paper compares this kind of post-modern encounter with text to a more authoritative modernist approaches which tends to see the text as something that requires loyalty not change. As exemplum it uses different productions of Robert Yeo's *Second Chance*, a play which looks at contemporary Singaporean attitudes to the relationship between educational qualification, romance and marriage. This paper argues that whilst much can be gained when the primary aim of performers is the creation of their own play in this case too much is sacrificed in the process. In other words there are times when not meddling with the original text will result in a more meaningful and pleasurable experience for the audience member.

A bemused and puzzled Ulysses S. Grant was the first Westerner to sit through a No drama in Japan. His diplomatic announcement after the performance was as simple as it was evasive: "You must preserve this."¹ Unwittingly he raises one of the central universal dilemmas for all practical dramatists: when you have the raw text in hand what do you preserve and how much do you add? When does interpretation end and fabrication begin? Wherein lies a performance ethic? Accepting the post-modern death of author and the non-sacrosanctity of text—that it is part of a larger nebulous discourse rather than ultimate object itself—doesn't mean that such questions are outdated or have become easier to answer. On the contrary, they are now more than ever problematic. The short performance history of Robert Yeo's *Second Chance* as it appears in its *Casebook* edition provides an opportunity to revisit these questions.²

The *Casebook* includes two different texts for the play, one from the original January 1988 production at the Hong Kong Arts Festival (and Singapore a few weeks later), and the other from the Guy Sherborne staging at the Substation Theatre in Singapore (Sept. '92).³ These productions could not have been more different if you had purposefully tried to make them so. The *mise en scene* for the former was simple and straightforward, giving the impression of a university lecturer's office, but for the latter it was transformed into a surrealist cramped space defined by the suggestion of a desk above which towered ladders (with bells on the steps) up which the lecturer would noisily climb when he simply had nowhere else to go.

The first production was conventionally "directed" by Chua Soo Pong with all that implies when sticking to the text as it is written; the second production was co-operatively "realized" by Sherborne and his cast of two, taking the text through four modulations before the performance which was

distinguished by "a reconfiguration of textual iconography into a marionette-like performance idiom."⁴

So the young lady who comes to ask her former university lecturer for advice on marriage is realistically portrayed in the original production but in the adaptation is masked and costumed expressionistically. Her verbal delivery was also stylized. So what she stands for in the adaptation becomes more important than the particular she is in the original. In this leap from one style to another there exists a kind of 20th Century mini history of approaches for taking a play from text to stage, from an authoritarian modernist approach where the text and product is central, to a post-modern concept of invention or reinvention where process and cross-insemination are major performance determinants.

The *Casebook* responds to this change in direction by including several essays on it; one by Yeo on the text as sacrosanct *vis a vis* the text as starting point in a process; one by Sherborne which includes his rationale for approaching the play as he does, together with copious rehearsal notes; and one performance critique each by William Peterson and Lily Rose Tope who were present at the Sherborne production, but not the original. Of the *Casebook* cast only Yeo is in a position to compare the two performances, but he is understandably silent on preference.

The First Real Chance?

The general consensus in the *Casebook* (by all except Yeo) is that Australian Sherborne takes a rather old-fashioned, flawed and somewhat

pedestrian play and converts it into a transcultural success through using post-modern processes which contemporary drama expects. Sherborne: in

a letter to Robert, I expressed considerable reservations about the play. It appeared to be a first draft, which had failed to undergo the detailed attention and tension of a writer-director-actor process. There appeared to be vestiges of late Ionesco, though awkward staged realism and stereotypical stage directions failed to magnify an implausible structure into compressed analysis and its counterpart of the ridiculous.⁵

As he sees it *Second Chance* is about to get its first real chance. Peterson echoes Sherborne's concerns: "it is almost impossible to imagine how a realistic staging ... could have successfully driven home the many messages imbedded in the work while also providing the audience with a high degree of visual stimulation and entertainment ."⁶ In other words it is "impossible to imagine" that the original could have been successful.

Genesis

This alleged transformation of the play from metaphoric frump to metaphoric Femme Fatale ironically mirrors the Pygmalionesque narrative of the play itself. At a time of personal crisis, the unattractive Helen Lee Tip Lee returns to the office of a former Lecturer in English Literature (Mr Chong in the first production and Vijay Rao in the second). Greatly angered by the desertion of her boyfriend of five years she wants Chong to help her find an alternative husband, but because this request is partly an act of revenge and

partly the desire for a partner, the new man must have a higher status than the old one and must possess an MA or a Ph.D. Chong falters in matchmaking, prevaricating for a few weeks, ultimately informing Helen that all "qualified" men listed in the university catalogue are either married or confirmed bachelors. Partly out of exasperation he suggests she might find someone herself if she modified her appearance. Taking him literally she returns six months later transformed: her Singaporean accent has been replaced by Received Pronunciation and everything that can be tucked, lifted and improved has been tucked, lifted and improved. As *Femme Fatale* she leaves Chong longing unrequitedly for the product he has partially created.

The idea for the play actually came from one of those usually unsolicited moments in a lecturer's life when the incipient revelation that has been hovering on the edge of a student's communication for a while is finally delivered in full force. Yeo writes of the experience:

... one of my former students came to seek my advice for the same reasons as Helen. But the second scene [the return of the transformed woman] was imagined; Graham Greene said somewhere that a writer should not set down something which happened to him or her exactly as it happened. That would be writing a documentary. I am quite sure that as I wrote I unintentionally subverted my intended message about the importance of educating for the emotions (what is now called emotional intelligence) by introducing the absurdist notion of cosmetic surgery.⁷

If this is the social antecedent responsible for the genesis of play, it is also worth noting some of the literary cousins of *Second Chance*. Shaw's *Pygmalion* and its concerns about social manipulation has already been mentioned. The play also mirrors the nemesis of *Frankenstein* where the

creature of the doctor's making returns to seek revenge for the part he plays in the monster's unfulfilled longing. So Chong's new creature in the glamorous Helen returns to unsettle his neat dull views about himself, his marriage (we suspect) and his role as an educator.

There are also shades of *The Glass Menagerie* in *Second Chance* when it explores the desire for a magical figure to obliterate the combined forces of isolation, anomie and spiritual impoverishment. Helen seeks her versions of William's gentleman caller, that mystical figure who can bridge the gap between her real life and her imaginary life, between potential and the actual, between happiness and sadness.

There is the further tragic image of Dickens's Miss Havisham in *Great Expectations* whose self can only be negatively sited in lack, absence and infertility. One of the visual achievements of the Sherborne version is Helen's Havisham-inspired costume, a grotesque parody of a wedding dress, an inflexible exoskeleton of hoops and constraints which dictated Helen's ability to move or not to move. The dress represents the physical embodiment of a subject trying to exist in a still born role.

Two Version: The Bare Bones

This is Robert Yeo's tabulated comparison of the two versions, which gives clear picture of the staged differences:

The reunification Yeo mentions here is in the curtain call; he does not imply

Second Chance

(original)

Second Chance

(adapted)

Setting

Contemporary Singapore of the mid-80s.	Contemporary but not specifically Singaporean in place or period
"Typical room" of a lecturer in a tertiary institution.	"Untypical room" of a lecturer in a tertiary institution. Illusionist, expressionist set; a boundary within which lecturer lves, moves. Symbolic, representing a refuge, a prison.

Character

Both Chinese.	One Indian, the other Chinese, suggesting perhaps multi-racialism, multi-culturalism.
Previous encounter as lecturer-student.	Previous encounter as lecturer-student and lovers. Deepens conflict and relationship. He moves like a trapped person, she a living doll.

Costumes

Literal dress of the period for both.	Lecturer untypically dressed, barefooted. Helen wears a marionette-like gown, mask and later, huge conical breasts.
---------------------------------------	--

Dialogue

Alludes to a specific Singaporean issue. Language has strong Singapore English elements.	Specific Singaporean allusion largely removed, though there are telling details. Language universalized.
---	---

Furniture

Tape recorder and Helen's handbag.	Tape recorder and handbag dropped. New Furniture includes big table with computer printouts, files, Helen's shoes, shopping bag, calling cards, letter. Additions extend range of symbolic references.
------------------------------------	---

Ending

Ends with Helen leaving but it is ambiguous.	Ends with Helen returning and reuniting with the lecturer.
--	--

the conventional "marriage" one associates with comedy. The characters meeting in the curtain call of Sherborne's production is certainly out of kilter with the bleak isolation which consumes the lot of both Helen and Vijay throughout the production.

Strengths of the Sherborne Interpretation⁸: the Absurdity of (Mis)Education

In both versions the plot of *Second Chance* is largely the same. Helen has just been jilted and as a consequence seeks marriage and revenge; her crisis precipitates one in the life of the lecturer. He must reexamine his work and status as a lecturer, and loses some confidence in the efficacy of his former teaching. But more than that he ultimately becomes the scapegoat through which Helen takes her understandable revenge on mankind. Both find themselves in radically different worlds than the one they have been led to expect. This of course is the essence of absurdist theatre, the on-the-spot revelation that values and beliefs of culture no longer hold meaning, and because we lose faith in them, the universe itself becomes unintelligible.

As Camus puts it in *The Myth of Sisyphus* we suddenly find ourselves "deprived of illusion and of light".⁹ Yeo links the illusion of both characters to their former dabbling with love-in-practice and love-in-literature, and not really knowing the difference. In the Sherborne adaptation, Vijay and Helen have had a previous sexual encounter as student and lecturer, something which he initially forgets or pretends to forget. I remember your "voice" he admits evasively in the opening moments. The inclusion of this piece of joint personal history adds a powerful irony to the play's conclusion when Helen leaves Vijay powerless with his overwhelming desire for her as Femme Fatale. For him love-in-practice is pain, ultimately having nothing to do with his meandering through the canon of love-in-literature.

Vijay claims to have discovered the difference between love-in-practice and love-in-literature when he was in school. He retells this story about a "boy in his class" one who is more than likely himself:

VIJAY : I had a teacher once, MRS POH, a very good teacher when it comes to producing results. If you need an extra A for your A Level, be sure to take her subject...ENGLISH LITERATURE. There was this classmate of mine, this boy who was crazy over this girl in my class. Mrs Poh would always catch him with a question whenever she saw him gazing at this girl with moon-glazed eyes. He could never answer her. You know what she did? Kicked him out of the class. LOVE & LITERATURE DO NOT MIX ... She gave him a choice. LOVE or LIT. He chose wisely—he dropped LOVE.

Helen has been lead to believe that that love and literature do mix, and that their combined force leads her to expect a greater emotional reality that will find expression in marriage. Marriage she accepts as the meeting place of sentiment, poetry and social ease. Helen's intelligible world is one that is marked by the reduction of the complex, always ambiguous text to the status of empty-headed, easily digested literary aphorism (the first and last refuge of the desperate lecturer). Helen's ideas about life and love as aphorism are, of course, gleaned from Vijay's lectures and the social conditioning they represent. Most of the first scene (over two thirds of the play) is a discussion between Helen and Vijay about literary text and common cliché—what they meant in their past and what they mean now, and how to account for the difference. As the play opens Helen and Vijay discuss former course content, but what they are really doing is trying to come to terms with the crumbling walls of the world of love as aphorism defines it. (It is not coincidental that she

too has become an English teacher to further broadcast the cultural misconceptions she has gleaned from Vijay.) Notice too how he tries pedantically to limit his responsibility for Helen's predicament:

HELEN :Your course was very enjoyable, Mr Rao, especially Jane Austen.

VIJAY : Thank you.

HELEN : Especially *Pride and Prejudice (Three times)*. You remember the opening lines, "It is the truth"...

BOTH : "...universally acknowledged that a single man in possession of fortune must be in want of a wife."

HELEN : Wife? How can I forget it. You always said it was the truth.

VIJAY : Actually the quotation goes, "It is a truth"... But yes, I said it was true of Jane Austen's time and probably has relevance today.

Helen discovers that Austen is "wrong" and that her love-literature world view has proven to be illusory. Tennyson is the next villain:

VIJAY : "I hold it true, whate'er befalls

I feel it, when I sorrow most;

'Tis better to have loved and lost

Than never to have loved at all."

HELEN : It's so sad. (*Turns on Vijay.*) But it's not true, that's the reason I came to ask you. It's about my love life.

VIJAY : Your what?

HELEN : My life ... My love-life.

VIJAY : Oh.

HELEN : And it's a lie what Tennyson said. I've just loved and lost and I wished

I had never loved at all. Why did you make me believe it was true?

Yeo's choice of *Pride and Prejudice* and "In Memoriam" is effective in its irony. Little does it matter to Helen (and perhaps even Vijay who should know better) that Austen devotes all of her novel to the debunking of the kind of formulaic thinking which has entrapped her characters and with which she opens her work. Furthermore the love which informs the grief of "In Memoriam" is of course the love between two men! The literary rendition of love is often idealistic and while it can intersect reality, it rarely sustains a close comparison. Artistic expression and lived experience contrast more than mirror.

Helen discovers that she is now a dazed being in an unfathomable universe, an essentially absurdist position. In Scene II, when she returns bedecked in a Madonna inspired Breast Plate, Vijay too is forced to admit again that sex and literature don't mix either. This is one of the central features of Yeo's original script and Sherborne fastens to it like a dramatic limpet, giving his production extraordinary force which banishes other considerations in the process.

He takes Yeo's "nearly absurd," amputates the "nearly," then turns it into absolutely absurd. A vein of absurdity is certainly there in the original, but Sherborne gives it what might be called dramatic steroid treatment. In the original the audience is warmly invited into the lives of two people in crisis: it is encouraged to empathize in this crisis, participate in its exposition, and enjoy the ambiguity of the denouement. The emotional response to Sherborne's production is quite different. His sticking to the absurdist vein in the original gives his play an intense, unremitting, and even terrifying atmosphere. Helen's masked face carries the hideousness of permanent

entrapment, and her figure with its grotesque hooped wedding dress and punitive halter comes straight from a surrealist nightmare. Barefooted Vijay is dressed in simple dark Indian attire. He paces in his limited space like a captured animal and perspires profusely throughout as if that were part of the aesthetic planning.

The new stage direction which calls for a whisper gives an almost sinister edge to that which was previously rather matter-of-fact:

VIJAY : Sometimes I go as far to say [to the student seeking advice], "If I were you, I'll do this, but I'm not you and the final choice is yours." (Whispers. Audience as accomplice.)

That's all I can do. You can't tell them what to do. It's dangerous, especially if you are a teacher.

Despite his admitted awareness of the dangers on teaching, he nevertheless glibly and paternalistically tells Helen not only what to believe but also tries to change her from one literary type to another—from sterile Havisham to luscious Esther:

VIJAY : All you have to do is change. Look at your shoes. Look at your dress (Repulsion). Look at your face (Quiet). Those pathetic breasts. Why don't you do something about the way you look, why don't you change your appearance?

Sherborne's production notes show that he understands this irony and is going to push the results to the limit:

August 30. Helen Lee Tip Yee six months later. Gone, the hideous beauty of bridal entrapment, a mask effigy of magnified sadness. Helen reappears in a simple day dress, almost unadorned, but a new image, a-tack-on (attach/attack), metallic breasts, to ridicule V.J.'s words..."those pathetic breasts." A construction for V.J.'s desecration of female body, a black satire on the occurrence of breast reconstruction amongst Singapore Chinese women, into western pictorial stereotypes of beauty imagery; Beauty World!! A Madonna breastplate, in alignment to kitsch symmetry of Howard Hughes at Hollywood...¹⁰

So we are left with the image of Vijay quivering in a heap of desire for this creature who is rejecting him, and with the ambiguous transformation of a would-be Havisham to punitive Femme Fatale. It is the presentation of this theme of education as absurdity and the realization that it destroys the educator and the educated which is the strength of the Sherborne production.

But much material in the play was sacrificed as a consequence, the most notable being the role played by Singapore itself. The city is almost a third character in the original play.

You Can Take the Boy Out of Singapore ...

In Sherborne's quote above he muses on Helen's new weapon-like breasts, a satire of the self-mutilation of Singaporean women who want to become other. What is odd about that comment is his mention of Singapore itself, for Sherborne saw it as important for his vision to remove Singapore

from the play, de-localize the text, universalize concerns. William Peterson ascribes this to his loyalty to the Absurd and calls it "departicularising the play" the object of which is to make it "more accessible to non-Singaporean and non-Asian audiences who may not have been familiar with the social dynamics which informed Yeo's earlier version or the work." He concludes that this kind of "departicularising" of text can be of special interest to those "adapting works to communicate across cultures."¹¹ In other words cross-cultural art needs to remove parochial content which can make the play inaccessible to non-local audiences.

I watched the 1999 production of the original script, and as such was an audience member both non-Singaporean and non-Asian who was hitherto unfamiliar with particular Singaporean social dynamics which inform the text. The play presents those social dynamics with such subtle verve and at times comic panache that one very easily copes with the relationship between the characters' predicament as it related to a unique Singaporean context around which the action occurs. In other words this is what the play is about, the individual lot in a particular social context which both frees and imprisons the two participants. The highly professional Sherborne version was gripping and deeply disturbing but it had an alienating effect on the audience. It was also unremittingly gloomy.

On the other hand the amateur rough-around-the-edges replay of the original version in 1999 was more humane and empathic, eliciting a surprising number of different responses from me. The inclusion of things Singaporean is one of the main reasons for that, giving this version layer upon layer of implications which the adaptation did not include. I think it was James Joyce who quipped that "you can take the boy out of Dublin but you can't take Dublin out of the boy". The same can be said of Yeo, but more importantly of

the play itself.

It would be unthinkable to remove things Irish from Yeats' poetry, or things Russian from *War and Peace*, or things American from *The Crucible* in order to make them more accessible to non-local readers. Universality of art of any kind arises from the exploration and elucidation of a local issue, rather than that local issue getting in the way of such application. It is impossible to remove Singapore from Yeo's drama, prose or poetry without doing irreparable damage to it in the process.

Even a cursory glance through the verse in *Leaving Home, Mother* reveals that the development of the man, his poetic sensibilities and the history and personality of Singapore are too intertwined in his art to be easily unwound.¹² Poems about marriage are about matrimony in Singapore and how interplay of the marriage, the psyche of the persona, and particular social factors combine to make the poem what it is. This is also the case in *Second Chance*. In "Coming Home, Baby", for example, the unmarried state is a comment on the persona's social status but it is also a platform from which the reader can examine a love-hate relationship to the country:

But before I could
Extricate myself from the inevitable,
it came,
"Are you married?"
I looked at her squarely
And simply said, "Not yet"
"What?" she pretended,
"Who are you waiting for? Miss Singapore, Rosalind Ong,
Mavis Young?"

I sighed one helleva sigh. This is Singapore all right,
And how much one year back home
Can do to you.

In "A Dragon for the Family" which celebrates the birth of his daughter and what she means to him, things Singaporean are there in number: the 2.5 million clan members of which she will be part; water rationing at the time; and Chinese fathers and their need for sons. This is the context of place and time which makes the birth mean what it does. Without Singapore there is no birth. The list could go on. Michael Wilding comes to a similar conclusion that you simply can't take Singapore out of the boy, the man or the work: his poems

chronicle the developments of an individual consciousness while at the same time
chronicle the developments of Singapore. The parallelism of the poet and the city is
unforced but recurrent. It ... allows the personal to expand into the social, filling out
the individual observation to a public record.¹³

If this is obvious for poetry it is equally obvious for the play. I was drawn to the 1999 production because issues Singaporean were cleverly woven into the fabric of the play in a non-didactic manner, for they are presented as part of character not just through character. In *Second Chance* Yeo is first and foremost a dramatist and not a pedant. In fact he raises far more questions in it than he answers. Obviously the play is about marriage, but is there such a thing as Singaporean marriage which differs from the institution elsewhere? The play would suggest that there is, but you have to go to the original

production or its 1999 rerun to find it.

Marriage Singapore Style

Ultimately in his poetry Yeo does not know what to think of marriage—he is never conclusive about it. It is magical and diabolic, productive and stultifying, enlightening and ruinous. In "The Newly-Married" the youthful idealist who wanted to write has lost direction: "I met him/ At the races/ And he stroked his paunch/ And he ambled about horses and his son." "Stroked" and "ambled" connote lassitude, self satisfaction and the absence of dynamism; more damning however is the juxtaposition of "horses" and "son", both thought of as commodity or entertainment. He is one of the many "mopped and married complacents" who people Yeo's narrative verse, interesting foils to Helen in the play for whom marriage is something else entirely.

For Helen marriage is the way to make poetry and self real, to blend the promise of romance to the actualities of daily life. Without it she is both caged "linnet" and benighted "heart" from the Tennyson she and Chong remember:

LECTURER : ...Here goes.

"I envy not in any moods
The captive void of noble rage,
The linnet born within the cage,
That never knew the summer woods."

(Helen takes out from her handbag her pack of tissues.

LECTURER continues.)

Nor, what may count itself as best,

The heart that never lighted troth

But stagnates in the weed of sloth ...

Tennyson does not of course mean to discuss marriage in this at all, but Helen automatically pulls the text into that arena. But why? What does she achieve by doing so? Helen needs to define herself, and feels that marriage is a definition that meets a range of her needs and expectations. Of course the irony is that marriage as she accepts it stands outside herself, somewhere else. Her present identity is therefore only expressed through lack. Jacques Lacan's description of functional and dysfunctional self imaging described Helen's circumstance. The infant uses the mirror image of self and other to make sense of his or her own being and to make early excursions into potency. It is both a positive and a negative experience, illusory and actual because mirror "reflection has a coherence which the subject itself lacks." It "is a moment of alienation, since to know oneself through an external image is to be defined through self-alienation."¹⁴ This kind of identification is universal according to Lacan and is a means through which we find ourselves and lose ourselves at the same time.

Yeo comes close to describing this imperfect but unavoidable balancing act in "Lines for Nita's Birthday" when he almost ruefully suggests that one sign of adulthood should be the ability to "learn each day how to mix doubts/ With certainty."

It is natural to love and hate such images of projection, an

ambivalence which leads to a healthy narcissistic configuration of self love and self knowledge, and one, which differentiates between image of self and image of other. In cases like Helen's self-identity can exist too much in the external image. For her there is certainty where certainty does not exist. Through a projected marriage she is consciously trying to turn herself into a permanent and unchangeable object. Her being—her identity—is consequently a kind of self-postponement. Here she seems incapable of reading signs of a mature relationship with the man since they don't fit with her view of the certain:

LECTURER: ... were you engaged to be married?

WOMAN: : No, but we sort of went out a lot.

LECTURER : You mean, you were going steady?

WOMAN: : You could say that.

LECTURER : But did he at any time say he was in love with you and might eventually propose to you?

WOMAN: : No.

LECTURER : Were you really going steady in the last five years? I mean, going regularly, every week, every day?

WOMAN: : No. You mean going steady is like that?

It is pertinent in the original text that Yeo calls the character "Woman" indirectly implying that there is insufficient "Helen" about her. We can also see here that what the object of her affection actually thinks or feels about things is beside the point in her scheme of things. And the sentiment in the last line above is more than just expressive of naivete, it points to the absence of a reality factor through which she separates fact from fantasy, doubt from

certainty. The pathological strength of her vision of her "external" self is confirmed when she is driven to find any other man to bring it in to being. The Lecturer in a moment of unconscious, ugly irony almost agrees with her—"Anyone who is prepared to accept you should be good enough."

The State Intervenes: You Can Take a Horse to Water...

To the non-Singaporean or the non-Asian Helen's predicament is not surprising, after all the jilted woman is on of the stocks of all narrative tradition anywhere in the world; what is surprising is the concerns she expresses in an around the situation—the issue of educational status and its relationship to marriage and eligibility. The relationship between educational qualification, matrimony and state intervention is one of the factors that makes Singaporean marriage unique as an issue. Here Helen links his infidelity to the fact that he is a graduate of a university, a Canadian one at that:

LECTURER : Did he go out with other girls?

WOMAN : I don't know. I think so, lah. You know he is a graduate of a Canadian university and he's quite handsome and charming. So I think he must have other girls he goes out with.

She continues this *non sequitur*, galled by the fact that she has teacher certification but that her rival only has A levels, as she sees it a bigger problem than the fact that she is half his age:

WOMAN : Not only that, she's about twenty one and nearly half his age. He's
forty plus. And what's worse, she's only got
A levels and he's a graduate.

If Helen's obsession with educational status and its relationship to marriage seems odd and irrational, Chong's reply to her is even more telling: "The Singapore male graduate anyway usually married a girl who's less qualified than he is." This kind of detail is almost bizarre. Chong's knowledge is singularly Singaporean and Helen's fixation is a national preoccupation gone awry.

In Singapore marriage of a particular kind is seen to be in the best interests of the State as it tries to overcome what it sees as serious problems with population. Hence the genesis of the controversial Social Development Unit, which some Singaporeans accept as a surefire sign of the paternalistic decency of Father State and others as a national embarrassment. According to Jim Baker it was

established as a dating service for better educated Singaporeans. Serious money was invested in the programs such as sea cruises for single graduates, a kind of government "love boat." Parties were organized for the same purpose, and computerized dating services were set up for graduates The SDU continues to function but with limited success.¹⁵

The SDU is mentioned both by Helen and Chong in the passage of their conversations. Chong's information about the relative educational qualification of marriage partners in Singapore was one of the findings of state sponsored social research which, among other things, led to the genesis of the

SDU. Helen laments the exclusivity of the SDU which is for graduates only. The State sets up expectations for her then robs her of the chance to participate by limiting potential suitors. But why the SDU? Baker links its birth and consolidation to grave concerns the government has about population trends in post-colonial Singapore.

Singapore's spectacular economic success of the 1960s and 1970s was partly due to the rapid fall in birthrate which previously had been one of the highest in the world. When visiting the poor semi-literate Chinese family of a well-loved family employee in "The Other Side of the Seventies," Yeo observes that in this kind of family a large number of children is considered to be "a form of wealth." When the poem is being written this attitude belongs to a Singapore that is disappearing. Affluence, education and punitive governmental measures when the number of children went over two had combined to kill the high birth rate. Ironically this successful reduction in the 60s and 70s became a cause for alarm in the 80s and 90s. Baker records that in 2020 "there will be 117 retired people for every 100 who are working." And that not only are Singaporeans having "too few babies" but the "wrong people" are having them."¹⁶ "Wrong" people include guest laborers from developing countries and the seemingly fertile minority Malay community. In the foreseeable future the racial balance, which makes Singapore what it is, is about to be thrown out of kilter. Singapore markets itself as a comfortable multi-cultural society where all races and religions and cultures are celebrated, but only in so far as the paternalistic core culture can continue to call the shots.

The SDU then was meant to marry the right people to the right people and produce the right children (even though Malays and other minorities could participate they were in relatively small numbers). Marriage and birth becomes one way to ensure the future of the island state. In current

population manipulation by the state, some people are encouraged to have fewer children and some encouraged to have more. The division is not based openly on race (how could it be in a civilized democracy?) but on education. The poorly educated are still given financial incentives to stop after two children but university graduates are give financial incentives to have a third child.¹⁷

One of the strongest themes of the play is Yeo's exploration of the intersection of desires of the state, marriage, educational qualifications and what happens to a gullible individual who responds to this social manipulation by taking it at face value. Weaving in and out of Yeo's play (but only through character and never tendentiously voiced) are Foucault's perspectives on the state and power. In *Surveiller et punir* Foucault argues that the disciplines of the state were originally "required to neutralise dangers, to keep useless or agitated populations in their place" but once this is accomplished these "disciplines" are "required to play a positive role, increasing the potential utility of individuals."¹⁸ Helen's psyche becomes the conduit through which Yeo shows the meeting place of sex and marriage, the discipline of the body and the control of population. As Singapore is presented in *Second Chance* it illustrates well Foucault's notion of the disciplines of state

Singapore—Slogan City

I have noted above that Helen too readily absorbs simplistic life notions from literature about marriage, about education, and furthermore that her would-be identity is posited in those platitudes. In its efforts to take

responsibility for the aesthetic, moral and cultural well-being of the community the government effectively uses slogans through which to disseminate all sorts of information which it feels is for the progress and improvement of all. Much of this is altruistic and admirable. In my last visit to Singapore in August 1999 there were two highly professional slogan campaigns providing much of the visual interest in the mass transit stations, one about the sanctity of the family and the other featuring intriguing Confucian analects. Whilst there is no doubt that such campaigns assist the government in its intentions for the nation, writers like Yeo are worried about the damage they can do. In "One Side of the Seventies" he expresses his concern about the ease with which one slogan can so easily become passe and be replaced by another:

That while garden still, we've

Now gone global.

Asia that was instant here

Has now gone international.

It could only happen here.

Where the journey from instant

To international can be

As short as it takes one slogan

To replace another.

In the hands of half-effective or even moderately competent lecturers like Chong, or in the hands of malleable and gullible students like Helen slogans can be lethal. They are by nature easily ingested, effortlessly remembered and

totally reductive. Much of their conversation is either speaking through cliches, slogans or analects or coming to grips with the discovery that these sayings are not, in fact, universally true. They manage to work out in a rather convoluted dialogue that the adage that "love is blind" is actually meaningless, as are most slogans:

LECTURER:.... You know the old saw, "Love is blind"...

WOMAN : The what Mr Chong?

LECTURER: What? You mean love, love is blind?

WOMAN : No, the word before that, what you said something like "Saw, saw ...?

LECTURER: Saw?

WOMAN : Yes it sounds like "saw."

LECTURER: Saw? Oh, don't you know ...? I mean, oh, a saw, a cliché, a popular saying that is sometimes true and sometimes not true.

WOMAN : But is a cliché always untrue? If love is blind, why did he fall in love with a pretty girl. You know Mr Chong, the girl is quite pretty. That means love is not blind.

LECTURER: Well, I suppose that's the true part.

WOMAN : Where's the untrue part then?

LECTURER: The untrue part is that he falls in love with a girl half his age, old enough or young enough to be his daughter. In that sense he's blind. I suppose, blind enough to ignore the age gap

So Chong as representative of the paternalistic force that furthers the use of slogans, that bases education on them, tries to wriggle out of Helen's discovery that they are as obfuscative as they are helpful. And after Helen's return to taunt him with her new found sexual weapons she talks like a

television advertisement, now using different slogans—"Try Guy Laroche...they make glasses for men too"; "they take into account Asian sizes"; "you should spoil yourself a little." It seems that she has replaced the poetic aphorism with the economic and the material. Helen has ingested slogans to the point that her life is ruled by them and like the nation in "One Side of the Seventies" she has the unfortunate capability of replacing one type of slogan with another, and doing so in an instant.

Removing Singapore from the play robs it of too much. There are also two other important aspects of the original which Sherborne chose to expunge from the text: any hint of stylistic realism and its supposed sexist content.

Expunging Realism?

The Straits Times review of the 1992 performance saw the twin specters of "naturalism" and "sexism" as textual bedfellows in the original script; Peterson also mentions the plays "realistic context," echoing Sherborne's assessment of the play as being "too held down by conventions of realism"; and even Yeo writes of the original as a "largely naturalistic play ... realistically set in Singapore."¹⁹ When I first read the *Casebook* I mentally went along with the efficacy of removing old-fashioned realism and replacing it with more expressionistic abstract alternatives that would allow for, well ... better theater. I much preferred the tighter script of the adaptation, so was prepared to be enlightened—that is until I watched both productions. To my surprise and (theoretical) horror I thoroughly enjoyed the original. My

expectations were turned on their head. Being an audience member was quite a different thing from being a theorist or a reader.

Why do I prefer the original? Even though it was sincerely acted it had all the limitations of an amateur production which don't need enumeration here, yet I thoroughly enjoyed every minute of it. The adaptation held me at a some distance, probably just as well when there was so much that was unsettling in it, but the original invited me in. The plays so-called "realism" is the means through which its comedy is presented. If there was any laughter in the adaptation it was the kind of fearful, embarrassed laughter one finds in absurdist theatre. I say so-called realism because *Second Chance* uses a certain kind of realism which needs description. The *Casebook* misses the fact that the play isn't an example of conventional realism or naturalism at all, not as they appear in Ibsen or Dreiser or James. If anything the play is born in a cusp between traditions of the absurd and the real; after all it is titled a "theatrical exercise in the nearly absurd."

What kind of realism is it? The first is George Eliot's realism, one that used "common life and average experience" to "knit more tightly the bonds of human sympathy among her readers."²⁰ Human sympathy felt by the audience in the original production was very much linked to the humor inherent in the script. The Singaporean accent—that engaging and unique mixture of lilting rhythm and the dropping of final consonants—made much of the script very funny. This humor did not have the effect of wiping out the serious themes of the play; on the contrary, by increasing the human sympathy the audience feels for the characters we leave with a more complex view of their lives and the thematic issues involved. What I thought previously to be clumsy dramaturgical flaws were sources of amusement, like Helen's producing the tape recording of Chong's earlier phone conversation: "you

should change your appearance. You know, the way you dress, walk, the way you look generally" This is also an example of the absurd mixing with the real. By giving the illusion of real people in a real place, the original production was able to highlight the absurd, not bury it in myth or symbolism or the inflexibility of masks. This play is not just about the "permanent entrapment", "perpetual disappointment" and the "magnified sadness" which are the suggestions of the adapted version.

This cusp of a play actually demonstrates that the absurd and the Absurd are part of real life as Yeo sees it in contemporary Singapore. Paul Auster's novel, *Leviathan*, concludes (in much the same way as does Yeo's work) that the "real is always ahead of what we can imagine."²¹ By expunging the kind of absurd realism which is *Second Chance*, the Sherborne production limits the plays disclosure that the world we live in is both real and unreal at the same time, rational and absurd, meaningful and puzzling.

Expunging Sexism or Red Herring?

Is *Second Chance* sexist in its original form? The claim is made several times in the *Casebook*. Sherborne contends that in the original text "there appeared a barely masked agenda of sexist scapegoat"²² In his essay reacting to the 1992 adaptation, Peterson notes that Sherborne's "initial response ... included the concern that embedded in the text was a measure of 'structural sexism.'"²³ The repetition of this charge implies that he agrees with it. *The Straits Times* review in the September 14, 1999 edition also jumps on the bandwagon noting that *Second Chance* "would have been an incredible

sexist play, performed at a naturalistic level."²⁴ It is worth noting that none of these claimants saw the original on stage. (I wonder too if the reviewer spoke to one of the cast or crew before the performance?)

This is not the time to present a long disquisition on sexism in drama, but the claim can be made that a text is sexist if it willfully or unconsciously disseminates attitudes, conditions or behaviors which promote the stereotypification of social roles based on gender. This is certainly not the case with *Second Chance* (1988). It exposes the unconscious sexism of both the lecturer and his former student, but never supports it. The lecturer does speak paternalistically from the ivory tower, but we know his posturing to be as much an escape from reality as a celebration of it. His sexist paternalism is ultimately pathetic as his creation of Femme Fatale returns if not to destroy him, certainly to destroy part of him. If there is a sexist scapegoat in the play it is more likely to be the lecturer than Helen.

The play also understands sexist issues surrounding Helen's metamorphosis: she doesn't become a "mopped and married complacent" even though she thinks she desperately wants to. Instead she becomes a parody of seductive womanhood to wreak revenge on the man who jilted her and the kind of kind man the teacher represents who educates for romance but cannot deliver. Of course her final triumph is ambiguous. She still relies too much on her life being defined by arbitrary structures, but at least there is some pleasure in watching her change from victim to aggressor. She tries to turn herself into one object, and when that fails she turns herself into another. But at least it is one partly of her own choosing and one where she has a certain level of potency. She moves from whimpering to dynamism. And as we leave the lecturer wallowing in his sexual longing he is responding to the sexist creature he helped to create through his male gaze. Yeo is certainly not suggesting that

this is desirable and appropriate or good for either party involved. Merely that it is so. The play explores sexism subtly and complexly but at no time does it unwittingly further the aims of the sexism it is trying to expose. No audience member could come away from the 1988 production not questioning the sexist undercurrents of education, of fine "art" misused, of Singaporean governmental paternalism, and above all of sexual role and sexual type, and even the institution of marriage itself. They might enjoy Helen's metamorphosis but it is an alloyed enjoyment since it highlights the limitations of being female.

This play is thoroughly anti-sexist from the first word of the dialogue to the last. I can only assume that it's alleged sexism is a red herring that being *au courant* unfalteringly flipped and flopped from one hand to another. I hope it has finally run out of steam, or more correctly, air. As with beauty, sexism is in the eye of the beholder.

The Unspoken Transcultural Voice?

What is to be gained when the forces of two cultures join to produce anything, for example the adaptation of *Second Chance*? Intercultural discernment? Cross fertilization? Bi-cultural understanding? Sherborne admits his aim is something like this early in the *Casebook*:

Eugenio Barba, in a gentle reminder of intercultural flux states in his preface to *The Paper Canoe*: "We have something to exchange as so we travel to meet." It is a position this *Casebook* acknowledges; the personal interaction beside the unstated transcultural voice.²⁵

But fruitful cross-cultural experience must retain something of the local in it for without it there is no culture to cross. If I watch a play from Singapore as a foreigner, an outsider, and soak in much about the place and the time, and feel I am closer to understanding the complexities which go to making the place what it is, then that is genuine cross-cultural interchange. The 1992 adaptation of *Second Chance*, which removed as much of the Singaporean content as it was possible to remove, politics and humor especially, was simply too reductive, albeit sincerely and co-operatively delivered.

You would think that post-colonial scars which mark every Singaporean in some way or another would have made them wary of other subtle forms of imperialism. Even the aesthetic which is, after all, only the political made beautiful.

¹ Quoted in Donald Keene's "Introduction" to *Five Modern No Plays by Yukio Mishima* (Tokyo: Charles Tuttle Company, 1967) vii. The performance was staged in 1878 by his Japanese hosts who felt it would be politic to expose him to something from the traditional Japanese canon.

² Robert Yeo & Guy Sherborne, *Second Chance: A Cross Cultural Theatre Casebook* (Singapore: Theatre Works (S) Ltd., 1996).

³ I viewed both the 1992 and 1999 productions. The latter, though including some minor textual revision, was very close to the original production in staging and in sentiment.

⁴ Sherborne, *Casebook* 1.

⁵ Sherborne, *Casebook* 34.

⁶ Peterson, *Casebook* 7.

⁷ Extracted from a letter to the writer from Yeo, 8 September 1999.

⁸ I frequently write things like "Sherborne's adaptation" or "Sherborne's version" when referring

to the 1992 production. In doing so I do not wish to imply that it is his production. I acknowledge that the 1992 production was the result of a group dynamic. I only write of it as his for convenience.

⁹ Quoted in M.H. Abrams, *A Glossary of Literary Terms* (New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1971) 86.

¹⁰ Sherborne, *Casebook* 56-7.

¹¹ Peterson, *Casebook* 7.

¹² Robert Yeo, *Leaving Home, Mother: Selected Poems* (Singapore: Angsana Books, 1999).

¹³ Michael Wilding, "Introduction," *Leaving Home, Mother* 11.

¹⁴ Madan Sarup, *An Introductory Guide to Post-structuralism and Postmodernism* (Athens: University of Georgia Press, 1989) 27.

¹⁵ Jim Baker, *A Popular History of Malaysian and Singapore* (Singapore: Times Books International, 1999) 384-5.

¹⁶ Baker 381-383.

¹⁷ Baker 384.

¹⁸ Foucault quoted in Francois Ewald, "A power without an exterior" in Timothy J. Armstrong, Ed., *Michel Foucault: Philosopher* (New York: Routledge, 1992) 169.

¹⁹ *Casebook* 6, 18, & 17 respectively.

²⁰ Quoted in C. Hugh Holman & William Harmon, eds., *A Handbook to Literature* (New York: Macmillan Publishing Company, 1986) 413.

²¹ Paul Auster *Leviathan* (New York: Penguin Books, 1992)

²² Sherborne, *Casebook* 34.

²³ Peterson, *Casebook* 4.

²⁴ Quoted in *Casebook* 32.

²⁵ Sherborne, *Casebook* 2.

(ジョージ ワット・本学教授)

苫小牧駒澤大学紀要第3号（2000年3月31日発行）

Bulletin of Tomakomai Komazawa University Vol. 3, 31 March 2000

〈翻訳〉「コールドロンの戦い」『500 ネーション』（第五部）

<Translation> "Cauldron War" In *500 Nations* (Series No.5)

村 井 泰 廣

Yasuhiro MURAI

キーワード：ネイティブ・アメリカン、アメリカン・インディアン、
先住民族、フレンチ・アンド・インディアン戦争、ポン
ティアック戦争、アメリカ独立革命

要旨

北米インディアンとヨーロッパ人の初期の接触は、単純な取引を通じて両者の友好が保たれていた。が、次第に植民地をめぐる経済的利益を追求するヨーロッパ諸国のパワー・ポリテックの渦中にインディアン諸国家が巻き込まれる。

アメリカ独立戦争の過程、パリ講和条約の調印終了後も、オハイオ川流域地方では、インディアン連合軍がなお戦闘中であり、むしろアメリカ軍に対し、軍事的優位に立っていた。威信を傷付けられたワシントン政権は、強力な軍隊をもってインディアンの村落を破壊し徹底した焦土作戦を展開した。かくしてインディアン連合軍は敗北したが、彼らの必死の抵抗は無駄ではなかった。ワシントン政権は、インディアン部族を条約の当事者つまり「国家」として扱い、彼らの占有地にたいする権利を認めた。

～ はじめに ～

この翻訳は、8時間有余にわたりアメリカ CBS テレビ連続番組の北米インディアン諸国家の歴史を基に台本化された『500 ネーション (500 Nations)』全8部(シリーズ)のうち、第5部の「コールドロンの戦い (Cauldron War)」を翻訳したものである。当番組は、映画監督ケビン・コスナー (Kevin COSTNER) がナレーターで、人間の平等と権利を謳って新天地に挑み、繁栄を築いた栄光のアメリカ史の裏に隠された残虐さを描き、また、土地と生命と、そして精神を圧殺したヨーロッパ人の傲慢さをドキュメンタリー・フィルム化したものである。その目的は、ヨーロッパ人によって書かれてきたネイティブ・アメリカン(今日では、「アメリカン・インディアン」という言葉は正しい呼称ではないとされている)の歴史を、自らの立場で見直し、その歴史観を展開したものである。白人による「インディアン」の過去の歴史がいかに偏見に満ちたものであり、歴史的具體性と客観性に基づいた認識と理解を欠いた記述を問い正すものでもある。が、同時に、多くの聴衆を意識して制作されたドキュメンタリー映画に伴う時間的制約から、客観性という意味における学術的緻密さを欠いていることは否定できないが、その正鵠は得ているということにおいて、このシリーズは、北米大陸初期入植者のヨーロッパ人によるヨーロッパ人のための一元的な歴史観に対する補正を試みており、ある一定の貴重な役割を果たしている点は高く評価される。

〈翻訳〉

「コールドロンの戦い」『500 ネーション』（第五部）

"Cauldron War" In *500 Nations* , Series No. 5

Film script by Jack Leustig, Roberta Grossman, Lee Miller,
and William Morgan, 1994

北米大陸の植民地が東部に設立される以前、新世界にはヨーロッパの野心的な企業家たちが西部に進出し始めていた。この肥沃な大地の境界線を調べながら、彼らが発見したものはインディアン国家の富と呆然とさせられるほどの豊かな自然資源だった。美しい毛皮、枯渴することのない鹿の皮。一方、インディアンたちが見たものは、ヨーロッパ人が持ち込んでくるものが、自分たちの生活を非常に楽にするものだった。金属製の斧、ナイフ、銅製のヤカン、そして、銃。

しばらくの間、両者は単純な取り決めで充分だったが、直ぐに北アメリカはヨーロッパ人にとって抑え切れないほど貴重な存在となった。ヨーロッパ人は大陸の資源を確保・支配しようと軍隊を送った。それはちょうど、現代の軍隊が石油を確保しようと軍隊を送って戦争をするようなものである。

白人が全くの見知らぬ者（ストレンジャー）としてここにやって来た時、白人たちにはインディアンの国で着ている毛皮が価値あるものと分かった。それゆえ、白人たちは私たちの祖先に多くの品々を持ち込み、それらを見せた。それらはとても魅力的なものに映ったのであった。白人たちは言った。「あなた方は私が持ってくる物に対し、あなたがたの動物の毛皮を売ってくれないか。」と。私たちの祖先は応えた。「私たちはあなたの物を買おう。あなたはわたしたちの毛皮を買う。」白人たちも、それ以上のことは提案しなかった。私達の祖先も、それ以外、何も同意するものがなかったし、そういう単純な取り決めで充分だったのである。

1600年代、フランス人とイギリス人の毛皮商人たちは、北米大陸の奥深くまで入り込んだ。そこには奥地に住んで居たインディアンたちは、ビーバー、ミンク、キツネ、そして、他の毛皮動物の狩りをしていた。北米のインディアン国家にとって、ヨーロッパ人と商取引をするということは、何世紀もの間、繰り返えされてきた季節的な狩猟の単なる拡大に過ぎなかったのである。冬、彼らは狩猟や罠をかけるために野営していた。それは各インディアン部落がさらにより小さなグループに分散する伝統的な季節でもあった。春になると、彼らはそれぞれの野営（キャンプ）から一緒に戻ってきて、部落の生活を取り戻す季節でもあった。ハンターたちは、冬に捕獲した毛皮をもって家に帰り、取引を歓迎した。当初の間、ヨーロッパ商人たちは、このインディアンの季節（サイクル）にあわせていた。即ち、美しいエキゾチックな毛皮がインディアン側の強い交渉テーブルの上で行われていたのである。

モンタニエ族の指導者が、ある日、「ビーバーはすべてに役立つ。それはヤカン、手斧、刀、ナイフ、パン。要するに、ビーバーの毛皮はそれらすべてを作るんだ。」と冗談っぽく言うのを聞いたことがある。彼は動物の毛皮を好むヨーロッパ人をむしろ、もてあそぶように楽しんでいただのである。毛皮商人たちは毛皮業がヨーロッパ経済の中核になっていくのを察知していた。ビーバーのフェルトから、そのフェルト帽までヨーロッパでは大流行になった。その後、北大西洋貿易は膨大な量を占めていった。それは、ちょうど、外から入ってくるヨーロッパ式貿易というものから、互いに誰が一番多くをもてるものになるか、しのぎを削っているようなものであった。ヨーロッパ人が来る前、私たちの民はそうではなかった。しかし、ヨーロッパ商人はすぐにそのような方法で裕福になることができることを学んだ。高まる需要とより高い価格が毛皮商人を変えさせていった。そして、それに伴ってインディアン国家の構造も変っていった。多くのインディアンたちは、古い経済活動を追求してい

るよりも、ヨーロッパ人と取引をすることがより実入りのいいことに気が付いた。より簡単な方法へ、より容易な方へと流れることによって、自己も、またその文化も失うのである。なぜなら、文化を維持するということは、いつも簡単で容易なことだとは限らないからである。若者たちは、自分たちが担うべき伝統的なコミュニティの役割を放棄したのである。彼らは商取引としての狩猟を追求し、取引を通じて得られる物を取得するために農業国家（ネーション）が必要とした農産物を少なくしていったのである。畑は休耕地にしていき、ヨーロッパ商人たちから食糧を買うために、毛皮が使われたほどであった。インディアンたちにとって彼ら自身の古い伝統文化と宗教的価値というものが、変質されていったということである。すなわち、母なる大地が投機的な富の対象となり、動物たちが商業的な狩猟という形を通じて変質されていったのである。それは、当のヨーロッパ商人たちでさえ、その時代がインディアン国家の過渡期であることに気づいていた。以前、インディアンは彼らが必要とする分だけしか動物を殺さなかった。彼らは、決してムース、カワウソ、ビーバー、その他の動物の毛皮を貯蓄することはなかったのである。しかし、そのために、ほんの十数年間で、この地域全体の動物の数は完全に根絶されたのである。

モヒカン族の嘆き

昔、私たちと物々交換するものはいなかった。この島に白人たちが来たら、動物を無駄にになってしまうようになった。かつて平和に取引をしていた国家が、白人たちの巧妙な後押しによって、互いに競争をし、また、敵意さえ強られるようになっていった。過去、私たちの祖先は、平和に、愛を持って、しかも、素晴らしい調和をもって暮らしていた。豊富な大地にはすべてがあった。ああ、しかし、どうだろう。いまでは、そうではない。魚を捕るにも、狩猟をするにも、鳥を捕らえることもす

べてできなくなった。

モヒカン族ハリー・クワボウエッテ

固執してきた伝統的な価値は、すべてアルコール取引によってさらに侵食された。英国の商人たちはじっと見ていた。インディアンの男たちが酔っ払っているのを。男たちが家にあるすべてのものを持ち出すのを。それを止めるために女たちが森にそれらを運び、隠そうとするのを。そして、男たちの酒飲みを止める女、子どもたちに暴力をふるうのを。その後、男たちは自分たちをも傷つけていた。なぐり合ったり、お互いを殺しあったり。各世代でアルコールはインディアン国家の社会構造に深く入り込んでいった。1803年だけでも、1621,000ギャロンものラム酒がこの地域に流れた。それは何を意味するかというと、私達が人間であるかないかという問題なのだ。虐待者はわれわれの土地に土着していない。しかし、悪意に満ちたラム酒は狡猾な白人たちの友情を装って持ち込まれ、驚くほどたくさんのインディアンたちの間に広まっていった。クリーク族にもまた、それが致命的な取引であることが認識されないまま、そのような取引がもたらされたのだ。

それでも、20世紀までインディアン国家は長い伝統を維持していた。絵画の発展とその絵の具が高く評価され、ヨーロッパ商人が、赤黄土色の明るい朱色の顔料をインディアン国家に紹介した時、顔や体の飾りにひろく使われるようになっていた。しかし、その顔料は鉛と水銀からできしており、隠された毒とも言うべきもので何千人もの人を打ち倒したのだ。

そのような取引は私たちインディアン祖先と白人によって同意されたことであるが、白人のために多年にわたり狩りをしたことから、次第に狩りで得る収穫は少なくなり利益も少なくなっていった。いま、私達が推論することは、白人との取引で石を使用するかわりに、鋭い斧を使用して木々を伐採したことであり、また、体を温める原始的な服を着

る代わりに、大洋を越えて運ばれてきた服を着用したことである。そして、豊富な食糧の代わりにいつも空腹になってしまったのである。勤勉である代わりに、インディアン達は酔っ払いになってしまったのだ。

かつて南部大西洋岸沿いにある小さなインディアン国家は自分たちの経済的運命を自身の手中に握っていたのだが、英国人はチャールストンを建設した。シウィー族、「島人」の領地にチャールストンは忽然と現れ、南部植民地の経済的中心地として繁栄した。1600年代、チャールストンの建設に伴い、森深いシウィー族国家をはじめ、その近隣諸国の経済は白人との交易を中心地として展開していった。クリーク族の周辺に住んでいた白人たちは、大商人となった。彼らは内部深くまで入り込んだインディアンと取引をしながら、工業製品やビーズ（数珠）などをあらゆる方法で交易をした。主に鹿の毛皮を取得するためにあらゆる手段が用いられた。しかし、チャールストンの白人商人の財政的成功は、インディアンの供給者には拡張しなかった。むしろ、インディアンの供給者が受け取った利益は、チャールストンの白人商人が英国の買い手に支払った値のたったの5%だけだったのである。これが白人とインディアンの典型的な取引だったのである。

シウィー族は、フェア（公正）に取り扱われるよう決意した。イギリスの船はそこにあるインディアンの地所が、あたかも自分たちが確信できる道、まさにイギリス人の道であるかのようにして入港した。その頃から、インディアンたちは非常に多くのイギリス船を見るようになり、交易が公正でないと思うようになった。

船積貨物の検査官ジョン・ローソン

シウィー族は、地平線上にイギリスの船が最初に現れる遠い所まで、自分たちの船（カヌー）を漕ぎつけば、英国への道を見つけることがで

きると彼らは思った。そして、そこに一度着けば、彼らシウィー族は、利益をむさぼる仲介業者を排除し、直接に取引が成立するだろうと、その準備を密かに始めた。彼らは早速、カヌーを増やし、しかも、最上の、最大のカヌーを作り、彼らが意図したイギリスへの航路を発見するためにインディアンが雇われた。勿論、あるインディアンは狩りに。そして、それぞれの役に、任命された全てのインディアンたちは、その役職（ポスト）に最も適任であり、ヨーロッパへ航行する船と貨物に向かうための誠意努力が重ねられた。

準備の数ヶ月後、生の毛皮、なめし毛皮、そして、シウィー族国家の最も高価なほとんどすべての富はカヌーに船積みされた。全ての頑強な体をもつ男たちも女たちもその船に乗った。打ち寄せる波に、子供達、病人、老人をだけを残して船は乗り出した。シウィー族国家は行動を共同とする集団になっていた。しかし、彼らが大洋に入ると、彼らの壊れやすい船は悲惨な状態に陥った。雷、強風が吹き荒れた。高潮がシウィー族のカヌーを飲み込んだ。生存した者達は、しかし、幸運な者たちではなかった。彼らは救われはしたが、通りすがりの奴隷船で西インド諸島の奴隷競売地に送られた。こうしていとも簡単にシウィー族国家は滅亡した。そして、彼らは商品になったのである。

そういうことは、彼らシウィー族国家だけではなかった。インディアンの奴隷たちは鹿の毛皮、ラム酒、南部植民地経済の基礎を形成した。南カロライナ州チャールストンでは奴隷貿易が実際に始まっていた。インディアン売りである。後で知るように、アフリカ系アメリカ人（黒人）と共にそこで売買され、1600年代そして1700年代のインディアンも一緒に市場に連れてこられ、街の一角に立たされ、競売に出されたのである。多くのインディアン奴隷は国内経済の南部、あるいはニューイングランドに船で運ばれたが、砂糖プランテーションで仕事をするために、バーバドス、パハマ、ジャマイカ、その他のカリビアンに送られたインディ

アンも多かった。残忍な奴隷状態に置かれた生命は短く、インディアン奴隷は、暴力、病気、そして厳しい労働条件のもとで死んでいったので、インディアンに代わって黒人奴隷が輸入されたのである。アフリカ人も、インディアンも基本的に動物として取り扱われた。たとえカソリック教会がインディアンの人間性を認識したとしても、やって来たほとんどの征服者たちは、その人間性を認めなかった。彼らは野生の馬や牛を取り扱うように烙印を押し、長い列をつくり行進させ相互に鎖つけた。人間として、彼らを取り扱うことはしなかった。牛や馬やロバが売られると同じく、インディアンを売り払ったのである。

1730 年後半、ある南部植民地の奴隷市場では、奴隷が依然としてインディアンの人たちだった。ここに売られたひとりのインディアンを競売場で見ろ。白人は私の種族を奪^{うば}い去り、そして他の白人、バーミュダのスペイン人に売ったのだ。しかし、私はここで言いたい。それは地球の端で、遙か彼方に聞こえた雷の音のようであったかもしれない。奴隷性を擁護する彼ら白人は、野獣より性質が悪く、退廃した原理に顔を背けもしなかった。彼らは、臆病者であり、人間のなかで数えら得るに値しない者たちだ。

ピーコット族：オダワ人、ウィリアム・アペス

イギリス人、フランス人は槍の両刃のようなものである。そして、私たちインディアンは、彼らの服のような存在（もの）である。1700 年半ばまでに、東部内陸のインディアン国家はヨーロッパの列強に囲まれた。スペインはフロリダを植民地にされ、彼らヨーロッパ人の間で粉々に斬り裂かれた。

イギリス人は東部の植民地から威圧し、フランス人は精力的に五大湖を横切り、ミシシッピ川に沿って進出した。暴利をむさぼる毛皮交易に刺激され、貴重な耕作地にそって、北米大陸にはヨーロッパ人が見

られるようになった。商取引きを目的として、それらを手に入れるために、本国フランス人もイギリス人も内陸部から自分たちの交易事業を援助するため、そして自分たちの主張した土地を強固なものにするため、駐屯前哨基地を設けた。居住地の不法進入とか土地所有の等の思想（考え）は、私たちインディアンにとって馴染まないものであり、理解できないものであった。私達は個人として、それを理解できなかった。それは、ちょうど、土地とその上にある空気を個々人の所有者に区分けするようなものであり、私たちの母親の乳房を切り裂いているようなものだった。

マスケット銃

1754年、フランスとイギリスは大陸を支配化におこうと衝突した。これは「フレンチ・インディアン戦争」として知られるように成っている。ヨーロッパから遠く離れたチェスの試合のように、領地、権力、そして、交易のため、インディアン国家を単なる（チェスの）歩兵たちの戦いのように、アメリカでの紛争がゲームのように見られた。アメリカでは、内陸部のインディアン国家が彼らのホームランド（本国）の暴力に満ちた戦いの場になっているのを知っていた。

どうして、あなたたちイギリス人とフランス人は、自分たちの故国で、そして、海の上で戦わないのか？ どうして私たちの土地で戦うのか？ シingas、レナペ、ほとんどのインディアン国家はその戦争に加わった。フランス側に味方した私たちはフランス人に対し非常に親近感を持っていた。その理由は彼らが私たちの領土に植民地化をする考えや、敵対的な策略を持っていなかったからである。彼らフランス人が私達と一緒に住むなら、また、インディアン族に混じって結婚をし、彼らは歓迎されるだろう。他方、イギリス人は植民地者として悪名高かった。イギリス人は大英帝国に日が沈むことをどこの植民地においても望まなかったの

である。そして、イギリス人はこの新世界においても全く同様であった。1760 年には 6 年間の戦争で、フランス人はオハイオ渓谷と西部五大湖その地域から突然の撤退で、フランスに味方したインディアン同盟に大きなショックを与えた。フランス人が北米大陸の他の地域で戦い続けていると、ここ（オハイオの渓谷と西部五大湖その地域）では、英国軍隊は敵対されることなく、かつて自分たちが見捨てた砦に進出することができたのである。

インディアン男

イギリスの男達よ、あなた達はフランス人を征服したけれど、あなた達は私たちをまだ征服していなかった。私たちはあなたがたの奴隷ではない。これらの湖、森、山々が私達に残されていた。それらは私たちの先祖による私たちの遺産である。それらを切り離すことの出来ない私たちは自然の一部なのだから。

フランス側についたあるオダワ族の男は、フランスの撤退を見た。しかし、その戦いを断念することを拒否した男がいた。彼の名はポンティアック。彼は生まれたその夜に雪と雨と風があった。稲荷光と雷、そして、流れ星があった。その夜、起きた現象のすべてを古老が語った。「偉大な人物が生まれている」と。多くのインディアン指導者たちが、イギリス人を見る一方、ポンティアックはイギリス人をインディアン国家の脅威として、インディアンの民にとっても脅威であると見なしていた。そして、統一という共通の目的のために、過去をわきに置かなければならなかった。ポンティアックの洞察は、数世代に渡るインディアン指導者たちの考えを変えた。彼ポンティアックがやったことは自分の考えをまとめ、自分の民を組織し、他の種族をまとめた。そして、彼は巧みな雄弁さと偉大な外交的働きと智慧をもって人々を統合した。

インディアン男

私たちはヒューロン族と数百年にわたって闘ってきた歴史がある。それゆえに、ある者は彼らの激しい敵であった。種族の敵であった。私たちはショーニー族と戦った。多くのこれらの部族と闘ってきた歴史が私たちにある。彼は各地を巡回し、彼らを統一の一部に組み入れようとした。これは「ポンティアック連合」として知られる。これは、私たちが、私たちを殺そうとする国家、すなわち、私たちの大地から撲滅させられるインディアン兄弟にとっても重要なことである。私がイギリス人の隊長に私たちのある同志が死んだと告げるなら、彼は嘆き悲しむ代わりに私とあなたを嘲笑するだけだろう。私が病気のため、彼にあることを頼むなら、彼は拒否し、私たちからは必要とするものは何もないと私に告げるだろう。もう時間を失う余裕などはないのだ。イギリスを敗北させるには、私たちはその回路を立ち切らねばならない。そうすれば彼らは、私たちの国に戻ることができないのだ。

ポンティアック

闘う男たち、アニシナベ、マイアミ、セネカ、レナペ、ショーニー、そして他の部族諸国は、彼ポンティアックの呼びかけに応えた。1763年の5月、ポンティアックの反乱はデトロイト砦を包囲して噴出した。2ヶ月以上にわたり、その地域にある11個所のイギリスの砦が陥落した。デトロイトとピッツ砦だけがイギリス人の手に残った。ポンティアック連合による包囲網のもとで、彼がイギリスの砦を落とし始めると、ポンティアックは砦ひとつひとつ落とし、その回路を断ち、その安全性を断ち、彼らイギリス人を孤立化させた。その次に彼の目標は、最期の砦、デトロイト砦を獲得え、イギリス人を家鴨や鵞のように大西洋に押し帰すことだった。ポンティアックはまさに全面勝利のきわみにあった。フランスは依然、ルイジアナを掌握していた。フランス軍隊はイギリス人を追い

出すため、また、彼ポンティアックを助けるため、ミシシッピ - 地方のフランス居住者は彼にこの地域に直ぐ戻ってくると確約していた。しかし、ポンティアックに何の報せもせず、パリでイギリス人への敵意と敵対を終了させ、北アメリカ大陸におけるこの二つの強国の間で既にフランスはイギリスに降伏の署名をしていた。その合意のうわさは6月ポンティアックが勝利の最高潮の時に届いた。しかし、彼はフランス人が彼の勝利に応じないとは思わなかったのである。イギリス陸軍はフランスとの戦いから解放され、インディアン連合隊に大々的な遠征隊を送り出した。しかし、ポンティアック同盟は自分たちの場所を死守したのである。

マスカット銃の銃声と叫び

ますます絶望が被うイギリスの将兵ジェフリー・アムハーストはポンティアックの首に懸賞金をかけ、遂には細菌使用という残忍な戦法を提案した。即ち、免疫のないインディアン種族の間に天然痘を撒き散らすことであった。何か策略することができないか。インディアンを駆逐するこの機にあらゆる戦略を使い、この忌まわしい人種を絶滅させるために首尾よく毛布に細菌を植え付け、駆逐しなければならない。こうして、ショーニー、レナペ、オダワは根絶にされてしまった。ピット砦からの天然痘に汚れた毛布が配われ、私たちインディアン（アンドリュー・ブラックバード）オダワ族の間にひどい病気が即座に蔓延した。この残忍な病気の破壊行為で、死体だけを残して小屋から小屋は完全に空になった。あちこちに横たわる死体の小屋の中で全ての家族は、掃き捨てられた。十月、フランスの降伏の確認がポンティアックと彼の同盟の許に届いた。そのニュースは、決定的な衝撃だった。反乱軍の勢いに対し、フランスの援助はもう決して来ないと彼らは知らされた。ポンティアックは、デトロイト砦の包囲を解き、彼の民と共に冬キャンプに退いた。

翌春、彼はイギリス人に対して、もう一押ししようと軍隊の召集を試みた。しかし、この試みは効果的でなかった。多くのインディアン国家は、イギリス人の定住は決して彼らの土地には行わないというイギリスとの密約で勇気づけられていた。彼らはその上で、イギリス人との関係を正常化することに熱心であり、ヨーロッパ人との交易の再開を希望していた。そして、それから一年が過ぎると、ポンティアックに従うものもなく、彼は裸の指導者になっていた。

イギリスの砦はそこに留まったまま、彼の時代は過ぎてしまったのである。1769年、6年後、イギリスに対して信じられないような果敢な戦略を成したポンティアックも死んだ。彼はカオキア古代インディアン・センターで殺害された。しかし、彼の人生は空しいものではなかった。インディアン国家を統一しようとした彼の洞察力はこれからもこの地域を通じ、否、この地域を越えて、来たるべき時代に響き渡るだろう。その思想は死ななかつたのである。ポンティアックが植え付けた思想は、他の指導者たちに、他の部族に広がり、ポンティアックの人生は、未来へのメッセージになったのである。

五大湖の諸国家とオハイオ渓谷が、もう一度、再び立ちあがる前に、アメリカの植民者たちと彼ら植民者の王様との間で、金のかかる戦争に北米大陸は巻き込まれて行った。イロコイ族は笑う。あなた達アメリカの植民者たちが自分たちの王様に従順であるということを話す時、イロコイ族は承服できない。なぜなら、人の尊厳に従順な振る舞いを示す思想とは、個々人にとって、他の力を認めるように、自分の自由を創造者からのみ主張しうる自分の心の中の主人であるべきなのだ、という抱負をもっているからである。

ジョン・ロング 毛皮商

ヨーロッパ人たちのインディアンに対する考え方は、インディアンが

人間として存在していない。しかし、あなたが私たちの歴史の中には入り込み、その歴史を振り返って調べてみるならば、私たちは既に、北米で最も古い民主主義を打ち建て、五つのインディアン国家によって組織された政府をもっていた国家であることにあなたがたは気がつくでしょう。しかも、生命体のすべてがすでに完全なものであったことも。今日、ニューヨーク州にある。オノンダガ、オネイ、モホーク、セネカ、ユガ。それらは総じてイロコイ族として知られるようになった。彼らは自分達を「ハウデノサウネニー（THE HAUDENOSAUNEE）」と呼んだ。ハウデノサウネニー連合そのものは、「フレンチ・インディアン戦争」の前の世紀、五つの国家の間にあったインディアン同士の戦いと復讐の悪循環が制御コントロールできない暴力的な時代に生まれたものだった。

叫び

混乱の真っ只中、フーロン族国家から先見性をもった男が現れた。棍棒と弓矢という暴力より、彼は智恵ある教訓を運んできた。彼は平和の使者として知られ、人々と国家が平和と統一の中に住むことの出来る道徳原理に導かれた自己を規定するシステムである一連の法律を提案した。これは「偉大な法律」として知られる。すべての行為において、自己利益は投げ去られ、いつも現在だけを考えるのではなく、来たるべき世代の生まれていない子孫の未来の国家にむけて、しかも、全体の人々の福祉に目を向け、この偉大な平和の使者は連合と法律を計画した。彼は争っている五つの国家を一つの心に、一つの体に、一つの精神に結び付け、彼は5本の矢を使うことによって、それを象徴とした。彼がひとつの強い連合を結び付けるときに彼は言った。「1本の矢を折るのは簡単に折れる」。彼は彼らの前で、1本の矢を半分に折って見せた。続けて「もし、すべてが一緒に結び付き、連合すると、あなた方は決して折れない」と述べた。そして、その最初のワンパンベルトが偉大な法律を象徴する

ために創られ、そのイメージはその夢を具体化し現実した。

其々独立したこの5つの国家は、ひとつとして連合した。偉大な法律は、道徳的な教訓と具体的な計画のセットであった。民主的な連合のために国家間の社会的組織が構成・設立されていた。それぞれの国家の一族は拡張された大家族として奉仕し、一族の女たちが所有する長い家に住んでいた。長さ200フィートまで及ぶ長い家々は12家族ほども多くの家族を収容し、プライベートな場所と囲炉裏を共有する安全な場所でもあった。厳しい冬に対しても虫が寒さを逃れてくるほどであった。一族の構成員は母親から子へと伝わり、子供たちが青年に達すると、彼らは他の一族のものと結婚した。このように全国家はひとつのより大きな家族として織られていた。この一族構成からハウデノサウニーが立てた代議制の民主主義をそれぞれの一族の女達が一人的男を指名して一族の長とした。このようにして指導力は信頼を通じてつくられていた。征服というよりも、5つの諸国家を代表する一族の長が集まり、ハウデノサウニーにオノンダゴの首都全体会議を創設するために、この全体会議は領地の内部から支配する全ての5つの国家を視野に入れていた。安全を保護する巨大な長い家は250マイルにも及んでいた。この長い家の中央の通路はハウデノサウニーの道、すなわち、コミュニケーションの主要なラインであり、この同盟のメンバーの間では東側ドアの地所はモホーク族によって守られ、セネカ族が西側のドアを見張っていたのである。そして、オノンダゴ族がその中心である火の見張り役であった。平和の使者による予見された民主的な連合は何世紀にもわたって平和を維持した。

1600年代初期に、ヨーロッパ人がハウデノサウニーの領土に来た時、平和の使者がその手続き、或いは条約原案がヨーロッパ人の政治的なそれと類似していたものであったので、すみやかに対処することができた。事実、1754年ベンジャミン・フランクリンはニューヨーク・アルバニーでハウデノサウニーの会議に出席した。彼はひとつの法律の支配下で統

一された、しかも、独立国家が成功したモデルを見、鼓舞されて帰っていった。その直後、彼は植民地に似たような統一体を提案した。それから22年後、自分達の独立をイギリスから勝ち取るため、これらの提案「合衆国」が宣言された。そして、その年の1776年、アメリカは革命にむかって事件が起こったのである。

一万人強のハウデノサウニー族が、合衆国植民地とカナダ・イギリス領の間に重要な戦略的な位置を占めていた。イギリス、そしてアメリカの外交官たちは勝利のカギとして、彼らを自分達の味方に引き入れようと何度もこの全体会議の代表と会った。しかし、偉大なる法律によって布かれた平和の原則に導かれていた全体会議は、中立を宣言した。彼らはどちらの列強とも同盟を結ぼうとしなかったけど、外交的ジェスチャーとして、全体会議からの中立宣言は、フィラデルフィアにもたされた。フィラデルフィアでは、ハウデノサウニー族は北米における最古の民主主義政体であることが公式に認識された。その宣言は、まだ若いアメリカ政府のインディペンダンス・ホールにある大陸会議の会議室の上に据えられていた。そして、そこでは代表者達が独立宣言を起草していた。

1776年の同じ決定的な夏の間、ジョセフ・ブラントと呼ぶ若いモホーク族は英国から帰ってきた。被保護国の住民、インディアン局のイギリス人役人、ウィリアム・ジョンソン伯爵は、ブラントの家族がイギリスと長年の関係があった。ハウデノサウニー諸国を巡りながら、ブラントは情熱的に彼らハウデノサウニー諸国の唯一の希望としてアメリカ人による侵略を防ぐため、イギリスと同盟を結ぶよう説得した。彼は諸国のなかのモホーク族、オネイダス族、オノンダガス族、カユガス族、セネカ族の若者をそそのかし、イギリスに味方をするよう説得をはじめた。まさに連合の存在を脅かす行為においてジョセフ・ブラントは公然と全

体会議に反抗してイギリス問題を論議するため、1777年夏の会議を呼びかけた。

ブラックスネークが若いハウデノサウニーセネカ国家から来ていた。彼は熱心に聞いた。ブランドが前に来て言った。もし私達がイギリスに何もしなかったら、私達の平和はないだろうと。私達の喉は切られるだろうと。イギリス人がアメリカ人によって私達が行くべきことは、父に加わることである。これが私達の道である。

ブラックスネークの叔父、尊敬されるセネカ族の指導者は、コーンプランターと呼ばれる。コーンプランターは「フレンチ・インディアン戦争」の在郷軍人であり、この重要な全体会議の決議に参加していた。彼は参戦することを望まなかった。それは彼らが戦う戦争ではない。「私が言わなければ成らないことをあなたはすべて記録し聴かねばならない。戦争は戦争だ。死は死だ。戦いは厳しい仕事なのだ。どちらの連中に対しても、私達の手を上げては成らぬ。それゆえ、私たちは少し待ち、両者の連中の間の協議をもっと聞こう。イギリス人が私達について言う全てを。アメリカが私たちに言う全てを。その次に、私達がどこへ行くかははっきり解かるだろう。」と。するとブランドは挑戦して立ちあがった。そのとき、驚きの不信でブラックスネイクと他の者たちは彼を見守った。彼はコーンプランターに話すことを辞めるように命令し、そして彼を臆病者と呼んだ。

ブラックスネーク

男達は大論争の渦中にあった。ある者はブランドに賛同し、ある者はコーンプランターに賛同した。そして、「私達は誰かのために戦わなければならない。何故なら臆病者と呼ばれるには耐えられない。」と彼らは言い始めた。次の日、集会は圧倒的多数でモホーク族とセネカ族はその全体会議を破って、イギリスと一緒に戦うことに同意した。コーンプラン

ターは多数の意志に従い辞任し、自分の種族を集めた。

コーンプランター

すべての勇敢な男たちよ、これから先、多くの危険な時代であると気がつくだろう。それゆえ、私はあなたたちに言う。あなた達は勇敢な兵士のように白人兄弟に立ち向かっていかなければならないだろう。何故なら、白人が気付くや否や、あなた達が彼に敵対していることを知るだろうからだ。彼らは私達に一切の慈悲を示さないだろう。すべてではないが、イギリスについたものもいる。また、アメリカの宣教師たちによって大きく影響されたオネイダ族はアメリカ人と完全な同盟に向かった。全体会議は支離分裂した。内戦の恐怖が連合体に迫っていた。

そして、アメリカ革命の真っ最中、ハウデノサウニーの内戦が始まった。1777年8月6日、オネイダ国家の兵士たちを含むアメリカの同盟とイギリス軍隊とイギリス軍側についたセネカ族とモホーク族とがオリスカニ・クリークで衝突した。

発砲

その日の終わり、数百の死体が戦場に横わっていた。戦争が東部大陸を被ったので、モホークとセネカ族の軍隊はイギリスと同盟した。しかもフロンティアの開拓地であるアメリカの経済的、軍事的財源を枯渇させた戦争行為の報復として、ジョージ・ワシントンは軍隊をハウデノサウニーの首都オノンダガに派遣し、完膚無きまでに粉砕した。ひとつの国家オノンダガ族は依然、執拗に中立を固持していたが、ワシントンの軍隊が首都を略奪して回った後、それに怒ってイギリス側につき戦いに入った。あなた達がジョージ・ワシントンをあなた達の「国の父」と呼ぶが、私達は彼を「ハナデガイエズ」と呼ぶ。その意味は、「町の破壊者」であると。

1779年8月、ワシントンはジョン・サリバン將軍を派遣し、ハウデノサウニー国家の領地に入り、サリバン將軍はいままで見たことも無かったほどの5000人の白人兵士を伴って、自分達の家に逃げようとする者たちを追い詰めて、寒気で鳥肌が立つほどの破壊をやったのけた。

サリバンの兵隊達が私たちの町についたとき、128軒の家からなっているこの捨てられたこの町の繁栄を見て驚かないではいられなかった。そのほとんどが非常に大きくエレガントでさえあった。ここに住むインディアン達の家々は非常に良く家具が備えられ、すべて必要な家庭用品と非常に多くの穀物、数頭の馬、牛、そして荷馬車があり、モホーク川の多くの白人農民よりずっと良い生活をしていた。それは真に古い豊かな植民地のようであった。非常に多くのりんご、桃の木があった。それを切り倒し、破壊した。ハウデノサウニーのグループの傭兵はサリバンの軍隊を領地に案内した後、セネカ族によって捕らえられた。

ひとりの男はその捕虜の中で死に値する自分の兄弟を見た。裏切り者が新しい祖国を捜し求める奴等のために、私達をこの父なる大地から追放しようとしている。反乱者の水先案内人として、私たちの国のドアに彼らを導き、私たちの子供達を虐殺させ、そして、私達を死に至らしめる、これほど大きな罪はないだろう！あなたは死に値するけど、その場で即座に死すべきだけど、私の手は兄弟の血で汚されては成らない。誰があなたを打つか！

セネカ族長は即座にその捕虜を殺した。サリバンの大掛かりな軍隊に強力なセネカ族でさえ対峙することができなかった。老人も子供もほんの少しの所持品をもって逃げた。彼らはとうもろこしも焼いた。残りは川に捨てた。彼らは私たちの家を焼き、彼らが見つけた私たちの牛、馬を殺し果物の木々を破壊し、何も残さなかった。ただ、剥き出しの土を除いて。

私達の感情（おもい）は何か。空腹で死のうとしているひとりの子供

の一日分さえ、食料の一口分さえも残されていなかったのを私たちは見た。デケワミス、セネカ、アメリカ人の破壊の報復として。オノンダガのモホーク、セネカ、そして、カユガ部族ジョセフ・ブランドは、オネイダと近隣のツカロラ、アメリカ人の同盟を攻撃した。最終的にこの5つの連合国家はことごとく荒廃した。ハウデノサウニーの町々の傷跡から2つの町だけが無傷のまま生き残った。しかし、それもすでに崩壊に瀕していたのだった。というのは、失われた収穫物を取り入れる方法もなく、悲劇は冬の到来とともに高まった。記録では一番寒し冬だった。雪は5フィートも積もった。家を失った多くのハウデノサウニーは飢餓と寒さと病気で死んだ。

4年後、1783年にはパリ条約で降伏をしたイギリス政府は、インディアン国家の主権に何らの関心も示さず、この新しいアメリカ国家にミシシッピ西部まで認め、イギリスは大陸の支配に終焉を告げた。

合衆国政府は戦後の条約で、合衆国の同盟者であったオネイダ国家の広大なハウデノサウニーの国土をも掌握した。オネイダ族の女達は命を救うため、とうもろこし、毛布をフォージ溪谷でジョージ・ワシントンの空腹の軍隊に運んだのである。しかし、この五つのハウデノサウニー国家は内戦の傷を癒し、1790年、アメリカ合衆国からカナンダイグア条約で彼らの故国を保持することが許されるよう、彼らは譲歩を引き入れた。ハウデノサウニーは生き残り、再建され、一緒に作成された偉大な法律と彼らの全体会議の統一体は続いて今日まで大胆にも留まっている。

もし、ハウデノサウニーが革命戦争で完全に破壊されていたならば、私は今、ここに座っているいないでしょう。だが、私たちは完全に破壊されなかったのである。私たちの全体会議の火は今だに残っている。これらの歳月のすべて、ハウデノサウニーの歴史、文化、その政治的そして精神的構造は今もそのままである。私たちはアメリカ革命戦争によっ

でも、崩壊しなかったのである。私たちは国家の主権者として自らのパスポートで世界中を旅行しているのである。

(むらい やすひろ・本学助教授)

苫小牧駒澤大学紀要 第3号

平成 12 2000年 3 月 25日印刷

平成 12 2000年 3 月 31日発行

編集発行

苫小牧駒澤大学

〒 059-1292 苫小牧市錦岡 52番地 293

電話 0144- 61- 3111

印 刷

三陽印刷株式会社

紀要交換業務は図書館情報センターで行っています

——お問い合わせは直通電話 0144- 61- 3311——